

金沢城史料叢書35

金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書12

# 金 沢 城 跡

一本丸附段・北ノ丸一

2019

石川県金沢城調査研究所



## 例　　言

1. 本書は、石川県金沢市丸の内地内に所在する史跡金沢城跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2. 事業は石川県土木部公園緑地課（以下、公園緑地課）が所管し、文化財調査は公園緑地課から石川県教育委員会事務局文化財課が依頼をうけ、本丸附段、北ノ丸（御宮、藤右衛門丸）の発掘調査については、財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託して実施した。いもり坂脇石垣の試掘調査と玉泉院丸の立会調査、報告書の作成・刊行については、石川県金沢城調査研究所が行った。

3. 事業期間と担当は次のとおりである。

### 【現地調査】

本丸附段（第1次）〔平成10年度（1998）〕

期間 平成10年5月6日～8月12日

担当者 財団法人石川県埋蔵文化財センター 滝川重徳（主事）、熊谷葉月（主事）、  
土田友信（講師）

本丸附段（第2次）〔平成12年度（2000）〕

期間 平成12年12月12日～12月25日

担当者 財団法人石川県埋蔵文化財センター 滝川重徳（主任主事）、土田友信（講師）

北ノ丸〔平成12年度（2000）〕

期間 平成12年6月13日～8月25日

担当者 財団法人石川県埋蔵文化財センター 富田和気夫（課主査）、滝川重徳（主任主事）、  
湊屋玲美（主事）、土田友信（講師）

いもり坂脇石垣（試掘調査）〔平成20年度（2008）〕

期間 平成20年10月21日～12月12日

担当者 石川県金沢城調査研究所 富田和気夫（主幹）、吉田千沙子（嘱託）

玉泉院丸（立会調査）〔平成24年度（2012）〕

担当者 石川県金沢城調査研究所 宮川勝次（所主査）、坂下博晃（嘱託）

### 【出土品整理】

平成12、15年度（2000、2003） 財団法人石川県埋蔵文化財センター

4. 報告書の作成は、滝川重徳（主幹）、西田郁乃（調査研究専門員）、辻森由美子（嘱託：平成29年度まで）、知田真衣子（嘱託）が担当した。執筆分担は目次に記した。なお、第5章第4節は、株式会社パレオ・ラボによる分析報告である。

5. 調査に関する記録・遺物は研究所が保管している。

6. 当事業に際して、次の方々から指導・助言並びに協力を賜った。

文化庁文化財第二課 石川県立図書館 石川県立歴史博物館 金沢市立玉川図書館 東京大学総合図書館 公益財団法人前田育徳会 防衛研究所戦史研究センター

石黒信二 市川浩文 金田明大 北浦 勝 北垣聰一郎 北野博司 久保智康 千田嘉博

田中哲雄 堀 徹也 成瀬晃司 新谷洋二 西形達明 橋本澄夫 平井 聖 堀内秀樹 宮里 学  
森島康雄 横山隆昭 吉岡康暢（敬称略）

## 凡　例

1. 本書の水平基準は海拔高を表し、東京湾平均海面標高（T.P）である。
2. 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第VII系に準拠した。
3. 土層注記の色調に関しては、農林水産省農林水産技術会議事務局等監修「新版標準土色帖」を使用している。
4. 石垣のID番号や呼称は、『金沢城跡石垣保存実態調査報告書Ⅰ』（金沢城調査研究所2016）の記載に拠っている。
5. 本報告書中の調査番号IDは次の通りである。  
本丸附段（第1次）：199801、本丸附段（第2次）：200007  
北ノ丸：200003（御宮、藤右衛門丸）  
玉泉院丸（石垣）：200807（いもり坂脇石垣）  
玉泉院丸：201204（玉泉院丸北石垣）
6. 遺構測量図中のケバ種や線種は下記の「平面図線種表」の通りである。
7. 遺構断面図中に使用した塗り部分については、次のとおりである。

 檀瓦     越前赤瓦     石瓦     石垣

8. 遺構図や遺物実測図の縮尺は、各図中に示した。
9. 本文中に使用される石垣用語は、「石垣用語表」及び「石垣名称凡例図」の通りである。
10. 遺物名は次の略号を使用した。  
P：土器・陶磁器・土製品    T：瓦    M：金属製品<sup>※</sup>    S：石製品（石瓦を含む）  
※金属製品とセットになるような革製品についても、Mの略号を使用した
11. 遺物図版中の遺物番号はゴシック体が本書報告番号、明朝体が遺物ID（調査ID番号-実測番号）を示す。
12. 陶磁器類の胎土表記には「磁器胎土表記」、「陶器胎土表記」に、瓦についての計測方法等は「瓦計測部位凡例」に示した通りである。
13. 引用参考文献は、原則的に一括して巻末に掲載した。

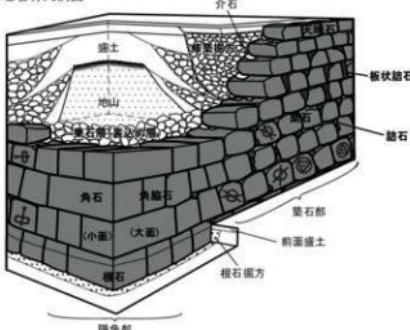
平面図線種表

	ケバ種	上端線／下端線		ケバ種	上端線／下端線		ケバ種	上端線／下端線
トレンチ		垂ケバ	遺構(未完型)		長・短ケバ	遺構壁の 傾斜変換線		長・短ケバ (下端線なし)
		実線			一点鉛線			実線・ケバなし
近代以後		短・短ケバ	遺構(検出のみ)		長・短ケバ (下端線なし)	遺構以外 (土質境)		実線・ケバなし
		実線			長・短ケバ (下端線なし)			石(埋没部分)
近世以前		長・短ケバ	(壁のみで確認 された遺構)		長・短ケバ (下端線なし)			一点鉛線
		実線			一点鉛線			

石垣用語表

用語	読み	解説
塙石部	ついいしぶ	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ所、外側に折れるものを出角(ですみ)、内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
シノギ角	しのぎすみ	出角の一つで、鈍角状に組まれる
輪どり	わどり	石垣の裏面を弧状に湾曲させる構築方法
天端	てんぱ	石垣の上面
天端石	てんぱいし	石垣の最上部の石材
裾部	すそぶ	石垣が地盤と接する部分
根石	ねいし	石垣の最も下の石
築石	つきいし	石垣を構築する石材、平石(ひらいし)とも言う
詰石	つめいし	築石の隙間に詰める小振りの石
板状詰石	いたじょうつかいし	石垣面に平滑に見せるため、石材の隙間に合わせて加工された板状の石材を詰石とする技法
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
棗石	うりいし	棗石の裏にあわせなどに用いられる円錐
押さえ石	おさえいし	石垣を補強するために裏込めに入れた石材
介石	かいいし	石材の固定及び角度調整のため詰え置く石材
捨石	すていし	棗石の内部に押さえ石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本楽の地面上に盛られた土
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のフリからなる
丁張	ぢょうはり	石垣普請時に石横の通りや勾配を示すために張る水糸や板
鉢巻き石垣	はちまきいしがき	鉢面上部特に鉢巻状に石垣を張いたもの。斜面版部だけに張いた石垣を鉢巻石垣という
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、片が大きい面
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、片が小さい面
持	ひかえ	石材の奥行き
石尻	いしじり	石垣の後ろ側
胸	どう	石材の面と尻の間
合端	あいば	石同士の接点
自然石	しぜんいし	加工していない石。野面石・河川転石とも言う
割石	わりいし	割って、大きさを整えたり、面を作ったもの
粗加工石	あらかこういし	割石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端までを加工した石材
周囲加工	しゅういがこう	切石の四方を一定幅で平滑にならす加工。周囲はつりとも言う
練積み	ねりづみ	コンクリート等を石積みの接合面や裏込めに使用して固めた工法
空積み	からづみ	石材を削製・接着しないで積んだ工法
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
落とし積み	おとしづみ	下の石の谷(くぼみ)へ石を落していく積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する2面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方
草み出し	はらみだし	変形の一つ。膨らんで張り出した状態
迫出し	せりだし	単体の石材が石垣面から飛び出した状態

石垣名称凡例図



### 磁器胎土表記

平滑性		光沢		器壁の空洞	
1 極めて平滑	A 強い	a 目立たない			
2 平滑	B 弱い	b 目立つ			
3 凸凹目立つ					

### 陶器胎土表記

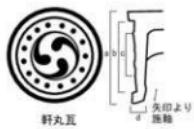
硬さ		平滑性		砂粒		器壁の空洞	
I 硬質	II 軟質	1 極めて平滑	2 平滑	A 希少	B 細砂含む	a 目立たない	b 目立つ
		3 凸凹目立つ		C 粗砂以上含む			

### 土師器皿胎土分類

特徴	
A	中砂多い、粗砂・極粗砂・海綿骨片目立つ
B	砂粒比較的少なく、均質（細分の余地大きい）
C	砂粒ごく少ない、均質
D	細砂多い、均質（粉質）
E	1 砂含み、粗砂・細砂多い（含有量の程度差大きい） 2 砂無～微、粗砂・細砂少ない (Bよりも粒子大きく、素地が粗い。E1より精良)

[石川県考古学研究会2014]

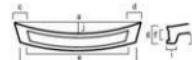
### 瓦計測部位凡例



軒丸瓦 (軒部)  
a 瓦当径  
b 文様区径  
c 内区径  
d 瓦当厚



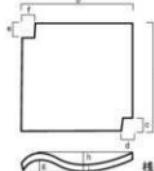
丸瓦  
a 全長  
b 体部幅  
c 玉縁長  
d 玉縁幅  
e 体部高  
f 体部厚  
g 玉縁高



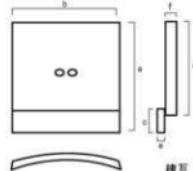
軒平瓦・軒丸瓦 (軒部・平部)  
a 上弧幅  
b 下幅  
c 右周縁  
d 左周縁  
e 文様区幅  
f 文様区厚  
g 瓦当厚  
h 頂高  
i 頂下部高  
j 弧度



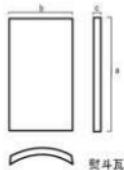
平瓦  
a 全長  
b 広幅  
c 狹幅  
d 弧深  
e 厚



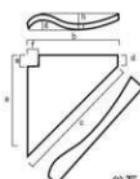
棟瓦  
a 全長  
b 全幅  
c 平部切込幅  
d 平部切込高  
e 棟部切込幅  
f 棟部切込高  
g 棟部弧深  
h 平部弧深  
i 厚



棟瓦  
a 全長  
b 全幅  
c 棟部長  
d 体部長  
e 棟部厚  
f 体部厚  
g 高さ



軒斗瓦  
a 全長  
b 全幅  
c 厚

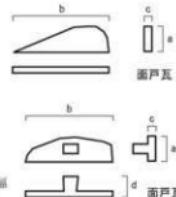


谷瓦

a 全長  
b 全幅  
c 谷部長  
d 平部長  
e 线部切込長  
f 棟部切込幅  
g 棟部弧深  
h 平部弧深  
i 厚



縫合  
a 全長  
b 広端幅  
c 狹端幅  
d 厚  
e 高さ  
f 高さ



面戸瓦  
a 全長  
b 全幅  
c 厚  
d 高さ

金沢城史料叢書35

金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書12

# 金 沢 城 跡

一本丸附段・北ノ丸一

2019

石川県金沢城調査研究所



# 目 次

第1章 経緯と経過 .....	(瀧川・西田) .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1	
第2節 調査の経過 .....	3	
第2章 歴史的環境 .....		7
第1節 金沢城跡と周辺の歴史的環境 .....	(知田) .....	7
第2節 金沢城の沿革 .....		12
第3節 本丸附段・北ノ丸の沿革 .....	(瀧川・知田) .....	14
第4節 既往の調査成果 .....	(知田) .....	23
第3章 本丸附段 .....		27
第1節 調査の概要 .....	(瀧川) .....	27
第2節 遺構 .....		27
第3節 遺物 .....	(辻森) .....	54
第4節 小結 .....	(瀧川) .....	145
第4章 御宮 .....		169
第1節 調査の概要 .....	(西田) .....	169
第2節 遺構 .....		173
第3節 遺物 .....	(辻森) .....	209
第4節 小結 .....	(西田) .....	304
第5章 藤右衛門丸 .....		321
第1節 調査の概要 .....	(西田) .....	321
第2節 遺構 .....		321
第3節 遺物 .....	(辻森) .....	335
第4節 出土人骨の分析 .....	(梶ヶ山・小林) .....	342
第5節 小結 .....	(西田) .....	345
第6章 いもり坂脇石垣 .....	(西田) .....	352
第1節 いもり坂脇石垣の試掘調査 .....	352	
第2節 玉泉院丸北石垣の立会調査 .....	360	
引用・参考文献 .....		366
報告書抄録 .....		371

国版目次		頁	57	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器26	89
第1回 調査区位置図	本丸附段	5	58	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器27	90
第2回 調査区位置図	北ノ丸	6	59	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器28	91
第3回 金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡(S=1/25,000)		8	60	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器29	92
第4回 近世後期の金沢城全体図		11	61	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器30	93
第5回 近世初期の金沢城		12	62	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器31	94
第6回 本丸附段(近世前期)		16	63	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器32	95
第7回 本丸附段(近世前期・後期・近代)		17	64	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器33	96
第8回 北ノ丸(近世前期)		20	65	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器34	97
第9回 北ノ丸(近世後期)		21	66	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器35	98
第10回 北ノ丸(近代)		22	67	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器36	99
第11回 金沢城跡発掘調査位置図(～平成30年度)		24	68	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器37	100
第12回 本丸附段 調査区位置図		28	69	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器38	101
第13回 本丸附段 調査区・絵図照合図		29	70	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器39	102
第14回 本丸附段 調査前段面平面略図		36	71	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器40	103
第15回 本丸附段 調査区全体図		37	72	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器41	104
第16回 本丸附段 造構等位置図		38	73	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器42	105
第17回 本丸附段 調査区南部平面図		39	74	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器43	106
第18回 本丸附段 調査区の中央部平面図		40	75	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器44	107
第19回 本丸附段 調査区の北部平面図		41	76	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器45	108
第20回 断段(雁木版) 南東部(上部) 平面図		42	77	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器46	109
第21回 断段(雁木版) 北東部(下部) 平場付近平面図・断面図		43	78	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器47	110
第22回 断段(雁木版) 南北軸断面図		44	79	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器48	111
第23回 断段(雁木版) 各段平面図・断面図		45	80	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器49	112
第24回 石垣立面図		46	81	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器50	113
第25回 石垣1412W(SW03)・1415E(SW06) 基礎平面図・断面図		47	82	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器51	114
第26回 石垣1413W(SW08) 東部基礎・SW05平面図・断面図		48	83	本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器52	115
第27回 石垣1415W(SW08) 西部基礎平面図・断面図		49	84	瓦 舩土分類		116
第28回 門柱基礎(根固)・排水溝平面図・断面図		50	85	軒瓦 瓦当文様分類		117
第29回 下層造構(SK04) 平面図・断面図		51	86	軒平・軒桿瓦 瓦当文様分類1		118
第30回 下層造構(SM01) 平面図・断面図		52	87	軒平・軒桿瓦 瓦当文様分類2		119
第31回 調査区南西造構平面図・断面図		53	88	軒平・軒桿瓦 瓦当文様分類3		120
第32回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器1	64	89	軒平・軒桿瓦 瓦当文様分類4		121
第33回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器2	65	90	本丸附段出土遺物実測図 瓦1		122
第34回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器3	66	91	本丸附段出土遺物実測図 瓦2		123
第35回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器4	67	92	本丸附段出土遺物実測図 瓦3		124
第36回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器5	68	93	本丸附段出土遺物実測図 瓦4		125
第37回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器6	69	94	本丸附段出土遺物実測図 瓦5		126
第38回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器7	70	95	本丸附段出土遺物実測図 瓦6		127
第39回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器8	71	96	本丸附段出土遺物実測図 石製品		128
第40回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器9	72	97	本丸附段出土遺物実測図 金属製品1		129
第41回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器10	73	98	本丸附段出土遺物実測図 金属製品2		130
第42回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器11	74	99	本丸附段出土遺物実測図 金属製品3		131
第43回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器12	75	100	階段(雁木版) とその周辺施設		146
第44回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器13	76	101	本丸附段 初期主要遺構位置図		148
第45回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器14	77	102	御宮 調査区位置図・絵図照合図		170
第46回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器15	78	103	御宮東 調査区全体図		171
第47回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器16	79	104	御宮西 調査区全体図		172
第48回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器17	80	105	御宮東 調査区平面図 1		175
第49回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器18	81	106	御宮東 調査区平面図 2		176
第50回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器19	82	107	御宮東 調査区平面図 3		177
第51回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器20	83	108	御宮東 調査区平面図 4		178
第52回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器21	84	109	御宮東 調査区平面図 5		179
第53回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器22	85	110	御宮西 調査区平面図 1		180
第54回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器23	86	111	御宮西 調査区平面図 2		181
第55回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器24	87	112	御宮西 調査区平面図 3		182
第56回 本丸附段出土遺物実測図	陶磁器・土器25	88	113	御宮西 調査区平面図 4		183

第114回	御宮西 調査区平面図	5	184	第171回	御宮出土遺物実測図	瓦12	255
第115回	御宮西 調査区平面図	6	185	第172回	御宮出土遺物実測図	瓦13	256
第116回	SE3・4区 断面図		186	第173回	御宮出土遺物実測図	瓦14	257
第117回	SW2区 断面図		187	第174回	御宮出土遺物実測図	瓦15	258
第118回	SW3区 断面図		188	第175回	御宮出土遺物実測図	石製品1	259
第119回	SW4区 石垣513E・石垣5100W平面図		191	第176回	御宮出土遺物実測図	石製品2	260
第120回	SW4区 石垣5100W立面図		192	第177回	御宮出土遺物実測図	石製品3	261
第121回	SW4区 石垣513E立面図・アゼ断面図		193	第178回	御宮出土遺物実測図	石製品4	262
第122回	SW4区 石垣513Eアゼ断面図・石材觀察図		194	第179回	御宮出土遺物実測図	石製品5	263
第123回	SW5区 南壁土層断面図		195	第180回	御宮出土遺物実測図	石製品6	264
第124回	SW6区 西壁(南北面)断面図		196	第181回	御宮出土遺物実測図	石製品7	265
第125回	NS1区 平面図		199	第182回	御宮出土遺物実測図	石製品8	266
第126回	NS1区 断面図		200	第183回	御宮出土遺物実測図	石製品9	267
第127回	NS1区 石垣5120N平面図・立面図・断面図		201	第184回	御宮出土遺物実測図	石製品10	268
第128回	NS2区 平面図		202	第185回	御宮出土遺物実測図	石製品11	269
第129回	NS2区 調査区西壁断面図		203	第186回	御宮出土遺物実測図	石製品12	270
第130回	NS2区 調査区東壁断面図		204	第187回	御宮出土遺物実測図	石製品13	271
第131回	NS2区 石瓦出土状況		205	第188回	御宮出土遺物実測図	石製品14	272
第132回	NS2区 調査区北端土削面図		206	第189回	御宮出土遺物実測図	石製品15	273
第133回	NS2区 石垣5120N平面図・立面図		207	第190回	御宮出土遺物実測図	石製品16	274
第134回	NS2区 石垣平面図・立面図		208	第191回	御宮出土遺物実測図	石製品17	275
第135回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器1		219	第192回	御宮出土遺物実測図	石製品18	276
第136回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器2		220	第193回	御宮出土遺物実測図	石製品19	277
第137回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器3		221	第194回	御宮出土遺物実測図	石製品20	278
第138回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器4		222	第195回	御宮出土遺物実測図	石製品21	279
第139回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器5		223	第196回	御宮出土遺物実測図	石製品22	280
第140回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器6		224	第197回	御宮出土遺物実測図	石製品23	281
第141回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器7		225	第198回	御宮出土遺物実測図	石製品24	282
第142回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器8		226	第199回	御宮出土遺物実測図	金属製品1	283
第143回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器9		227	第200回	御宮出土遺物実測図	金属製品2	284
第144回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器10		228	第201回	御宮出土遺物実測図	金属製品3	285
第145回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器11		229	第202回	御宮出土遺物実測図	金属製品4	286
第146回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器12		230	第203回	御宮出土遺物実測図	金属製品5	287
第147回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器13		231	第204回	御宮出土遺物実測図	金属製品6	288
第148回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器14		232	第205回	御宮出土遺物実測図	金属製品7	289
第149回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器15		233	第206回	御宮出土遺物実測図	金属製品8	290
第150回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器16		234	第207回	御宮 調査区内の建物変遷		306
第151回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器17		235	第208回	鳥越城・舟岡山城・御宮石垣(5113M)		307
第152回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器18		236	第209回	藤右衛門丸 調査区位置図・絵図照合図		322
第153回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器19		237	第210回	藤右衛門丸 調査区全体図		324
第154回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器20		238	第211回	藤右衛門丸 調査区平面図	1	325
第155回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器21		239	第212回	藤右衛門丸 調査区平面図	2	326
第156回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器22		240	第213回	藤右衛門丸 調査区平面図	3	327
第157回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器23		241	第214回	藤右衛門丸 調査区平面図	4	328
第158回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器24		242	第215回	藤右衛門丸 調査区平面図	5	329
第159回	御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器25		243	第216回	N1・3EK 平面図・断面図		330
第160回	御宮出土遺物実測図 瓦1		244	第217回	N3K 平面図・断面図		331
第161回	御宮出土遺物実測図 瓦2		245	第218回	N4K サブトレシ1 平面図・断面図		332
第162回	御宮出土遺物実測図 瓦3		246	第219回	N4K 土層記述		333
第163回	御宮出土遺物実測図 瓦4		247	第220回	N6K 断面図		334
第164回	御宮出土遺物実測図 瓦5		248	第221回	藤右衛門丸出土遺物実測図 陶磁器・土器1		337
第165回	御宮出土遺物実測図 瓦6		249	第222回	藤右衛門丸出土遺物実測図 陶磁器・土器2		338
第166回	御宮出土遺物実測図 瓦7		250	第223回	藤右衛門丸出土遺物実測図 陶磁器・土器3		339
第167回	御宮出土遺物実測図 瓦8		251	第224回	藤右衛門丸遺物実測図 瓦1		340
第168回	御宮出土遺物実測図 瓦9		252	第225回	藤右衛門丸出土人骨		344
第169回	御宮出土遺物実測図 瓦10		253	第226回	火葬間違遺物		346
第170回	御宮出土遺物実測図 瓦11		254	第227回	調査区位置図		354

第228図 調査区現況・繪図照合図	355	写真図版11 本丸附段遺構写真11	159
第229図 いもり坂石垣現況	356	写真図版12 本丸附段遺構写真12	160
第230図 石垣立面図・断面図、調査区位置図	357	写真図版13 本丸附段遺構写真13	161
第231図 第1地点 平面図、断面図	358	写真図版14 本丸附段遺構写真14	162
第232図 第2地点 平面図、断面図	359	写真図版15 本丸附段遺構写真15	163
第233図 玉泉院丸北右垣トレンチ位置図、地形断面図	360	写真図版16 本丸附段遺構写真16	164
第234図 玉泉院丸北右垣トレンチ断面図	361	写真図版17 本丸附段遺構写真17	165
第235図 玉泉院丸北5-3地点	362	写真図版18 本丸附段遺構写真18	166
写真図版19 本丸附段遺構写真19	167		
写真図版20 本丸附段遺構写真20	168		
<b>表目次目次</b>	<b>頁</b>		
第1表 周辺の近世遺跡地名表	9	写真図版21 御宮遺構写真1	308
第2表 金沢城の沿革	13	写真図版22 御宮遺構写真2	309
第3表 本丸附段の沿革	15	写真図版23 御宮遺構写真3	310
第4表 北ノ丸の沿革	19	写真図版24 御宮遺構写真4	311
第5表 金沢城跡発掘調査一覧（1）	25	写真図版25 御宮遺構写真5	312
第6表 金沢城跡発掘調査一覧（2）	26	写真図版26 御宮遺構写真6	313
第7表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器1	132	写真図版27 御宮遺構写真7	314
第8表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器2	133	写真図版28 御宮遺構写真8	315
第9表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器3	134	写真図版29 御宮遺構写真9	316
第10表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器4	135	写真図版30 御宮遺構写真10	317
第11表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器5	136	写真図版31 御宮遺構写真11	318
第12表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器6	137	写真図版32 御宮遺構写真12	319
第13表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器7	138	写真図版33 御宮石瓦写真	320
第14表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器8	139	写真図版34 薩右衛門丸遺構写真1	347
第15表 出土遺物観察表 本丸附段 陶磁器・土器9	140	写真図版35 薩右衛門丸遺構写真2	348
第16表 出土遺物観察表 本丸附段 瓦1	141	写真図版36 薩右衛門丸遺構写真3	349
第17表 出土遺物観察表 本丸附段 瓦2	142	写真図版37 薩右衛門丸遺構写真4	350
第18表 出土遺物観察表 本丸附段 瓦3・石製品	143	写真図版38 薩右衛門丸遺構写真5	351
第19表 出土遺物観察表 本丸附段 金属製品	144	写真図版39 いもり坂石垣遺構写真1	363
第20表 主な瓦の取上げ番号と器種	205	写真図版40 いもり坂石垣遺構写真2	364
第21表 出土遺物観察表 御宮 陶磁器・土器1	291	写真図版41 玉泉院丸北5-3地点	365
第22表 出土遺物観察表 御宮 陶磁器・土器2	292		
第23表 出土遺物観察表 御宮 陶磁器・土器3	293		
第24表 出土遺物観察表 御宮 陶磁器・土器4	294		
第25表 出土遺物観察表 御宮 陶磁器・土器5	295		
第26表 出土遺物観察表 御宮 瓦1	296		
第27表 出土遺物観察表 御宮 R.2	297		
第28表 出土遺物観察表 御宮 瓦3	298		
第29表 出土遺物観察表 御宮 石製品1	299		
第30表 出土遺物観察表 御宮 石製品2	300		
第31表 出土遺物観察表 御宮 石製品3	301		
第32表 出土遺物観察表 御宮 金属製品1	302		
第33表 出土遺物観察表 御宮 金属製品2	303		
第34表 出土遺物観察表 薩右衛門丸 陶磁器・土器・瓦	341		
第35表 薩右衛門丸出土人骨一覧	343		

<b>写真図版目次</b>	<b>頁</b>
写真図版1 本丸附段遺構写真1	149
写真図版2 本丸附段遺構写真2	150
写真図版3 本丸附段遺構写真3	151
写真図版4 本丸附段遺構写真4	152
写真図版5 本丸附段遺構写真5	153
写真図版6 本丸附段遺構写真6	154
写真図版7 本丸附段遺構写真7	155
写真図版8 本丸附段遺構写真8	156
写真図版9 本丸附段遺構写真9	157
写真図版10 本丸附段遺構写真10	158

# 第1章 経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

### 1. 金沢城公園の開設に至る経緯

金沢城は、16世紀半ばに成立した金沢御坊（金沢御堂）を前身とし、天正8年（1580）以降、織田政権下の城郭となった。天正11年（1583）には前田利家が入城し、これより前田家歴代当主14代が約300年にわたり城主となり、最大の大名の居城として機能した。

明治初年から旧金沢城内は兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、昭和20年（1945）まで第九師団司令部や歩兵第六旅団司令部、歩兵第七連隊の兵舎が立ち並ぶ陸軍の拠点であった。第二次世界大戦後の昭和24年（1949）には文部省の所管となり金沢大学が開学し、金沢城跡は大学キャンパスとして利用されてきた。

昭和53年（1978）、城内キャンパスは金沢市郊外の角間地区への移転を決定し、平成5年（1993）3月に総合移転を完了した。大学跡地の取り扱いは、平成3年（1991）8月に設置された金沢大学跡地利用懇話会で検討され、平成5年3月の「公園的、文化的利用を基本とする」との提言を受けて、公園化に向けた動きが始まった。

県は、この提言に沿って、平成7年（1995）3月に「金沢城跡整備実施設計報告書」をとりまとめ、平成8年（1996）1月に28.5haを都市公園に利用する都市計画を決定し、同年3月に国から大学跡地21.77haを取得した。

### 2. 金沢城公園整備（第一期整備から第三期整備）

平成8年度に始まった第一期金沢城公園整備は、平成16年度（2004）までを公園としての基盤整備とする10ヵ年計画に基づき、①敷地環境の整備、調査（不要建物の撤去、石垣修景等）、②広場、園地等の整備（二ノ丸等各種広場、幹線園路、便益施設等）、③城郭建造物の復元（菱櫓・五十間長屋・橋爪門統櫓、内堀等）を進めることとした。また、保存目的として、石垣の記録化（石垣現況測量）や動態観測にも着手した。

公園の開設は、平成9年度（1997）の本丸等の暫定開園に始まり、平成13年（2001）9月の「全国都市緑化いしかわフェア」の開催を期に、公園計画区域のほぼ全域を開園した。

公園整備の実施に先立ち、県教育委員会文化財課と県土木部公園緑地課は、金沢城跡が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、工事に伴い埋蔵文化財に影響が生じる場合は前もって発掘調査等の保護措置を講ずるべく、事前協議を進めていた。

その結果、平成9年度（1997）に県立埋蔵文化財センターが実施した内堀及び菱櫓台石垣上面遺構の確認調査を皮切りに、園地整備に係る工事設計と埋蔵文化財調査がほぼ同時並行状態で急ピッチに進み、平成10年（1998）には、新たに設立された財団法人石川県埋蔵文化財センターを調査担当として、いもり堀、本丸附段階段、菱櫓南（五十間長屋折曲部）、三ノ丸北便所の発掘調査、平成11年（1999）には、前年度から継続の建物復元整備に伴う内堀・五十間長屋に加えて、新丸広場（湿性植物園）、三ノ丸休憩所、新丸大手門便所、鶴ノ丸便所、二ノ丸園路等の整備に係る発掘調査が行われた。

公園整備に係る調査は以後も引き継がれ、平成12年度（2000）には北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）、尾坂門、三ノ丸北、鶴ノ丸、いもり堀、平成13年度（2001）には風呂屋口門等、橋爪門、尾坂門で、園路整備に伴う遺構確認調査が実施されている。

本書で報告する対象は、このうち平成11年度に実施した本丸附段階段、12年度に実施した北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）の各調査地点である。

石川県は、今後の金沢城公園の整備計画を検討するため、平成16年(2004)2月に「金沢城復元基本方針検討委員会」を設置し、金沢城公園の復元整備の基本的な考え方、復元に際しての留意点等について検討を加え、①復元にあたっては史実の十分な調査と検証を行い、史実性の高い整備を行うこと、②復元に際しての時代設定は基本的に江戸時代後期に統一すること、③多様な公園機能にも配慮すること、④復元はゾーン別の保全・整備や活用方針等を踏まえて長期的視点も含めた段階的な取り組みを進めること、等の基本方針を示した。

この基本方針に基づき、平成26年（2014）までとする第二期整備計画が策定され、復元整備の拡充をはかった。具体的には、①三御門（河北門・橋爪門・石川門）の整備、②いもり堀の段階的整備、③玉泉院丸庭園整備である。また、保存目的として玉泉院丸南西石垣の保存修理も行っている。

平成26年をもって第二期整備が完了となることから、平成27年（2015）3月に「金沢城公園第三期整備計画策定懇話会」を設置、同年6月には来園者へのアンケート調査などを実施し、12月には第三期整備を策定した。①鼠多門の復元整備、②鶴ノ丸休憩所一帯の再整備、③石垣の保全を掲げ、石垣の計画的な「金沢城の石垣の保存管理及び保全対策に係る計画書」を作成、基本計画の策定やそれに基づく保全対策の実施を目指し、現在も事業を進めている。

### 3. 金沢城の調査研究

公園整備を進める一方で、石川県は、平成13年（2001）7月、金沢城の調査研究、関連資料の整理・収集、関連城郭の調査研究、調査成果の普及・啓発等を目的として、県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室を設置し、金沢城に係る学術的な調査研究を推進することとした。（平成19年（2007）石川県金沢城調査研究所に改組）

平成14年度（2002）からは、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術（石垣）などを対象に金沢城の総合的な調査研究に着手した。埋蔵文化財では、金沢城跡の変遷と構造を探る目的で平成14年度（2002）より国庫補助を得て本丸・本丸附段・東ノ丸附段等の確認調査を継続している。また、平成19年度（2007）から23年度（2011）には、石川門の修理に伴う遺構確認調査も実施した。一方、金沢城公園整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査も主幹部局である土木部の依頼により実施している。第二期整備事業では平成10年（1998）から続くいもり堀の調査を始め、平成18年（2006）には河北門（～H20）、平成20年（2008）に玉泉院丸（～H25）、平成22年（2010）に橋爪門（～H24）を、第三期整備では、鼠多門の整備に係る遺構確認調査を実施している。

### 4. 国史跡指定

こうしたなかで、整備着手から12年後の平成20年（2008）1月11日に、金沢城跡の主要部分275,155.14m<sup>2</sup>について、石川県が文部科学大臣に国史跡指定の申請を行い、平成20年5月16日に国の文化審議会の文部科学大臣への答申を得て、平成20年6月17日付け文部科学省告示第100号で国の史跡に指定された。また、平成20年12月24日には石川県が管理団体に指定された。翌21年から『史跡金沢城跡保存管理計画書』に着手し、23年4月に策定された。

## 第2節 調査の経過

### 1. 本丸附段調査区（第1回）

本丸附段北側の階段については、近世の絵図によると大規模なものであったが、明治末期に推定される改変を受け、以後縮小された状態で存続していた。石川県では金沢城跡の整備を進めるにあたり、この階段を近世段階の景観に復することを図り、「金沢城址公園整備実施計画図」に整備案を反映させ、平成9年11月27日に開催された「第1回 金沢城址公園整備懇話会」において、平成13年度に予定されている「第18回全国都市緑化いしかわフォア」までに整備を行う区域の一部として報告した。

当該年度には文化財課と公園緑地課との協議が進み、平成10年3月30日付文書で公園緑地課から文化財課へ本丸附段調査区をはじめとする金沢城跡の発掘調査依頼があった。翌平成10年度には石川県教育委員会から財團法人石川県埋蔵文化財センターに委託され、4月1日付けで業務委託契約が締結された。文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届出書は4月1日付け及び7月1日付けで提出された。この年度の調査区は本丸附段（今回報告、約500m<sup>2</sup>）・三ノ丸第1次・いもり堀第1次・二ノ丸五十間長屋の4地点である。

本丸附段調査区に着手したのは5月6日で、最初に平板測量を実施し、続いて近代改変に係る石材の撤去を進めた。また、調査範囲南端にあった手水鉢とみられる石造物を調査区外へ移動した<sup>1)</sup>。5月20日から人力による掘削に着手し、トレーンチ状に設定した部分において近世地盤を探り、順次検出面を広げた。5月中旬は主に階段上方（調査区南部）の掘り下げを行い、6月以降、下方（中部～北部）の調査にも取り掛かり、調査区東側の近代以後堆積土を対象とした重機掘削を行いつつ、近世段跡の検出を進め、7月15日・8月6日の両日には写真測量を行った。対象とした階段は全般的に改変が著しかったこともあり、調査のとくに初動において、近代と近世の遺構・土層の見極めが必ずしも十分ではなく、試行する日々が続いた。ただし規格的な遺構であることも幸いして、部分から全体を推量できる場合もあり、最終的には幅約19mに及ぶ当初段階の形状を把握し、併せてこれに先行する初期金沢城の遺構・遺物を一部確認することができた。現地作業の完了日は8月12日である。

なお、平成10年度の調査では、調査区の中央付近にあった樹木の処置が保留されており、その周辺を残して発掘したが、平成12年度になって樹木は伐採されることとなった。このため同年度に切株周辺約20m<sup>2</sup>を対象とした調査を行った（第2次調査）。

平成12年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会から財團法人石川県埋蔵文化財センターに委託され、4月3日付けで業務委託契約、13年3月5日付けで変更契約が締結された。文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届出書は4月7日付けで提出された。調査区は、北ノ丸第1次（御宮・藤右衛門丸地点）、三ノ丸第4次（河北門・河北坂地点）、いもり堀第3次（土橋地点・鯉喉橋地点）、新丸第3次（尾坂門地点）、本丸附段第2次の5地点である。本丸附段第2次調査は上記の経緯のとおり年度当初の計画には挙がっていなかったが、途中で追加されることとなった。調査着手日は12月12日、現地作業完了日は12月25日である。

平成12年7月1日に開催された「第8回 金沢城址の石垣・橋に関する修築・復元専門委員会」では、「本丸附段階段の整備について」と題し、埋蔵文化財調査の結果についても報告した。これに基づき、平成12年度に整備が実施されている。

1) この石造物は「文禄年中以来等之旧記」（金沢市立玉川図書館後藤文庫、[日本海文化研究所1976]【石川県金沢城調査研究所2008c】所収）、「御城高石垣之事等（御城中御門々名目并御長屋間敷等之事）」（後藤文庫、[日本海文化研究所1976]所収）において本丸にあったとされる手水鉢の可能性があるが、詳細な原位置は定かではない。金沢南部に産出する坪野石（溶結凝灰岩）製とみられる。

## 2. 北ノ丸調査区（第2図）

北ノ丸の発掘調査については、御宮広場の整備に伴い側溝等の敷設が計画されたことから、その工事影響範囲内での遺構確認調査を実施したものである。従って、御宮、藤右衛門丸の両調査区とも、郭の縁辺部を取り巻くような調査予定地となつた。

調査に係る契約事務等については、前項の本丸附段（平成12年度）を参照いただきたい。

北ノ丸の発掘調査は6月13日より、まず藤右衛門丸の表土除去から着手した。6月14日より人力による遺構検出、遺構掘削を開始し、7月5日には、空中写真測量を行つた。7月4日から7日にかけて遺構の完掘写真撮影を行い、調査を終えた。

藤右衛門丸と一部並行して、7月7日から御宮の重機による表土除去を開始した。7月10日からは、人力による遺構検出を行い、順次遺構掘削作業も進めていった。7月12日には、NS2区の斜面において石垣や石段が検出された。7月27日には先行して調査が完了したSW2・3区、SE3・4・5・6区を対象としてリフトセンサーによる第1回の空中写真測量を行つた。

NS2区で検出した石垣については、2段分の解体が必要となつたため、一段毎に測量を行いながら解体を進めていった。8月9日には、1段目の石垣についてリフトセンサーによる空中写真測量と、解体を行つた。石垣前面の斜面についても、石瓦が大量に出土したことから、出土状況について測量後、瓦の取り上げや現地の断面精査等を行つた。

8月22日には第3回の空中写真測量と、現地に残つてゐた遺物の取り上げや、遺構の完掘写真、断面図作成等を行つた。

現地作業は8月25日に完了した。なお、調査がほぼ終盤を迎えた8月22日の北陸中日新聞において藤右衛門丸から出土した骨片について、翌23日には同じく北陸中日新聞で御宮の棟石転用の石段について報道された。

## 3. 予備調査および立会調査

本丸附段と玉泉院丸の間にあら斜面上に位置する、いもり坂脇石垣（ID1500W）については、変形が著しく、また来園者が頻繁に往来するいもり坂園路の直近に位置することから、これまで観察が続けられてきた石垣である。今後、修理も含めた何らかの対策を検討する必要があると判断され、その基礎資料を得るために、予備調査として現状の詳細観察と試掘調査を実施した。調査は平成20年度10月21日から開始し12月12日に完了した。

玉泉院丸色紙短冊積石垣を中心とする雑段石垣の段上には二ノ丸側からの崩落土が厚く堆積しており、玉泉院丸庭園の整備の一環として撤去作業を実施した。周辺では玉泉院丸庭園の遺構確認調査として色紙短冊積石垣の前面で調査（第5地点）が行われていたことから、その担当者が併せて立会を行つた。（庭園調査については、金沢城調査研究所2018dを参照）

## 4. 出土品整理の経過

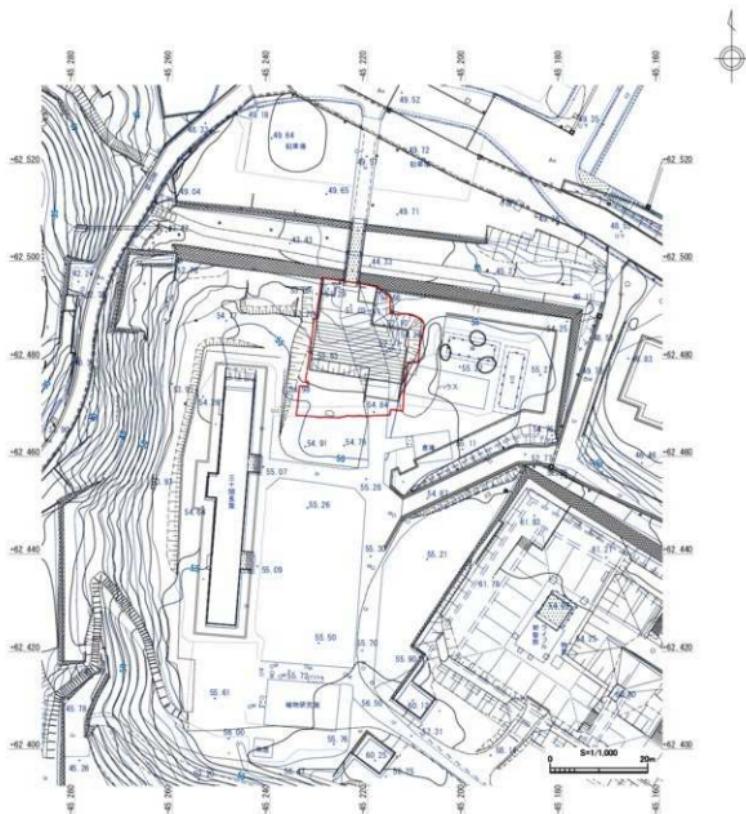
大部分については石川県教育委員会から委託を受けて（財）石川県埋蔵文化財センターが実施し、一部金沢城調査研究所が補足した。前者の委託事業について、今回の報告対象調査区に係る部分を抄出する。

〔平成12年度（2000）〕

本丸附段階段調査出土の陶磁器・瓦・金属製品・石製品等の記名・分類・接合・実測・トレースを実施した。

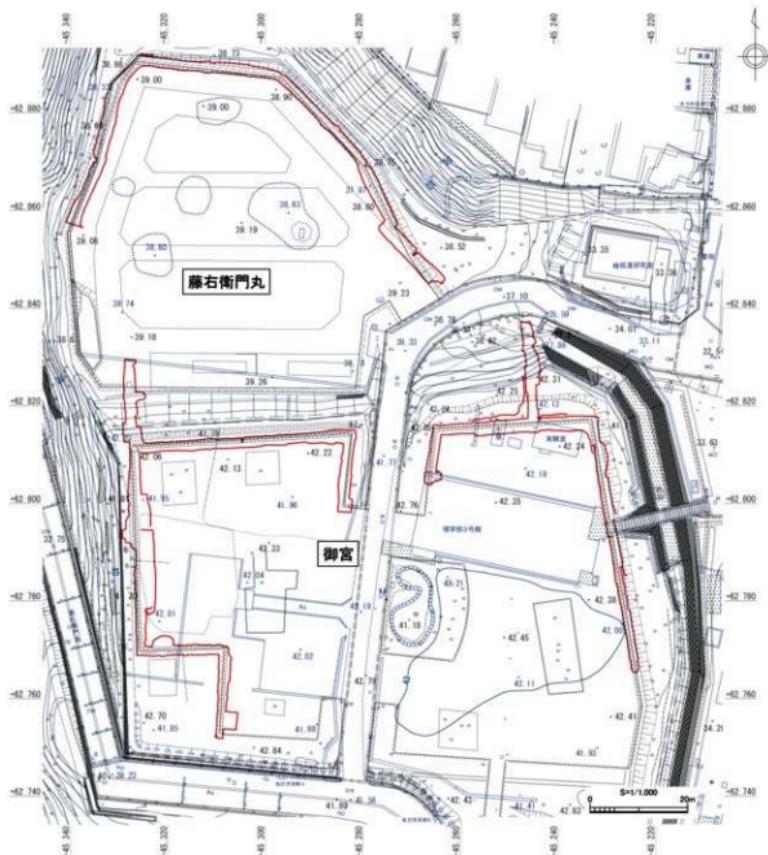
〔平成15年度（2003）〕

北ノ丸調査出土の陶磁器・瓦・金属製品・石製品等の記名・分類・接合・実測・トレースを実施した。



黒-現況図 青-整備前(調査時) 赤-調査区

第1図 調査区位置図 本丸附段



第2図 調査区位置図 北ノ丸

## 第2章 歴史的環境

### 第1節 金沢城跡と周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より流れ出す犀川・浅野川によって形成された、細長く伸びる小立野台地の先端部に位置する。城外との比高差は、低所に位置する新丸においては約10m、最高所である本丸で30m以上を測る。本丸からは、低地の金沢平野のみならず小立野台地方面へも眺望がきく。また、城のある台地先端部とその南東に続く台地本脈との間には、自然谷が形成されていたらしく〔藤田1999〕、城付近の地形は、人の手が加わる以前から独立丘的な状況を呈していたようであり、城は自然地形を巧みに利用して築かれたことが推察される。

城下町は、金沢城を中心に小立野台地を含む河岸段丘から沖積平野に展開している。外堀としての内懸構堀、外懸構堀が城を遠巻きに二重に囲み、旧北国街道は金沢城を東に迂回するよう城下町を通る。それらを基幹として城下町と各地を繋ぐ街道や街路が整備された。これら城下町の基本的な構造は、現在の市街地に引き継がれ、城下町の町並を色濃く反映している様態は、歴史都市・金沢を特徴づける要素の一つになっている。

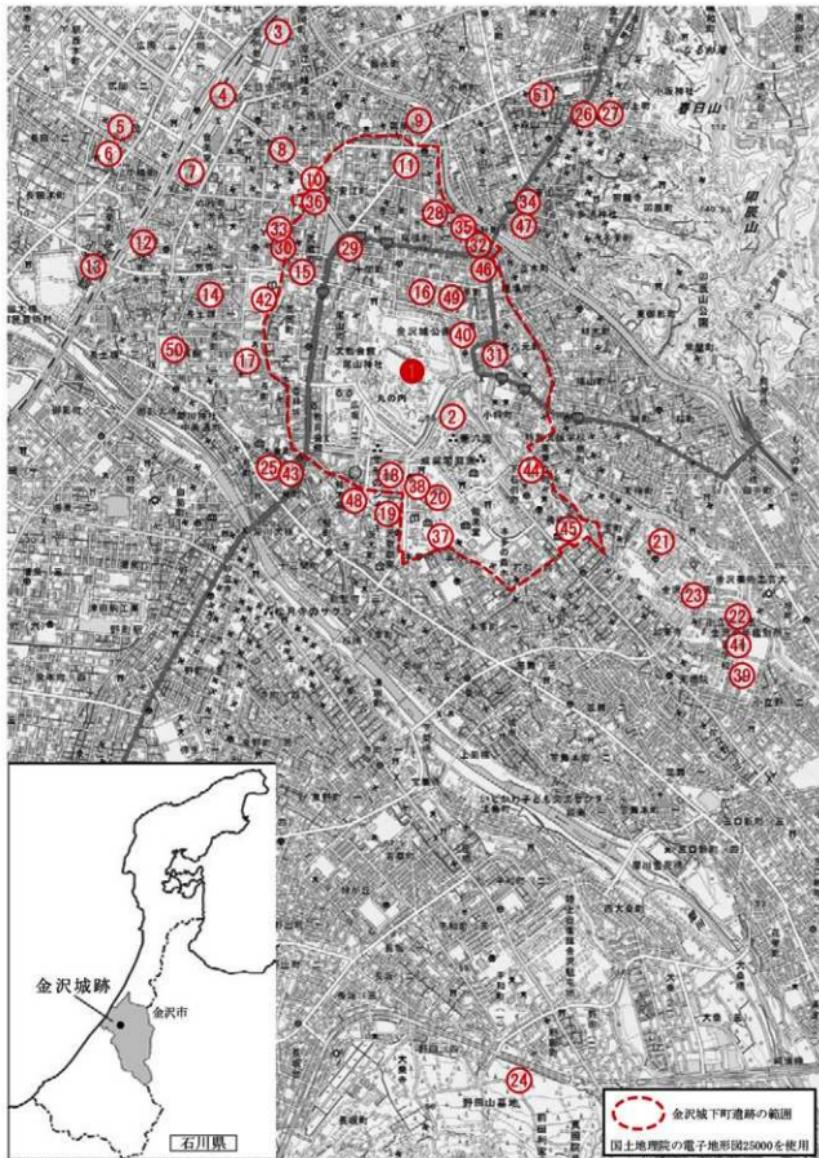
金沢城跡周辺は、絵図等の資料から近世以降の市街化が確認できるものの、それ以前の様相については文献等からの推定にとどまっていたが、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002e〕、広坂1丁目遺跡〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a・2005c・2006a・2007a・2009a〕・丸の内7番地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2014a・2015a〕の発掘調査、懸構堀復元整備に伴う確認調査〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c〕や市街地再開発等に伴う諸所の発掘調査等により、その姿を垣間見ることが可能となった。また平成23年4月1日には、第3図の赤破線内の範囲が金沢城下町遺跡として周知されている。

旧石器時代の遺跡は、城外縁の車橋、石川門前土橋、丸の内7番地点の調査で数点の石器が出土している。県内において数少ない当該期の遺跡のあり方を示すものとして注目される。

縄文時代の遺跡は、丸の内7番地点で草創期の有舌尖頭器が採取されている他、城内の幾つかの調査区で遺物の出土が確認されるとともに、前田氏（長種系）屋敷跡地点で、後期の陥穴が検出されている。城下町の調査でも、まとまった面積の調査が実施された地点では遺物の出土がみられ、今後その実態が明らかになることを期待したい。

弥生時代は、前田氏（長種系）屋敷跡地点で弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓が確認され、広坂1丁目遺跡では中期の土器が出土し、後期後半の竪穴建物等が検出されている。古墳時代は、高岡町地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002d、金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a〕で前期の竪穴建物が確認され、下本多町遺跡〔金沢市埋蔵文化財センター1999〕や彦三町一丁目地点〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b〕では中期の造構が、広坂1丁目遺跡では前期、後期の土器の他、車輪石や勾玉等の遺物が出土しており、後に隆盛となる集落の母体が出来上がっていたものと考えられる。

古代では、城内の平成9年度の調査において8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的ではあるが、幾つかの調査区で造構、遺物が確認されている。城下では高岡町地点で7世紀後半の竪穴建物や、半瓦当を含む古式瓦、奈良、平安時代の掘立柱建物と、円面硯、帶金具、奈良三彩等が確認されている。県庁跡地（堂形）〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2010・2012、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2014c〕でも7世紀後半から10世紀初頭の遺物が出土し、竪穴建物、掘立柱建物等の造構が確認されている。広坂1丁目遺跡では7世紀初め頃から



第3図 金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺の近世遺跡地名表

№	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地籍	特記事項	
1	金武城跡	(昭和)	城跡	(空地)	(空地)
2	豪之園	(昭和)	庭園	(空地)	(空地)
3	末ノ新保遺跡(久昌寺遺跡)	HI(1996)～89(1997)	寺院(墓地)	古墳群の集落	鶴川1997、金沢市埋蔵文化財センター2006b
4	木ノ新保遺跡	HI(1994)～87(1995)	寺院？(墓地)	石器遺物、瓦利施瓦(井戸井・竹縄)、土器(灰・土・ガラス)、建物跡(土塁基礎、木柱)	(財) 金沢市埋蔵文化財センター2005b 金沢市埋蔵文化財センター2005b
5	鶴ヶ山遺跡	HI(1995)～810(1996)	古墳地～中経武家地	前田氏、(北之森)下屋敷 木原、水利施設(竹籠・蓋舟)	金沢市埋蔵文化財センター2001 谷口・増田2004
6	長田町遺跡	HI(1994)	下経武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
7	短田町遺跡	HI(1993)～87(1995)	町人地・下経武家地	延宝元年(1673)火災資料出土、近世駿月用水	金沢市埋蔵文化財センター2001～2003c
8	末ノ丁目遺跡	HI(1990)～96(1991)～ HI(1997)～813(2003)	町人地	築堤・土塁、施設(土塁、石垣)、施設跡(馬籠口、施設跡等)	金沢市斎藤泰介1993・1997b 金沢市埋蔵文化財センター2003c・2008b
9	旗葉町遺跡	SD(1996)	上経武家地	前田氏(主屋跡)上屋敷、施設跡(馬籠跡多岐出土)	金沢市斎藤泰介1991
10	安江町遺跡	HI(1991)～85(1992)	町人地・中経武家地	軒端跡(木造上屋)、漆器製品多発、 駿河山(駿河上屋)、漆器製品多発、 駿河山(駿河下屋)	金沢市教育委員会1997a
11	金沢城下町道跡(三町地区)	SD(1990)	中経武家地		金沢市埋蔵文化財センター2002
12	三井町遺跡	HI(1994)～89(1997)	云間地～町人地	御殿、倒壊、駄菴の跡、施入札からしな	(財) 金沢市埋蔵文化財センター2001b・2007
13	元町町遺跡	SD(1987)～81(1988)	云間地～町人地	築堤・土塁、施設(土塁、石垣)、施設跡(馬籠口)	(公財) 金沢市埋蔵文化財センター1990
14	元町町遺跡	SD(1996)	下経武家地	前田氏・屋敷	金沢市埋蔵文化財センター1998
15	金沢城下町道跡(高岡町地区)	SD(1990)～810(1990)～ SD(1990)～810(1997)	上経武家地、木原	築堤・土塁、施設(土塁、石垣)、施設跡(馬籠口)、石垣基盤、廻廊形剖面	金沢市埋蔵文化財センター2001a・2002a (財) 金沢市埋蔵文化財センター2005a
16	金沢城下町道跡(船出丸・長福寺)・豊筋路(通)	HI(1996)～827(2015)	町人地～上経武家地	施設(以前の町屋跡)、施設跡(馬籠跡)	(財) 金沢市埋蔵文化財センター2005c
17	長福寺跡	SD(1996)	中経武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
18	庄原町丁目遺跡	HI(1996)～812(2006)	中～上経武家地	櫓の大火大穴御井、大型土塁 (廻廊上、廻廊下、施設)、施設(廻廊、廻廊下)、施設(廻廊)	金沢市埋蔵文化財センター 2001a・2002a・2004a・2005a・2008c
19	下永多町遺跡	HI(1992)	下経武家地～上経武家地	宝篋の大土塁による火炎資料	金沢市埋蔵文化財センター1999
20	金の坂下町道跡(木津丸内塙跡地)	SD(1990)～821(2009)～ SD(2010)～828(2011)～ SD(2010)～829(2016)～ SD(2017)	上経武家地、武家地	築堤(地下1m)、施設(廻廊)、廻廊上段、廻廊下段、廻廊(廻廊下)	石川県立埋蔵文化財センター1998 金沢市埋蔵文化財センター2010a・2010b・2016a・ 2017 (財) 金沢市埋蔵文化財センター2005a
21	金代六字町道跡(木津丸内塙跡地)	SD(1997)～814(2002)～ SD(2012)	下～中経武家地	施設(廻廊)、施設(廻廊)	金沢市埋蔵文化財センター2010a・2019
22	金代六字町道跡(庄原町保原)	SD(1998)～810(2007)	下～中経武家地	施設(廻廊)	金沢市太郎蔵造の廻廊資料センター2000～2003・ 2017
23	綾寺寺守跡	SD(2001)	中経武家地	近世相撲の跡、近世相撲	
24	金代六字町道跡(庄原町保原)	SD(1997)～809(1998)～ SD(2002)	中～上経武家地	近世相撲の跡、近世相撲	(財) 金沢市埋蔵文化財センター2005c
25	町方二丁目遺跡	SD(2000)～813(2011)	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2005d
26	利根門内門前遺跡	SD(2003)	寺院、新道		金沢市埋蔵文化財センター2006c
27	二ノ町前遺跡	SD(2004)	寺院、新道		金沢市埋蔵文化財センター2006c
28	金の坂(所附跡)・(庄一町一丁目地)	SD(2004)	武家地	廻廊上段	金沢市埋蔵文化財センター2007b
29	金代六字町道跡(庄一町一丁目地)	SD(2005)	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2007c
30	金の坂下町道跡(金沢西内塙跡地)	SD(2005)～821(2008)	廻場	廻場(当初の廻場)、廻場(改造状況)、上廻場	金沢市埋蔵文化財センター2009b・2011a
31	金の坂下町道跡(東八町さき番地)	SD(2005)～823(2011)	武家地	井戸、土塁、石垣	金沢市埋蔵文化財センター2007b・2012a
32	金の坂下町道跡(金の坂内塙跡地)	SD(2006)	廻場	廻場(改造状況)	金沢市埋蔵文化財センター2009b
33	七戸町道跡	SD(2006)	武家地	土塁	金沢市埋蔵文化財センター2010b
34	東一丁目前遺跡	SD(2008)	町人地	廻場(近隣廻場)、廻場(廻場、廻廊口、廻廊跡等)	金沢市埋蔵文化財センター2010b
35	金の坂下町道跡(金沢西内塙跡地)	SD(2008)	廻場	廻場(廻場、廻廊口、廻廊跡等)	金沢市埋蔵文化財センター2010b
36	金の坂下町道跡(金沢西内塙跡地)	SD(2008)～822(2010)	廻場	廻場、井戸、廻場(近傍水系)	金沢市埋蔵文化財センター2012d・2013b・2018
37	金の坂下町道跡(木津町二丁目地)	SD(2010)	武家地	廻場	金沢市埋蔵文化財センター2012c
38	金の坂下町道跡(木津町二丁目地)	SD(2009)	廻場(西側構築付近地)	廻場、上廻場	金沢市埋蔵文化財センター2012b
39	小矢野町(日置町)	SD(2010)	寺院、墓地	廻場	金沢市埋蔵文化財センター2013c
40	金の坂下町道跡(久昌寺内塙跡地)	SD(2011)～823(2012)	武家地(公事場、廻場)	廻場(廻場(近隣廻場)、廻場等)	(財) 金沢市埋蔵文化財センター2014a・2015a
41	小矢野町(ノゾミ遺跡)	SD(2010)～824(2012)	武家地	廻場付大土塁	(財) 金沢市埋蔵文化財センター2014b・2015b
42	高尾上屋敷跡	SD(2012)～825(2013)	上経武家地	廻場上段、柱穴	金沢市埋蔵文化財センター2015b
43	町方二丁目遺跡(5番地)	SD(2011)	武家地	廻場下段、井戸、廻場物(石臼基盤、砾石)、水路、土塁	金沢市埋蔵文化財センター2016b
44	金の坂下町道跡(東八町5番地)	SD(2013)～827(2013)	廻場	土間(廻場)、木板敷設、石臼(廻場)、石臼(廻場)	(公財) 石川県埋蔵文化財センター2017
45	金の坂下町道跡(風呂町3番地)	SD(2013)～827(2013)	武家地	廻場(廻場)、大音下廻場 土間(廻場)、廻場(廻場)、井戸	金沢市埋蔵文化財センター2015a・2016a
46	金の坂下町道跡(金の坂内塙跡地)	SD(2014)	廻場	廻場	金沢市埋蔵文化財センター2014c
47	東八町木塀跡	SD(2009)	水路跡	廻場	金沢市埋蔵文化財センター2010a
48	林木益遺跡	SD(2016)～829(2017)	武家地	廻場(廻場)、廻場物(土上廻場、砾石)、廻場、土塁	金沢市埋蔵文化財センター2017
49	金の坂下町道跡(大手町3番地)	SD(2017)	武家地(人跡付林木益南地)	石臼(廻場)、井戸、水路、土塁、井戸	金沢市埋蔵文化財センター2016
50	金の坂下町道跡(大手町3番地)	SD(2017)	武家地	土間(廻場)、廻場物(廻場)、廻場、土塁	金沢市埋蔵文化財センター2016
51	金の坂下町道跡	SD(2017)	武家地	土間(廻場)、廻場物(廻場)、廻場、土塁	金沢市埋蔵文化財センター2016
52	金の坂下町道跡(5番地)	SD(2017)	武家地(足湯跡)	廻場、石井	金沢市埋蔵文化財センター2018

(金沢市埋蔵文化財センター)・2001年は金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター)・2002年以降は金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)

(財) 金沢市埋蔵文化財センター・金沢市教育委員会・(財) 金沢市埋蔵文化財センター・(2013年度から公算財团法人)

11世紀の遺物が確認されるとともに、藤原宮式、平城宮式に準拠した大量の瓦、「佛」刻書土器、「寺」刻書瓦、仏器等が出土し、矩形の区画溝、掘立柱建物、竪穴建物等が確認され、古代寺院が造営されたと考えられている。また、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内7番地点でも古代の土器が出土し、城跡周辺では兼六園のある小立野台地側や、反対の尾山神社側等にまだ空白部はあるが、律令初期から金沢城跡を取り囲むように遺跡が展開していたと想定され、地域の拠点となっていたと考えられる。

中世では、広坂1丁目遺跡で区画溝や礎石建物、墓地等が確認され、13世紀後半頃～14世紀代に盛期を持つ居館、室町末～17世紀初頭は寺内町内の有力者の居住域か施設が想定されている。また、西側の県庁跡地（堂形）では、16世紀後半の館ないし寺院の区画施設と推定される溝、土塁が確認されている。一方、城の反対側に位置する丸の内7番地点では遺構は不明であるが13世紀頃から17世紀初頭の遺物が出土し、隣接する石川橋白鳥堀調査区では16世紀第3四半期頃に築造されたと考えられる鍛冶関連遺構が確認されている。高岡町地点では薬研堀状の溝が確認され館跡の一部と考えられている。

文献資料からは14世紀には現在の久保市乙剣官付近に「山崎窪市」が成立し、天文15年（1546）には現在の城地に金沢御堂（金沢坊舎）が創建され寺内町が展開し、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展したとされている。遺跡からはまだまだ当時の様相を具体的に述べるほどの資料は得られていないものの、古代から引き続き、それらのベースとなった集落の展開がうかがわれる。やがて金沢御堂（金沢坊舎）は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織政の大名による支配が始まるが、この段階を遺跡ではうまく捉えきれていない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配の下、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は50か所を数えるが（第3図・第1表）、まとまつた量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長年間に築造された内・外懸構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c、木越2013〕。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永8年（1631）・同12年（1635）の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661～1672）までにはほぼ骨格が整い、以後明治時代の今まで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂1丁目遺跡、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内7番地点がある。広坂1丁目遺跡は、17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡地点は、寛永16年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。丸の内7番地点では、16世紀後半～17世紀初頭の町屋→17世紀初頭～寛永8年大火頃の町屋→大火以降から万治2年の武家屋敷→万治2年以降の公事場・武家屋敷という城下町遺跡の成立、変遷が捉えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡〔金沢市・金沢市教育委員会1997a〕は中級藩士・町人居住地が対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡〔金沢市教育委員会1995〕は町人の居住地に該当し、富蔵の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廐棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追究されている。木ノ新保（久昌寺含む）・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡〔金沢市（

沢市埋蔵文化財センター) 2004b] では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡 [石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2002b] では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容をうかがうことができ、三社町遺跡 [石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2007] でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、野田山墓地、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡 [石川県金沢城調査研究所 2008e・2013c] は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石闘門遺跡群であり、城内石垣の9割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術など様々な点が明らかにされた。野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や藩主前田家墓所の測量・試掘調査等が実施されている [金沢市 (金沢市埋蔵文化財センター) 2003d・2008a・2012e]。辰巳用水 [金沢市 (金沢市埋蔵文化財センター) 2009b] は寛永9年 (1632) に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管 (木桶、石樋) が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道など当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。



「御城中毫分勘絵図」(横山隆昭氏蔵) 文政13年(1830)  
第4図 近世後期の金沢城全体図

## 第2節 金沢城の沿革

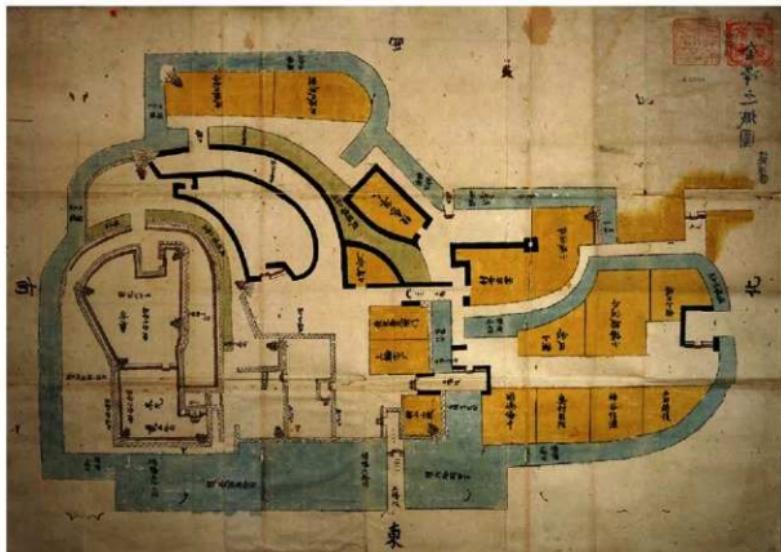
金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』〔石川県金沢城調査研究所2008a〕が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表（第2表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

年表では、金沢城の歴史を4期に区分し、造成・灾害・修築等を中心に記載した4つの時期については、利家による城内整備から寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火灾までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廢藩までを「宝暦の大火後」、廢藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城とそれ以前については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった災害のうち、寛永8年（1631）の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。一方、宝暦9年（1759）の大火灾は、全盛期の終わりを象徴する灾害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門も、再建までに10～30年の長期を要した。

廢藩後では、明治14年（1881）に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられ、松原屋敷・金谷出丸など縁辺が削平され往時の形状が失われた郭もある。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。



「加州金沢之城図」（東京大学総合図書館蔵）近世初期  
第5図 近世初期の金沢城

第2表 金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出来事
初期金沢城	天文15年	1546	本願寺別院として金沢御坊（金沢坊舎）を設置、金沢城の前身
	天正8年	1580	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	1583	越ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北
	天正14年	1586	前田利家が入城し、これ以後金沢城として前田家が14代にわたり統治
	天正15年	1587	天守構築、翌年に南部藩主臣北信愛が前田利家のものとしを受け、天守をはじめ、城内の案内をされたとの記述（『北信愛覚書』）
	文禄元年	1592	石垣職人の穴太源介に知行100俵を与え召抱える
	慶長7年	1602	戸室石を利用して本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築 落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和6年	1620	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛永8年	1631	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し城内も延焼【寛永の大火】
	寛永9年	1632	大火後の石垣構築・修築でほぼ現在の縄張りに近い状態に
	寛永11年	1634	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永17年～	1640	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	万治3年	1660	20年間藩主不在、城内が荒廃
	寛文元年	1661	5代藩主綱紀がはじめて入国、城内のみならず城下町整備や新田開発など文化振興に寄与
	寛文2年～	1662	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か
	寛文11年	1671	鉛瓦が普及
宝暦の大火灾後	宝暦9年	1759	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害【宝暦の大火】
	宝暦10年	1760	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、5万両を借り修築
	宝暦11年	1761	河北門石垣を修築
	宝暦12年	1762	橋爪門を再建
	宝暦13年	1763	五十間長屋石垣を修築、10代藩主重教二ノ丸御殿に入る
	明和2年	1765	石川門石垣を修築
	安永元年	1772	河北門を再建
	天明8年	1788	五十間長屋や石川門などを再建
	文化5年	1808	橋爪門櫓台修理
	文化6年	1809	二ノ丸火災
	寛政11年	1799	橋爪門を再建、12代藩主齊広二ノ丸御殿に移徃
	安政2年	1855	地震による石垣被害が大きく、石垣を修築
	安政5年	1858	
近代以降	明治4年	1871	兵部省（のち陸軍省）の所轄となり、多くの建物が払い下げ
	明治9年	1876	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	1881	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	1882	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	1907	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200mに渡り上部2／3が取り壊され、現在残るよう段を設けて改修
	昭和24年	1949	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成7年	1995	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成8年	1996	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成20年	2008	国史跡に指定

## 第3節 本丸附段・北ノ丸の沿革

### 1. 本丸附段の沿革

本丸附段を含む、本丸とその周辺の沿革については、『確認調査報告書II』〔石川県金沢城調査研究所2014d〕の中で記載されている。本節もこれに準じ、広く本丸周辺について触れつつ、今回報告する本丸附段について若干の補足を加えた。

#### 位置（第1図）

本丸附段は、本丸の西側に隣接する郭である。中央平坦部の標高は約55.6～55.8mで、隣接する本丸・東ノ丸区域における最高所約60mより3m程度低い。郭は北辺が長く、南辺が短い逆台形の平面形を呈するが、明治40年（1907）の本丸南側の石垣崩落に伴う改変により南縁部が削平されており、削平以前の南北長は約110～120mに復元される。現在は、最長部東西80m、南北100mを測る。

郭内には、宝暦の大火後に再建された三十間長屋が現存する。本書で報告する北部の階段は、調査着手前では近代に改変されながらも形状を留めていた。

#### 初期の様相

本丸とその周辺においては、金沢城以前には、一向一揆・本願寺勢力の拠点である金沢御坊（尾山御坊・金沢御堂）の中心施設があったとされるが、同時代の史料は知られていない。続く佐久間盛政の城主時代も不明なところが多い。前田利家入城（天正11年（1583）直後の様子に関しては、天正15年（1587）4月に金沢城を訪問した南部家の家臣北信愛の覚書（「北信愛覚書」、「瀬戸2000」）がある。この史料には敷寄屋、御座敷、さらに天守の「くりん」（最上階）に招かれ饗應を受けたことが記されており、本丸とその周辺にこれらの諸施設が具わっていたことが窺える。

「三壇開書」等によれば、天守は慶長7年（1602）落雷によって焼失したとされる。この後天守は再建されず、替わって建てられたのが三階櫓である。三階櫓は寛永8年（1631）大火に被災したもののは再建され、近世前期を通じ存続していたが、宝暦9年（1759）大火で再び焼失し、以後再建されることになった。

慶長の天守焼失と寛永8年の大火の間、元和6年（1620）にも本丸は火災に見舞われている。この火災を契機とし、翌年本丸の拡張工事が行われ、近世城郭への変換が進行した。

元和7年（1621）前後の景観をある程度反映していると想定される「加州金沢之城図」（第5図）には、寛永大火以後の本丸区域が「奥方」、東ノ丸区域が「本丸」と記載されており、東側が「表」、西側が「奥」あるいは「詰の丸」に相当したと考えられる。

なお、17世紀末頃の景観内容とみられる「金沢古城図」（石川県立図書館蔵）では、本丸附段を「舞台跡」と記載する（第6図）。また『越後賀三州志（来因概観附録）』（文化2年（1805））では、本丸にある舞台の址は、慶長末年頃、前田家三代の夫人達の「戯芸」観覧に供するため設けた跡地と推論している。『金沢古蹟志』（明治24年（1891））でも上記三州志や「金沢細見図譜」の所見を紹介するとともに、「三壇開書」等を引用し、慶長後期から元和にかけて、金沢城内が「音曲諸芸」の者達により賑わった様子を記している。

平成15～19年度の金沢城跡埋蔵文化財確認調査では、本丸附段南部に寛永8年（1631）の大火以前の遺構群が検出され、当初は本丸との間に堀があったが、上述した元和7年（1621）頃に埋め立てられたこと等が明らかになり、本丸御殿奥側の空間に取り込まれていく過程が窺える結果を得た。「舞台跡」に直結する遺構は明確ではないものの、本丸附段の当該期利用の在り方としては、絵図・文献に伝わる事象と大きく異なるようと思われる。

#### 近世前期～後期の様相（第6・7図）

元和期に再整備された本丸御殿や櫓等の建物は、寛永8年（1631）の大火で焼失し、以後金沢城の

中枢部は二ノ丸へ移ることとなった。ただし、宝暦9年（1759）大火までの近世前期において、本丸には御殿の一部の機能（広間）のみを残したと見られる建物や、上記の三階櫓と周辺石垣上の櫓群、干飯や鮎の塩辛桶等軍用食を保管する三十間長屋等がなお存在した。

本丸附段は、改めて二ノ丸から本丸に至る正門側に位置づけられ、空堀に架かる極楽橋からの上り口において、幅20m近い階段が設けられた。「加州金沢御城來因略記」（金沢市立玉川図書館蔵）では「雁木坂」と記される石段である（本書において発掘調査結果を報告）。建造物としては、三十間長屋を始めとする長屋・櫓が数棟建ち並び、本丸との間には重厚な櫓門として鉄門があった。

なお『金沢古蹟志』では、本丸附段に「御茶土蔵」と称される建物があったとするが、近世前期の絵図に該当するような建物は見いだせない。『金沢古蹟志』が典拠とする史料には「附段御門御茶土蔵」とあり、本丸附段ではなく東ノ丸附段を指しているとも思われる。東ノ丸附段では、近世前期に南北二棟の土蔵があり、上記「來因略記」では、北側の土蔵の位置に「御茶具土蔵」との書き込みがある。一方「金沢城東之御丸・御本丸絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）には、北側が「御武具奉行」、南側は「表御納戸方」預りとする記載がみられる。この場合表納戸方所管の土蔵の方がふさわしいように思われ、「來因略記」とは一致しないが、いずれにせよ南北どちらかの土蔵に茶道具が収納されていた可能性も考えられる。

寛文2年（1662）・寛保元年（1741）等には本丸附段北側の石垣破損・修復記録がある。宝暦9年（1759）の大火灾で本丸周辺の建物は全焼し、本丸附段では1830年頃までに物置や番所が建てられたのみであったが、安政5年（1858）になって三十間長屋が再建された。

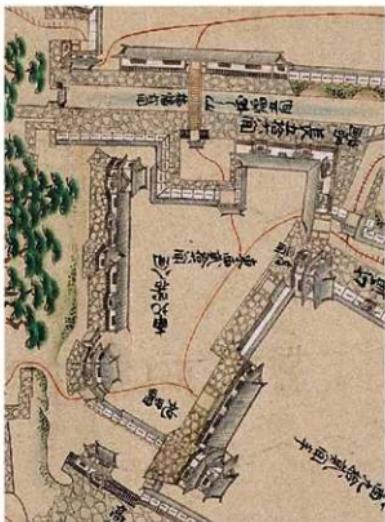
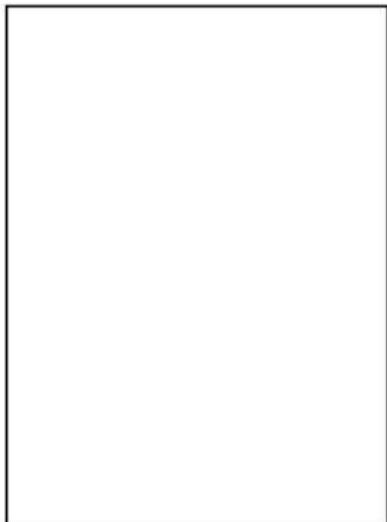
#### 近代以降の様相

明治4年（1871）、城域は兵部省（後陸軍省）の管轄となった。本丸とその周辺に残された建物も次第に撤去されていったが、本丸附段の三十間長屋、東ノ丸附段の土蔵は維持され、現在ともに重要文化財に指定されている。明治40年（1907）には辰巳櫓下の石垣が崩壊し、その後の措置として東ノ丸から本丸附段までの約200mにわたり、郭南辺の石垣上段が撤去され、段状地形に改修された。このため郭面も幅10～20m削平することになった。

翌年の明治41年（1908）、融雪・雨水処理のため本丸からの排水路を設けることが計画された（「排水路築設工事ノ件（陸軍省肆大日記）」（防衛研究所戦史研究センター蔵））。その付属図（第7図）によると、本丸附段階段（雁木坂）を縦断する水路が認められる。この時の計画は認可されず、施工時期は遅れたようであるが、調査着手前までの形状は、この頃の改変によるものとみられる。

第3表 本丸附段の沿革

年号	西暦	月	事項	出典
慶長～元和頃			本丸との間に堀、ゴミ穴や地下空状遺構が存在。 (本丸附段は本丸御殿の裏手、東ノ丸唐門が本丸大手)	「余光城跡埋蔵文化財確認調査報告書1」
元和6年	1620	11月	本丸火災により、本丸御屋形等が焼失。	「寛永六年火災案」(加賀藩史料2巻) 「松井文庫所蔵文書」(松井文庫)等
元和7年	1621		御屋形再建、本丸西堀を埋め立て西北に拡張。 以後、櫓・池状造構・鐵冶造構などが展開。	「古ヨリ公儀江被上御城給御御園 御改め申品々之帳」(加賀藩文庫)
寛永8年	1631	4月	寛永の大火（後の石垣構築・修繕）ではほぼ現在の構造に近い状態となる。 以降、広場の役割へ（本丸附段が本丸正面となる）	「安政寺文書」(安房寺)、 「萬葉古地圖」、「川合文書」(富山人) 等
寛文2年	1662	5月	地震により複数箇所の石垣破損（本丸附段北）	「加州金沢城給図」(青島会)、 「古ヨリ公儀江被上御城給御園 御改め申品々之帳」(加賀藩文庫)
		6月	複数箇所の石垣普請が許可され、 寛文11年にまで損傷の著しい箇所を修復する。	
寛保元年	1741		本丸附段北石垣を修復	「鶴弓之記」(飛騨文庫)
宝暦9年	1759		宝暦の大火灾（本丸全焼、石垣にも被害）	「宝暦九年宝暦火事之一巻」 「加賀藩史料8号」等
			三十間長屋再建（これまで簡素化した門、番所、物置のみ）	「余光城跡埋蔵文化財確認調査報告書1」
明治41年	1908		本丸からの排水路設営が計画される。	「排水路築設工事ノ件（陸軍省肆大日記）」(防衛研究所)



「加賀金沢城絵図」  
((公財)前田育徳会蔵) 寛文7年(1667)

「加賀国金沢之絵図」  
(金沢市立玉川図書館蔵) 寛文8年～延宝年間(1668～1681)

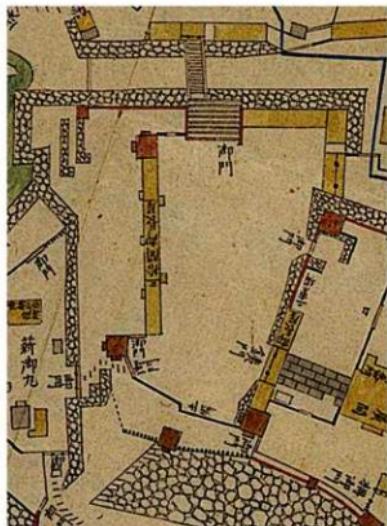


「金沢城絵図」  
(石川県立歴史博物館蔵) 延宝4年～元禄年間頃(1676～1704)



「金沢古城図(舞台跡之図)」  
(石川県立図書館蔵) 天和2年～貞享4年頃(1682～1687)

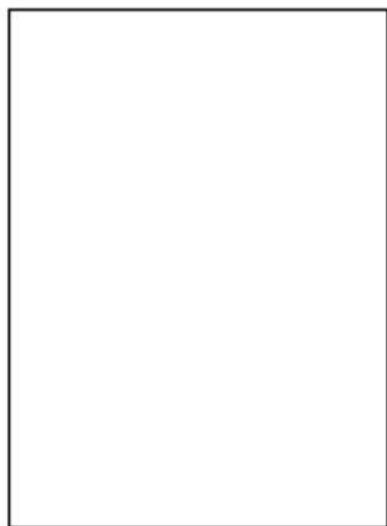
#### 第6図 本丸附段(近世前期)



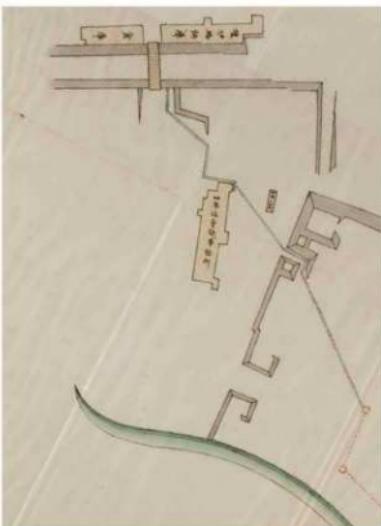
「金沢城図」  
(金沢市立玉川図書館蔵) 18世紀前半



「金沢城本丸・東丸之図」  
(金沢市立玉川図書館蔵) 文化3年～天保元年頃(1806～1830)



「御城分間御絵図」  
(公財)前田育徳会蔵 嘉永3年(1850)



「金沢旧城廓(本丸)一部平面図」  
『排水路築設工事ノ件(陸軍省肆大日記)』  
(防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵) 明治41年(1908)

第7図 本丸附段(近世前期・後期・近代)

## 2. 北ノ丸の沿革

### 位置

北ノ丸は、二ノ丸の北側に隣接し、金沢城の最北端に位置する郭群である。北ノ丸南側の郭を御宮、北側を藤右衛門丸と呼び、本丸に向かって御宮の後方に藤右衛門丸が段丘状に低くなつて位置する。北ノ丸周囲の斜面には部分的に江戸期の石垣が残存しており、西北の郭沿いでは甚右衛門坂が取りつく。近代以降は旧陸軍施設の敷設に伴い、両郭の中央を横断する道が造られるなど改変を受けた。また、藤右衛門丸の後方地には、北ノ丸御宮から移転した尾崎神社（金沢東照宮）が鎮座している。

### 近世初期の様相

初期の金沢城内には、有力家臣の屋敷があつたことが古絵図や文献からわかっている。有沢永貞（江戸前期の加賀藩軍学者）の考証によれば、慶長期における北ノ丸には御宮の郭に村井出雲、藤右衛門丸に小塙藤右衛門の屋敷があつたとしている。しかし、小塙藤右衛門は、天正11年（1583）の時点で既に戦死しているという森田平次（幕末～明治の郷土史家）の指摘がある（『金澤古蹟志』）。森田は、藤右衛門丸には小塙藤右衛門の弟・小塙淡路（秀正）が居住したものと考えており、実際に近世初期の金沢城絵図の中には「小塙淡路」と明記されたものが確認できる（第5図）。

このほかに御宮の郭には、山崎美濃の屋敷があつたとする史料もみられる。元和6年（1620）に発生した金沢城本丸火災により、本丸の藩主御屋敷が焼失したため利常父子が家臣屋敷に移住することとなる。『三壺聞書』によると、被災した利常らは、三ノ丸の興津内記邸や北ノ丸の山崎美濃屋形に入り、翌日には横山大膳邸（新丸）に移住したとされる。

### 近世前期～後期の様相

寛永年間では、加賀藩の4代藩主前田光高の発願により、北ノ丸に金沢東照宮が創建された。東照社は徳川御三家をはじめ、家康ゆかりの地でいくつか建立されているが、外様である加賀藩前田が領国に東照宮勅請を許されたのは、光高が徳川と血縁関係にあつたからとされている。寛永17年（1640）に幕府から勅請を許可された後、寛永19年（1642）には天海の指導をうけて社殿の造営が始まった。翌年の寛永20年には竣工し、遷座式が行われている。以後、金沢東照宮が置かれた郭は「御宮」と呼ばれるようになる。北ノ丸は、大火に見舞われることがなかつたため、御宮も基本的には創建当初の建物配置のまま鎮座してきた。しかし、近世前期からあつたと考えられる宝蔵（経蔵）が、天保年間以降（1830～）の絵図に見られなくなつておらず、御宮における最大の変化とされている。

藤右衛門丸は、慶長期における小塙氏の居住以後のことはよくわかっていない。宝曆の大火（宝曆9年（1759）以前の絵図によると、接木焼へ利用された時期もうかがえるが（第8図）、絵図のほとんどは描写のないものが多い。御宮の後方地であったため、絵図の通り明地であった可能性もある。ただし、文化の大火（文化5年（1808）以降の絵図では、物置や井戸の描写がみられ、御宮と藤右衛門丸間の通用口も出現することから（第9図）、何らかの利用があつたとものといえる。

### 近代以降の様相

明治を迎えると、東照宮は遠ざけられる存在となる。明治2年（1869）、神仏分離により金沢東照宮の管理に当たってきた天台寺院や別当寺が外され、仏像・仏器も取り除かれた。明治7年（1874）には尾崎神社と改名するが、明治11年（1878）に算用場跡地であった現在の場所に移ることとなる。その後の北ノ丸は、兵舎が敷設された旧陸軍時代を経て（第10図）、昭和24年（1949）に金沢大学が開学してから現在に至るまで、主に駐車場として利用されている。

第4表 北ノ丸の沿革

年号	西暦	月	事項	備考
慶長期			北ノ丸に村井氏・小堀氏の屋敷所在か。	「慶長金沢城図」(金沢市立玉川図書館)
元和 6年	1620	11月	本丸火災。被災した利常父子が三ノ丸の興福宮内記邸。北ノ丸の山崎美濃櫻屋形に入る。	「二歳製書」(加賀能文庫), 「文禄年中江東等之印記」(後藤文庫)
寛永 8年	1631		寛永の大火	「安忍寺文書」(安忍寺), 「黄蘋古箇集」, 「川合文書」(富山大) 等
寛永17年	1640	11月	4代光高、幕府へ東照宮請書を申請し、許可される。	「寛永諸家系図伝」(内閣文庫)
寛永18年	1641		幕府大工頭の木原泰允が社殿の設計にかかる。 利常、東照宮請書許可の札状を大老酒井忠勝に送る。	「加藤国相遺文」(加賀能文庫)
寛永19年	1642		金沢東照宮、金沢城内北ノ丸にて造営開始。	
寛永20年	1643	8月	東照宮の堂代、村井兵部長朝に守られ、江戸から金沢に到着。	「金沢尾崎神社文書」(尾崎神社), 「金沢東照宮造立趣札」(尾崎神社)
		9月	金沢東照宮、竣工。 上野寛永守が照院を招いて遷座式を執行。	
正保 2年	1645		東照社に「東照宮」の宮号宜下。 光高、江戸にて急逝。	
万治 3年	1660		神護寺内にて大歓院仏殿の造営を開始、寛文2年に完成。	
寛文 2年	1662		大歓院仏殿の祭祀を行なう松寿院(常照院の弟子)が金沢に常住し、毎年20石を支給。	
延宝 5年	1677		綱紀により、金沢東照宮が修理される。	「金沢東照宮修宮權札」(尾崎神社)
宝曆 3年	1753	3月	金沢東照宮、修復につき外遷宮が行われる。	「高畠左門御帳」(加賀能文庫), 「大野木日記」(加賀能文庫) 等
		9月	金沢東照宮西側の櫻下土留石垣、修復完了する。	
宝曆 5年	1755		金沢東照宮、修復につき正遷宮が行われる。	「泰雲公御年譜」(加賀能文庫), 「金沢東照宮修宮權札」(尾崎神社)
宝曆 9年	1759		宝曆の大火(北ノ丸、火災を免れる)	(宝曆九年金沢火難之一巻) (加賀藩史料8) 等
宝曆13年	1763		常照院8代光研、10代藩主重教の要請により金沢を訪れて金沢東照宮の遷宮祭を執行。	
安永年間	1772 ～ 1781		東照宮祭祀について、神護寺の留守役理性院と金沢天石宗地頭顕院との論争が起きる。	
文化 5年	1808	1月	二ノ丸火災により、金沢東照宮の御神体を一時神護寺へ移す。	「御成中家事ニ付東照宮遷御一件ノ内」 (大野木神社文書)
文化12年	1815	4月	金沢東照宮、修理につき遷座が行われる。	「日記抜書」(加賀藩史料12)
明治2年	1869		神仏分離により、金沢東照宮の社僧を遷俗させ、仏像・仏器を排除する。	
明治6年	1873		金沢東照宮から尾崎社に改称。	
明治7年	1874		尾崎社から尾崎神社に改称。	
明治11年	1878	9月	尾崎神社、北ノ丸から現在地の西町へ移転。	「金沢東照宮移転權札」(尾崎神社)

＊第3・4表 出典欄の略称は次の通り

本丸附段

[史料叢書機関]

松井文庫=財團法人松井文庫、加賀能文庫=金沢市立玉川図書館加賀能文庫、安居寺=富山県南砺市安居寺、富山大=富山大学附属図書館、前田育徳会=(公財)前田育徳会、後藤文庫=金沢市立玉川図書館後藤文庫、防衛研究所=防衛省防衛研究所戦史研究センター

[図書]

『加賀藩史料2』～『加賀藩史料 第2編』1980清文堂出版,『黄蘋古箇集』～『岡山県の中世文書—黄蘋古箇集』2016戎光洋出版、

『加賀藩史料8』～『加賀藩史料 第8編』1980清文堂出版

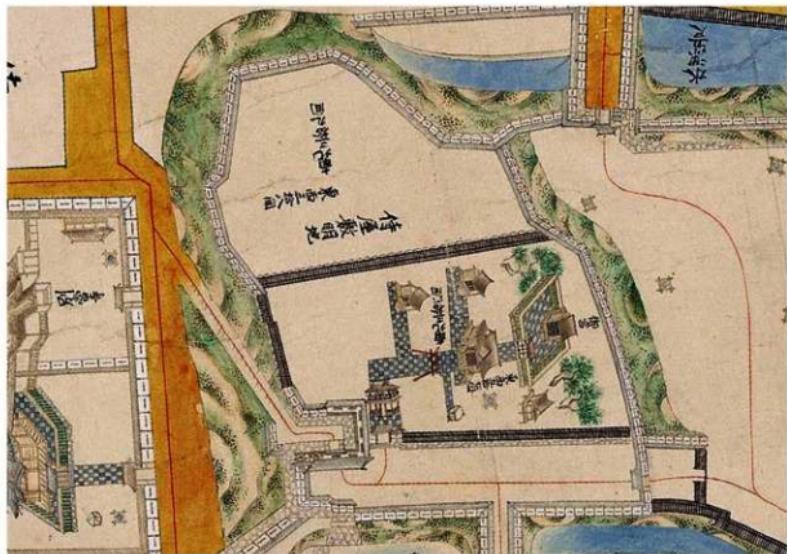
北ノ丸

[史料叢書機関]

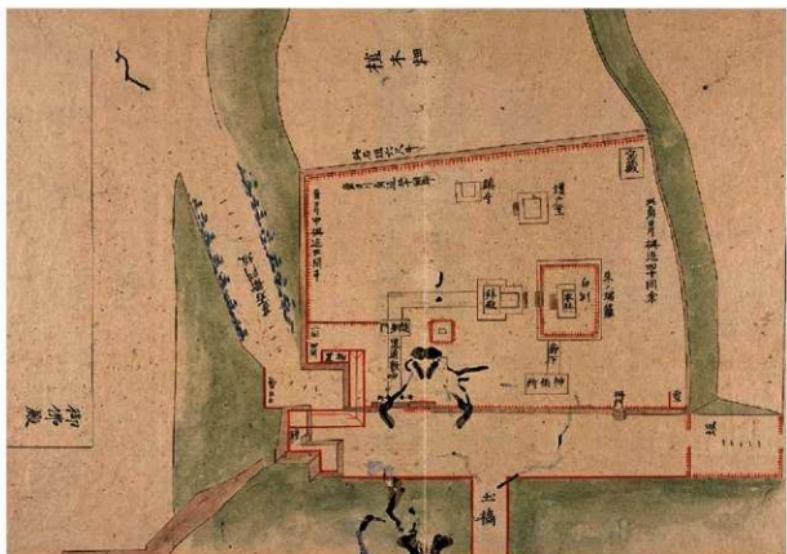
加賀能文庫=金沢市立玉川図書館加賀能文庫、後藤文庫=金沢市立玉川図書館後藤文庫、安居寺=富山県南砺市安居寺、富山大=富山大学附属図書館、内閣文庫=国立公文書館内閣文庫

[図書]

『黄蘋古箇集』～『岡山県の中世文書—黄蘋古箇集』2016戎光洋出版、『石川県2016』～『金沢城諸書作事史料4』2016 石川県金沢城調査研究所、『加賀藩史料8』～『加賀藩史料 第8編』1980清文堂出版、『加賀藩史料12』～『加賀藩史料 第2編』1981清文堂出版



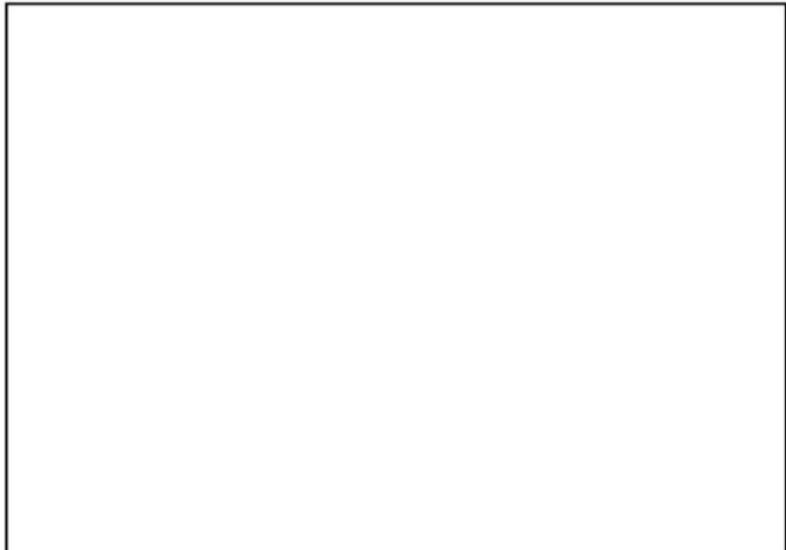
「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）寛文8年～延宝年間(1668～1681)



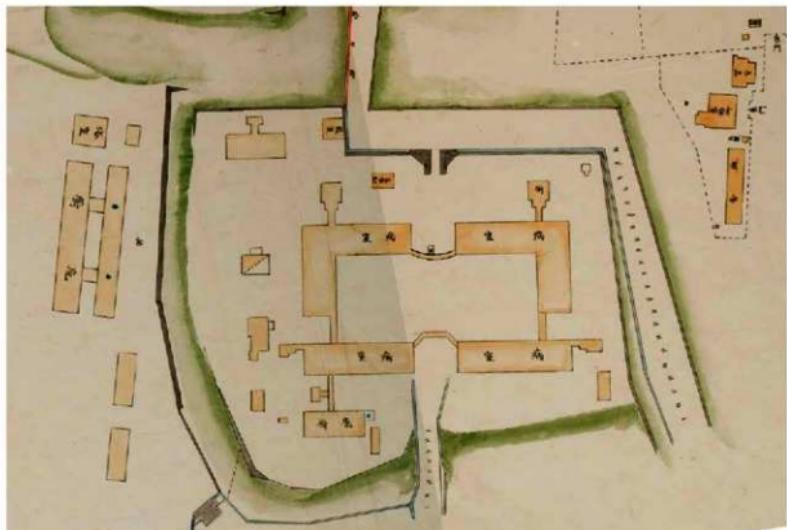
「金沢古城図」（石川県立図書館蔵）天和2年～貞享4年頃(1682～87)  
第8図 北ノ丸(近世前期)



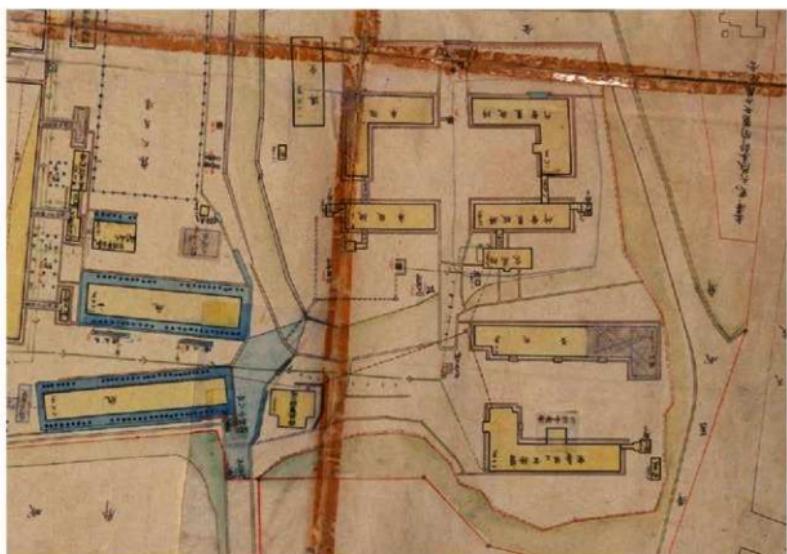
「金沢城内絵図」（石黒信二氏蔵） 文化7～13年頃(1810～16)



「御城分間御絵図」 ((公財)前田育徳会蔵) 嘉永3年(1850)  
第9図 北ノ丸(近世後期)



「歩兵第七連隊構外木柵解除之図」『歩兵第七連隊構外木柵改修ノ件（陸軍省伍大日記）』  
（防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵） 明治32年(1899)



「歩兵第百七聯隊圖」（石川県立歴史博物館蔵）昭和20年(1945)  
第10図 北ノ丸(近代)

## 第4節 既往の調査成果

### 1. 金沢城の発掘調査

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和43年の金沢城学術調査委員会が実施した本丸・二ノ丸等の学術調査が端緒である。昭和50～61年には金沢大学が主体となり、大学施設設置工事に伴う調査を実施している。

平成4～6年には県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋・車橋門の一部で調査を実施している。平成8年に石川県が金沢城跡の用地を国から取得したことにより始まる金沢城公園整備事業に伴い、平成9～13年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降は（財）石川県埋蔵文化財センター）が二ノ丸内堀・菱櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査が実施された。

平成13年、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成19年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が開設され、翌年より絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の4分野から総合的な調査研究が開始された。埋蔵文化財確認調査事業は初期金沢城の解明を目的として平成14年度から継続的に実施されている。調査では本丸・東ノ丸を中心にして石垣の構築過程、本丸大手通路（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出など多くの成果がある。

平成15年度以降は公園整備事業に係る調査が再開され、いもり堀・河北門・玉泉院丸・橋爪門で復元整備にかかる確認調査が実施された。このほか、都心軸整備推進事業として（財）石川県埋蔵文化財センターが城の外郭部にあたる堂形で調査している。

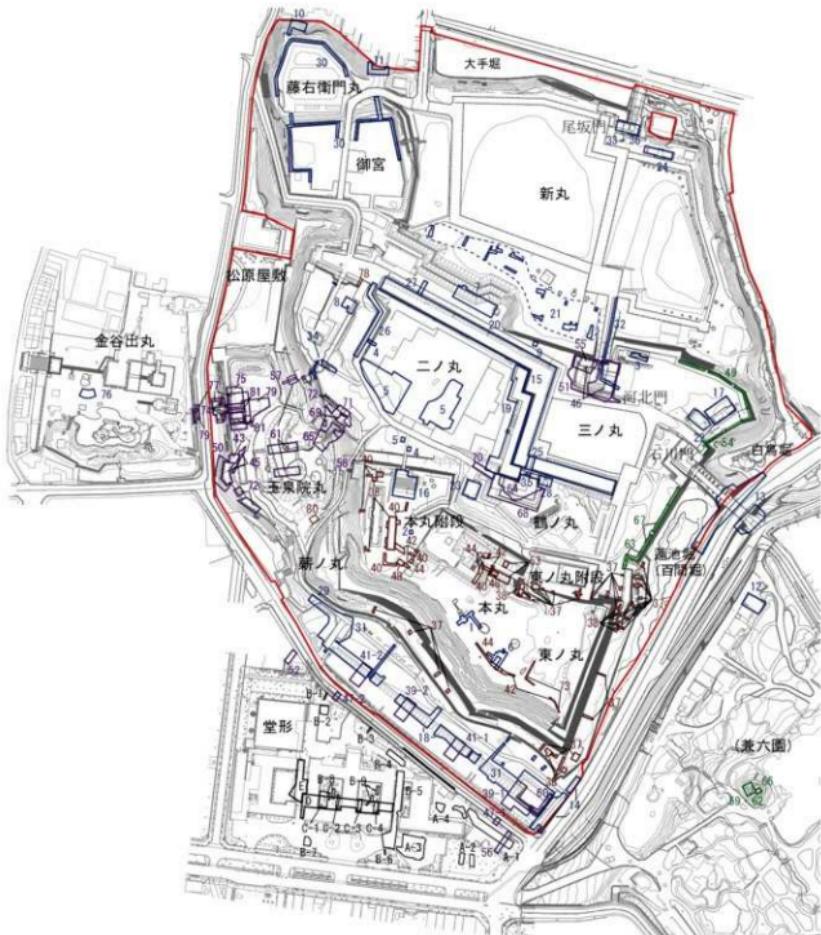
### 2. 北ノ丸の発掘調査

金沢大学考古学研究室による昭和56年度調査〔貞末ほか1986〕で、藤右衛門丸北側法面裾部において石垣が検出された。ただし、現存する西北隅角部の西面および北面の一部は、一般的な築石が斜面全体を覆う石垣であるのに対して、前者以東の北面では階段状の石垣列が構築されていた。昭和61年度調査〔貞末ほか1989〕でも、黒門横北側懸崖部頂上で石垣列が検出されており、藤右衛門丸北側法面の石垣列と連続すると推定される。先の調査から、両者は最下段の第1石垣列を基礎としており、その石垣列の基盤部前面に敷き詰められていた瓦から18世紀後半～19世紀の構築と推定されている。

### 3. 本丸附段の発掘調査

平成15・16年度の調査〔金沢城調査研究所2008d〕において、寛永8年（1631）以前に遡る遺構面を三面確認した。初期遺構面IIは地山を基盤とするが、溝状の遺構（2004-1SX03）がある他不明な点が多い。初期遺構面I（古）は造成土を基盤とするもので、食物残滓を廃棄した土坑や地下室状遺構等が高い密度で営まれている。初期遺構面I（新）では堀による区画がなされ、本丸寄りには池・水溜の可能性がある遺構（2004-1SK11）等、その外側には鍛冶等金属加工に関連する遺構が認められた。焼土面の状況や出土した土師器皿等の年代観から、遺構面I（古）は慶長～元和頃、遺構面I（新）は寛永8年（1631）大火までと考えられる。これら遺構の濃密な展開から、本丸附段はこの当時本丸の奥側あるいは裏手であったと位置付けられる。またこの状況は、本丸大手が東ノ丸唐門側であったことも示唆している。

平成17・18・19年度の調査〔金沢城調査研究所2014d〕では、本丸西面石垣下部の特徴をより明確にすることに加え、堀の規模・本丸との連絡路（土橋等）・埋没過程とその後の利用状況の確認等、堀の構造と変遷の解明を目的とした発掘調査を実施した。また、堀の深さ等を探るため、ボーリング調査も行っている。



<input type="checkbox"/> 史跡指定範囲 (H20. 6. 17)
<input type="checkbox"/> 金沢城跡埋蔵文化財確認調査 (H14~20, 26, 29, 30)
<input type="checkbox"/> 文化財保存修理工事に係る埋蔵文化財調査 (H19~23)
<input type="checkbox"/> 金沢公園整備に係る埋蔵文化財調査 (H15~30)
<input type="checkbox"/> 都心地区整備に係る埋蔵文化財調査 (H15, 16, 19, 20, 24)
<input type="checkbox"/> その他の埋蔵文化財調査

0 100m

第11図 金沢城跡発掘調査位置図(～平成30年度)

第5表 金沢城跡発掘調査一覧（1）

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	報告書	文献
1	本丸	昭和43(1968)	企大金沢城調査委	学術調査	川越門・礎石建物跡	井上1969・古岡1985・増山1999
2	本丸附設	昭和43(1968)	企大金沢城調査委	学術調査		井上1969・古岡1985・増山1999
3	三ノ丸	昭和43(1968)	企大金沢城調査委	学術調査	川原石石積	井上1969・古岡1985・増山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	企大金沢城調査委	学術調査	歌舞台跡・台所跡・極楽橋行近律跡	井上1969・古岡1985・増山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	私教委・企大	柵倉堀築	柵倉門・桝木施設・用水路	私教委1970・古岡1985・増山1999
6	本丸	昭和44(1969)	私教委・企大	学術調査	二階櫓・三階長屋跡	私教委1970・古岡1985・増山1999
7	西十間表塀	昭和50(1975)	企大	学生会監修而建政	長岸塀石・植木垣	上野1976・古岡1985・増山1999
8	二ノ丸	昭和52(1977)	企大	学術調査	前庭14m後方の御殿跡	佐々木1981・古岡1985・増山1999
9	三ノ丸へ十間表塀間通路	昭和54(1979)	企大考古学研究室	無縫アーチナット設置	大型造石	佐々木1980・古岡1985・増山1999
10	表右内門丸北側法面柵板	昭和56(1981)	企大考古学研究室	柵板設置	石垣・瓦	貞木ほか1986・増山1999
11	表門櫓と表塀底部	昭和61(1986)	企大考古学研究室	表界石並排防護工事	石垣・切石側面・瓦	貞木ほか1986
12	裏六櫓(江戸町裏指定地)	平成4年(1992)	県埋文センター	店舗改築	17世紀初期の造構面(礎石建物等)	県埋文センター1992
13	石川門裏土塁(石川櫓)	平成6・7(1992-94)	県埋文センター	道路整備	土壠の削成過程(16世紀後半頃の御庭館遺構等)	県埋文センター1997・1998
14	表門	平成6(1994)	県埋文センター	道路整備	石垣	県埋文センター1996
15	内堀第1次・通路	平成8(1997)	県埋文センター	川面修理(復元整備)	壁・堆積(重ねられた刀・鉢・瓶)・表格離石等	金沢調査研究所2011d・2012b
16	本丸附設	平成10・11(1998-2000)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	周囲整備		本報告
17	三ノ丸第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	御砲石跡(御山塚遺跡)・御砲弾品		金沢調査研究所2006b
18	いもり塀第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	天正～元和頃の塀・土塁・瓦と以後の塀・植竹		三澤1999
19	東十間長屋	平成10-11(1998-99)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	御内堀整備(復元整備)	表内堀底壁・表内堀排水溝・表内堀排水溝・17世紀初期の造構面	金沢調査研究所2011a・2012b
20	内堀第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	表北手石垣(復元整備)	表北手石垣の構造把握	金沢調査研究所2011d・2012b
21	表丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	御内堀(復元整備)	御内堀に埋没した塀の範囲確定	金沢調査研究所2011d
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	御石碑等(番所跡)	御石碑等(番所跡)・石組井戸	(財)県埋文センター2002a
23	西ノ丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	木構・石垣(御用川用)		金沢調査研究所2011d
24	西ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	御内堀(復元整備)	16世紀後半から末期頃の造構面	(財)県埋文センター2002b
25	櫛爪門外櫛脚御系通	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	櫛脚本體の構造把握	金沢調査研究所2011d・2012b
26	二ノ丸闘闘	平成11(1999)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	礎石・石組造築		金沢調査研究所2011d
27	三ノ丸第3次	平成11(1999)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	公園整備(復元整備)	土枕	金沢調査研究所2011d・2012b
28	西ノ丸第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	御内堀(復元整備)	16世紀末頃の造構面	金沢調査研究所2011e
29	いもり塀第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	櫛脚後部から瓦と半蔵門の石垣		海津・土井2001
30	北ノ丸第1次	平成12(2000)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	太輪造営・空瓶舎・石瓦等		本報告
31	いもり塀第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	元和以後の塀・土塁・土俵講車・金箔瓦		海津・土井ほか2001
32	三ノ丸第4次	平成12(2000)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	河内門と相馬・織田・土坂と表手へ末頃の造構面		金沢調査研究所2011c
33	西ノ丸第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	尾張門跡・御妙院門跡・土塁	尾張門跡・御妙院門跡と表手へ末頃の造構面	金沢調査研究所2011d
34	風呂屋(1門等)	平成13(2001)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	看護・石組築	看護・石組築	金沢調査研究所2011d
35	櫛爪門移形	平成13(2001)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	土壠・壁・ピット		金沢調査研究所2011e
36	尾坂門	平成13(2001)	(財)県埋文センター・20箇所整備(復元整備)	石組築・路面	石組築・路面	金沢調査研究所2011d
37	本丸廻路	平成14(2002)	企大金沢城調査委	学術調査	本丸廻路(安波江)の把握	金沢調査研究所2009d
38	本丸西辺	平成15(2003)	企大金沢城調査委	学術調査	三十間長袖石垣の調査等	金沢調査研究所2009d
39	いもり塀	平成15(2003)	企大金沢城調査委	公園整備(復元整備)	櫛脚塀の検出	金沢調査研究所2004a
40	本丸四辺	平成16(2004)	企大金沢城調査委	学術調査	東本丸火以前の2面の造構面	企大金沢城調査研究所2008d
41	いもり塀	平成16(2004)	企大金沢城調査委	公園整備(復元整備)	櫛脚当時の塀の規模を確認	企大金沢城調査研究所2004a
42	本丸	平成17(2005)	企大金沢城調査委	学術調査	本丸三層石垣	企大金沢城調査研究所2014d
43	玉蔵院丸	平成17(2005)	企大金沢城調査委	公園整備(石川集算)	近代の改修・石垣上部の二重構造の把握	企大金沢城調査研究所2010b
44	本丸	平成18(2006)	企大金沢城調査委	学術調査	元和期の大規模改修・初期金沢城の礎石建物	企大金沢城調査研究所2014d

第6表 金沢城跡発掘調査一覧（2）

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	結果	文献
45	玉泉院丸（南西石垣）	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（石垣移築）	部分移築の把握。昭和金泉石垣	公園緑地・調査研究所2010
46	河北門	平成19(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	現存状況、規模、立場、創建時期の把握	金沢城調査研究所2011c
47	いもり堀	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	東岸の位置確認	金沢城調査研究所2007a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術調査	慶永8年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2014d
49	石川門（右方太鼓櫓）	平成19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修復（建造物）	再杜跡の確認	金沢城調査研究所2014c
50	玉泉院丸（南西石垣）	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（石垣移築）	改修範囲と土台、初期金沢城石垣の変遷の確認	金沢城調査研究所2010e
51	河北門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	横門門跡（慶長後期以前）の遺構確認	金沢城調査研究所2011c
52	いもり堀	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	南岸の位置確認	金沢城調査研究所2008a
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術調査	慶永8年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2014d
54	石川門（右方太鼓櫓）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修復（建造物）	再杜跡の確認	金沢城調査研究所2014c
55	河北門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石垣解体調査（二ノ門堀当）	金沢城調査研究所2011c
56	いもり堀	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	軸の測定、既用木石皆、近世初期の石垣、石列等	金沢城調査研究所2009a
57	玉泉院丸（塀木）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	東北面の遺構確認	金沢城調査研究所2015d
58	玉泉院丸（いもり堀石垣）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	石垣変形箇所の基礎部試掘	未報告
59	東六箇室櫻山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修復（石垣移築）	石垣解体調査	管事務所・調査研究所2012
60	いもり堀	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	横峰石垣東部の既存竹造確認、一部解体	金沢城調査研究所2010a
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	木手中央、北部の遺構確認（中島、出島、塀石等）	金沢城調査研究所2015d
62	東六箇室櫻山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修復（石垣移築）	石垣解体調査	管事務所・調査研究所2012
63	石川門（左方太鼓櫓）	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修復（建造物）	再杜跡の確認	金沢城調査研究所2014c
64	櫛爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	二ノ門内石垣剥落、石垣壁面	金沢城調査研究所2015c
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	東北東面の遺構確認（護岸石垣、墨石等）	金沢城調査研究所2015d・2018d
66	東六箇室櫻山	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修復（石垣移築）	石垣・石造物の軸体制調	管事務所・調査研究所2012
67	石川門（左方太鼓櫓）	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修復（建造物）	再杜跡の確認	金沢城調査研究所2014c
68	櫛爪門	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	二ノ門内石垣剥落、石垣壁面、近世初期遺構	金沢城調査研究所2015c
69	玉泉院丸	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	紙袋瓦積石垣下の遺構確認	金沢城調査研究所2018d
70	櫛爪門	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石垣壁面、石庭面、林野面	金沢城調査研究所2015c
71	玉泉院丸	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	紙袋瓦積石垣周辺と墨石底部の遺構確認	金沢城調査研究所2018d
72	玉泉院丸（南石垣）	平成25(2013)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石垣の解体調査、近世初期の土壌確認	公園緑地・調査研究所2017
73	東ノ丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	学術調査	東ノ丸庭園の遺構確認	金沢城調査研究所2015a
74	玉泉院丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	多門、豊多門の遺構確認	金沢城調査研究所2015a
75	玉泉院丸	平成27(2015)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	多門の遺構確認	金沢城調査研究所2015c・2016a
76	金谷出丸	平成27(2015)	金沢市歴文センター	博物調査	壁または礎、瓦版灰瓦片、石垣遺構	金沢市埋蔵文化財センター・2016a
77	玉泉院丸	平成28(2016)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	多門、豊多門の遺構確認	金沢城調査研究所2016a・2017a
78	敷石屋敷跡北	平成29(2017)	金沢城調査研究所	学術調査	切石櫻石堆砌調査	金沢城調査研究所2018a
79	玉泉院丸	平成29(2017)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	多門、豊多門の遺構確認	金沢城調査研究所2018a
80	玉泉院丸（南東）	平成30(2018)	金沢城調査研究所	学術調査	切石櫻石堆砌調査	金沢城調査研究所2018a
81	玉泉院丸	平成30(2018)	金沢城調査研究所	公園整備（造構確認）	多門の遺構確認	金沢城調査研究所2018a
A	風炉跡地（東側）	平成31(2019)	(財) 旗應文センター（遺跡調査課）	都心跡（背景）	都心跡（背景）	(財) 鳥居文センター・2010
B	風炉跡地（東側）	平成31(2019)	(財) 旗應文センター（遺跡調査課）	都心跡（背景）	都心跡（背景）	(財) 鳥居文センター・2010
C	風炉跡地（東側）	平成31(2019)	(財) 旗應文センター（遺跡調査課）	都心跡（背景）	都心跡（背景）	(財) 鳥居文センター・2012
D	風炉跡地（東側）	平成32(2020)	(財) 旗應文センター（遺跡調査課）	都心跡（背景）	都心跡（背景）	(財) 鳥居文センター・2012
E	風炉跡地（東側）	平成34(2022)	(財) 旗應文センター（遺跡調査課）	都心跡（背景）	都心跡（背景）	(財) 鳥居文センター・2014c

執教委：石川県教育委員会、鳥居文センター：石川県立埋蔵文化財センター、（財）旗應文センター：石川県教育委員会、（財）石川県埋蔵文化財センター（2012年度から公益財团法人）  
 金沢城調査研究室：石川県教育委員会事務局文化財課古跡・歴史研究室、（財）石川城考古研究室：石川県教育委員会、管事務所・調査研究室：石川県公益財團・第六箇室管事務所  
 石川県立埋蔵文化財研究室、（財）石川城考古研究室：石川県立木部記念図書館、石川県立埋蔵文化財研究室  
 全沢市埋蔵文化財センター：全沢市立埋蔵文化財センター  
 他大：金沢大学

## 第3章 本丸附段

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査区の位置と調査の概要 (第12～15図)

本調査区は、本丸附段の北部、二ノ丸との間に設けられた空堀（堀切）に面した斜面に相当する。当該地は17世紀後半以後の絵図において、二ノ丸に連絡する橋（極楽橋）、石垣・塀で囲まれた耕形状の区画、幅広い階段（石段・雁木坂）等が認められる（第6・7図）。近代に入ると幅が大きく減じられる等の改修を受けたが、調査着手時まで階段としての体裁を留めていた。

調査を進めるにあたり、最初に現況地形の平板測量を実施し、次いで近代に改変された部分を重機等により取り除くこととした。この時階段の袖石や下方（北側）脇に散乱していた石材だけでなく、階段本体を構成していた足掛かりの石材（延石）も一部を除き対象とした。着手当初は、延石についても、近世絵図の描写と異なっていたこと等から、近代以後の据え直しと考えていた。ただし発掘の進捗とともに、近世段階の位置を踏襲していたものが多くを占めていることが明らかになった。

調査区は東西両側に厚く近代の整地土が堆積しており、このうち東側の一部は調査区外から重機で掘削した。その他は人力で掘削を行った。階段一帯は全体的に擾乱を受けており、延石裏込め土の流出状況の扱いを始めとして、階段痕跡の見極めが十分に至らない部分もあった。このこともあり、階段痕跡等を反映すると思われる部分は、近代以後の抜き取りが想定される場合も含め、遺構平面図の表現において長短ケバで示した。なお、調査区内の区分けについては、平板測量に際し設置した杭を基準にI～VII区を設定した（第15図）。

#### 2. 基本層序 (第22図)

本調査区の層序は、I：階段（雁木坂）近代改変後の土層、II：階段造成・改修期の土層、III：階段造成以前の土層、IV：地山（基盤層）に大別した。このうちII層は、延石裏込め土・造成（整地）土（整地土A～C層）・石垣裏込め等が該当する。III層は階段以前の造成土（E層）や遺構埋土（SK04・SX01）等が該当する。階段（雁木坂）第1段から極楽橋間の造成（整地）土（整地土D層）も本層に含めた。層序ごとに土質に明確な傾向があるわけではないが、II・III層は地山層起源とみられる黄褐色・黒褐色粘質土の互層やブロックが主体となる土層が多い。

### 第2節 遺構

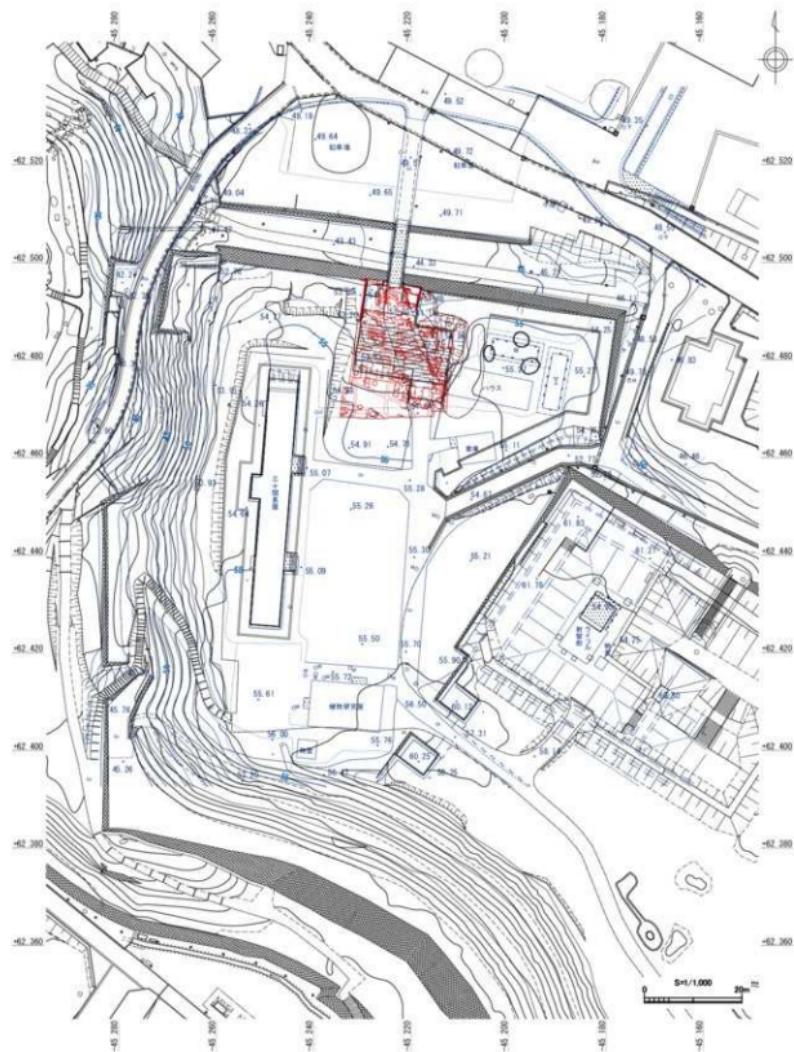
#### 1. 階段

##### (1) 調査前の状況 (第14図)

調査着手前の階段の状況は、近世絵図の描写と異なり、両側に斜面に斜行した袖石を有した形状で、袖石間の幅はおよそ5.5mであるが、踏面自体は斜面に直交し、その状態での長さ（奥行）は12.7mを測った。段数は10段を数え、踏面先端には直方体状の石材（延石）が据えられていた。階段両脇の袖石の外側は、郭面向かって緩やかに上る斜面となっており、地表上では石垣は階段下方・極楽橋詰両脇のみ認められた。第2章で言及した通り、明治41年（1908）からしばらくのうちに、近世初期以来の階段（雁木坂）が改修を受けたものと考えられる。

##### (2) 検出遺構の状況 (第16～23図)

**遺存状況** 近代階段の両脇は、主に近世後期～近代初期の陶磁器・瓦片を多く含む土層が堆積していた。このうち初期の陸軍兵営で使用された、アラビア数字を繪付した碗・皿類が最も年代の下る一群とみられ、明治末頃と推定される改修時期とも対応する。この近代土層を除去したところ、延石の大



黒:現況図 青:整備前(調査時) 赤:調査区

第12図 本丸附段 調査区位置図



第13図 本丸附段 調査区・絵図照合図

半は撤去され、ごく少数残るのみであった。延石が失われている箇所でも、階段状を呈する地形が認められ、延石背後の裏込めに起因すると推定される土層も所々で検出されているが、流出や擾乱等により、延石の厳密な位置を特定するのは難しい状況であった。

近代階段部分については、基本的に近世階段の一部を踏襲したものであり、食い違い状を呈する近世階段の上部・下部の出入り口を繋げた範囲のみ残し、両側の延石の大部分を撤去し袖石で区切った状況が明らかになった。踏襲した中央部分についても、近世階段の2段分をもって1段とし、間の延石は撤去されていた。また近世階段の最上段の南に更に1段分付加したり、周囲石垣撤去部分（1415E（SW06）北端）に延石を延長している箇所があった。この他腐植土層の上に位置するもの、斜面を縦断して設置された鉄管が下方を潜るもの等もみられ、近代以後に据え直されている場合も想定される。しかしこれら延石の多くは、その下位に地盤の整形や根固め石が残っていて、両脇に残存する発掘した延石やその抜き取り痕等と考えられる階段状の地形に対応しており、近世時の位置を示すものである。以上のような遺構の状況からみて、階段の段数は18段を数える。

なお近世階段は、上下の出入口の他は、階段側に面を持つ石垣で囲繞されていた。近代に多くの部分が撤去され、地上露呈部はわずかであったが、発掘により下部・根石・抜き取り痕等が検出された。**全体形状と規模**（第16～21図） 平面形については、中央部が東西に長い矩形で長大であるのに対し、出入口部は相対的に狭く、さらに下方（北・極楽橋側）は西に、上方（南・本丸附段郭側）は東に寄せ、軸をずらして設けられており、全体として鍵形を呈する。周囲の石垣の存在とも併せ、樹形としての体裁を残したものと考えられる。

斜面に直交する南北長は、階段本体部分（第1段（最下部）前面～第18段（最上部）前面）で12.7m、第1段前面から極楽橋詰まで6.4m、最大幅18.8m、第1段下面から第18段までの高さ3.9mを測る。段（踏面）の奥行きは一定ではないが、およそ70～80cmに復元される。下部の第3～7段東端には南北3.5m、東西2.3mの平場があり、主軸に直交し、西から東へと上る段（踏面）が派生している（第21図）。なお第3段東部と直交する東第1段は、踏面奥行きが狭くなっている。

**基盤の構造**（第22図） 階段の第1段から第13段付近までは、基本的に地山を整形した削平面が基盤となっている箇所が多い。第14段より上位では、地山面に展開する遺構を造成土（整地土）で覆い、嵩上げを行って基盤を形成している。階段に関する造成土（整地土）については、下方延石の裏込め土、上方延石の裏込め土・基盤層とも整地土C層として一括したが、当初構築以後の改修とも関連し、近世後期以後の出土遺物を含む箇所もある。

階段第1段より北側の平坦面（I区）については、地山が急激に北に向かって下降している。この落ちを埋めるように下層に栗石、上層には造成土（整地土D層）が施されている。本層の範囲は、不明瞭な部分もあるが、およそ壇状施設の内側、通路部分に相当する。

階段第18段より南側には、整地土C層に先行、もしくは一体的に施工された造成土（整地土A層）が展開する。また整地土B層は、最上段付近において部分的に認められる土層で、整地土A層を切って充填されており、近世後期の陶磁器や釉薬瓦を伴う。階段の東辺である1412W（SW03）南端部（第17・25図）は、整地土B層中に収まっており、石垣の改修等に関連して施工された可能性がある。

**段の状況と延石**（第22・23図） 各段は、近代の改修が著しいが、近代階段として踏襲された箇所の他、抜き取りを免れた延石（第1・2段、第4・5・8段東、東1・2段等）、延石抜き取り痕等とみられる段状の遺構、裏込め土とみられる土層、裏込め・根固め石等が所々に検出された。これらは部分的で、確定し難いものも含むが、階段地割が規格的であることを考慮し、近世後期の絵図描写も参考にすると、各段は奥行き70～80cmで、主たる南北方向では18段を数えるものと判断される。

各段の最前方（北端）には、略直方体状の延石が配置される。延石は第12段の2基の凝灰岩を除き戸室石製の切石材で、背面・側面・下面の調整は粗い。また納穴のある転用材もみられる。長さは

35cm～2mとばらつきがあるが、1～1.5m程度が半数を占める。幅は30～40cm前後、高さ（各段自体の高さとほぼ同じ）20～30cmが主体である。階段下方では、延石の裏込めとして地山との間に主に褐色～暗茶褐色の砂質土が施されるが（第23図）、上方では、扁平な川原石が裏込め・根固めとして用いられる割合が高い（第20・22図）。背後の踏面は土の面のままの仕上げとなる。階段下方の一部では、最上面に黄灰褐色～灰褐色砂質土が薄く堆積している箇所がみられる。

多くの延石が抜き取られる中、東西軸の段と南北軸の段とが直交する東側平場付近は比較的良好に遺存していた（第21図）。これによると、主軸第4段と東第1段とが同一レベルを形成し、主軸第7段と平場が対応することとなる。ただし平場の西辺（東第4段最前方）は、通常の延石ではなく、幅12～15cmほどの細長い材で仕切っている。

なお延石は厳密には一直線に揃っておらず、第1段、第2段、第18段等で顕著である。経年的に変形したことが推定されるが、当初から多少の出入りがあった可能性もあり、特定しがたい。また同一段でも高さに10cm以上の差がみられる場合もあり、第22図では平均化した数値を示した。

この他、第16段については、延石・根固め石の範囲が、後述する石垣1415E（SW06）の北延長ラインよりさらに西へ広がっており（第20図）、近世後期の絵図の描写と整合していない。第16段西端の延石については、裏込めから釉薬瓦が出土しており、近代に拡張した可能性があるが、近世後期絵図の景観以前に遡る造作である可能性も考えられる。

**構築時期** 下層遺構や造成土の出土遺物や周囲の石垣基礎部分の特徴等から、構築時期は17世紀前半と判断され、寛永8年（1631）大火後の本丸一帯の土地利用の在り方からみても整合する。

## 2. 階段関連遺構

### （1）石垣（第17～20・24～27図）

階段は出入り口付近を除き、石垣で囲繞されている。石垣石材は戸室石（角閃石安山岩）である。**1412E（SW01）**（第18・19・24図）郭の西辺において東面する。極楽橋詰から階段第3段付近まで遺存するが、これより南側は損壊し、地上部分にはみられない。今回の調査では北側で基礎部分、南側でIV区1415N（SW08）西端に至る抜き取り痕が確認された（第18図）。現存南北長8.9m、抜き取り痕を含めた延長19.4m、階段第1段下面から現存南側天端までの高さ2.54mを測る。

石垣の地盤については、階段第1段付近以南は約15°勾配の地山斜面、以北は地山が急激に下がっており、栗石の充填域に相当する。階段第1段の北2.5～4.5m付近、標高50.7mあたりでは、根石とみられる粗加工石の上端が一部検出された。この上位からは切石積となり、正面を多角形に整形した石材による乱切合わせの手法が採られており、金沢城石垣編年5期（寛文～元禄年間）の特徴をもつ。

**1411W（SW02）**（第19・24図）郭の東辺北部において西面する。現状では北端のみに天端が残り、南側の大半は階段状に石材の取り外しを受けている。現存長5.1m、階段第1段下面（50.75m）から天端（54.37m）までの高さ3.62mを測る。検出最下段とその上段北寄りは粗加工石積で、最下段の下端は未確認であるが、階段第1段下面のレベル等からみて根石の可能性がある。石材は大型の刻印を有するものもあり、石垣編年4期（寛永年間）の所産である。これより上位は5期の切石積となる。

**1412W（SW03）**（第17～19・24・25図）郭の東辺南部において西面する。発掘前は地上に露呈していなかった。南端から北に5.94m分、高さも一段分が検出されたのみで、損壊が著しい。南端の石垣石の設置状況については（第25図）、整地土A層を掘り込み、整地土B層と一緒に施工されている。また北部の地盤（北に下降する斜面）においては、根石抜き取り痕は未検出である。現存部北端の根石と思しき石垣石材は粗加工石、南端の5石分は切石である。南端の切石積は、整地土Bとの関連から近世後期に改修を受けていることが明らかであるが、石垣編年5期の特徴が保持されている。

**1411S（SW07）**（第18・19図）SW02南端から東へ連続し、SW03北端に至る石垣で南面する。発掘によ

り検出された根石が遺存するのみであるが、両端を欠くものの長さ6.4mを測り、郭本来の側辺長に近い。地盤は東に向かって緩やかに上っており、東端の根石上面は西端より90cm程高い。根石は粗加工石で、大型の刻印を有するものがある。控えの長さは40cm～80cm程度である。

1414S (SW04)・1413S (SW05) (第19・24図) 郭北辺、極楽橋詰の両側に位置する。後述するように、絵図に見える壇状施設南側を削平した面に構築されたとみられ、近代以後に下る可能性が高い。なお橋詰東側の1413S (SW05)では、近代の排水溝が石垣西半の下を通っている。ただし両石垣とも、橋側に面した端部の短い南北辺については、壇状遺構の地割を踏襲していると推定される。

1415E (SW06) (第17・24・25図) 1415N (SW08) 東端より南へ直角に折れ、東側のSW03南部と相対し、東面する。発掘で検出した石垣で、1415N (SW08)との出角から南へ4.86m遺存していた。櫓台状施設の東辺に相当する。地盤は北から南に向かい上がっており、北側では2～3段（検出高75～120cm）、南端では根石1段が残る。天端の高さについては不明である。

石垣は平面的には階段第18段（最上段）以降に対応している。最上段に続く近世地表面（本丸附段郭面）は標高54.5～6mを測り、石垣残存レベルに近い。検出した石垣は、近世において概ね地中に埋もれている状態であり、近代の石垣の撤去は、ほぼ地表面より上位で行われていることを示す。

第25図は、北端角石から南へ3石目付近の東西土層断面である。この箇所では階段構築以前の土層（III層）であるE層を基盤として根切りされ、根石下端が据えられている。掘方の上位には整地土A層が施され、これが近世地表面の基盤層となっている。

石垣石材は、北端角石（上面のみ検出）を除き、粗加工石で構成されている。ただし、ほぼ地表より上となる残存上面より上位に切石が積まれていた可能性も考えられる。

1415N (SW08) (第17・20・26・27図) 1412E (SW01) 南端から東へ連続し、1415E (SW06) 北端に至る石垣で北面する。地上部分は失われておらず、長さ10.9m、幅1.75mの溝状抜き取り坑の埋土を取り去ったところ、東側では築石の根石5基と東端出角部分が掘方内に遺存していた（第17・20図）。櫓台状施設の北辺に相当する。掘方前方（北側）は地山を基盤とし、緩やかな下降から急傾斜となる壁面で、背後（南側）は直立気味に立ち上がる（第26・27図）。幅1.75m、深さ59cmを測る。掘方内の埋土は、下部に栗石が多く含まれるが粘質土が混在し、上部前面には互層状の粘質土が認められる。西側では根石ごと撤去されており、一部を除き石垣裏込め層もほとんど残っていないが、掘方形状は東側と大きく変わらず、抜き取りは掘方を若干広げる程度で行われたようである。なお1412E (SW01)との接続部分では（第27図）、根石前面（北側）に黄褐色粘質土・粘砂質土や、黒褐色粘質土との混土層が互層状となる部分があり、平面がやや広がった掘方における埋土と判断した。

根石は粗加工石で、寸法は控えの長さ88～106cm、幅64～83cmと比較的均質である。大型の刻印をもつものがあり、石垣編年4期に属する。

## （2）門柱基礎（根固）（第28図）

階段（雁木坂）上方（V・VII区）において東西2基の遺構が検出された。西側の遺構は1.4×1.2m、東側は90×85cmを測る略円形を呈し、ともに10～40cm台の礫が集中していた。東西間の芯々距離は約3.5mを測る。礎石が抜き取られ、根固の礫が残存した状況と考えられる。

近世前期の「金沢城絵図」（第6図）では、西側石垣（1415E (SW06)）と東側石垣（1412W (SW03)）を結ぶ扉があり、中程に門の表記がある。1415E (SW06)に接して礎石状の自然石があり、絵図にみえる扉の基礎に対応すると思われる。絵図では3間半との表記があるが、これは両石垣間の距離に近い数値であり、出入口部分は描写からみて2間（3.64m）程度と推定され、遺構とも概ね一致する。近世後期の絵図に門は見えず、宝曆9年（1759）大火で焼失し以後再建されなかつたと考えられる。

なお「金沢城本丸・東丸之図」（第100図）・「御城中毫分碁絵図」（第13図）等では、階段最上部の南側に東西方向の区画が描かれている。発掘調査では、第18段前端から約5.3m南のあたりで浅い溝

状の窪みが一部検出されており、関連する可能性がある。

### (3) 壇状施設（第17～19図）

壇状施設とした方形区画は、南（階段上部の第16・17段西側、IV・V区）及び北西・北東（階段下方の東西石垣1412E（SW01）・1411W（SW02）に接したもの、I区）の3箇所ある。このうち南の施設（第17・18図）については、絵図では東側の階段出入口部より低い表現となつており、遺構面も東側より若干低いことが確認されたが、明確な区画は検出できなかつた。

北西部・北東部の施設（第19図）については、近世後期の「御城分間御絵図」「金沢城本丸・東丸之図」（第100図）等によると前者が2区画、後者が1区画で構成されていて、寸法が記載されている。調査着手前の状況では、極楽橋詰の東西に南北幅1～1.6m、高さ80cm～1m程の築地状の高まりがあり、橋側及び南側に低い石垣が巡っていた（1414S（SW04）・1413S（SW05））。この高まりが壇状施設の名残と見られる。これより南側は近代の土層が堆積しており、区画上部は撤去され擾乱を受けていたが、東西石垣の根石に近いレベルで区画の基礎と考えられる石材列が部分的に検出された。

北西部では、階段の足掛かりと類似する延石が、1412E（SW01）と概ね平行して2列検出された。より石垣に近い西側では、長さ98cmの規模のものが1基のみの構成であるが、石垣との距離は2.48mで、絵図に描写された2区画のうち南側のものと寸法がおおよそ一致する。ただし北辺・南辺については不明である。この東側にも延石3基で構成される長さ2.08mの石列があり、北側の築地状高まりの東端（1414S（SW04）東端）とおおよそ揃っている。絵図とは合致しないが、近代初期までに、区画を修復・拡張した可能性も考えられる。

北東部では、1411W（SW02）と平行して石垣石材3基が検出された。これらは北側の1基は石垣根石と同様、面を外側に向けて設置されていたが、南側の2基の長軸は区画のそれと揃った状態であった。なお南端の1基と中央の1基とは約50cmの間隔がある。石垣石材列自体の長さは3.12mで、1411W（SW02）からの距離（東西幅）は外列側で3.50mを測る。これは北側の築地状高まりの東西幅（1413S（SW05）長）ともほぼ一致する寸法で、高まりを含めた南北の長さは4.53mを測る。絵図に記載された区画の寸法に対し、東西で30cm、南北で60cmほど大きいことになるが、基礎であることを考えれば、おおよそ対応しているとも考えられる。

### (4) 排水溝（第28図）

階段下方、I区で2条の排水溝が検出された。

SD01 I区の中央西寄りに位置する暗渠の石橋で、概ね階段の南北軸に一致する。北側先端部が損壊を受け、反対側も失われている可能性があり、現存長は2.65mを測る。整地土D層を基盤とし、幅1m程の掘り方内に収められている。周囲の近世面の遺存状況が悪く確定的ではないが、蓋上部のレベルが整地土D層上面にほぼ対応しているようである。

石組は北側の下段と南側の上段で構成される。下段本体は凝灰岩を凹型に成形したもので、ほぼ同形の二石で構成される。全長1.78m、北半90cm、南半88cm以上、幅外法36～38cm、内法20～23cm、高さ外法17cm、内法13～14cmを測る。底面勾配は約4.2°である。蓋石は不定形な凝灰岩や戸室石の石材が用いられている。

上段本体は北側大部分と南端に細分される。北側の部材は下段と類似した作りで、下段末端近くに積まれている。長さ67cm、幅外法38cm、内法21cm、高さ外法21cm、内法13cmを測る。先端部については継ぎ手状の加工があり、その部分は幅29cm、高さ16cmを測る。南端の構造は、凝灰岩製底板と左右側板を組み合わせたもので、造作は粗い。長さは35cmを測る。下段全体の底面勾配は約2.8°である。なお下段最前方に不定形の蓋石が一部遺存していた。

これらの部材は、主として転用材と考えられる。年代については、後述する木樁暗渠SD02を切っており、近世後期に設置されたと推定されるが明確ではない。

**SD02** SD01の東で検出された溝状の遺構で、暗渠の木樋跡である。長さ2.24m、最大幅60cm、深さ30～40cmを測る。階段の南北軸に対し、西へ大きく振り、前方（北側）がSD01に切られている。本体の材質はほとんど腐朽しているが、材を打ち留めていた鉄釘が30点ほど出土した。

断面は箱状を呈し、上層は褐色、下層は暗褐色の砂質土が充満していた。鉄釘の多くは壁面に沿い、頭部を上あるいは下にした状態で並んで検出され、木質がわずかに付着していた。これらの状況から、断面矩形の木樋の痕跡と判断される。木樋痕の外側に掘方は見つかっておらず、判然としない点もあるが、整地土と一緒に埋め込まれた可能性も考えられる。

頭部を上とする鉄釘に付着する木質は、ほとんどの場合上下に分かれ、下段が溝に平行、上段が直交していた。頭部を下とする鉄釘では、上下の別は判別し難いが、木質は概ね溝に対し全体に平行していた（第28図下、第97～99図）。これらから前者は蓋板と側板、後者は底板と側板を連結していたと判断される。蓋板については、あるいは長大ではなく、長手方向が樋に直交する板を並べていたのかも知れないが、上記傾向と齟齬をきたす少数例を含め、木樋構造の詳細はなお検討を要する。

SD02の年代に関しては、SD01に先行することの他、初期の整地土と一緒に構築されている可能性があり、近世前期に存続したとみられるが明確ではない。

### 3. 下層遺構・土層

#### (1) 地山削平段・盛土（第20・22図）

調査区南東部（V区中部）において、階段造成土（整地土A・B）の下位で検出された。トレント1において、主として南北方向の奥行や断面が確認されたが、東西方向の広がりははつきりしない。

地山削平段は、階段14段以南に重複し、三段の平坦面が認められる。南北の奥行は全体で4m以上、高さは50cmを測る。下方北側の第1・2段の奥行は50～60cm、上段の第3段（標高53.81～67m）は2.5m以上である。なお、第3段は、北端が高まりとなっており、南側は11～14cm低い。

第3段の上部には、細かな互層状を呈する黄褐色・黒褐色粘質土で構成される台形状の盛土が構築されている。盛土は基底部南北長2.38m、高さ40cmを測る。盛土上面の南北1.8mの範囲は、径10～20cm前後の平たい川原石で覆われていた。第3段北端の高まりの形状等からみて、削平段と盛土は一体的に形成された可能性が考えられる。

これらの遺構は、全体の平面形状は明瞭ではないが、階段（雁木坂）とは断面形状が整合的ではなく、別の遺構と判断される。階段（雁木坂）に先行する通路の一部であり、上段の盛土は東西に延びる土居状の施設となる可能性も考えられる。

また盛土南端は、上部に炭層を伴い17世紀前半の土師器皿がまとまって出土する造成土（E層）によって覆われている。この造成土はやや広い範囲で認められ、盛土と一体的とは考え難い。なお土師器皿は当該期の一群においては新相を呈し、年代について1630年前後を目安としつつや下る可能性も考えられ、階段の構築時期の詳細とも関わって検討を要する。

#### (2) SK04（第29図）

調査区中央部（IV区東部～V区西部）、階段（雁木坂）第11～15段の下位で検出された。当該範囲周辺については、地山とは異なる土質の広がりが認められ、下層遺構の存在が想定されたため、ほぼ東半分に相当する部分を対象に検出・掘削を行い、遺構の構造を確認した。

本遺構は斜面等高線に直交する軸を有し、北側にやや広がる台形状の平面形を呈する。北端はわずかに近代以後の擾乱を受けているが、南北3.69m、東西4.3m以上を測る。南側・東側の壁面は垂直に近く、底面から斜面下方の北側へは緩やかな段状を為している。西壁は未確認であるが、東壁と同様に推定される。南壁の高さは1.47m、北端と底面最深部との差は49cmを測る。

埋土下部はおよそ水平で、上部は若干北へ向かって下降する。しまりの弱い黒褐色・暗黄褐色・褐

色・明茶褐色を呈する砂質・粘砂質土が主体である。出土資料のうち、銅釘（第99図）等は上層からの混入品とみられ、主体となるのは17世紀前半の土師器皿や陶磁器、燐瓦である（第35・36・90図）。

通路状遺構の脇に位置し、これに何らかの関連をもつと考えられ、切岸のような機能も想定されるが判然としない。

### （3）SK01（第30図）

調査区南東部（V区東部）、階段（雁木坂）第12～15段下位で検出された。本遺構上面には近代階段の東辺を限る袖石が設けられていて、これより東側はとくに擾乱が著しく、このため本遺構の大部分は、本来の形状が失われていると考えられる。

検出した平面は南北に長い長円形を呈し、断面の形状としては南側が高く急傾斜で、北側は緩やかで低く立ち上がる。この部分は長径3.22m、幅1.91m、南壁の高さ88cmを測る。埋土下部は大きな単位の土層で構成され、土層には異なる土質のブロックが混在する。上部には均質で比較的小さな単位の粘質土が堆積している。出土資料は少ないが、17世紀前半の土師器皿がある（第36図）。

西側のSK04と通路状の遺構を挟んで対応する位置にあり、同様の性格を有していた可能性がある。

## 4. その他の遺構（調査区南西遺構群）（第26・31図）

調査区南西部で検出された、階段（雁木坂）に直接関連しないと考えられる遺構群である。ただし櫓台状施設の範囲と重複するSK05・P01については、階段（雁木坂）存続中（櫓台改修等に伴う場合）の他、これに先行する可能性もある。

### （1）SK01（第31図）

VII区南西で検出された。調査区外に伸長するため全形は不明であるが、検出部分の平面は不整円形を呈し、底面も凹凸が著しい。南北3.98m以上、東西1.42m以上、深さは浅くやや平坦な部分で25～37cm、ピット状の部分で57～93cmを測る。近代の釉薬瓦が出土している（第91図T009）が混入品とみられ、出土資料（第37～41図）の主体は18世紀後半～19世紀前半の年代を示している。

### （2）SK02（第31図）

VII区南西で検出された。東西方向の溝状を呈し、西端がSK01、東端が近代のピットと重複する。SK01との前後関係は判然としない。長さ2.34m、最大幅1.05m、最深部53cmを測る。

### （3）SK03（第31図）

VII区南部で検出された。調査区外に伸長するため全形は不明であるが、検出部分の平面は略三角形状を呈し、東西3.56m以上、南北2.2m以上を測る。南部の底面はやや平坦で深さ13～26cmと浅いが、北部の一角は一段低い長円形を呈し、長さ2.36m、幅1.47m、深さ92cmを測る。

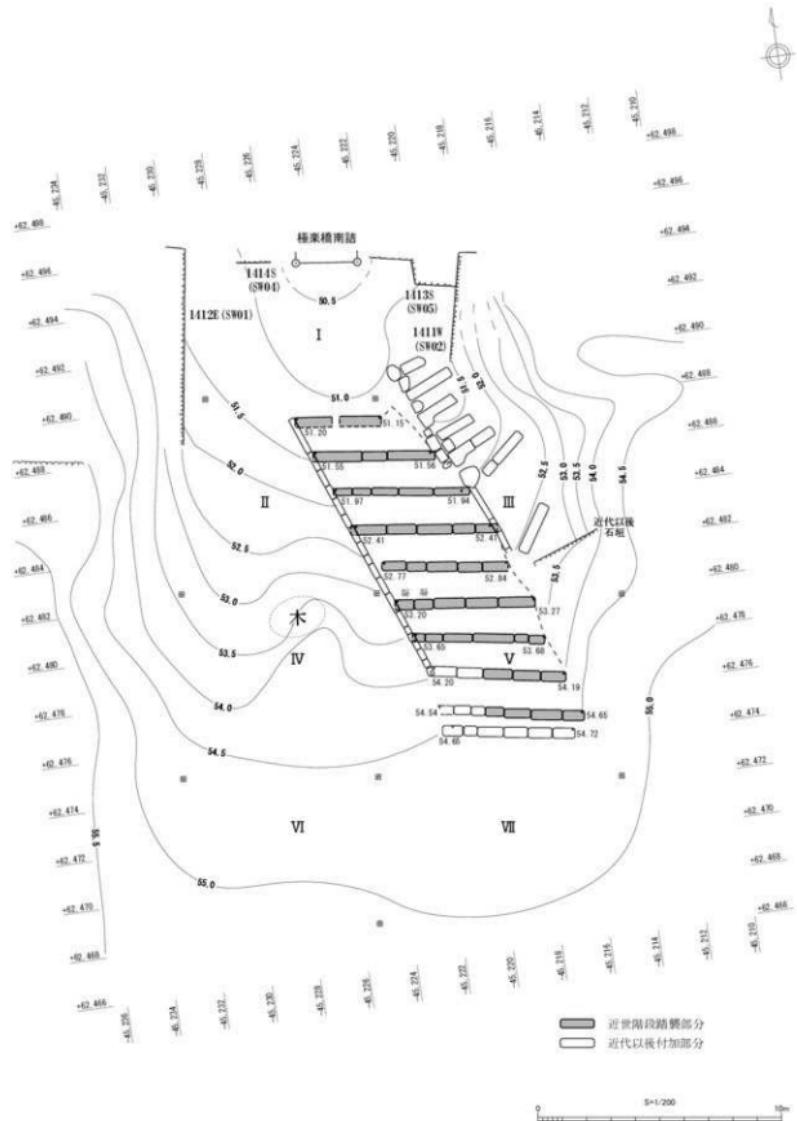
土師器皿（第42図P049）や越前赤瓦の平瓦・熨斗瓦の破片（第91図）が出土しており、遺構は17世紀後半頃形成された可能性がある。

### （4）SK05（第26図）

VII区北部、トレンチ3で検出された。平面は略円形と推定され、断面は逆台形を呈する。検出長は1.97m、深さは80cmを測る。階段造成と一体に施工された整地土Aを基盤とする。北側の1415N(SW08)との構築時の切合の関係は明らかではないが、1415Nの石垣石材抜き取り時の掘り込みにより北端を削られている。内部には栗石・戸室石破片等が充填されている。

### （5）P01（第31図）

VII区北部、1415N(SW08)のすぐ南側で検出された平面円形のピットで、直径96cm、深さ84cmを測る。近世に属するとみられるが、詳細な時期は判然としない。



第14図 本丸附段 調査前状況平面路図



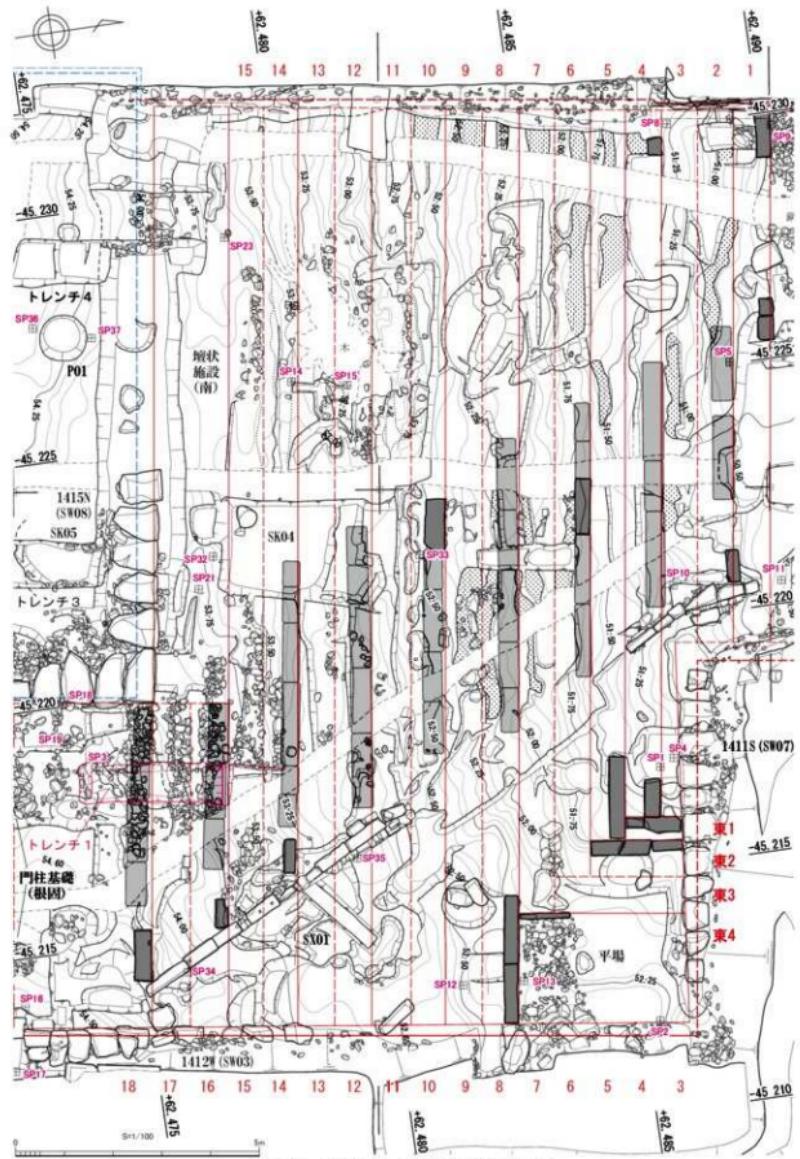
第15図 本丸附段 調査区全体図

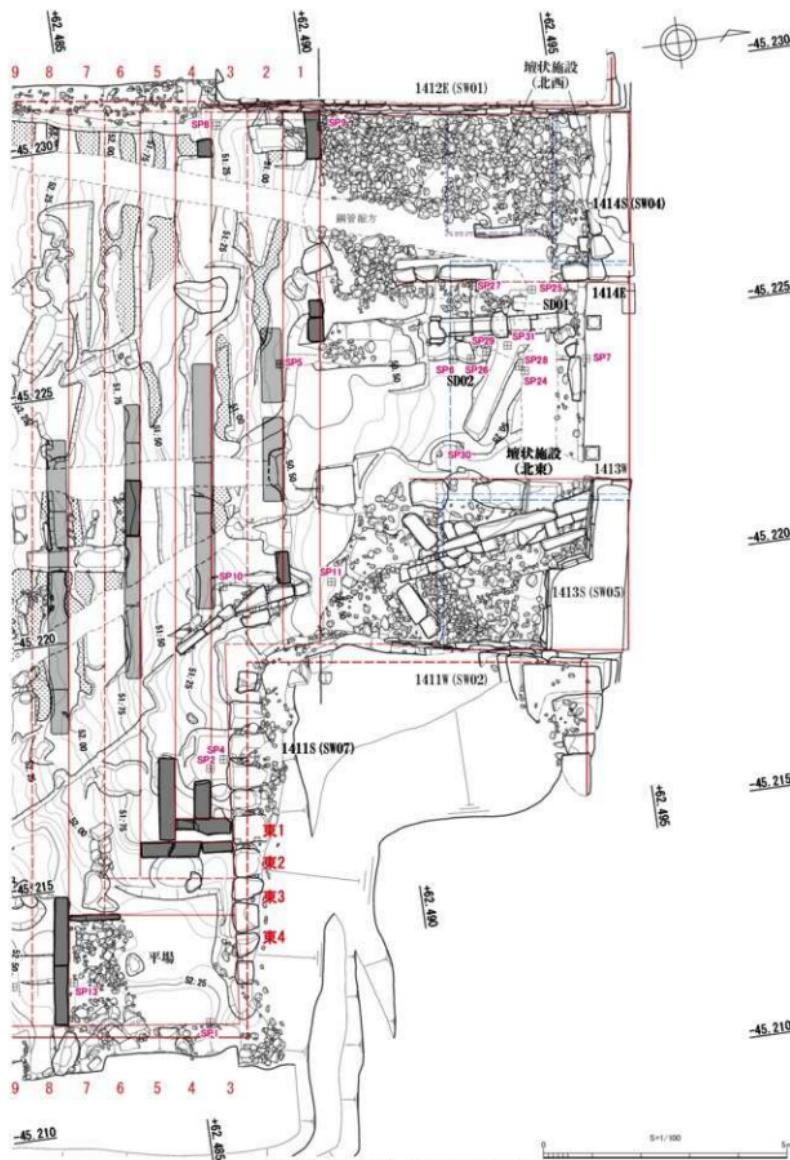


第16図 本丸附段 遺構等位置図



第17図 本丸附段 調査区南部平面図

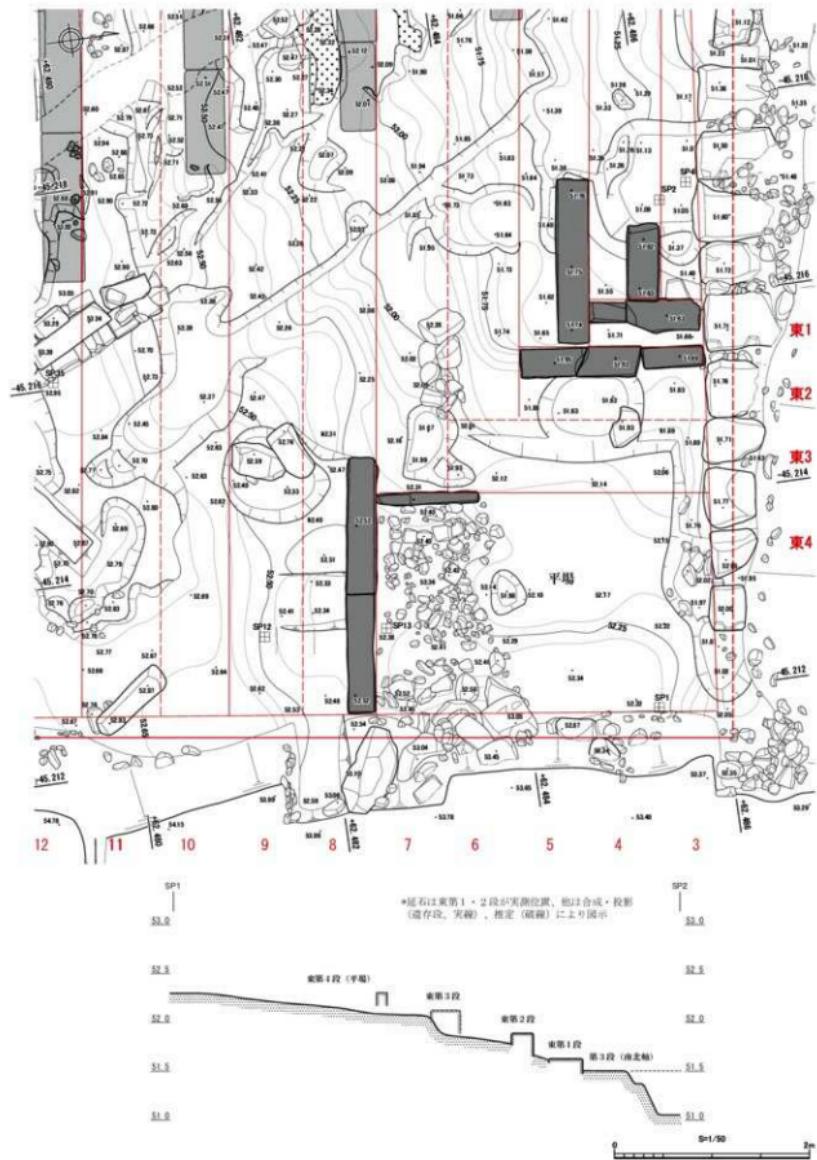




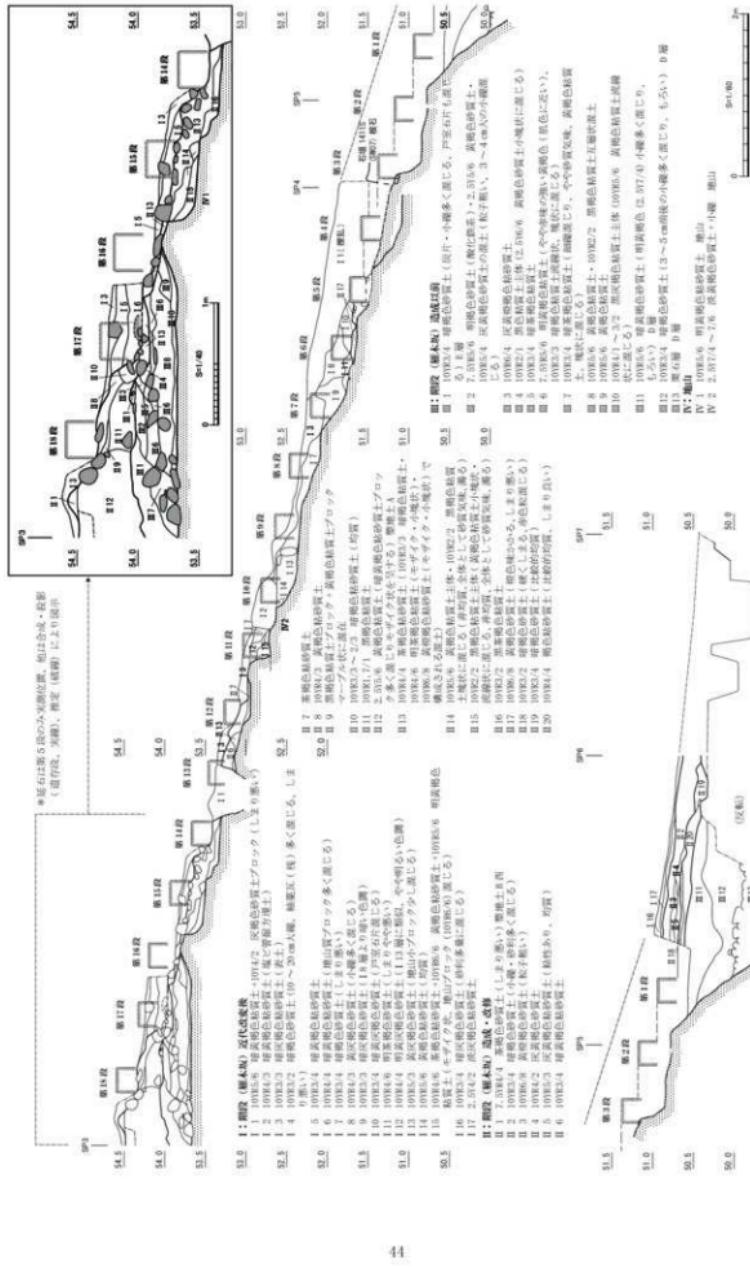
第19図 本丸附段 調査区北部平面図



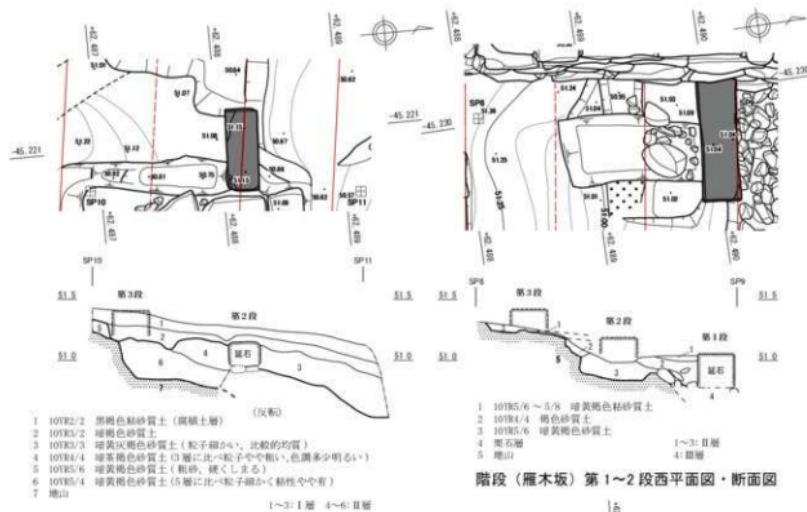
第20図 階段(雁木坂)南東部(上部)平面図



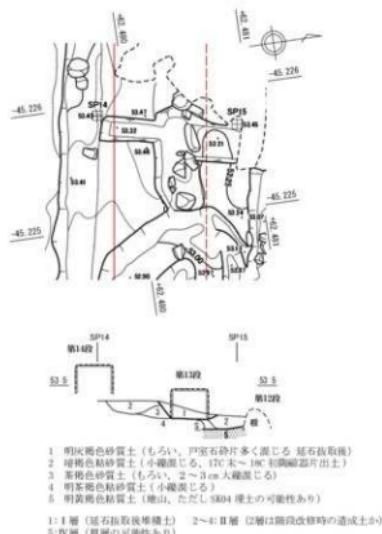
第21図 階段(雁木坂)北東部(下部)平場付近平面図・断面図



第22圖 階段(雁木坂)南北軸断面図

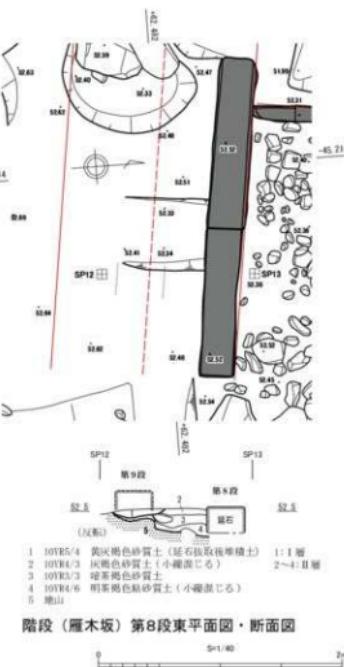


階段(雁木坂) 第2段東平面図・断面図



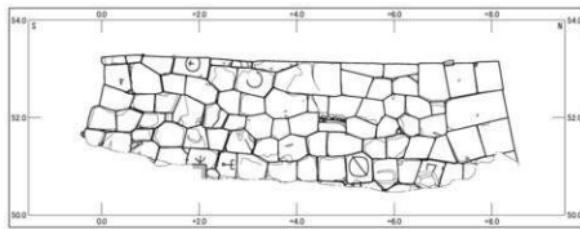
階段(雁木坂) 第12～13段西平面図・断面図

\*直線表示の延石位置は推定・投影による

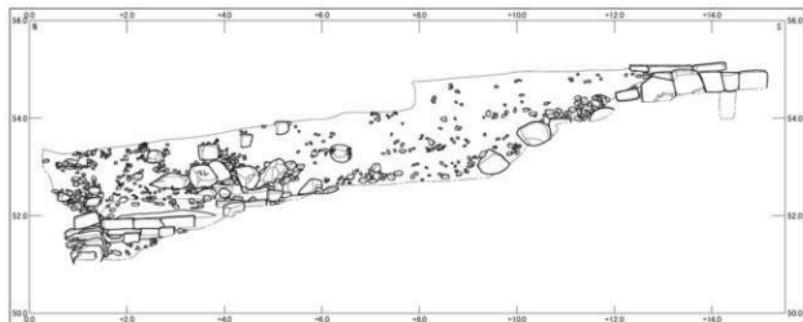


階段(雁木坂) 第8段東平面図・断面図

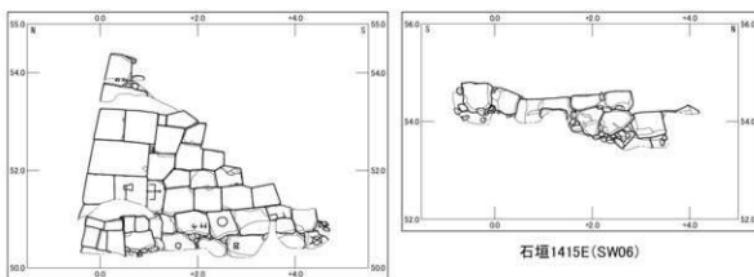
第23図 階段(雁木坂)各段平面図・断面図



石垣1412E(SW01)



石垣1412W(SW03)



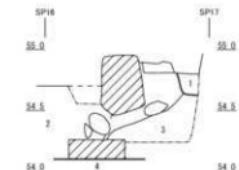
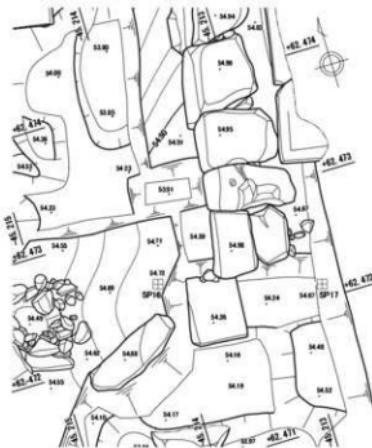
石垣1411W(SW02)・1413W(SW05西面)



石垣1414S(SW04)・1413S(SW05)

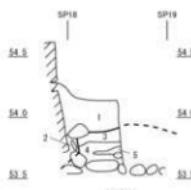
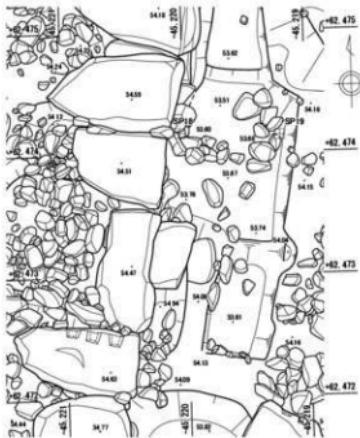
0 5m  
Scale 1/100

第24図 石垣立面図



- 1 (機丸)  
2. TMR4/4 塗褐色粘質土(1.まき透い) 粘地土  
3. 2.1.1. 黄褐色粘質土(暗黃褐色粘砂質土ブロック  
多く透じやめでイグナイトを呈する) 粘地土  
4. 10YR3/4 塗褐色粘質土(微片・小礫多く混じる。  
戸室石片も混じる) 粘層

2~3: 日層  
4: 三層



- 1 暗黃褐色粘砂質土(岩井質・小礫(20~50mm多い) 複数) ソーディク質  
褐色粘質土(透じ) 10YR5/6~10YR1/6 明褐色粘質土 10YR4/6 塗褐色粘  
砂質土 10YR6/6 明黄褐色粘質土モザイク状に混じる(底土層) 粘地土  
2 10YR4/4 塗褐褐色粘砂質土 10YR5/6 暗黄褐色粘質土混土(非均質) 1層  
類似) 右側断面堆積  
3 10YR4/4 暗褐色粘質土(微透し含む) E層上端主体  
4 10YR4/4 暗褐色粘質土(粘性強く均質、下部 20~30mm 細繊維)  
5 10YR4/4 塗褐色粘質土(4層中にレンズ状に入れる。比較的均質な砂層

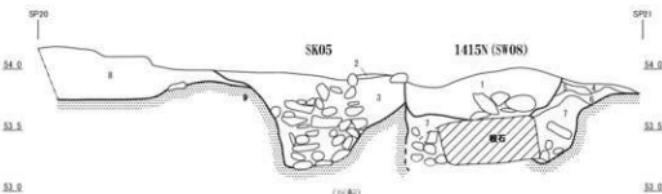
1~2: 日層  
3~5: 三層

石垣 1412W (SW03) 南端基礎平面図・断面図

石垣 1415E (SW06) 基礎平面図・断面図

0 5:1/40 1m

第25図 石垣1412W(SW03)・1415E(SW06)基礎平面図・断面図

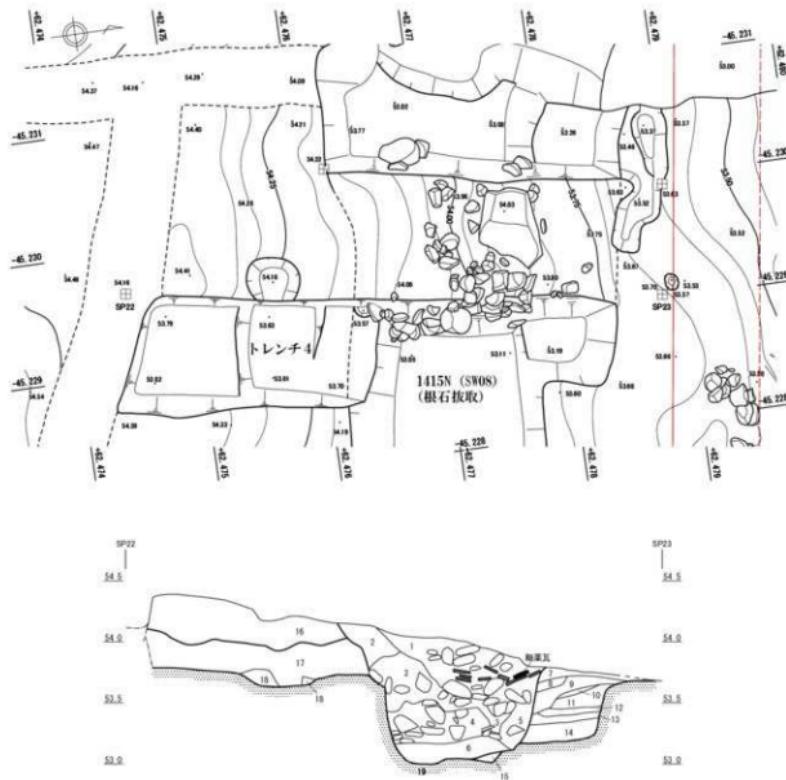


- 1 10YR4/4 増褐色粘砂質土 (粗粒抜取後堆積土)
- 2 10YR3/3 増灰褐色粘砂質土 (表土)
- 3 黄褐色・芦葦付粘性土質土 300mm
- 4 10YR5/6 黄褐色粘質土 10YR4/4 増黄褐色粘砂質土のモザイク状面土 (黒褐色粘質土ブロック含む。小範囲に)
- 5 10YR3/4 ~ 10YR2/2 黑褐色粘質土、增褐色粘質土の混土
- 6 10YR5/4 黄褐色粘質土 (粗小片・繊維混じる。表均質)
- 7 10YR5/6 黄褐色粘質土 10YR4/4 ~ 10YR3/4 増茶褐色粘土主体の面土 (3層に類似。下部織多く混じる。1層より黄褐色粘質土優勢)
- 8 2, 535/6 黄褐色粘質土 (增黄褐色粘砂質土ブロック多く混じりモザイク状を呈する) 砂地土
- 9 地山

- 1 ~ 2: I層  
3: SK05 埋土  
4 ~ 8: II層 (4 ~ 7: 石船腹方埋土)

第26図 石垣1415N(SW08)東部基礎・SK05平面図・断面図

50:1/40 1m



- 1 10YR6/4 暗褐色砂質土(細・細粒互多く混じる。しまり悪くもろい)  
 2 10Y5/4 暗黃褐色粘砂質土(塊片・黄褐色粘質土小塊(10YR6/6)等混じる。  
 3 しまり悪くもろい)  
 3 10YR6/6～6/8 暗黃褐色粘質土塊・主体(暗褐色砂質土塊(10YR3/4)混じる。  
 糜多く混じる。しまり悪くもろい)  
 4 10YR3/4 暗褐色砂質土(黄褐色粘質土・小塊混じる。しまり悪くもろい)  
 5 10YR4/2～5/6 暗褐色砂質土塊・主体(灰褐色粘砂質土(10YR4/3)混じる。  
 塵片少數混じる。しまり悪くもろい)  
 6 10YR3/3～4/4 暗黃褐色砂質土(暗褐色粘質土小塊(10YR5/4～5/6)上部  
 中心に混じる。細葉瓦出土)  
 7 10YR5/4～4/4 暗黃褐色粘質土(2cm隔間小塊多く混じる)  
 8 10YR2/2 黑褐色粘質土→10YR4/4 明黃褐色粘質土・混土層  
 9 10YR4/6～10YR5/6 明黃褐色→黃褐色粘質土(黑褐色粘質土小塊少數混じる。  
 小塊・細粒混じる)
- 10 10YR6/8～5/8 明黃～黃褐色粘砂質土→10YR2/2 黑褐色粘質土+10YR4/4  
 暗褐色粘質土・混土層  
 11 10YR6/8～10Y5/8 明黃～黃褐色粘砂質土・暗褐色粘質土混土(細粒で構成。  
 もろい)  
 12 10YR4/2 暗褐色粘質土(10YR2/2 土体)  
 13 11層と同  
 14 9層と同  
 15 10YR6/8 暗褐色粘質土・漂泥層・白色微粒子混じる。地山と同じ。黑褐  
 色粘質土(後述)(3)の層と同層で、土壤層と重複する。しまり悪くもろい  
 16 2, 5Y5/6 黄褐色粘質土(暗褐色砂質土ブロック多く混じりモザイク状を  
 呈する)漂泥土A  
 17 10YR3/4 暗褐色砂質土(原片・小塊多く混じる。室内石片も混じる)F層  
 18 10YR3/3 暗褐色粘質土(細粒混じり、やや砂質気味。黄褐色粘質土、塊状  
 に混じる)  
 19 地山

1～6: I層(石柱抜取後堆積土)  
 7～16: II層(7～15: 右粗面方埋土)  
 17～18: 離層

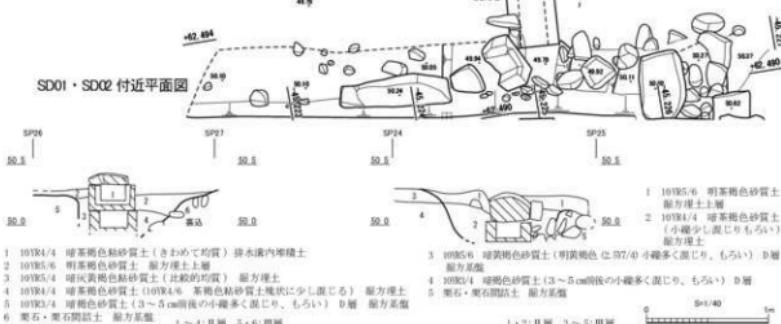
第27図 石垣1415N(SW08)西部基礎平面図・断面図



門柱基礎(根固) 平面図

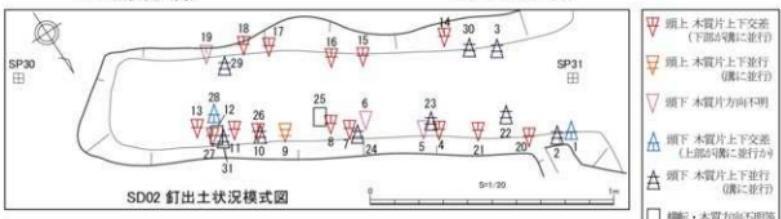


SD02 断面図

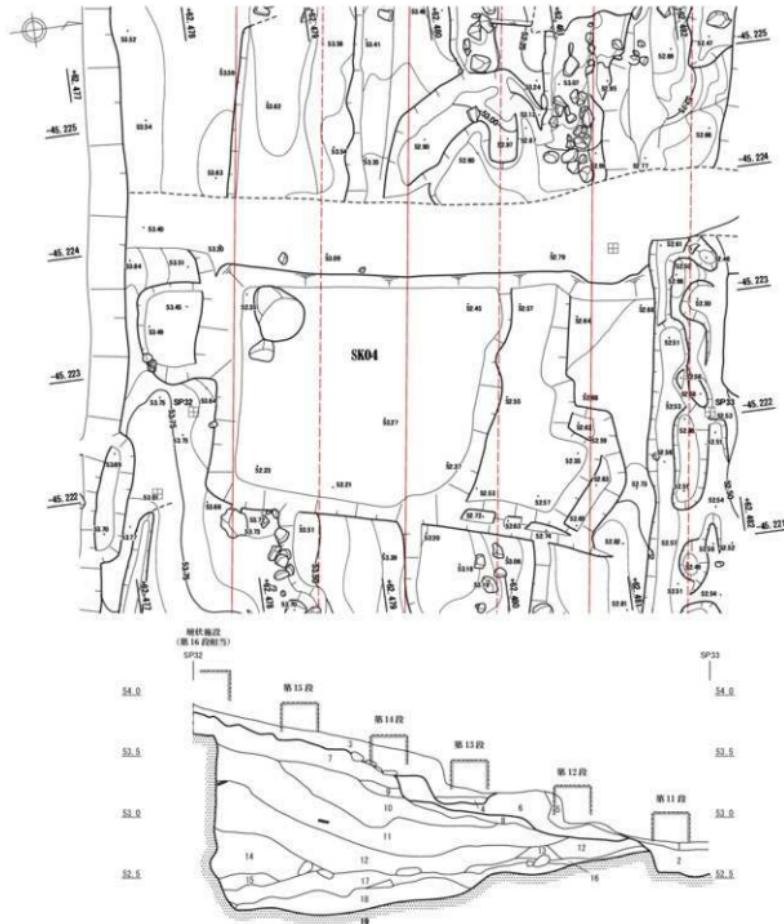


SD01 断面図(南)

SD01 断面図(北)



第28図 門柱基礎(根固)・排水溝平面図・断面図

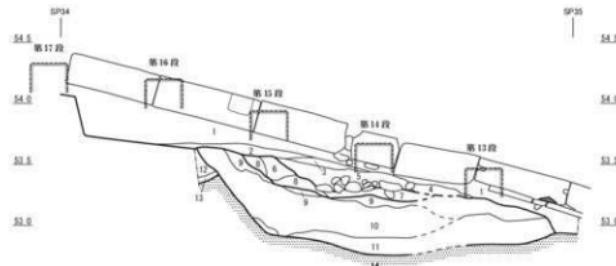
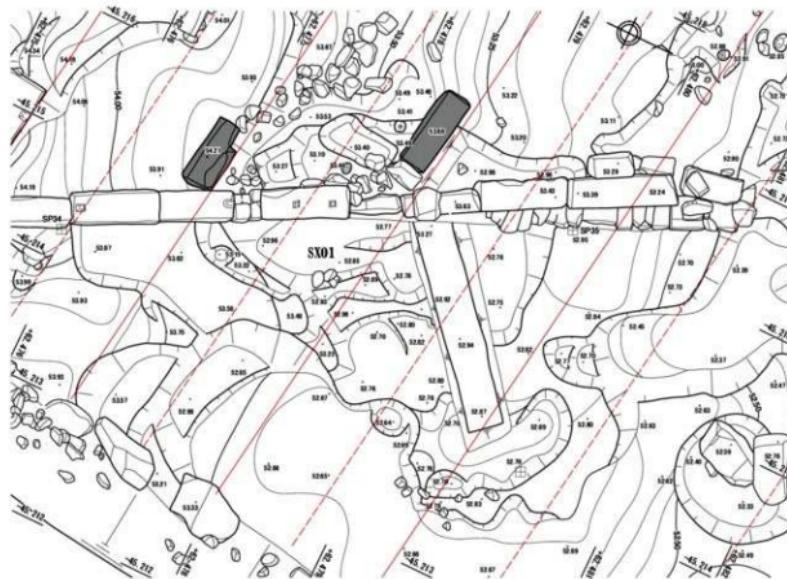


- 1 10VR2/2 黒褐色粘砂質土（腐植土層）複乱（ブラ管）  
 2 10VR4/4 黄褐色粘質土（地山ブロック（黄褐色）複状混じる）複乱（ブラ管）  
 3 10VR2/3 黑褐色粘砂質土（腐植土層）表土  
 4 10VR4/3 硫黃褐色粘砂質土（地山ブロックマーブル状混じる、しまり感）  
 5 10VR2/3 黑褐色粘砂質土（硫黃じる）  
 6 10VR4/4 黄褐色砂質土（しまり感）  
 7 10VR5/6 明黄色粘砂質土（しまり良い、小繊混じる）  
 8 10VR4/6 硫黃褐色粘砂質土（しまり悪い）  
 9 10VR4/6 明黄色粘砂質土（しまり良い）  
 10 10VR2/2 黑褐色粘質土（しまり感）、地山小ブロック少し混じる、小繊多く混じる）  
 11 10VR4/3 黄褐色粘砂質土（しまり感）、地山ブロック少し混じる、從斜少し混じる）  
 12 10VR5/4 増黄褐色粘砂質土（地山ブロック（硫黃褐色）塊状に混じる）  
 13 10VR3/3 黄褐色砂質土（しまり無い、木の根？）  
 14 10VR4/4 黄褐色粘砂質土（10番に類似、やや暗い色調）  
 15 10VR4/4 明黄色粘砂質土  
 16 10VR6/6 明黄色粘砂質土（均質）  
 17 10VR2/2 黑褐色粘質土（9番より均質、粘性強い、地山ブロック（明黄色）塊状に混じる）  
 18 10VR5/6 明黄色粘砂質土（小繊多く混じる、しまり悪い、7番より黄色味強い）  
 19 地山

1～4：Ⅰ層  
 5～6：Ⅱ層（耕作道底土）  
 7～18：Ⅲ層（耕土）

\* 線録表示の延石位置は推定・投影による

第29図 下層遺構(SK04) 平面図・断面図



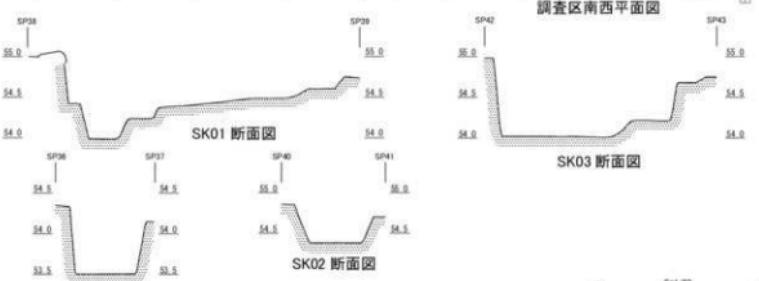
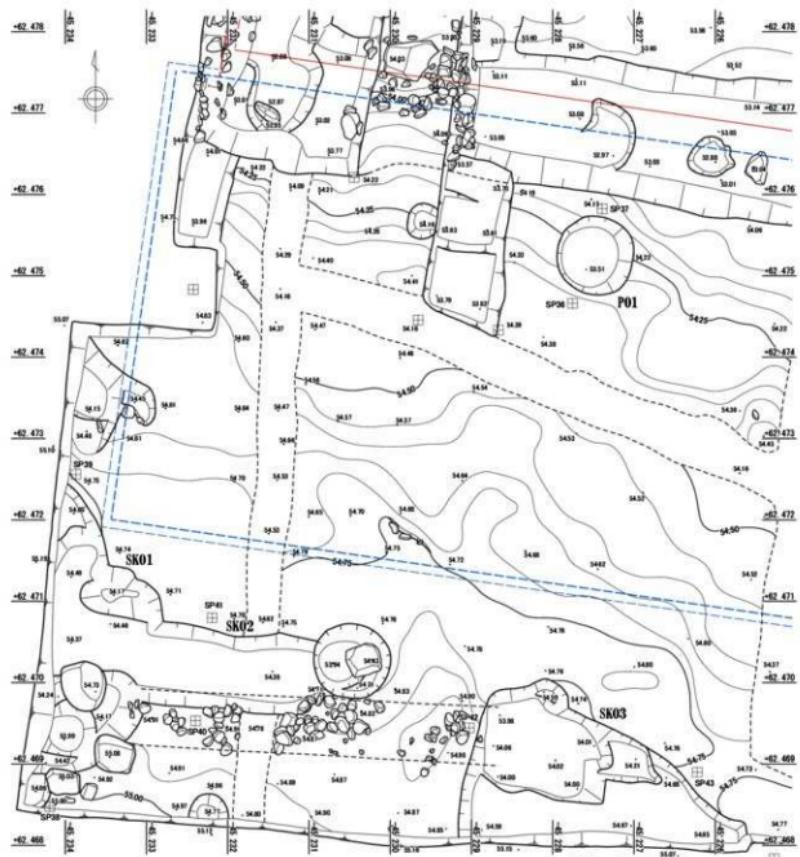
- 1 IOW4/3 塗茶褐色粘土砂質土
- 2 IOW5/8 明潤褐色粘土土(均質)
- 3 IOW4/4 ~ 5/6 塗茶褐色粘土砂質土(塗茶褐色土、細繩茎じる)
- 4 IOW4/4 塗茶褐色粘土質土
- 5 IOW2/3 黒茶褐色粘土砂質土(黃褐色(地山質)小ブロックマーブル状混じる)
- 6 IOW2/3 黑茶褐色粘土質土(均質)
- 7 IOW5/4 黄茶褐色粘土質土(均質)
- 8 IOW2/4 塗茶褐色粘土質土(均質)
- 9 IOW2/3 塗茶褐色粘土質土(黄褐色(地山質)、黒褐色小ブロックモザイク状に混じる、非均質)
- 10 IOW2/3 塗茶褐色粘土質土(黄褐色(地山質)、黒褐色小ブロックモザイク状に混じる、非均質)
- 11 IOW2/2 黑茶褐色粘土質土(黄褐色、黄白色土(地山質)ブロック塊状に混じる、非均質)
- 12 IOW3/3 塗茶褐色粘土砂質土(黄褐色土(地山質)ブロック状に混じる)
- 13 IOW2/2 黑茶褐色粘土質土
- 14 地山

- 1 ~ 5: I 層  
6 ~ 8: II 層 (削成土)  
9 ~ 11: III 層 (SX01 建土)  
12 ~ 13: IV 層 (遺構埋土)

\*結縫表示の延石位置は推定・仮影による

第30図 下層遺構(SX01)平面図・断面図

0 5~10m



第31図 調査区南西遺構平面図・断面図

### 第3節 遺物

#### 1. 概要

本調査区からは、陶磁器・土器・瓦・石製品・金属製品などが出土している。大部分が遺構に伴わない上面からの出土で、17世紀初頭から20世紀までの遺物が混在している状況であるが、土坑・溝などからの出土も見られる。

以下に材質ごとに大別し、更に出土地点ごとに記述していくが、器種を優先する部分もある。

#### 2. 陶磁器・土器（第32～83図、第7～15表）

陶磁器では、肥前、瀬戸・美濃、京・信楽、再興九谷などの国内各産地のものがあり、陶器擂鉢では堺産のものが多くみられる。また少量ではあるが中国産のものもあり、19世紀後半から20世紀初頭のヨーロッパ製品かと思われる硬質陶器の皿が1点出土している。土器では、17世紀の土師器皿が多く、他には火鉢が多数出土している。陶磁器の分類・年代観については、「九州近世陶磁学会2000」・「[服部1993]」・「[石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002b]」・「[石川県金沢城調査研究所2012b]」・「[石川県金沢城調査研究所2014d]」等を参考にして記述した。また、陶磁器・土師器皿の胎土分類については、「[石川県金沢城調査研究所2014d]」に依っている。

##### 石垣1415N (SW08) （第32図P001～P004）

P001は掘方下部（裏込め）から出土した中国徳化窯の製品かと思われる白磁端反り小杯である。P002は掘方北から出土した17世紀前半の土師器皿である。平底から外へ開くように直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに摘み上げている。内面体部と底部の境には凹線が巡り、外面の口縁と体部の境には、細い凹線が巡っている。P003は抜取坑中層出土の万古焼の色絵陶器碗である。外面に白泥を塗ったうえで灰釉を掛け、その上から赤と水色で文様を描いている。外底面は露胎で、「萬古」の陰刻がある。P004は抜取坑上面から出土している。須佐唐津灰釉鉢の底部で、灰釉はごく薄く、外面は被熱によって白濁している。内面に橙色の胎土目跡が8個ある。

##### 整地土A・整地土A下 （第32図P005・第33図P006・第77図P206）

IV区トレント4の整地土A出土のP005は17世紀前半の土師器皿で、やや丸味を帯びた平底から体部は急に立ち上がり、口縁は内屈する。内面は一方向ナデで、体部との境に凹線が巡る。口縁には全周に油煙痕があると推定される。VII区整地土A下出土のP006は17世紀前半の土師器皿で、平底で立ち上がりの急な体部で、口縁の摘み上げは明瞭ではない。内底面の調整は摩耗のためはっきりしないが、外底面には板目状痕が残り、外側面には指頭圧痕が残る。口縁のおそらく全周と内面に油煙痕が厚く付着している。P206はトレント4の整地土Aと石垣1415N (SW08) 掘方から出土した破片が接合している。やや丸味を帯びた平底から少し開き気味に体部が立ち上がり、口縁は内屈するが端部の摘み上げは強くない。内面の体部と底部の境の凹線はごく弱く、見込みは一方向ナデであろうか。口縁には油煙痕がある。17世紀前半の製品である。

##### 整地土B （第33図P007・第34図）

P007・P008は丸形の土器火鉢である。P007には円形脚が3個付く。口縁外面には沈線が巡り、体部には菊花の印花文がある。殆ど剥離しているが、赤漆の痕跡がある。P008は体部には直径4.6cmの菊花文と1.6cmの花文の2種類の印花文がある。外面の沈線より下は赤漆塗りで、上は剥離しているが黒漆塗かと思われる。

##### SK04 （第35図～第36図P015）

P009は中国景德鎮窯系の青花碗である。非常に薄手で、呉須の発色も良い。P010は陶器灰釉鉢口縁片である。P011・P012は肥前ロクロ成形擂鉢口縁片で、口縁端部付近のみ鉄釉が掛けられている。

P011は口縁端部が平らになり、内面側に延びている。P012は口縁端部がP011と同じように内面側に延びるが、外面は屈曲が緩くなり、強い稜を持たない。口縁端部付近のみに掛けられた鉄軸は被熱のために、黄褐色に変色している。P013～P015は17世紀前半の土師器皿である。P013は平底で外底面は指揮さえ、内底面は一方向ナデで、内面体部と底部の境には浅い凹線が巡り、口縁端部はわずかに摘み上げている。P014は小型丸底で、底部と体部の境は明らかではない。口縁部は内外面ともヨコナデが入るが、端部の摘み上げは見られない。P015は平底からやや外開きに体部が立ち上がり、外底面には板目状圧痕がわずかに残っている。内面の体部と底部の境には明瞭な凹線が巡り、遺存部分では口縁全部に油煙痕がある。

#### SX01 （第36図P016）

P016は小型丸底の土師器皿で、口縁はやや内弯し、油煙痕が1か所ある。

#### E層上炭層（第36図P017～P019）

P017は17世紀前半の肥前陶器鉢口縁片で、小片のため遺存部分に節目は見られないがクロコ成形捕鉢と思われる。口縁端部は内側に突出し、口縁部内外面のみ鉄軸が掛けられる。石垣1415E (SW06) 前面のE層上炭層出土のP018は17世紀前半の土師器皿である。平底から体部が短く立ち上がるP019よりは外へ開いている。口縁端部は内屈している。見込みは不定方向ナデと思われ、外底面には板目状圧痕が残る。内面の底部と体部の境には稜が入るが凹線状にはなっていない。口縁には油煙痕がある。P019は17世紀前半の土師器皿である。平底から体部が短く立ち上がり、外底面には板目状圧痕が残る。口縁には全周に油煙痕があると思われる。

#### E層（第36図P020～第37図P026）

P020は白磁の皿か鉢の口縁小片である。内面に陽刻があり、口唇部は口銚になっている。P021～P025は17世紀前半の土師器皿で、P021は見込み不定方向のナデで、外底面には板目状圧痕があり、口縁端部は内弯している。P022は見込み不定方向のナデ、外底面に板目状圧痕があり、口縁端部はわずかに摘み上げている。遺存部は全周に油煙痕がある。P023は口縁外面のヨコナデが強く、体部との境に稜を持っている。P024は平底で底部外面には板目状圧痕が見られ、体部外面には指頭圧痕が残る。口縁外面から体部内面はヨコナデで、内面体部と底部の境は凹線が巡り、底部側に強い稜を持つ。口縁は遺存部分全周に油煙痕がある。P025は外底面には板目状圧痕があり、内面体部と底部の境には浅い凹線状のナデが巡る。口縁に油煙痕がある。P026は小型の土師器皿で、口縁端部はわずかに摘み上げている。口縁に油煙痕が1か所ある。17世紀前半の製品であろうか。

#### SK01 （第37図P027～第41図）

P027は磁器染付碗底部であるが、陶器質の胎土で、釉には内外面とも貫入が入っている。19世紀の若杉窯の製品であろうか。P028～P030は18世紀の肥前磁器染付碗である。P028の素地は灰白色で呉須の発色も良くなく、外面にはコンニャク印判による松文が施されている。P029は幾何文の腰張半球形碗、P030は山水文の筒碗で、どちらにも口縁内面に四方櫻文が施されている。P031は中国景德鎮窯系磁器青花皿である。内面は二本線とダミで描かれた唐草文で、高台内にも圈線がある。後述のP102と類似している。P032は肥前磁器染付大型輪花鉢で、高台はごく低く、内側が釉剥ぎされているので、中央部が欠損しているが蛇の目型高台と思われる。内側面上には花唐草文、見込みは松竹梅文、外側面上には二本線とダミによる唐草文が描かれている。18世紀末から19世紀前葉の製品であろう。P033も肥前磁器染付碗で、内面の花唐草文、外面の唐草文とも、太い筆で描かれている。P034は肥前磁器染付蓋で、上面に蛸唐草文が描かれている。口縁端部と内面1cm程度は釉剥ぎされ、アルミナが付着していて、内面釉剥ぎから内側へ1.5cm程度の部分には、擦痕が多く残っている。水注の蓋であろうか。P035はナズナ文の陶胎染付碗で、呉須は生掛けのため滲んでいる。P036・P037は京・信楽焼の陶器

碗である。P036は灰釉碗で、体部上半には凹線が4条巡り、高台は輪高台で中央には兜巾を持ち、露胎になっている。見込みにはハリ目痕が2個残っているが、間隔からすると3個あったと思われる。P037は灰釉端反り碗で、内外面とも細かい貫入の上に更に粗い貫入が入ったように見え、粗い貫入は煤が浸み込んでいるのか灰色を呈している。P038は陶器鉄釉窯で、口縁は外に肥厚し、肩に強い稜を持っています。P039・P040は堺の陶器擂鉢である。P039は幅4.8cmの口縁帶に2条の沈線が巡り、内面は口縁近くまで伸びた脚目の端部が、強いナデで消されている。P040は底部で、高台は内面に強いナデを巡らせることで作り出し、外底面と見込みに輪状の重ね焼き痕がある。疊付には板か蔭のような線状の圧痕が見られる。接合しないが同一個体と思われる体部片があり、P039も同一個体の口縁かもしくはない。

P041は施釉土器の灯明受皿である。内面と口縁外面に鉛釉が掛かり、外面体部と底部は回転ケズリされている。P042は土師器皿で、外面は口縁を除き回転ケズリされ、底部は平底で体部との境に稜を持つている。内面はヨコナデで、体部と底部の境に凹線が1条巡っている。口縁には油煙痕がある。P043は焼塩壺の蓋で、上面に刻印がある。「七度本屋き塩」であろうか。P044は瓶形の焼塩壺ではほぼ完形である。外面は丁寧なミガキで、底部は少し窪んでいる。SK01からは他に3個体出土している。P045～P048は土器火鉢である。P045・P046は線刻のある口縁片で、P045は口唇部にあり、「寛政」と思われる。P046は丸形火鉢の口縁外面に「役所」と読める線刻がある。P047は口縁端部と外面に斑状の墨痕がある。P048は円形脚の丸形火鉢底部片で、外面は丁寧に磨かれている。

#### SK03 （第42図P049）

P049は17世紀後葉の土師器皿で、若干丸味を帯びた底部には板目状圧痕が見られる。体部は外反し口縁端部は摘み上げられて、内面体部と底部の境には、浅い凹線状の圏線が巡っている。

#### 上面 （第42図P050～第83図）

本調査区の遺物のほとんどは上面から出土していて、被熱した陶磁器を多く含んでいる。P050～P069はアラビア数字が描かれた陶磁器である。体部外面の口縁と腰部付近に圏線を引いて、その間を1～3本一組の縱線で3つに区画し、中に「1」～「4」のアラビア数字を描いている。金沢城跡からはアラビア数字が描かれた陶磁器が多数出土していて、染付の製品に赤の後絵付けを施したもの、白磁に青の上絵付で数字などを描いたもの、染付で作られたものなどバラエティーに富んでいる。後絵付けを施された染付製品の年代などからみて、19世紀末から20世紀初頭の製品と思われ、同じもののが多数あるので、旧陸軍で使用されたものであろう。

P050～P059は磁器染付で、陶器質に近い胎土などから19世紀末から20世紀初頭の再興九谷の製品と思われる。P050～P054は端反り碗で、高台は輪高台である。縱線は全て3本一組で、数字は「1」～「4」がある。内面は口縁部に1本と立ち上がり部に2本の圏線があり、P050とP053には見込み文があるが、P051とP052には無い。P055～P059は皿で、高台は幅1.5～1.7cmの幅広輪高台である。縱線はP058が2本一組で、他は3本一組である。内面も口縁に1本、立ち上がり部に2本の圏線があり、P055とP056には見込み文があり、他には無い。P060～P064は圏線・縱線・アラビア数字が上絵付されているもので、色が分からなくなっているものが多いが、残りの良いものから判断して青色と思われる。縱線は3本一組で、数字は「3」と「1」がある。胎土は陶器質に近く、19世紀末から20世紀初頭の再興九谷の製品と思われる。P060とP061は端反り碗で輪高台である。P061は遺存部分の内面には上絵付も染付も見られないが、他の4点の内面には口縁部に1本、見込みに2本の圏線と中央に小さい円がある。皿の高台はP062のみが幅1.6cmと広い輪高台であり、皿の見込みにはハリ目跡が見られるが、P062とP064は圏線の上に5か所あると思われるのに対して、P063は圏線より内側に3か所あって、疊付にも5か所の目痕が見られるなど、染付の製品よりバラエティーに富んでいる。

P065～P069は19世紀末の瀬戸・美濃の製品と思われる磁器染付の端反り碗と蛇の目凹型高台皿に、

赤で囲線・縦線・アラビア数字が上絵付されているものである。P065とP066は縦線が2本一組で、数字は「1」であり、P067は縦線が3本一組で、数字は「1」であろうか。P068は縦線が3本一組で数字が「3」、P069は縦線が1本で数字が「4」である。

P070～P074は瀬戸・美濃の磁器染付端反り碗である。P070は19世紀後葉の製品で、ほぼ完形である。外面は3つに区画された中に松竹梅と思われる文様があり、見込みには寿字文がある。P071はおそらくP070と同じように3つに区画された中に草文のような文様が描かれている。P072には「祿」の文字が描かれている。「福禄寿」と描かれていたものであろう。P073は山水文碗である。P074は口銹を施していて、外面に草文と源氏香文と思われる文様がわずかに見られる。P075は肥前磁器染付端反り碗で、大型でやや深い。見込み文は輪状の松竹梅と思われ、外面の唐草文は呉須の発色は良いが若干滲んでいる。19世紀の製品と思われる。P076とP077は磁器色絵端反り碗で、黒の線描きと赤・青・黄・緑で花文が描かれ、P077には太い赤で源氏香文も描かれている。

P078～P094は肥前磁器染付碗である。P078・P079は暦文の小広東碗である。P081～P85は18世紀後半から19世紀初頭の製品で、呉須の発色はやや悪く、P084以外は口縁内面に四方襷文や囲線がある。見込みにも囲線があり、P085に手描きの五弁花文が見られることから、他のものにも見込み文がある可能性がある。P084の内面は無文で、外面は2つに区画されて松竹梅と思われる文様が描かれている。また、P084は被熱のため釉が一部白濁している。P085とP086は器形が腰張半球形と筒形で異なっているが、外側面に雪輪文、高台脇に唐草文、口縁内面に四方襷文、見込みに二重囲線という文様構成は同じである。P087は青磁染付の筒碗で、口縁内面には四方襷文、見込みには二重囲線がある。18世紀後半の製品であろう。P088・P089は18世紀前半の浅球形碗で、三角高台で端部は釉剥ぎされている。外面には若松文と笛文が描かれているが内面は無文である。P090は丸文と幾何文が細い筆とダミで丁寧に描かれていて、一部に墨弾きも使われている。17世紀末から18世紀初頭の製品である。P091・P092はコンニャク印判による松文・団鶴文が施されている17世紀末から18世紀の製品である。P093は17世紀後半の碗か鉢の底部片で、火を受けて降灰し、全体に自然釉が掛かったようになっている。P094は向付で、口縁外面に七宝繫ぎ文が施されている。

P095・P096は瀬戸・美濃の隸書体文の小碗で、19世紀の製品である。P097は肥前磁器染付猪口である。外面の蛸唐草文および見込の五弁花文は、輪郭を細い線で描いて塗りつぶしている。高台内には一重囲線と「□珠珍玩珍」の銘がある。17世紀後半から18世紀の製品である。P098は瀬戸・美濃磁器染付蓋で、19世紀の製品である。P099も蓋で、外面は青磁釉が掛かり、口銹で、内面天井部に染付の二重囲線が見られる。18世紀後半の肥前の製品である。

P100は青白磁型押し皿である。一部染付と赤橙色が釉下に施されている。口縁の一部欠損した部分と疊付の釉剥ぎされた部分に煤が付着している。P101は灰白色の胎土にやや発色の悪い染付が施されている。見込は蛇の目釉剥ぎされ、重ね焼きの痕跡も見られる。

P102～P108は肥前磁器染付皿である。P102は内側面の唐草文の輪郭を細い2本線とダミで描いている。P031の中国青花皿とよく似ているが、P031は体部から口縁にかけて厚さが殆ど変わらないが、P102は口縁が薄くなっている。P103は蛇の目型高台で、外側面の唐草は1本線で描かれている。18世紀中葉から19世紀の製品である。P104は輪花皿である。薄手で丁寧な作りで、口銹があり、外側面の花唐草は2本線とダミで描かれている。高台内には一重囲線と二重方形枠内に「金」の銘があり、17世紀後半の製品である。P105は薄手で丁寧な作りの小皿で、口縁は内弯し、高台は三角高台でやや内傾している。内側面には模式化されない牡丹唐草文が描かれ、見込みには簡略化されない手描きの五弁花文がある。外側面の唐草文は、2本線で輪郭を描いてダミを入れている。高台内には一重囲線の中に二重方形枠内に満福の銘がある。17世紀末から18世紀の製品である。P106は輪花皿で、内側面には唐草文が描かれ、外側面の唐草文は茎を線描きのみで、葉などを線描きとダミで描いている。

P107は底部が厚く、高台は短く、胎土は灰白色を呈している。見込みにはコンニャク印判の五弁花文がある。疊付は使用による摩耗のためか平滑になっている。P108は釉が青味を帯びて、青白磁に近い。疊付のみ釉剥ぎしているが砂が付着している。17世紀中葉の製品であろうか。P109は中国景德鎮窯系青花皿である。薄手で、外面底部中央と高台脇に砂が付着し、外底面の鉢目が顕著である。

P110・P111は肥前磁器色絵染付皿である。P110は方形小皿かと思われ、外面は染付で梅のような文様と高台に鋸歯文が描かれている。内面は何色かで文様が描かれているが、被熱のために変色し、よく分からぬ。P111は内外面とも色絵が認められる。P112は中国の製品と思われる白磁型押し皿である。全体に灰白色を呈し、口縁は欠損しているが外反すると思われる。高台は三角高台で内傾し、疊付と外面2.5mm程度が釉剥ぎされている。P113・P114は肥前青磁皿である。P113の高台は三角高台で内傾し、外面は体部との境に明瞭な屈曲を持たずながらに続いている。全面施釉後、疊付から外面1.8cm程度釉剥ぎされている。P114は口縁片で、見込みに輪状の釉剥ぎがあるタイプであろうか。

P115～P119は肥前磁器染付大皿である。P115は外面の唐草文は2本線にダミ、内側面の蛸唐草文はダミのみで描かれている。P116は内側面には山水文が、外側面には蝶が丁寧に描かれている。胎土は均質緻密であるが、わずかに陶器質に近い。P117の内側面は草花文であろうか。外側面は2本線とダミで描かれている。呉須の発色は良く、釉の透明感もある。P118は内傾する高台から体部は丸く立ち上がっている。胎土は白色堅致で呉須の発色も良く、外側面の唐草文は2本線とダミで描かれている。P119は内側面には牡丹文、内底面は二重圓線で側面と区切られ、牡丹文かと思われる文様があり、呉須は渋みが無く、線描きとダミで丁寧に描かれている。胎土は均質緻密であるが、やや黄色味を帶び、わずかに陶器質に近い。実測図では、接合しない口縁片を図上で復元している。

P120・P121は中国景德鎮窯系青花の口縁片である。P120は折縁鉢であろうか。熱を受けて内外面とも荒れている。P121は鉢か碗の口縁で、被熱している。外面には馬の絵が描かれている。P122・P123は肥前磁器染付鉢である。P122には内外面に花唐草文かと思われる文様が、P123には外面に牡丹唐草文、内面に牡丹文が丁寧に描かれている。P124は肥前青磁染付鉢口縁片である。外面は青磁釉が施され、内面は松文が染付されている。口縁端部はわずかに外反している。P125は白磁輪花鉢である。三角高台で体部は16面に面取りされている。口縁部と底部は接合していない。他にも同タイプの破片があり、揃いであった可能性がある。中国德化窯の製品であろうか。P126は肥前磁器染付合子の身である。方形で側面には幾何文が描かれている。P127は中国景德鎮窯系青花で、方形の合子の蓋であろうか。被熱している。P128は肥前白磁小壺である。口縁端部が釉剥ぎされているので蓋が付くものと思われる。透明感に欠ける白釉が外面と内面下半に掛けられ、疊付の釉剥ぎはやや雑で、平らなところと2面を持つところがある。

P129は、硬質陶器の皿の口縁片である。青色の銅版転写で、窓絵部分には帆船が描かれている。小片のため明確ではないが、幕末から明治初期に輸入されていたイギリスのドーソン窯またはオランダのペトルス・レグー窯の製品の可能性がある。

P130～P155は陶器碗である。P130～P133は陶胎染付碗である。P130・P132は灰色で硬質のややザックリした胎土に粗い貫入の入った釉が掛かっている。P131・P133の胎土は、灰黄色で硬質緻密である。P131は被熱のため釉が白濁し、一部剥落している。P134はにぶい赤褐色で硬質緻密な胎土に鉄絵で草花を描いている。P135は18世紀の京焼の小杉碗である。淡黄色の胎土に非常に細かい貫入が入った釉が掛かっている。P136・P137は鉄絵部分が欠損しているが、小杉碗であろう。P138・P139は灰釉筒碗で、釉は黄灰色で非常に細かい貫入がはいり、外側面には染付と鉄絵がある。P139は口縁端部特に外面の稜線が強く、内面にはロクロ痕が残っている。P140～P141は灰釉せんじ碗で、18世紀の製品である。P140は体部上半欠損のため不明であるが、わずかに鉄絵と白泥かと思われるものが残っている。高台内が墨で黒くなっているのは、硯または墨溜として使用したためであろうか。見込みにはハリ目跡が

1か所残り、釉は熱を受けて変色している。P141は、体部外面に平行沈線が巡っている。P142は灰色で緻密な胎土に細かい貫入の入った灰釉が掛かっている。腰に明瞭な稜線があり、見込みにはハリ目跡が1個残っている。P143・P144は京・信楽の灰釉平碗である。P143は見込みに鉄絵があり、釉は黄色味を帯びている。P144は、灰白色で透明感のある釉が掛かり、底部が欠損しているため鉄絵は不明である。P145は黄色味を帯びた柔らかい胎土に白っぽい釉が掛かる。見込みに文様は無く、高台内に墨書きがある。18世紀から19世紀の瀬戸の製品である。P146～P148は京焼の色絵碗である。赤以外の色は殆ど剥離している。P149は肥前京焼風と思われる丸碗である。やや黄色味を帯びた白色の緻密な胎土に非常に細かい貫入の入った灰釉が掛かっている。高台脇から外底面は無釉であり、外底中央に円圏文がある。P150は瀬戸・美濃の拳骨茶碗で、黒褐色で透明感は無いが均質な釉が掛かっている。P151は灰色で緻密な胎土で、黄色味を帯びた灰白色の透明感の無い藁灰釉に鉄釉が流し掛けられている。高台は強いケズリで作りだされている。P152は刷毛目碗である。褐色で硬質の胎土に外面は白泥を塗った後に櫛状具で搔き落として波状文にし、内面は白泥の打刷毛目を施した上に透明釉を掛けている。疊付のみ釉刺ぎされている。P153も刷毛目碗である。外面は白泥で満巻状の平行線を、内面は打刷毛目を施した後に、細かい貫入の入った灰釉が掛けられている。見込みにはわずかに降灰が見られる。P154は灰釉碗底部である。高台内に刻印があり、「御菩」のみ残っているが、「御菩薩」ないしは「御菩薩池」と思われる。P155は黄色味を帯びた灰釉が掛かる底部片で、高台内に「六」の墨書きがある。

P156・P157は陶器灰釉皿である。P156は口縁は玉縁で、外面体部上半から内面は灰釉が掛かっているが被熱のためか白濁している。外面体部下半以下は露胎で、内面口縁近くに鉄絵がある。P157は底部だけであるが、全体に灰白色の透明感のない釉が掛かっていて、疊付のみ釉刺ぎされている。見込みには満巻き状のナデがあり、4か所の砂目跡は、摩耗により平滑になっている。17世紀の肥前の製品であろうか。P158～P166は陶器鉢である。P158・P159は瀬戸灰釉鉢の底部で、P158の釉は黄緑灰色で透明感があり粗い貫入が入っている。高台は貼り付けている。P159は微粒砂を多く含む胎土に緑灰色で透明感があり粗い貫入の入る釉が掛けている。P160・P161は灰色で緻密な胎土に緑灰色で貫入の入らない釉が掛けている。P162は灰釉鉄釉流し鉢口縁片で、素地は灰白色に浅黃橙色の斑があり、やや砂っぽい。19世紀中葉の再興九谷若杉八幡窯の製品であろう。P163は三島唐津鉢で、白泥象嵌の後灰釉を掛けていると思われるが、被熱のためか釉が全体に白濁している。外面体部下半は、鉄釉を刷毛塗りしている。P164は刷毛目唐津鉢底部である。外面は回転ケズリで、内面には同心円状に白泥を施している。P163・P164は18世紀前半の肥前の製品である。P165は瀬戸灰釉大型鉢の底部片である。P166は須佐唐津灰釉鉢の口縁片である。胎土は精良で灰釉は薄く、被熱のためか白濁している。

P167～P194も陶器である。P167～P170は灰釉合子と蓋である。P171は上面に白泥を塗り鉄釉と緑釉で文様を描いている、いわゆる山水土瓶の蓋と思われる。P172は土瓶である。外面に白泥を塗り鉄絵と緑釉で山水文を描いている。破片は広範囲から出土し、底部は接合していないが、図上復元した。P173は甕肩部片である。内面はヨコナデに鉄漿、外側は鉄釉を流し掛けしている。丸を3個つなげた形の貼花がある。P174は信楽の壺の口縁から肩部片である。肩が張る形で、外面と口縁内面には鉄釉が掛けられ、内面には鉄漿が塗られている。P175は口径72cm、器高71.4cmの陶器大甕である。底部外面以外は鉄漿が刷毛塗りされている。越前の製品である。P176は行平蓋である。内面には口縁部を除き灰釉が掛けられる。外面は飛び鉋を施した後、鉄漿を帶状に刷毛塗りし、飛び鉋の上に白泥で簡描きしている。口縁内面は使用による摩耗のためかやや平滑になっている。P177は鉄釉行平である。体部外面は飛び鉋を施した後、鉄漿を刷毛塗りしている。内面と片口部は鉄釉が掛けられ、口縁部と体部下半から底部は露胎で、底部には煤が付着している。鉄釉が一部被熱のために沸いて縮れている。P178は鉄釉土鍋である。遺存部分は全面に光沢のある茶色い鉄釉が掛けられている。口縁は強く外反した後、

先端を内側に巻き込んでいる。

P179～P193は擂鉢である。P179は19世紀の再興九谷若杉八幡窯の製品であろうか。卸目は密に施されていて、幅3.1cm、16本以上と思われる。卸目の先端はヨコナデによって消されている。内面に薄い鉄軸を掛けた後、口縁部と外面全体に光沢のある鉄軸を掛けている。P180は小片のため卸目は残っていないが、肥前ロクロ成形擂鉢と思われる。口縁部のみに鉄軸が掛かっている。17世紀前半の製品であろう。P181は肥前ロクロ成形と思われる擂鉢口縁片である。内外面全体に鉄軸が掛かっている。卸目は密に施されているので明確ではないが、幅4.3cmで15本以上があり、幅6.8cmで24本に見えるが、広すぎて器壁が曲面になり、板状の工具がきちんと当たらないと思われる。18世紀後半から19世紀前半の製品である。P182は外面とも鉄軸が掛かり、卸目は先端がヨコナデによって消されている。越中瀬戸の製品であろうか。

P183～P191は堺の擂鉢である。P183は外面口縁帶に2条の沈線が巡る。片口部の口唇部内面に扇形の中に「上」を陰刻した刻印がある。卸目は幅3.5cmに9本である。P184は外面口縁帶には太い沈線が2条巡っている。卸目は幅3.8cm、9本で、隙間なく密に施されているが、先端は強いナデで消されている。P185はやや小振りのものであろうか。外面口縁帶の2条の沈線も細く簡略化され、卸目は幅4.2cmに14本と細かく浅い。卸目の先端はナデ消されているがナデは強い稜を持つほど深くない。P186は外面口縁帶には2条の沈線が巡る。卸目は少なくとも幅3.1cm、6本あり、やや間隔が広い。先端はヨコナデによって消されている。P187は底部である。卸目は重なり合っているため明確ではないが、幅4.2cmで11本と思われる。外底面は回転ケズリの後、高台の内側を強くナデしている。P188～P190は口縁片で外面口縁帶には2条の沈線が巡っている。P188の卸目は3.6cm幅に10本ある。P189は卸目が4.1cm幅に11本あり、先端は口縁部のヨコナデによって消されている。口縁端部には重ね焼きによるものか溶着が見られる。P190の沈線は外面口縁帶下方で細い。卸目は4.1cm幅に11本あり、先端は口縁部のヨコナデによって消されているがヨコナデが弱いため、かすかに残っている。P191は底部で、内面には卸目が密に施されているため、幅2.8cmで8本以上であることしか分からない。内側面と見込みの卸目は別に施され、見込みおよび疊付は、使用により平滑になっている。外底面には落葉状の圧痕が見られる。

P192・P193は越前擂鉢である。P192は硬質で薄手、胎土は砂粒が多く含んでいる。内面口縁のヨコナデの後で、幅2.5cm、12本以上の卸目を施している。内面に縦に溶着痕がある。17世紀中頃から後半の製品であろう。P193は口縁端部内面側に強いナデを入れて面を作っている。卸目は幅3cm、11本で、端部まで延びている。17世紀前半の製品であろうか。P194は灯明受皿で、かえりは口縁より低い。内面には白釉が掛かっているが、かえり端部は釉剥ぎされている。外面は露胎で、体部下半から底部にかけて回転ケズリが施されている。

P195は灰器として使用されたと思われる産地不明の製品で、被熱している。内外面暗灰色で、瓦質土器に似た灰色で砂粒と細かい気泡を多く含んだ胎土である。P196は華南三彩輪花皿の口縁片で、陰刻が施された後、緑・黄・紫で彩色されている。P197～P199は施釉土器である。P197は鉢で内外面とも鉛釉が施されている。P198は灯明受皿である。外面は露胎で、剥離した部分に煤が付着している。P199は灯明皿で、内面のみに薄く鉛釉が掛かり外面は露胎である。内面には圓線が2本巡り、底部と体部は回転ケズリが施されている。口縁部に油煙痕がある。

P200～P223は土器で、P200～P209は土師器皿である。P200は精製品で、胎土は橙色を呈し精良で堅緻、内外面とも丁寧に磨かれている。P201は外側面と外底面には指頭圧痕が残り、口縁外側と内面はヨコナデして、口縁端部は摘み上げている。内面の体部と底部の境には凹線状の圓線が巡っている。胎土は精良で粉質、遺存部には油煙痕は見られない。P202は外底面に板目状圧痕があり、内底面の調整は摩耗のため不明である。遺存部分は口縁全周に油煙痕がある。P201は平底から体部が短く立

ち上がり、口縁端部は内屈している。内面と口縁外面はヨコナデし、体部外面には指頭圧痕が残っている。遺存部分は外面とも全体に油煙痕がある。P204は外底面に板目状圧痕があり、見込みは不定方向のナデである。体部はP202より開いている。口縁に油煙痕がある。P205は外底面には板目状圧痕が残り、見込みは一方向ナデで、胎土は砂粒の含みが少なく焼き締まっている。油煙痕が口縁から内底面まである。P207・P208はクロ成形と思われ、外面とも丁寧なヨコナデで、P207は外底面に、P208は体部下半まで回転ケズリが施されている。内面の体部と底部の境に沈線が1条巡り、口縁には油煙痕がある。P209は体部がまっすぐ外へ開き、外面は指頭圧痕が残り、体部と底部の境ははつきりしない。内面は丁寧なナデで、体部と底部の境には底部側に稜を持つ凹線が巡っている。口縁には一部油煙痕がある。P201～P206は17世紀前半、P209は18世紀前半の製品である。P210・P211は焼塗壺である。P210は鉢形で、胎土は細砂を多く含み砂っぽい。P211は瓶形で、外面はミガキが施され、底面には回転糸切り痕が残っている。P212は焼塗壺の蓋である。橙色の砂っぽい胎土で、上面には刻印、天井部内面には布压痕がある。刻印は「鷺坂」であろうか。金沢で一般的にみられるタイプではない。P213～P223は火鉢である。P213～P217は丸形で、口縁と外面にはミガキ、内面はヨコナデが施されている。P213は円形脚が3個付く形で、外面は菊花の印花文を施し、赤漆を塗っている。P214は円形脚を持つ底部で、体部には沈線文と円形浮文がある。胎土は砂粒を含むが、粘土は細かく粉質である。P215は口縁外面に沈線が1条巡り、体部には菊花と思われる印花文がある。外面には赤彩の痕跡がある。P216は外面口縁端部から3cmのところに沈線が1条巡り、体部には花の印花文がある。口縁外面には墨を塗ったような痕跡がある。P217は口縁外面に沈線が1～2条巡っている。P218は丸形ないしは円筒形の火鉢口縁で、口縁外面に沈線が1条巡っている。胎土は細砂を多く含み砂っぽく、海綿骨針を含んでいる。P219は円筒形火鉢の口縁と思われるが、体部は薄い。P220は風炉の口縁片で、内面には突起がある。P221は角形火鉢である。口縁部は丁寧に磨かれ、体部外面は横のケズリ、内面は口縁近くに1条の横のナデが入り、体部は縦にナデ上げている。内底面は雑なナデで、外底面には離れ砂の痕跡が残る。P222は口縁が欠損しているが円筒形火鉢で、円形脚が3個付く形である。外面はミガキが施されていて、墨を塗っているのは漆塗りの下塗りであろうか。内底面にも墨のような痕跡がある。P223は板状脚の丸形火鉢で、口縁部は欠損している。内面はヨコナデ、外面はミガキが施され、体部には菊花の印花文が見られる。

### 3. 瓦（第84～95図、第16～18表）

本調査区からは焼瓦・釉薬瓦・越前赤瓦などの多数の粘土瓦が出土している。以下に出土地点ごとに記述していく。なお、瓦の胎土・瓦当文様の分類は第84～89図に依っている。

#### 整地土A（第90図T001・T002）

整地土Aからは焼瓦のみが出土している。T001は丸瓦である。内面調整はコビキBと刺縫痕が見られる。T002は平瓦で、胎土はやや硬質のB2である。上面と正面・側面は丁寧なヘラナデが施されているが、下面は未調整である。

#### 整地土B（第90図T003・T004）

整地土Bから出土した瓦は、殆ど焼瓦であるが、T004など釉薬瓦も少量ある。T003は焼腰瓦で、側辺中央の凹みは円形凹Aで深い。尻側辺に焼き台の痕跡がある。T004は釉薬熨斗瓦である。濃紫色の釉が上面と側面に掛かるが、被熱のためか一部白濁している。

#### SK04（第90図T005～T008）

SK04から出土しているものは全て焼瓦である。T005～T007は軒丸瓦である。瓦当文様は巴文で、珠文は欠損しているものも含めて16個と推定される。T005は巴文II-2a類で、巴文の頭部は小さめで丸く盛り上がり、尾は長く伸びて全体が繋がっている。T006は巴文II-2c類で、巴文は丸味を帯びて

いる。T007は巴文II-2b類で、巴文は丸く盛り上がっている。T005とT006は瓦当面と体部の接合部で割れていますので、割れ口に接合するための櫛目が残っているのが見える。T008はSK04の9層から出土した丸瓦である。内面調整はコビキBで、布圧痕と刺縫痕が見られる。

#### SK01 （第91図T009）

SK01からは近世末の釉薬瓦が数点出土しているが、図示したT009は混入品と思われる近代の釉薬瓦である。わずかに光沢のある濃紫（茶）色の釉が両面に掛かり、外面には「□分式特許□ 商標田」金田 □昨郡字中沼」の刻印がある。石川県立歴史博物館に展示されていた大正2年（1913）銘の雪止め付平瓦に「森□式特許機 商標④西盛 羽昨郡字ニツ屋」という刻印があることから[米澤義直・米澤義光2008]、同時期のものと推定される。

#### SK03 （第91図T010～T012）

SK03からは、焼瓦と越前赤瓦が出土していて、釉薬瓦は見られない。T010は、焼丸瓦で、胎土は赤橙色を呈する1である。内面調整はコビキBに刺縫痕が見られる。T011は、越前赤瓦の平瓦である。硬質緻密で縞状の胎土で、上面に鉄漿が刷毛塗りされている。T012は越前赤瓦の熨斗瓦である。硬質緻密な胎土に上面2/3と正面に鉄漿が施されていて、下面には深い櫛描きがある。

#### SK05 （第91図T013）

SK05からは焼瓦のみが出土している。T013は、軒丸瓦である。瓦当文様は巴文II-2b類で、珠文は8個残っているが、16個と思われる。巴文は丸味を帯びているが、高く盛り上がってない。

#### 上面、その他 （第91図T014～第95図）

釉薬瓦が多く、焼瓦・越前赤瓦がある。T014～T017は軒丸瓦である。T014は、瓦当面の下半部分である。黒褐色の釉が掛かっているが、器面が荒れているためか光沢はない。瓦当文様は丸味を帯びた扁平な花弁と釉がわずかに残っているので、梅鉢文II類かIII類と思われる。制作時のひび割れのためか、断面の一部に釉が流れ込んでいる。T015は越前赤瓦で、瓦当文様は巴文II-2b類である。巴文は扁平で、尾は次の巴につかず、離れている。胎土は灰色で砂粒の含み少なく、硬質緻密である。T016は焼瓦で、瓦当文様は巴文II-2b類である。珠文は11個残っているが、16個と推定される。巴文は扁平で、尾が全て繋がって円形になっている。T017は焼軒丸瓦であるが、瓦当面が欠損している。瓦当面と接合する部分には、強く接合するための櫛目が残っている。内面調整はコビキAで、布圧痕が見られる。

T018～T021は焼軒平瓦である。T018は瓦当文様は垂下型三葉文であり、下向きの三葉文の上に付く小さな葉は、向かって左側だけにある。T019は瓦当文様が三葉文I類である。焼成不良のためか胎土は浅黄橙色を呈するC2で、砂粒を多く含んでいるが、瓦当面であるため空隙は少ない。T020は軒平瓦であるが、側辺を瓦当面に対して斜めに切っているので隅瓦であろうか。瓦当文様は三葉文I類である。T021は、瓦当文様は三葉文III類である。

T022～T033は釉薬瓦の軒桟瓦である。T022～T024は瓦当文様が五弁花文と思われるもので、暗灰色の釉が薄く掛かり、胎土は7である。T022は小丸部の瓦当文様は梅鉢文III類で、軒平部は中心飾りが欠損しているが、唐草文の形から五弁花文と思われる。T023は山部が欠損しているが、瓦当文様が五弁花文であるので、軒桟瓦と推定した。T024は中心飾りが欠損しているが、唐草文の形から五弁花文と思われる。小丸部は剥離していて、接合のための櫛描きが残っている。T025は山部が残っていないが、瓦当文様が玉文II-3類であるので、軒桟瓦と思われる。T026の瓦当文様は玉文V類である。T027は小丸部が欠損しているが軒桟瓦で、光沢のある濃紫（茶）色の釉が遺存部全面に掛かっている。瓦当文様は梅鉢文IV類で、唐草文は菊文III-3類と同じである。T028は軒平部の瓦当文様は菊文III-2類で、濃紫（茶）色の釉は上面は光沢がないが、下面には少し光沢がある。胎土は砂粒を多く含み、層状に重ねて作っているのがわかる。T029は瓦当文様は小丸部が梅鉢文III類、軒平部は中心飾りが欠損

しているが、唐草文の形から菊文III-3類と考えられる。T030は瓦当文様は菊文VI類である。T031も光沢のある濃紫（茶）色の釉が掛かった軒瓦で、軒桟瓦と思われる。瓦当文様は桜文である。胎土は砂粒の含みはやや少ないが、全体に白い縞が入っている。T032はわずかに光沢のある黒褐色の釉が掛かる軒瓦で、平部しか残っていないが軒桟瓦の可能性がある。瓦当文様は宝文で、中心飾りは宝袋と思われ、唐草文の代わりに房の付いた紐のようなものがある。

T034～T036は丸瓦である。T034は釉薬丸瓦の玉縁部付近である。内面調整はコビキBで、棒状压痕が見られる。体部から玉縁部への屈曲部には、「○」と思われる刻印がある。T035は越前赤瓦で、上面には鉄漿が掛けられ、内面調整はコビキBと刺縫痕、上面の釘穴のところで割れている。「○」のような陰刻がある。T036は燐丸瓦の側縁近くの小片で、「○」の陰刻が2個ある。上面及び、下面側縁付近2.5cm程度は、丁寧に磨かれていて、内面はコビキBの痕跡と布压痕がある。T037は燐平瓦正面部分と思われる小片で、正面に「□」の中に「上」の陰刻がある。上面は丁寧に磨かれていて、上面側の角は面取りされている。T038はIV区トレーナー4の東から出土した燐丸瓦の玉縁付近である。内面調整はコビキBと布压痕が認められる。

T039・T040は鬼瓦と思われ、表面は燐されたように暗灰色になっているが、T039には屋根に取り付けるための銅線を繋ぐためのやや太い銅線が成形時に埋め込まれていて、焼成されていないと思われる。胎土は灰白色を呈し、細砂を含むが均質で、細かい纖維質のものが含まれている。表面の調整は風化のためか平滑でなくなっている部分が多いが、遺存状態の良い部分では丁寧なミガキで平滑に仕上げられている。

#### 4. 石製品（第96図、第18表）

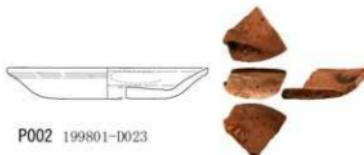
石製品は全て上面からの出土である。S001は石製硯で、海側の縁部であろうか。上面に陰刻で「大」が2個と「大」の横棒かと思われる「一」が1個ある。破損後再利用しようとしたものか、片側の側縁は割れ口を平滑に再調整している。S002は石製硯の陸側の隅である。裏面の中央が縦長の方形に一段窪む形のものである。S003は石臼である。欠損しているが上面に縁があるので、茶白の上臼である。側面に挽き手を差し込む穴を開けているが、その周りに二重の菱形の浮彫を施している。非常によく使いこまれているため下面是擦り減って、菱形の浮彫の下の部分が無くなっている。卸目も細く、間隔・方向ともにバラバラで、何回も引き直していると思われる。側面と上面も平滑になっていて、半分に割れているが、割れ口がデコボコしていないので、何かに再利用されたのであろうか。S004は凝灰岩製の角形火鉢の口縁部片である。被熱によりもろくなっている。S005は風化が著しいが、宝鏡印塔の相輪請花部分であろう。被熱していて、割れ口に溶融鉛であろうか、付着物がある。

#### 5. 金属製品（第97～99図、第19表）

M001はIII区の第8段東延石の背後から出土した銅釘である。頭部は円形で扁平、軸部断面は円形を呈している。M002・M003はIV区石垣1415N(SW08)抜取坑中層から出土した銅釘である。どちらも頭部は崩れた円形で、軸部は方形である。M002のほうがM003より大きい。M004～M030はSD02から出土した鉄釘である。直立または倒立した状態で出土し、木質が付着している。M004・M007・M010・M011・M013～M019・M021・M022・M027・M028は木質片が上下交差し、M005・M006・M012・M023～M026・M029・M030は木質片が上下並行になっている。M031・M032はSK04から出土した銅製の貝折れ釘であるが上部からの混入と思われる。どちらも完形で、M032のほうがM031より太く、少し短い。M033はSK03から出土した銅釘である。頭部は不整円形で、軸部の断面は方形である。M034・M035は、上面出土である。M034は銅製の匙で、完形である。M035は長方形で、四隅に穴が開けられた鉛板である。鉛瓦の一部であろうか。



P001 199801-D022



P002 199801-D023



P003 199801-B011



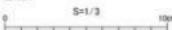
P004 199801-D055



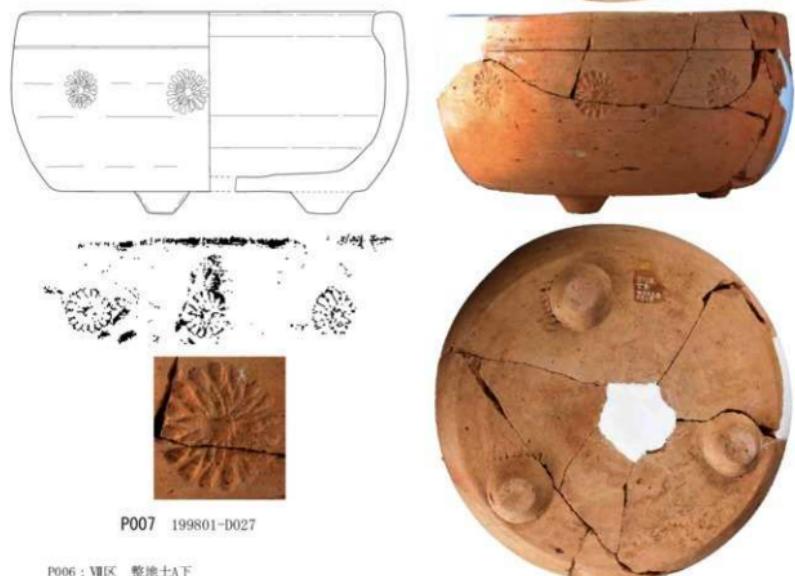
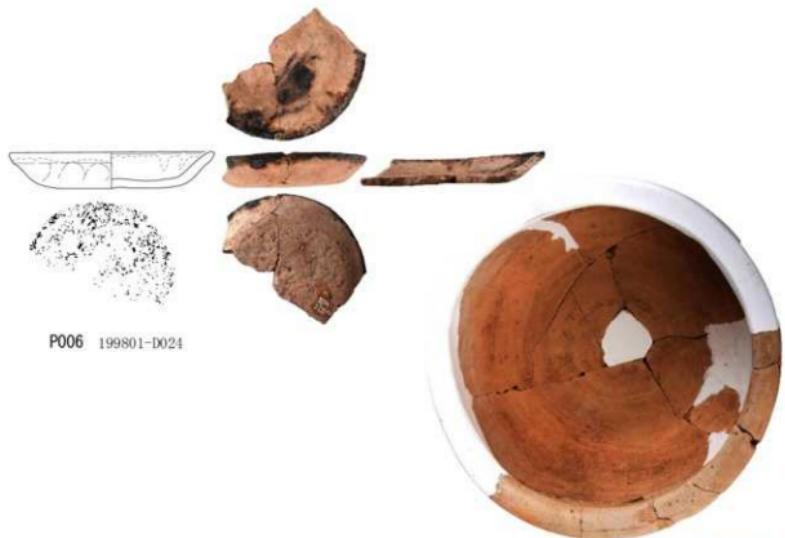
P005 199801-D025



P001; V区 石垣 (1415N SW08) 挖方下部 (裏込)  
 P002; IV区 石垣 (1415N SW08) 挖方北  
 P003; 石垣 (1415N SW08) 挖取坑中層  
 P004; IV区 石垣 (1415N SW08) 挖取坑上面  
 P005; IV区 トレンチ4 整地A

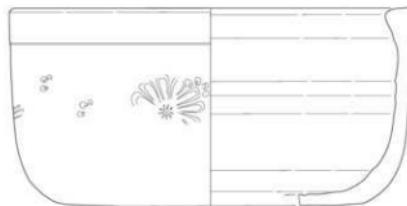


第32図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器1



第33図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器2

S=1/3 10cm



P008 199801-D028

P008 : VI区 整地土B、上面

0 S=1/3 10cm

第34図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器3



P009 199801-B010



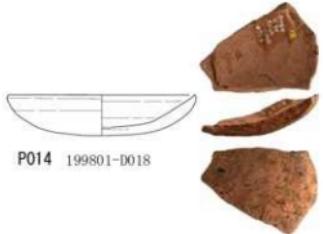
P010 199801-D017



P011 199801-D015

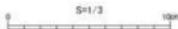


P012 199801-D016

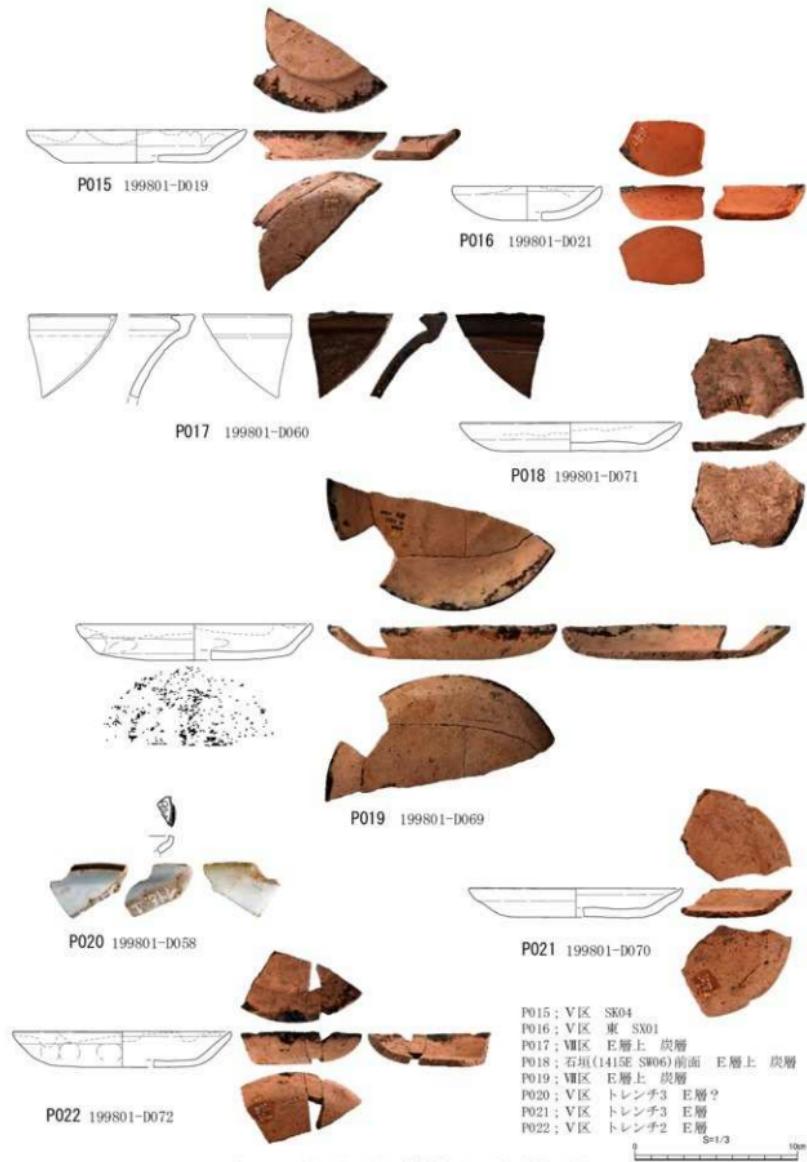


P013 199801-D020

P009 ; V区 西 SK04 11~14層, SK04  
P010 ; V区 西 SK04  
P011・P013 ; V区 西 SK04 9層  
P012・P014 ; V区 西 SK04 11~14層



第35図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器4



第36図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器5



第37図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器6



第38図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器7



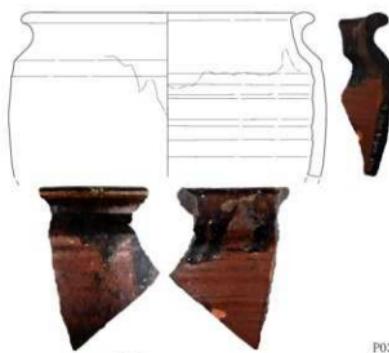
P035 199801-B006



P036 199801-D001



P037 199801-D002



P038 199801-D009

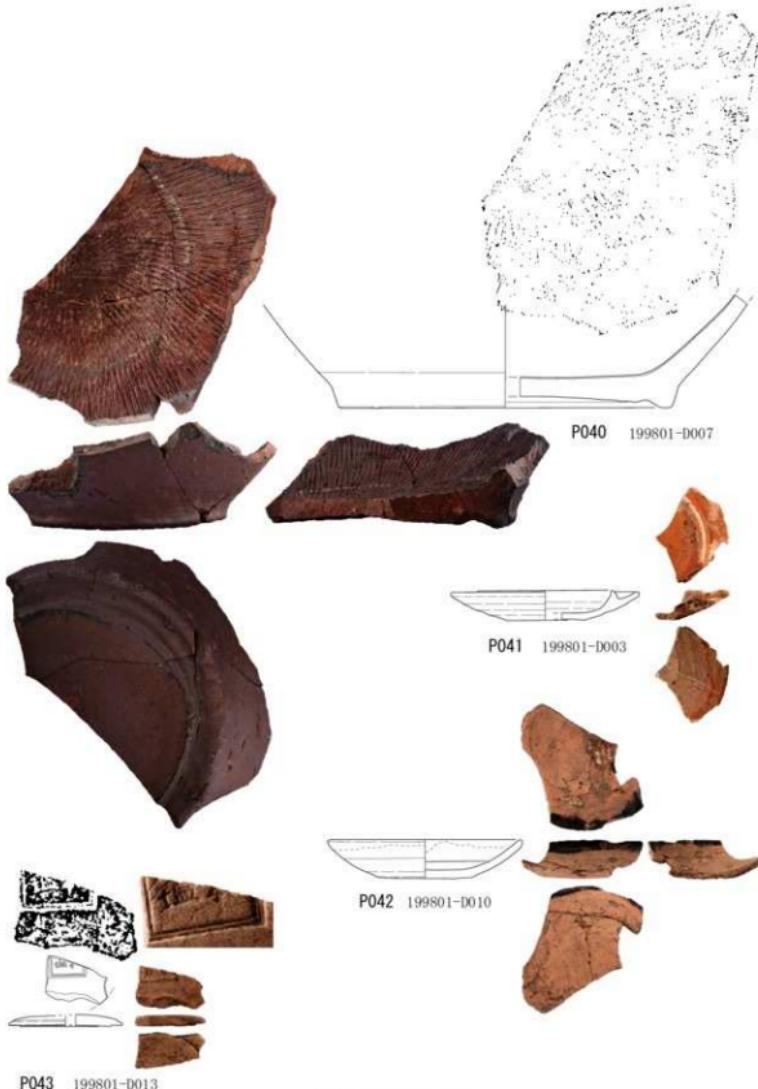
P035 : VIK SK01 上面  
P036～P039 : VIK SK01



P039 199801-D008

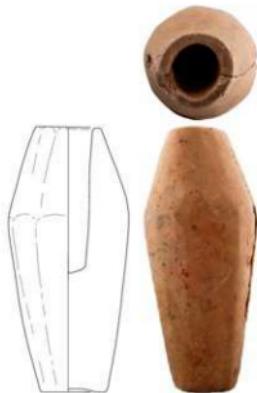
0 S=1/3 100

第39図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器8

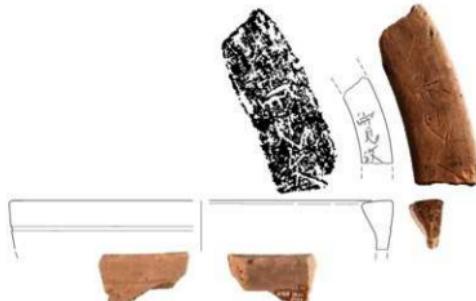


第40図 本丸附設出土遺物実測図 陶磁器・土器9

0 5=1/3 10cm



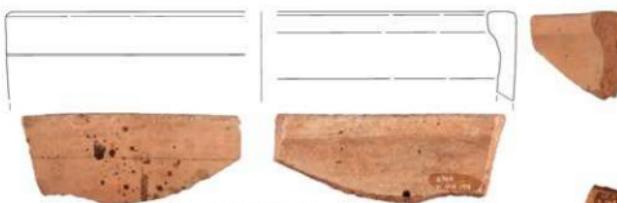
P044 199801-D004



P045 199801-D011



P046 199801-D012



P047 199801-D005



P048 199801-D006

P044～P048 : VII区 SK01



第41図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器10



第42図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器11



P052; I区 西 上面、IV区 上面、V区 上面  
 P053; I区 西 上面、II区 上面  
 P054; I区 東 上面  
 P055; III区 東 上面

第43図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器12

0 S=1/3 10cm



P056 199801-B087

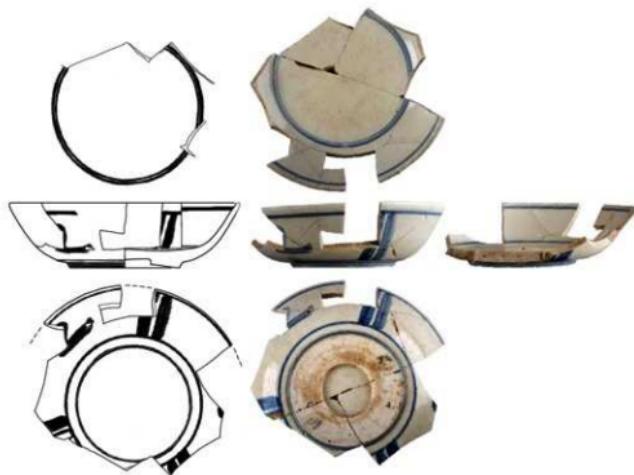


P057 199801-B086

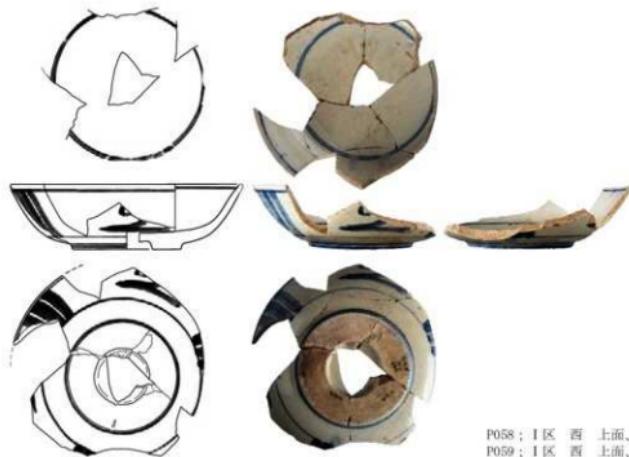
P056・P057：I区 西 上面

0 S=1/3 10cm

第44図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器13

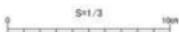


P058 199801-B101



P058 ; I 区 西 上面、IV 区 上面  
P059 ; I 区 西 上面、V 区 上面

P059 199801-B102



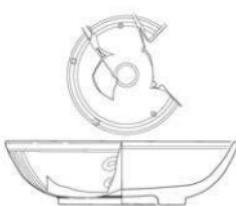
第45図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器14



P060 199801-B088



P061 199801-B089



P062 199801-B090



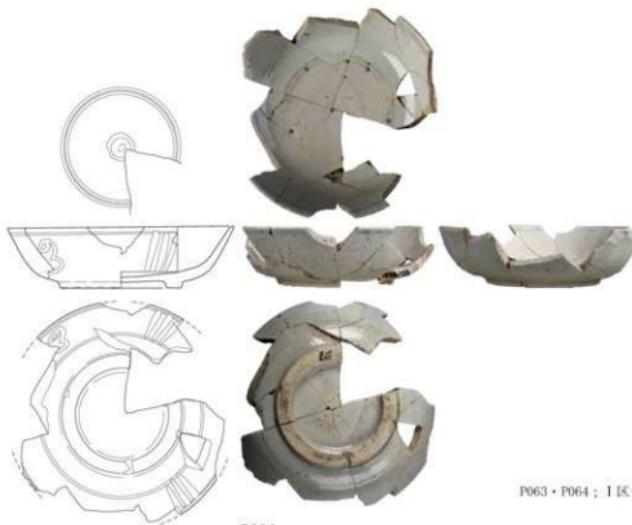
P060・P061；I区 西 上面  
P062；I区 西 上面、II区 上面

0 5=1/3 100

第46図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器15

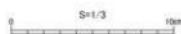


P063 199801-B091



P064 199801-B105

P063・P064 ; I 区 西 上面



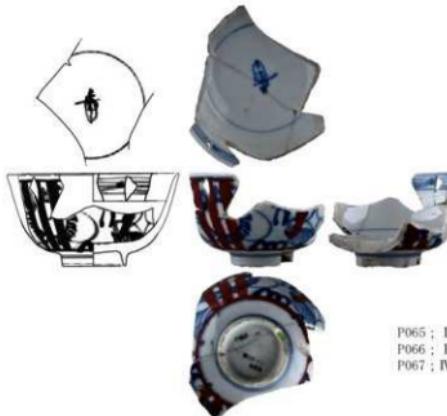
第47図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器16



P065 199801-B092



P066 199801-B093



P065 ; I 区 西 上面  
P066 ; I 区 東 上面  
P067 ; IV 区 上面

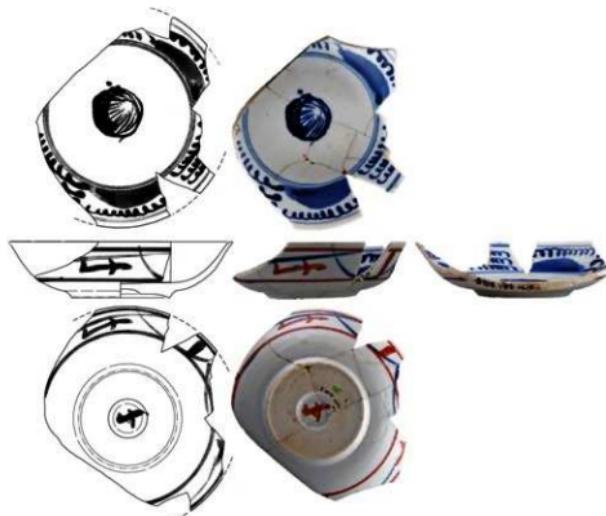
P067 199801-B094

5+1/3 10cm

第48図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器17



P068 199801-B095



P069 199801-B098 P068; I区 東 上面  
P069; I区 西 上面、IV区 上面、V区 上面

Scale 1/3 cm

第49図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器18



P070 199801-B016



P071 199801-B013



P072 199801-B014



P073 199801-B032



P074 199801-B033



P075 199801-B019

P070・P072・P075; I 区 西 上面  
P071; I 区 西 上面、II 区 上面  
P073; II・III 区 東 上面  
P074; III 区 東 上面



第50図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器19



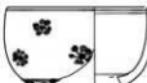
第51図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器20



P081 199801-B025



P082 199801-B026



P083 199801-B028



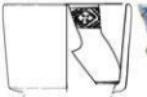
P084 199801-B050



P085 199801-B051



P086 199801-B027



P087 199801-B017



P088 199801-B012



P081・P082; V区 東 上面

P083; II・III区 東 上面

P084・P089; VII区 上面

P085; VII区 上面

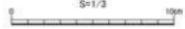
P086; III区 東 上面、IV区 上面

P087; I区 西 上面

P088; I区 東 上面

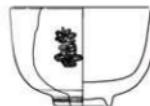
P089 199801-B049

第52図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器21





P090 199801-B022



P091 199801-B024



P092 199801-B023



P093 199801-B046



P094 199801-B048



P095 199801-B034



P096 199801-B015

P097 199801-B030

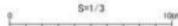


P098 199801-B035

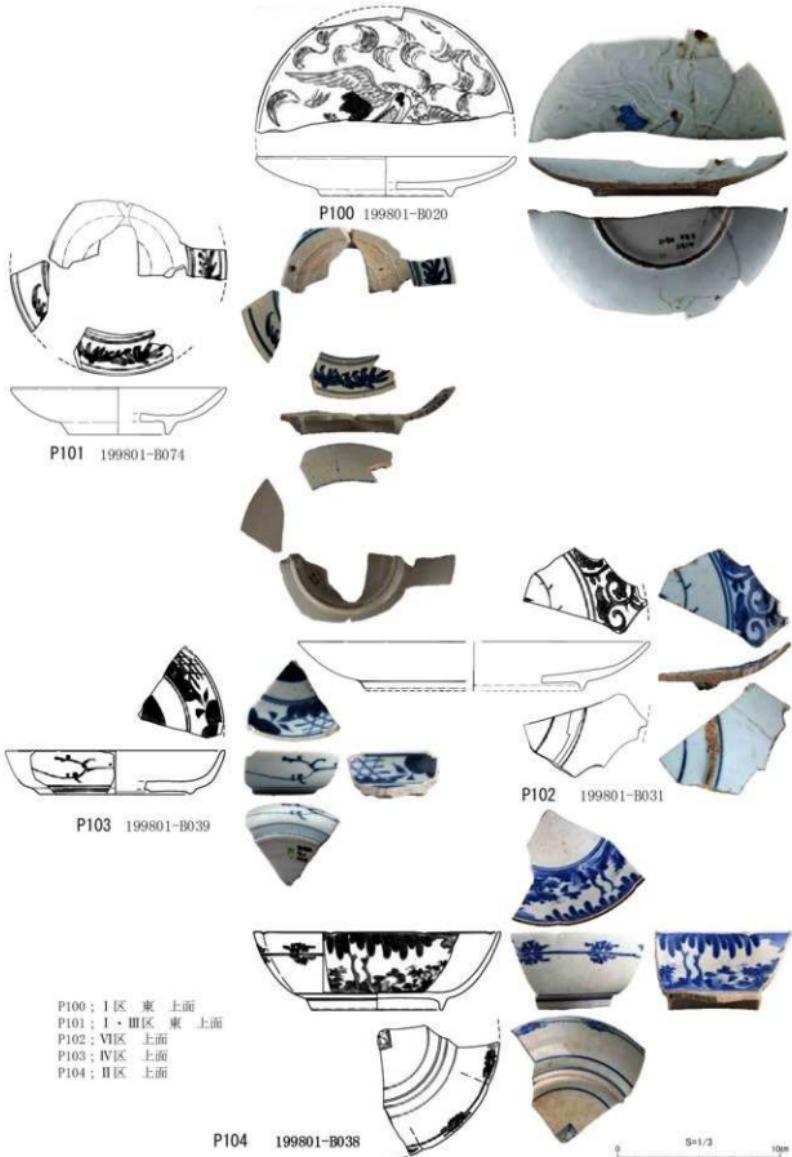


P099 199801-B018

P090 ; II・III区 東 上面  
 P091・P098 ; III区 東 上面  
 P092 ; III区 東 上面、V区 東 上面  
 P093・P095 ; V区 東 上面  
 P094 ; VI区 上面  
 P096・P099 ; I区 西 上面  
 P097 ; V区 上面



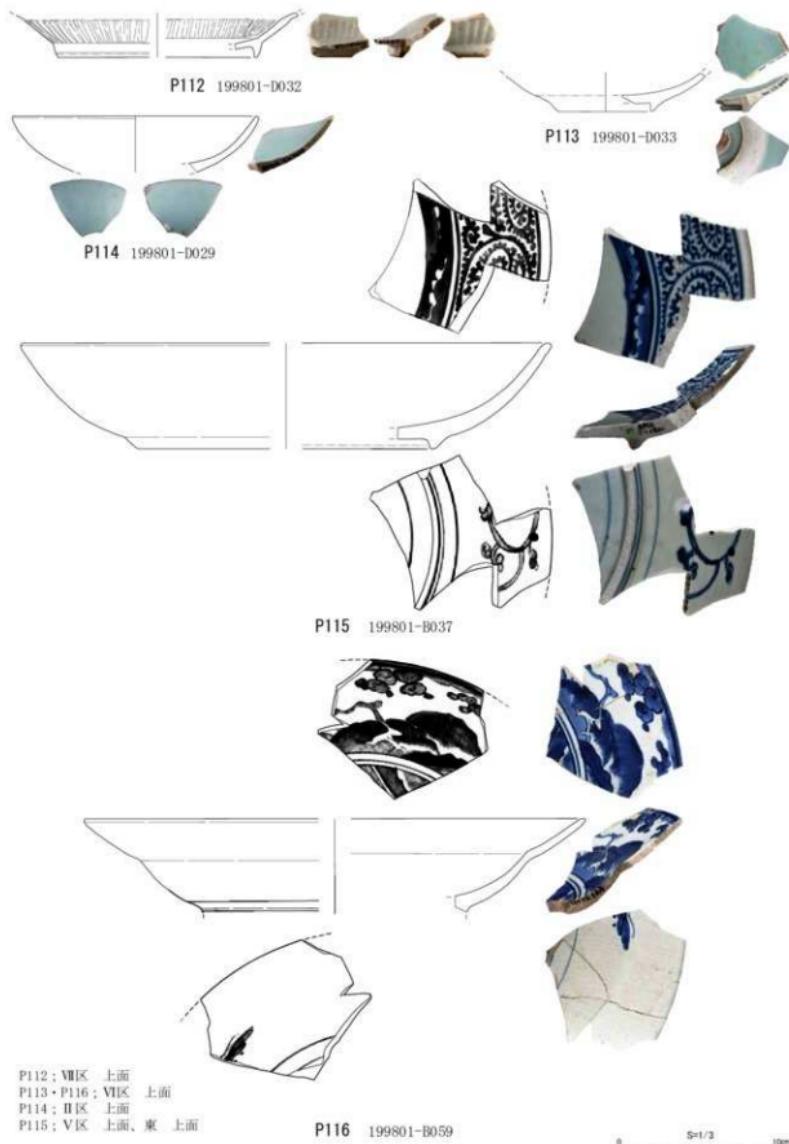
第53図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器22



第54図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器23



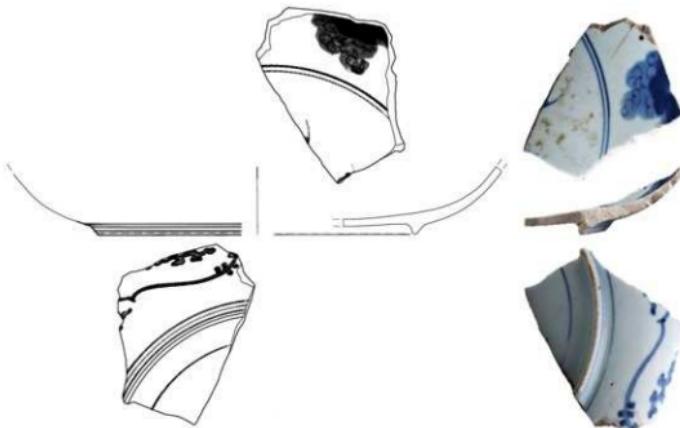
第55図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器24



第56図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器25



P117 199801-B060

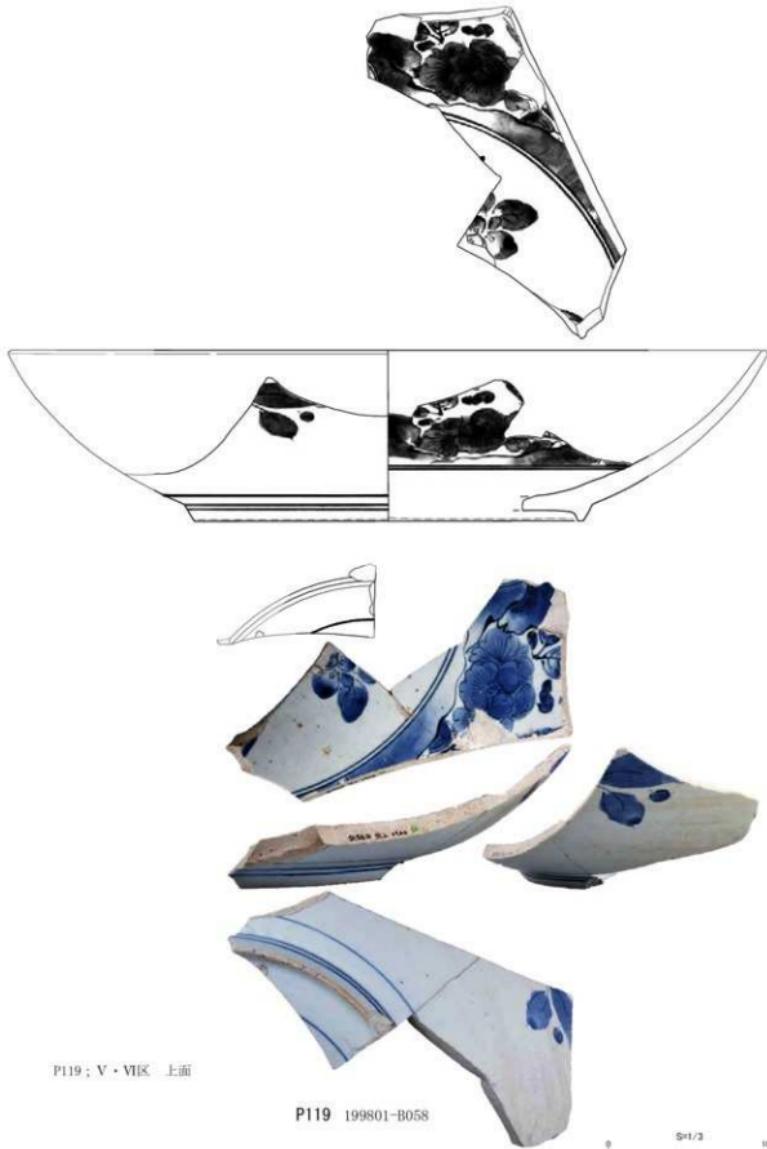


P118 199801-B061

P117 : IV・VI区 上面  
P118 : VII区 上面

第57図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器26

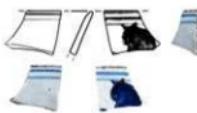




第58図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器27



P120 199801-B042



P121 199801-B047



P122 199801-B043



P124 199801-B045



P123 199801-B021



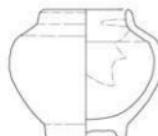
P125 199801-B031



P126 199801-B036



P127 199801-B063



P128 199801-B030



P129 199801-B044



- P120 : II区 上面
- P121 : VI区 上面
- P122 : III区 東 上面
- P123 : I区 西 上面
- P124 + P129 : IV区 上面
- P125 + P127 : VII区 上面
- P126 : V区 東 上面
- P128 : III区 東 上面、V ~ VII区 上面

0 5cm 10cm  
5:1/3

第59図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器28



P130 199801-B067



P131 199801-B069



P132 199801-B083



P134 199801-B068



P135 199801-B071



P133 199801-D034



P136 199801-D046



P137 199801-D099



P138 199801-D047



P139 199801-D100



P130 ; III区 東 上面、V区 西 上面アセ

P131 ; I区 東 上面、V区 西 上面

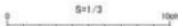
P132 ; P137 ; VI区 上面

P133 ; I区 東 上面

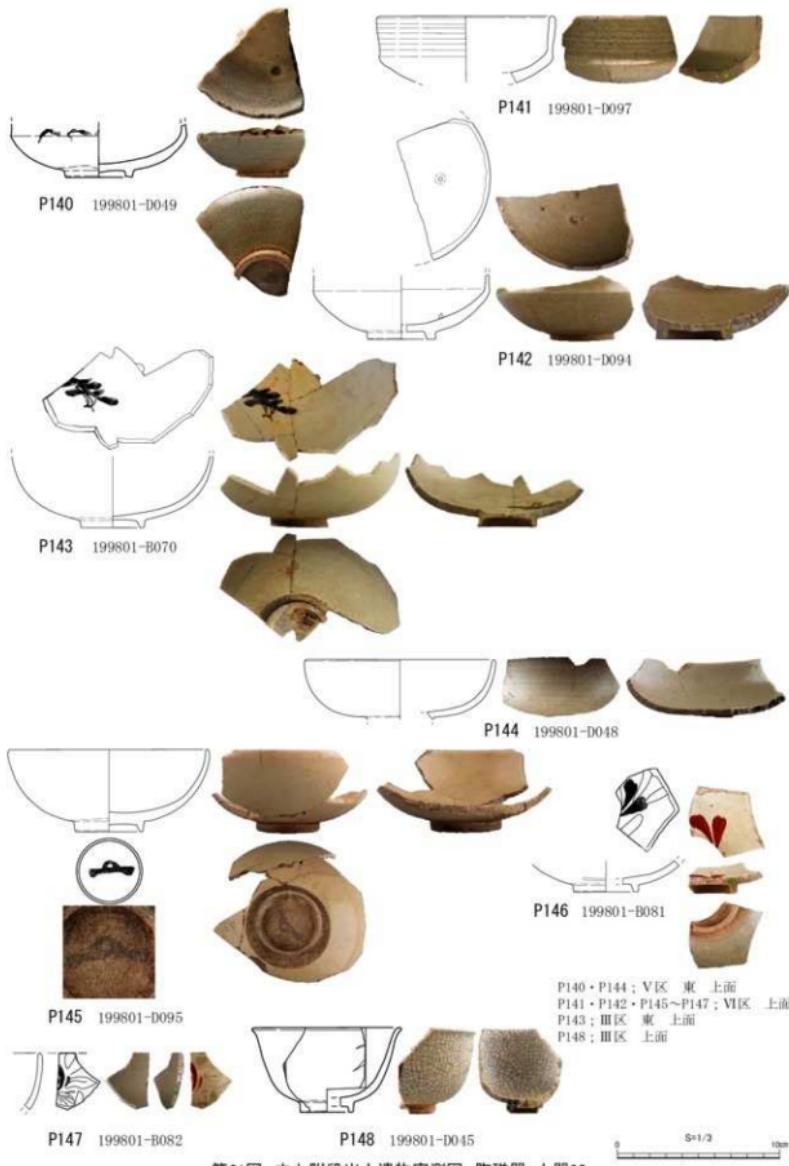
P134 ; P136 ; II区 上面

P135 ; P138 ; III区 東 上面

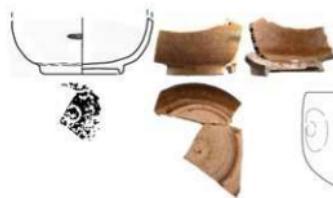
P139 ; VI~VII区 上面



第60図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器29



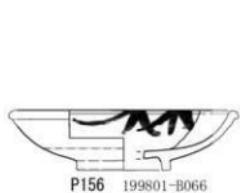
第61図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器30



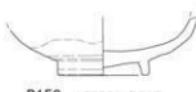
P149・P150・P155 ; VII区 上面  
P151～P153 ; II区 上面  
P154 ; VII区 上面

5×1/3 10cm

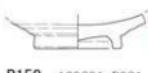
第62図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器31



P157 199801-D035



P158 199801-D043



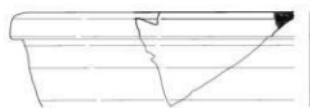
P159 199801-D091



P160 199801-D092



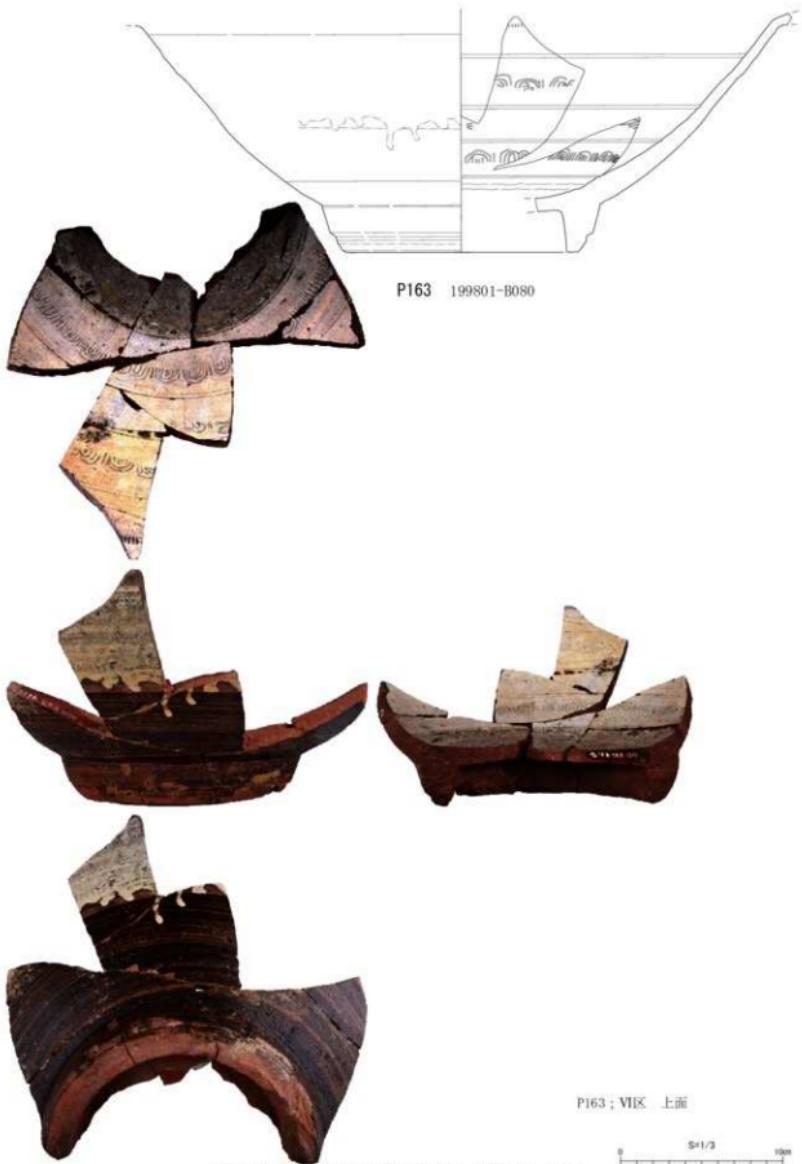
P161 199801-D044



P162 199801-D038  
第63図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器32

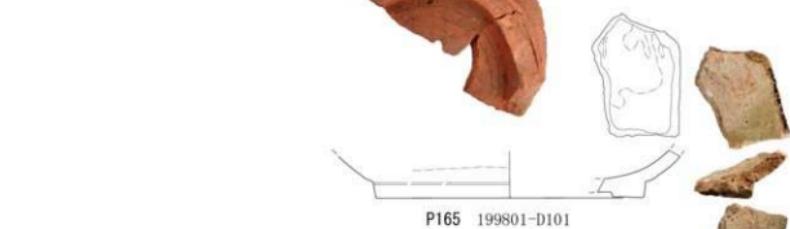
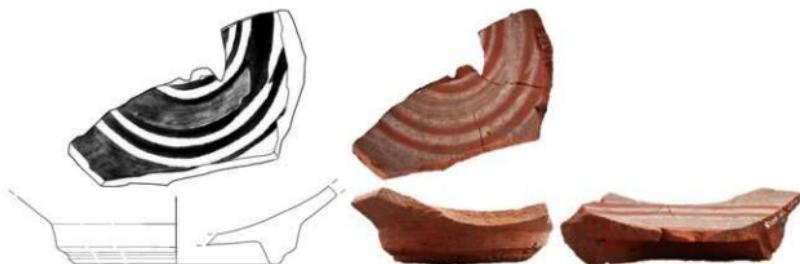
P156 ; I 区 東 上面  
P157 • P162 ; I 区 西 上面  
P158 ; II 区 上面  
P159 • P160 ; VI 区 上面  
P161 ; IV 区 上面

$\times 1/3$  10cm

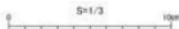


第64図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器33

5cm  
1cm



P164 ; VII区 上面  
P165 ; VI~VII区 上面  
P166 ; IV区 上面  
P167・P168 ; III区 東 上面  
P169 ; I区 西 上面



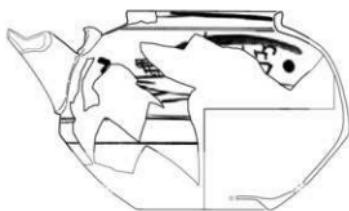
第65図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器34



P170 199801-D102



P171 199801-B075



P172 199801-B076



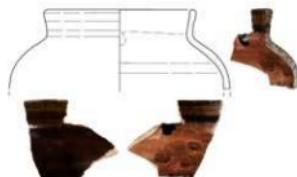
P170 ; VII区 上面  
P171 ; I区 西 上面  
P172 ; I・V区 西 上面、II・IV区 上面



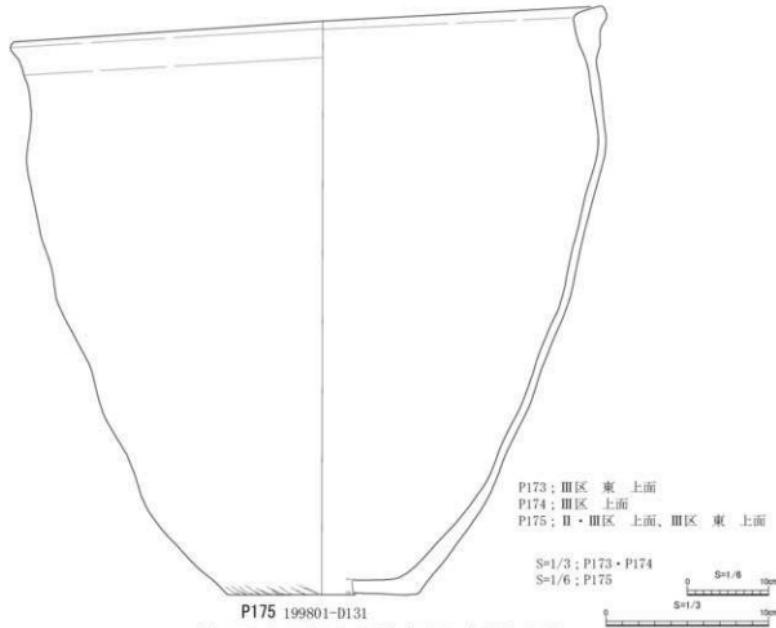
第66図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器35



P173 199801-D053



P174 199801-D054

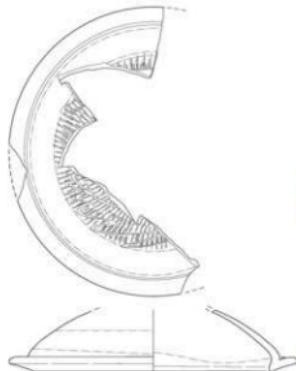


第67図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器36

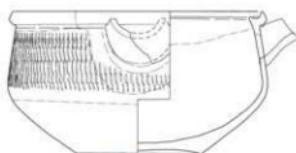


P175 199801-D131

第68図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器37



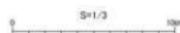
P176 199801-B064



P177 199801-B065

P176・P177；I区 東 上面

第69図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器38





P178 199801-D057



P179 199801-D067



P180 199801-D059

P178・P180 : IV区 上面  
P179 ; III区 西 上面

0 5cm 10cm

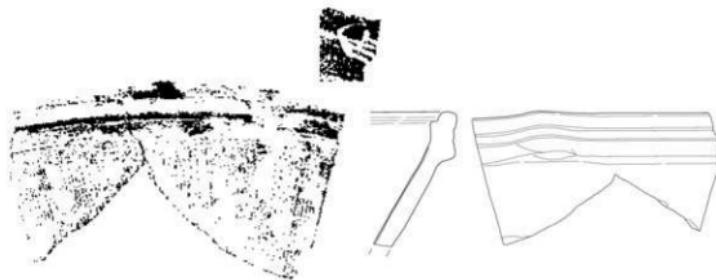
第70図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器39



P181 199801-D066



P182 199801-D108



P183 199801-D061

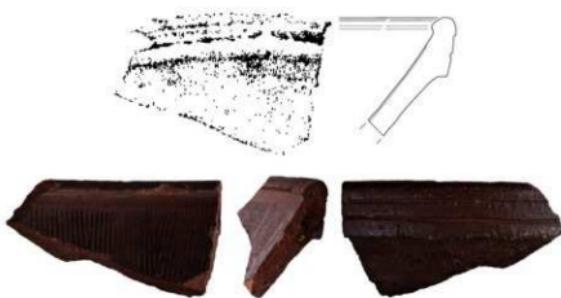
P181 ; V区 上面  
P182 ; VI区 上面  
P183 ; IV区 上面

0 S=1/3 10cm

第71図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器40



P184 199801-D062



P185 199801-D063



P186 199801-D064

P184 : V区 上面  
P185 : IV区 上面  
P186 : III区 東 上面

0 5-1/2 10cm

第72図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器41



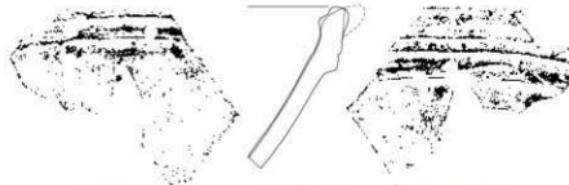
P187 199801-D065



P188 199801-D104



P189 199801-D105

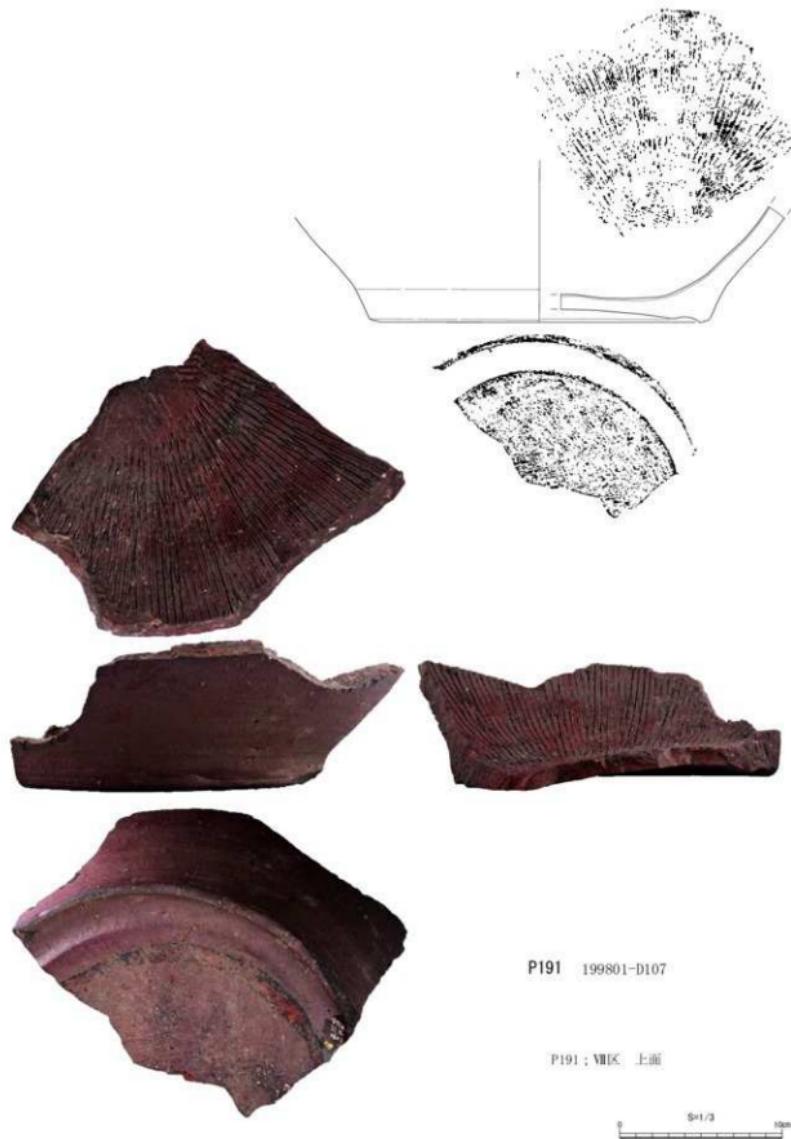


P190 199801-D106

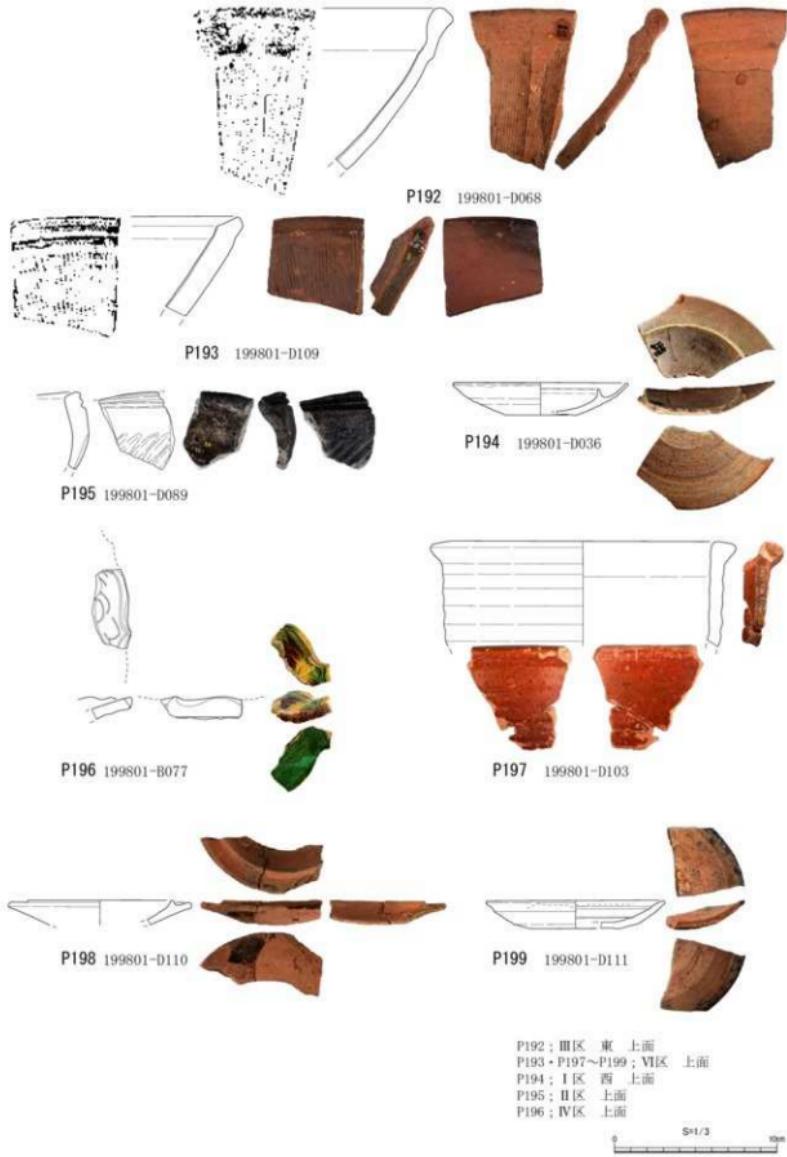
P187 : II区 上面  
P188~P190 : VII区 上面

0 5cm/3 10cm

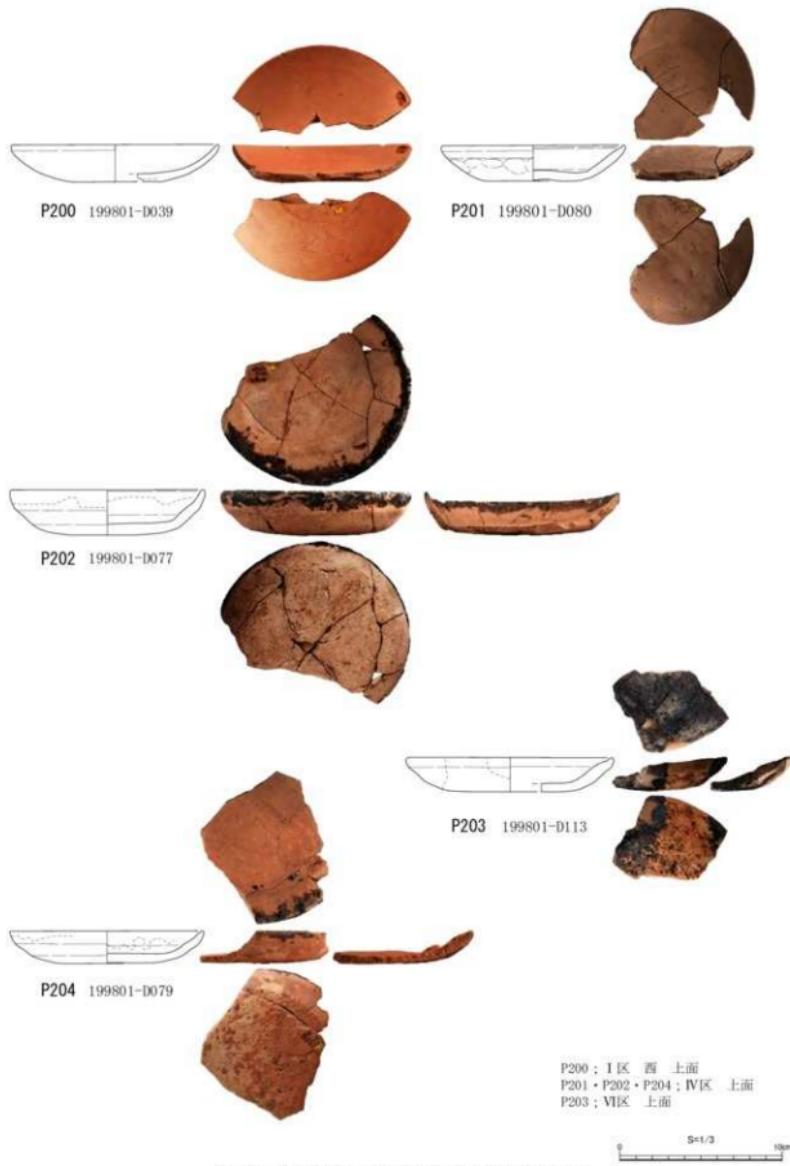
第73図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器42



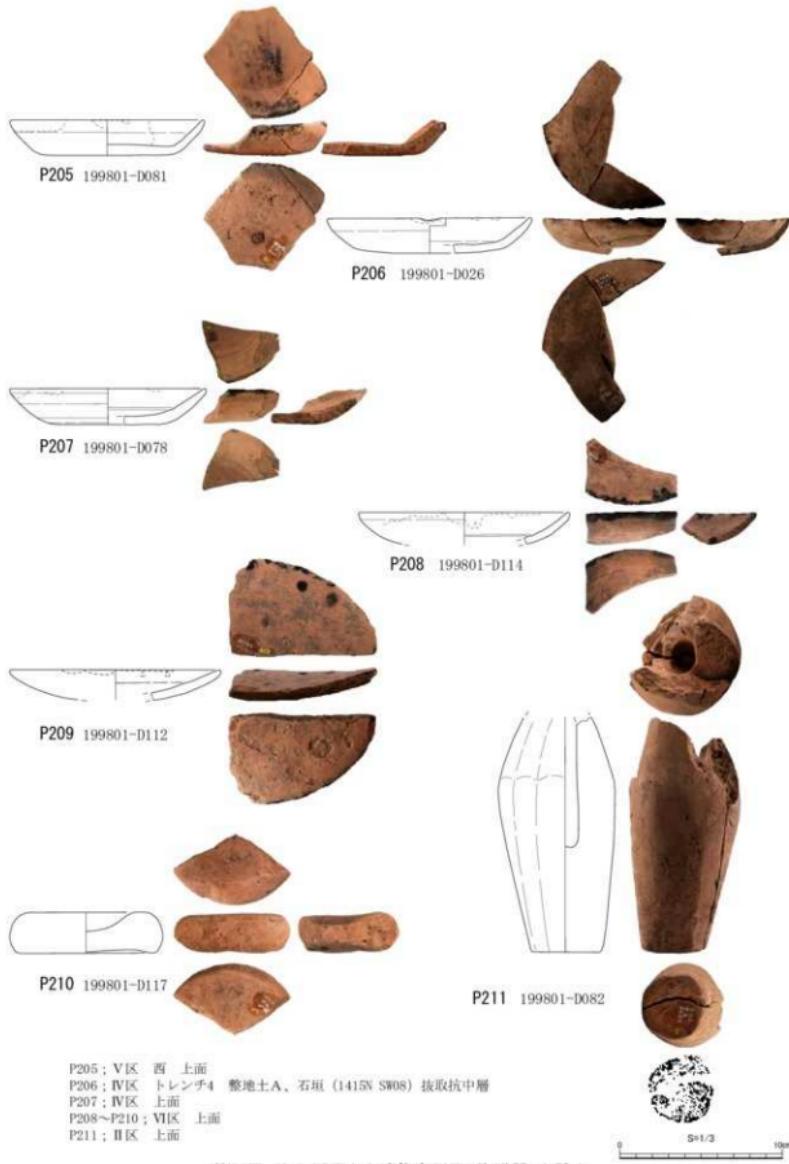
第74図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器43



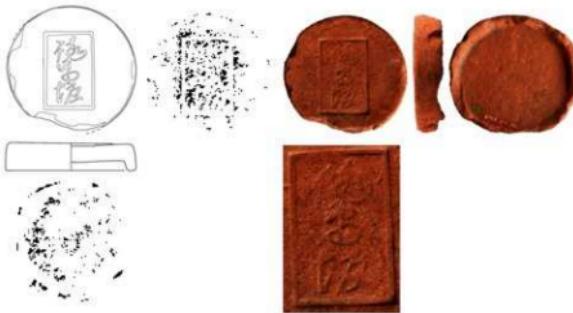
第75図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器44



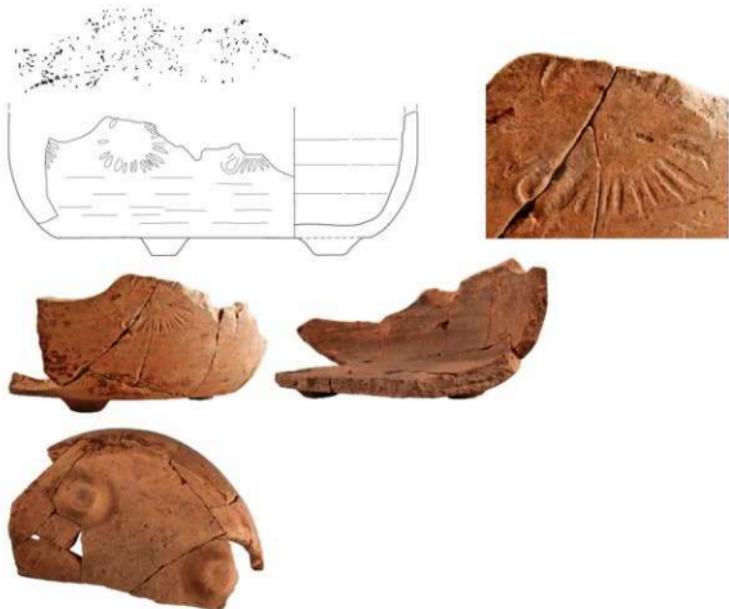
第76図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器45



第77図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器46

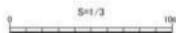


P212 199801-B078

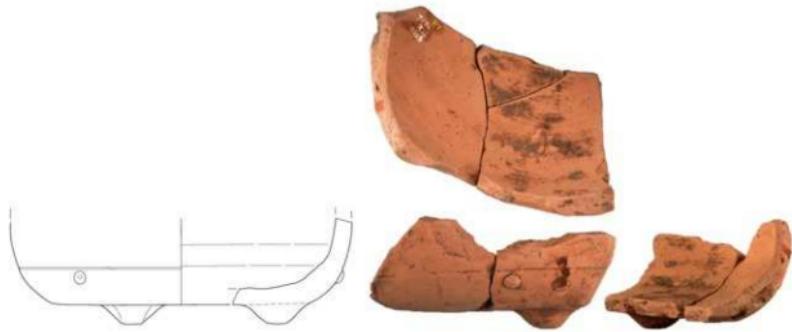


P213 199801-D083

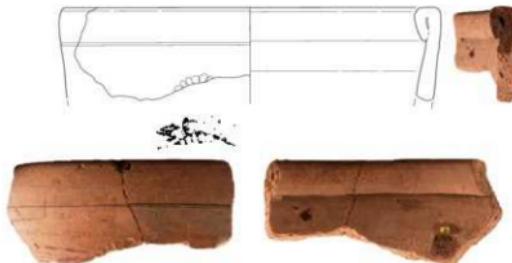
P212 ; VI区 上面  
P213 ; III区 東 上面



第78図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器47

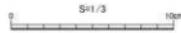


P214 199801-D116

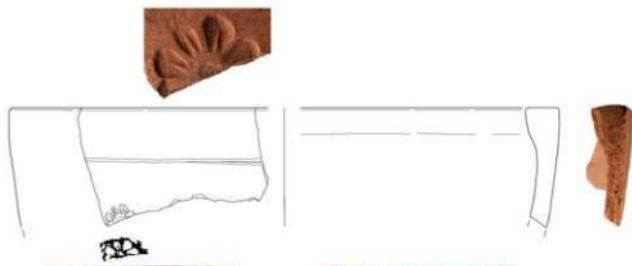


P215 199801-D087

P214 : VII区 上面  
P215 : IV区 上面



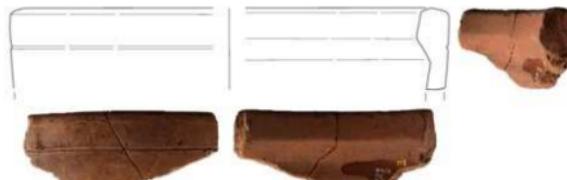
第79図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器48



P216 199801-D086



P217 199801-D085



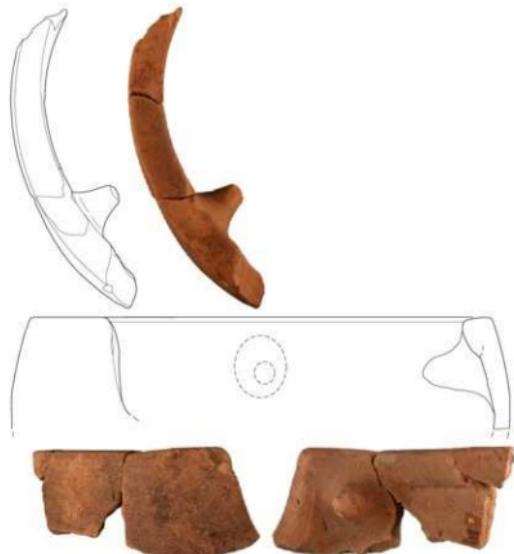
P218 199801-D115



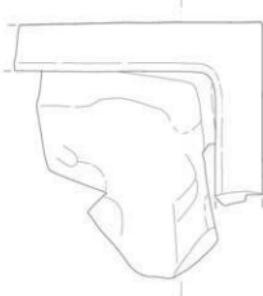
P219 199801-D040

P216・P217；IV区 上面  
P218；VII区 上面  
P219；I区 西 上面  
Scale 1/3 10cm

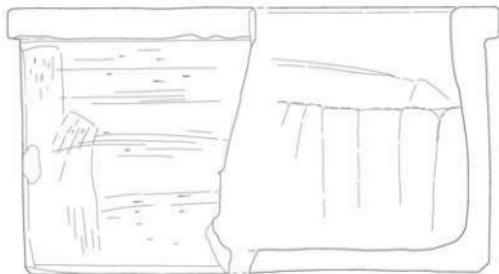
第80図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器49



P220 199801-D084



P220; III区 東 上面  
P221; I区 東 上面



P221 199801-D041

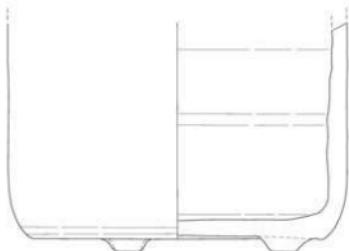
Scale: 1/3 10cm

第81図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器50

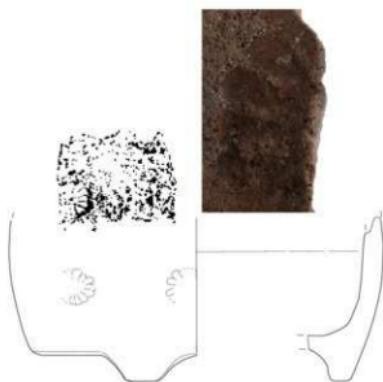


P221 199801-D041

第82図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器51



P222 199801-D042



P223 199801-D088



P222; I区 西 上面  
P223; II区 上面

0 5=1/3 10cm

第83図 本丸附段出土遺物実測図 陶磁器・土器52

## 焼瓦



A 1 199801-D124



B 1 200003-D105



C 1 201006-D046



A 2 200003-D100



B 2 200003-D085



C 2 200003-D130

A 1 : 硬質、緻密。断面縞状。  
A 2 : 硬質、緻密。断面縞状でない。

B 1 : 軟質、空隙多。断面縞状。  
B 2 : 軟質、空隙多。断面縞状でない。

C 1 : 軟質、緻密。断面縞状。  
C 2 : 軟質、緻密。断面縞状でない。

## 釉薬瓦



1 199801-D151



2 201106-D032



3 199801-D150



4 201204-D114



5 I 199801-D133



5 II 201204-D122



6 201106-D055



7 199801-D152



越前 200003-D138

- 1 : 橙色系で、白色粒・細砂を含み、細かい空隙が多い。軟質と硬質緻密なものがある。
- 2 : 橙色系で1と似るが、砂粒の含みや空隙はやや少なく、細い白い縞が入る。
- 3 : にぶい橙色系で、黒色粒が目立ち、白色粒・縞も含む。細かい空隙が多く、ザックリしている。
- 4 : にぶい褐色系で、白色粒・粗砂を多く含み、硬質。器壁が厚く、断面はにぶい褐色と暗灰色のサンドイッチ状を呈する。
- 5 : 橙色、灰褐色で、黒色・白色の縞が多く入る。白色粒を多く含み、黒色粒・縞・粘土塊も含む。全体が縞状を呈し比較的緻密なもの（5 I）と、大きめの空隙を含み縞状が強くないものの（5 II）がある。
- 6 : 黄橙色系で、砂粒の含み少く緻密。白色または黒色の細い縞がわずかに入る。
- 7 : 灰色で白色粒・細砂を含む砂っぽい胎土。光沢の無い暗灰色の軸が薄く掛かる。
- 越前：白色粒・粗砂を多く含み、硬質で、焼き締まっている。縞状が強い部分と弱い部分がある。

第 84 図 瓦 胎土分類

巴文 I



- ・珠文なし
- ・巴 左回り

200603-0097

巴文 II-1a



- ・珠文あり
- ・巴 左回り
- ・前の尾部が次の巴頭部まで

200703-0003

巴文 II-1b



- ・珠文あり
- ・巴 左回り
- ・前の尾部が次の尾部の中央まで

200703-0016

巴文 II-1c



- ・珠文あり
- ・巴 左回り
- ・前の尾部が2つの巴頭部まで

200003-0081

巴文 II-2a



- ・珠文あり
- ・巴 右回り
- ・前の尾部が次の巴頭部まで

199801-0122

巴文 II-2b



- ・珠文あり
- ・巴 右回り
- ・前の尾部が次の尾部の中央まで

200703-0011

巴文 II-2c



- ・珠文あり
- ・巴 右回り
- ・前の尾部が2つの巴頭部まで

200703-0010

梅鉢文 I-1a



- ・軸なし
- ・花弁と花芯が同じ大きさ
- ・花弁から花芯までの距離短い

200703-0018

梅鉢文 I-1b



- ・軸なし
- ・花弁と花芯が同じ大きさ
- ・花弁から花芯までの距離長い

200703-0013

梅鉢文 I-2



- ・軸なし
- ・花弁より花芯が小さい

200703-0019

梅鉢文 II-1



- ・軸あり
- ・花弁より花芯が大きい

200703-0001

梅鉢文 II-2



- ・軸あり
- ・花弁より花芯が小さい

200703-0017

梅鉢文 III



- ・軸あり
- ・花芯側軸間に突起(劍)あり

201204-T011

(石川県立本部公園緑地課・石川県金沢城調査研究会 2010年の分類を基に作成)

第 85 図 軒丸瓦 瓦当文様分類

### 三葉文 I



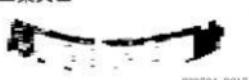
中心飾りの三葉文の横に、下向きに2本、唐草が巻く。その外側下向きの唐草の巻きは繋がっていて、上方先端は枝毛状。

### 三葉文 II



中心飾りの三葉文の横の下向き唐草は1本。その外側は唐草が「川」の字状に伸びる。上方先端は枝毛状。

### 三葉文 III



中心飾りの三葉文の横の下向き唐草は1本。先端まで数本の唐草で構成されている。三葉間はあまり開かない。

### 三葉文 IV



中心飾りの三葉文の間が開き、唐草は繋がっていない。全体的に簡略化される。

### 三葉文 V



中心飾りの三葉文が花弁のように幅を持ち、唐草は全て下向きに巻く。

### 三葉文 VI



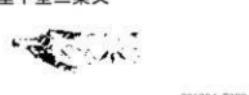
中心飾りの三葉文の間は開き、唐草は1本ずつ独立して、上下交互に巻いている。

### 三葉文 VII



中心飾りの三葉文は開き、横の下向き唐草は1本で巻きが浅い。その外側の唐草は、2本が交差して延び、下向きに浅く巻いている。その外側にも下向きの唐草がある。

### 垂下型三葉文



中心飾りの三葉文が下を向いて、上に小さな葉が2枚つく。第1唐草が下向きに深く巻き、途中から上向きの唐草が枝分かれしている。第2唐草も第1唐草から枝分かれして、先端は上下に分かれて巻き、間に蕾状のものがある。

### 半葉文



中心飾りは輪郭線で描かれた葉の上半分。外側に、下向きに巻く葉と上向きに巻く唐草がある。

(石川県金沢城調査研究所 2018d の分類を基に作成)

第 86 図 軒平・軒棟瓦 瓦当文様分類 1

### 梅鉢文 I



200703-D024



中心飾りは梅鉢文。第1唐草が第2唐草に添って上下に巻く。第2唐草は末端が上向きに巻く。

### 梅鉢文 II



200703-D025



中心飾りは梅鉢文。唐草は中心飾りに近い側で3本。第1唐草は上方が下より開く。第2唐草は末端の巻きが大きく、下向きに巻く。

### 梅鉢文 III-1



200503-B011



中心飾りは梅鉢文。第1唐草の開きは上下同幅。下が上に比べ畠れている。末端の巻きは浅く、上を向く。

### 梅鉢文 III-2

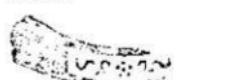


200503-B013



中心飾りは梅鉢文。第1唐草は下方が上より開き、上に比べ畠れている。末端の巻きは浅く、上を向く。

### 梅鉢文 IV

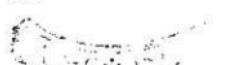


199801-D156



中心飾りは梅鉢文。唐草は菊文III-3と類似して、中心飾りを包むような第1唐草と屈曲の深い第2唐草からなる。

### 桜文



200603-D049



中心飾りは桜文。第1唐草から第2唐草へは途切れずに続いている。

### 九曜文

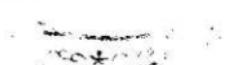


200003-D147



中心飾りは九曜文。唐草は簡略化され、第1唐草から第2唐草へは途切れずに続いている。菊文IIIが変化したものかもしれない。

### 星文



200003-D148



中心飾りは星文。唐草は巻きが浅く、第1唐草が下に巻き、第2唐草が上に巻いて枝分かれしていて、他の唐草文とは逆になっている。

（石川県金沢城調査研究所 2018d の分類を基）  
に作成

第87図 軒平・軒棟瓦 瓦当文様分類2

### 玉文 I



201106-1368



中心飾りは第1唐草が玉を抱えるように配され、第2唐草は一つなぎになっている。玉の下には縦の軸が第2唐草の下まである。

### 玉文 II-1



199904-0056



玉は少し大きくなり、唐草も太くなるが、稜を持ったため拓本では細く表現される。第2唐草が左右に独立する。玉は第1唐草の下まで続く軸を持つ。

### 玉文 II-2



201106-1367



玉は軸を持たず、玉・唐草ともに扁平になるため拓本では太く表現される。

### 玉文 II-3



199904-0030



玉は軸を持たず、第2唐草は外側に離れて、巻きが浅くなって、子葉が大きくなる。

### 玉文 III



201106-1089



玉が大きくなり、第1唐草は玉を抱くように上に延びる。第2唐草は下向きに深く巻き、上向きに枝分かれしている。

### 玉文 IV



200003-0149



中心飾りの玉は横長になり、上下に軸がある。第2唐草は上向きに渦を巻く。

### 玉文 V



199801-0150



中心飾りは軸を持つ玉文であるが、唐草は葉のようになっている。

### 五弁花文



201204-1077



中心飾りは五弁花文。輪郭線で描かれた葉状の唐草がある。

### 宝文



199801-0155



中心飾りは宝袋。袋の口を縛った房付きの紐が横に延びる。

（石川県金沢城調査研究所 2018d の分類を基）

第 88 図 軒平・軒棟瓦 瓦当文様分類 3

### 菊文 I



201106-D071



中心飾りの菊は花弁 10 枚。線は華奢で、稜がはつきりしている。唐草は上向きに巻く。

### 菊文 II



200802-D001



中心飾りは 10弁の菊花文。唐草は巻きが浅く、第2唐草は末端が下を向く。

### 菊文 III-1



200603-D050



中心飾りは丸味を持つ 8弁の菊花文。唐草は幅があり、輪花状になっている。第1唐草は中心飾りの菊花文を包むように上に延びて、第2唐草は下向きに巻いて、先端で枝分かれしている。

### 菊文 III-2



200603-D052



中心飾りは III-1 より丸味を持つ 8弁の菊花文。唐草は簡略化され、先端で枝分かれしなくなる。

### 菊文 III-3



201106-D026



中心飾りは丸味を持つ 8弁の菊花文。唐草は簡略化されて輪花状ではなくなり、第2唐草の屈曲が深い。

### 菊文 III-4

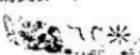


201204-T014



中心飾りは丸味を持つ 8弁の菊花文。第2唐草は第1唐草の途中から出て、横へ延びた後、上に延びる。

### 菊文 IV-1

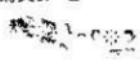


200802-D003



中心飾りは稜のはつきりした 8弁の菊花文。第1・第2唐草とも枝分かれせず、第2唐草は曲がりながら上へ延びる。

### 菊文 IV-2



200802-D005



中心飾りは丸味を持つ 8弁の菊花文。唐草は菊文 IV-1 と同じ。

### 菊文 V



200802-D004



中心飾りは 8(?)弁の菊花文。第1唐草は上下に緩く巻き、第2唐草は、枝分かれしたもののが上に強く巻いている。

### 菊文 VI



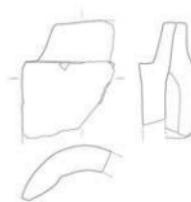
199904-B295



中心飾りは稜のはつきりした 8弁の菊花文。唐草は、梅鉢文 III-1 と同じく、第1唐草の開きが上下同幅で、下が上に比べ潰れ、末端の巻は上を向く。

（石川県金沢城調査研究所 2016 の分類を基に作成）

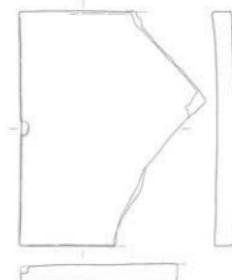
第 89 図 軒平・軒棧瓦 瓦当文様分類 4



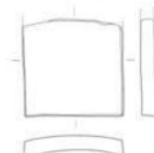
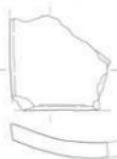
T001 199801-D126



T002 199801-D127



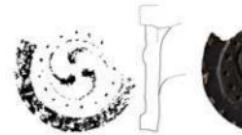
T003 199801-D128



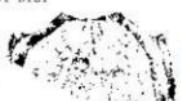
T004 199801-D129



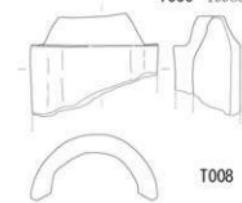
T005 199801-D122



T006 199801-D121



T007 199801-D123



T008 199801-D124



T001 + T002 ; IV区 トレンチ4 整地土A

T003 ; VII区 整地土B

T004 ; VII区 整地土B 西

T005~T007 ; V区 SK04

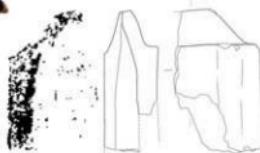
T008 ; V区 SK04 9層

0 5=1/6 10m

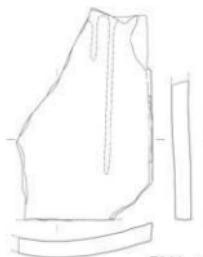
第90図 本丸附段出土遺物実測図 瓦1



T009 199801-D151



T010 199801-D118



T011 199801-D119



T012 199801-D120



T009 ; VI区 SK01  
T010~T012 ; IV区 SK03  
T013 ; V区 トレンチ3 SK05  
T014 ; I区 上面 アゼ、西 上面  
T015 ; II区 上面



T013 199801-D125

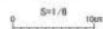


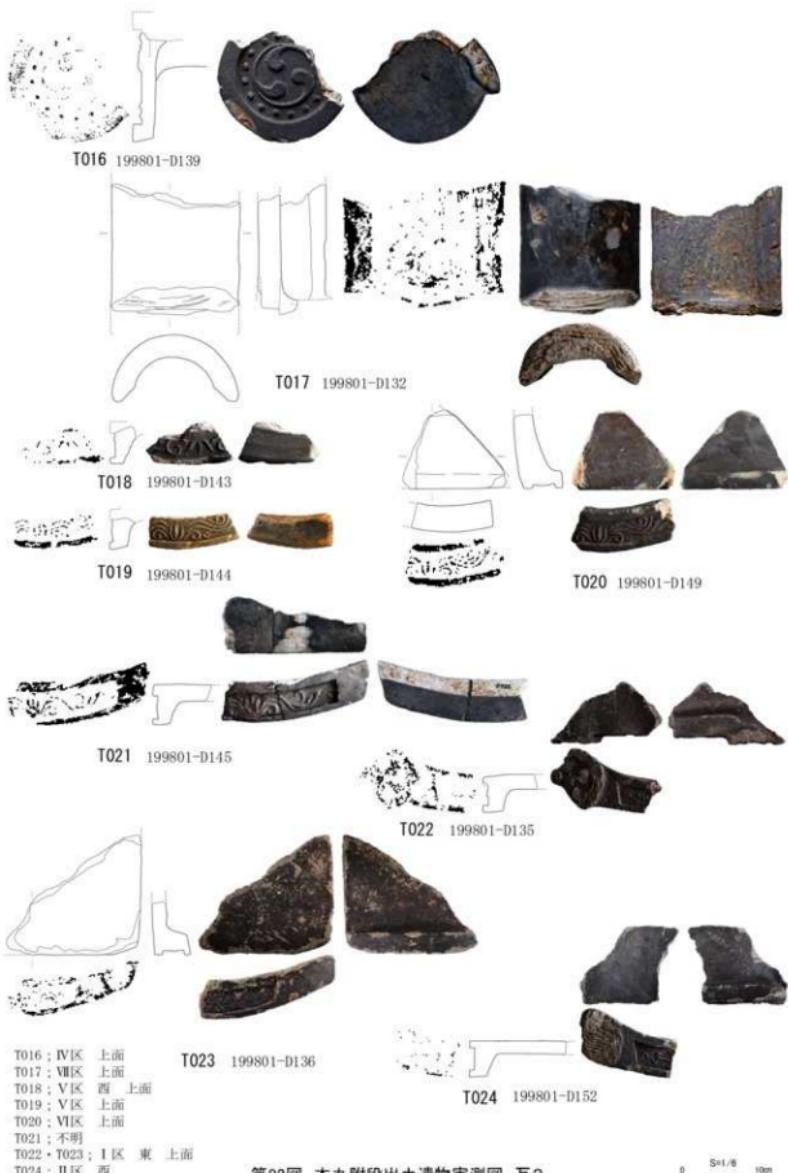
T014 199801-D134



T015 199801-D140

第91図 本丸附段出土遺物実測図 瓦2





第92図 本丸附段出土遺物実測図 瓦3

Scale: 1/6 10cm



第93図 本丸附段出土遺物実測図 瓦4

Scale bar: 1cm



T031 199801-D157



T030 199801-D147



T033 199801-D141



T034 199801-D133

T030 ; III区 東 上面

T031 ; V区 西 上面

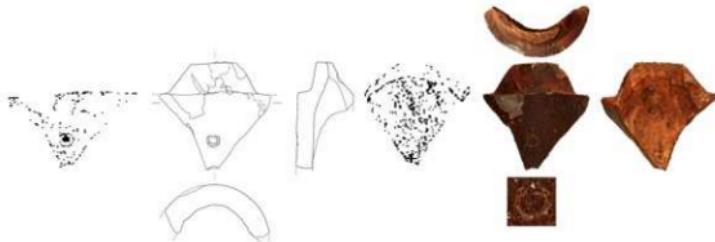
T032 ; II区 上面

T033 ; IV区 上面

T034 ; III区 西 上面

第94図 本丸附段出土遺物実測図 瓦5

0 5cm 10cm



T035 199801-D158



T036 199801-D154



T037 199801-D153



T038 199801-D130



T039 199801-D138



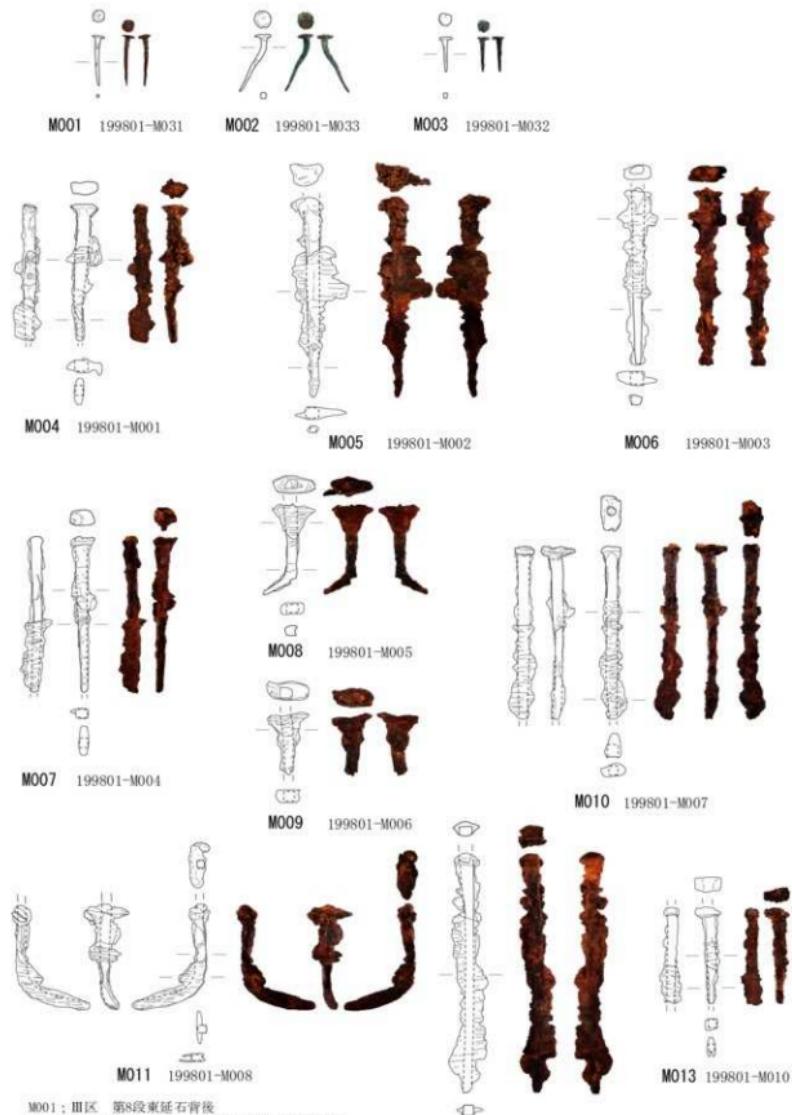
T040 199801-D137

T035~T037 : VI区 上面  
T038 : IV区 レンチ4 東  
T039 : III区 東 上面  
T040 : III区 西 上面

第95図 本丸附段出土遺物実測図 瓦6

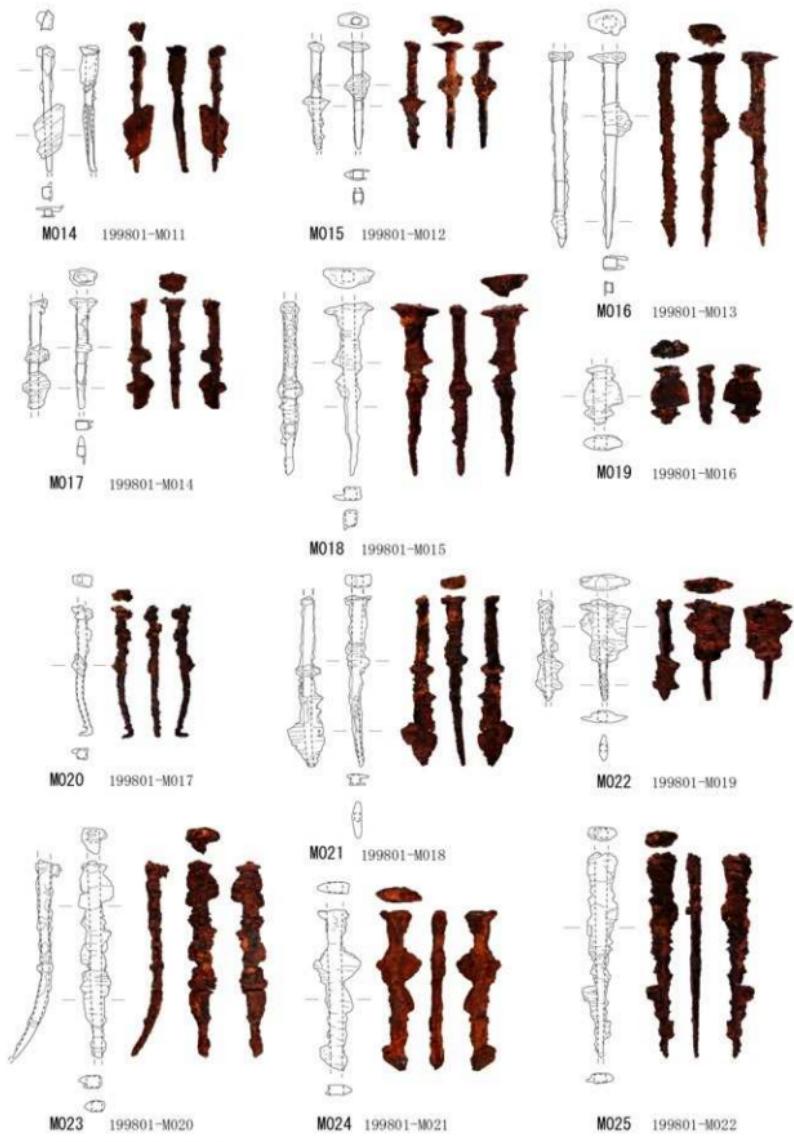






第97図 本丸附段出土遺物実測図 金属製品1

Scale: 1/3 10mm



第98図 本丸附段出土遺物実測図 金属製品2

S=1/3 10cm



第99図 本丸附段出土遺物実測図 金属製品3

第7表 出土遺物觀察表 本丸附段

回収 番号	構 造	器種	地区	11時		銘文 (cm)	直徑 (cm)	地圖・ 絵図		形状・ 装飾等	鉢上・色調等	鉢特徴	底面	年代	特記事項	ID(実測番号)	
				出土段	段			製作	底								
P001	壇	小杯	V	1.0 (1.0-1.0) (M.L.)	6.0	2.5	2.65	口13.26 底8.36	手作り	白磁	E1	端反形	中高台面 底?	盤付自持子 2個	199001-0022		
P002	土器	土器	IV 輪舟	1.0 (1.0-1.0) (M.L.)	12.3	1.9	11.96	底7.26	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	E2	浅黄褐	IV磁		199001-0023		
22	P003	陶器	壇	6.0 (1.0-1.0) (M.L.)	—	3.4	12.9	底7.26	口カロ	灰褐、 鉛質	E1	22cm灰黃	万古	島台内咲あり(風占)	199001-0011		
P004	陶器	壇	IV (灰質・輪舟)	6.0 (1.0-1.0) (M.L.)	10.8	14.5	20.96	口9.0	灰褐	13cm灰黃	E1		圓窓		199001-0015		
P005	土器	土器	IV 壇地土A	13.6	9.7	2.6	12.96	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	底8.06 底8.36	E2	淡黄褐 細紋	8.0cm、精良	IV磁	199001-0025		
23	P006	土器	土器	V 壇地土A'	12.4	9.1	2.2	11.36	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	E1	淡黄褐 多、減少	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0024	
P007	土器	六体	V B・III H III.06	12.4	19.2	12.5	11.46	底8.06	ヨコナリゲ 底8.06 底8.36	赤味 底8.06 底8.36	E2	底8.06 底8.36	精良 丸刷毛	IV磁	199001-0027		
24	P008	土器	六体	V 壇地土B	12.8	11.6	12.2	11.86	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	E2	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0028 ca.7cm(文字)	
P009	陶器	壇	V 5.304	11 14.8	6.7	—	13.9	底8.06	口9.0	内花	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0010	
P010	陶器	壇	V 5.304	11 14.8	6.7	—	13.3	小穴	口9.0	内花	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0012	
P011	陶器	壇	V 5.304	11 14.8	6.7	—	16.2	底8.06	口9.0	内花	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0015	
25	P012	陶器	壇	V 5.304	11 ~14.8	—	17.2	小穴	口9.0	内花	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0016	
P013	土器	土器	V 5.304	9 12.6	—	—	12.76	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	底8.06 底8.36	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0020		
P014	土器	土器	V 5.304	11 14.8	11.5	2.5	11.26	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	底8.06 底8.36	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0018		
P015	土器	土器	V 5.304	11 13.5	—	2.0	11.96	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	底8.06 底8.36	E2	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0019		
P016	土器	土器	V 5.304	11 13.5	—	2.1	11.96	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	底8.06 底8.36	E2	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0021		
P017	陶器	壇	V 5.304	11 13.5	—	—	16.2	小穴	口9.0	内花	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0020	
P018	土器	土器	V 5.304	11 13.5	—	—	11.96	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	底8.06 底8.36	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0021		
26	P019	土器	壇	V 5.304	11 13.5	—	11.8	2.2	11.96	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0019
P020	陶器	壇	V 5.304	11 13.5	—	—	11.85	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	底8.06 底8.36	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0018		
P021	土器	土器	V 5.304	11 13.5	—	—	11.8	11.96	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	E1	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0017	
P022	土器	土器	V 5.304	11 13.5	—	2.2	11.96	手 <rightarrow>下</rightarrow>	白	底8.06 底8.36	E2	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	底8.06 底8.36	IV磁	199001-0012	

第8表 出土遺物觀察表 本丸附段 陶磁器・土器2

回収番号	種類	形状	大きさ	底径 (cm)	底質	底質 (cm)	底質 底質	輪郭・ 装飾等	輪郭・ 装飾等	時代	特記事項	ID(実測番号)
P023 土器	土器	V	1.5×1.5×2 [12.3]	2.1	11.4/3 8.7/26	手づくひ	E2	瓦葉地 細砂多、縫少	在地	17世紀半	削面板	109001-0073
P024 土器	土器	V・W [1.5]	1.5×1.5×2 [13.3]	2.0	11.7/26 8.7/26	手づくひ	E2	瓦葉地 細砂多、縫少	在地	17世紀半	削面板	109001-0015
P025 土器	土器	V・W [1.5]	1.5×1.5×2 [13.3]	1.9	11.4/26 8.7/26	手づくひ	E2	瓦葉地 細砂多、縫少	在地	17世紀半	削面板	109001-0074
P026 土器	土器	V	1.5×1.5×2 [1.5]	1.7	11.7/26 8.7/26	手づくひ	E	瓦葉地 細砂少	在地	17世紀半	削面板	109001-0076
37	P027 磁器	碗	V1	5.0/1	—	[4.1] (2.1) 底13.7/26	ロタロ	窓付	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0004
	P028 磁器	碗	V1	5.0/1	8.8	3.6 底30.9/26	ロタロ	窓付、ミヤコ ニヤコ	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0001
P029 磁器	碗	V1	5.0/1	8.5	— [5.1]	11.7/26 ロタロ	窓付	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0002	
P030 磁器	碗	V1	5.0/1	8.6 [5.1]	— [4.2]	11.2/26 ロタロ	窓付	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0003	
P031 磁器	瓶	V1	5.0/1	—	— 2.8	底2.7/26 ロタロ	背丸	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0005	
P032 磁器	杯	V1	5.0/1	25.6 1.5/26	14.6 9.2	口4.0/26 底8.2/26	ロタロ	窓付	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0009
P033 磁器	杯	V1	5.0/1	22.0 1.5/26	12.6 7.6/26	口4.0/26 底1.6/26	ロタロ	窓付	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0007
P034 磁器	瓶	V1	5.0/1	11.3	— [1.6]	11.7/26 ロタロ	窓付	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0008	
P035 磁器	瓶	V1	5.0/1	9.7/26	4.8 [6.5]	11.7/26 ロタロ	窓付	1.5/26 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0006	
P036 磁器	瓶	V1	5.0/1	10.2/26	6.4 5.6	11.0/26 ロタロ	窓付	1.5/26 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0001	
P037 磁器	瓶	V1	5.0/1	8.6/26	— [11.0]	11.0/26 ロタロ	窓付	1.5/26 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0002	
P038 磁器	甕	V1	5.0/1	17.0/26	— [11.0]	11.0/26 ロタロ	窓付	1.5/26 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0009	
P039 磁器	甕	V1	5.0/1	16.0/26	— [11.0]	11.0/26 ロタロ	窓付	1.5/26 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0008	
P040 磁器	甕	V1	5.0/1	15.0/26	— [7.0]	11.0/26 ロタロ	窓付	1.5/26 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0007	
P041 磁器	灯明受皿	V1	5.0/1	11.1/26	— [8.2]	1.8 底7.7/26	ロタロ	窓付	2.0/1 窓付	内側丸、外 [青白]	やや焼成不良	109001-0003
P042 土器	土器	V1	5.0/1	11.6/26	[8.8]	2.4 底12.2/26	瓦葉地 コテツ	C	二点式、高脚 [青白]	内側丸、外 [青白]	削面板	109001-0010
P043 土器	土器	V1	5.0/1	11.7/26	[7.0]	11.0/26 ロタロ	窓付	E2	瓦葉地 細砂少	内側丸、外 [青白]	削面板	109001-0013
P044 土器	土器	V1	5.0/1	4.0	4.0	11.0/26 ガラス	手づくひ、 ガラス	H	瓦葉地 細砂少	内側丸、外 [青白]	削面板	109001-0004
P045 土器	火鉢	V1	5.0/1	—	— [1.0]	小片	側面	E2	瓦葉地 細砂少	内側丸、外 [青白]	削面板	109001-0011
41	P046 土器	火鉢	V1	5.0/1	— [1.0]	小片	側面	E2	瓦葉地 細砂少	内側丸、外 [青白]	削面板	109001-0012
P047 土器	火鉢	V1	5.0/1	— [1.0]	小片	側面	E2	瓦葉地 細砂少	内側丸、外 [青白]	削面板	109001-0005	
P048 土器	火鉢	V1	5.0/1	— [1.0]	— [18.4]	底7.7/26 [5.3]	ロタロ	E2	二点式、高脚 [青白]	内側丸、外 [青白]	削面板	109001-0006

第9表 出土遺物觀察表 本山附錄 腳踏器：十架

第10表 出土遺物觀察表 本丸附段 陶磁器・土器												C. 1.2.3.4.5.				
編號	番號	種類	器種	地區	出土地點	1114 [cm]	體積 [cm <sup>3</sup> ]	直徑 [cm]	遺存度	輪轉・ 燒結	胎土・調滑	形狀特徵	產地	年代	特征項	ID(生測番号)
50	P012	磁器	碗	I	西 上面	[9.2]	3.2	4.7	11/6/36 底20/26 口27/36	口斜 底斜	23a 白	帶支座	素口・失燒	[9C]		109001-0014
P013	磁器	碗	I + V	東 上面	[9.0]	3.6	5.2	11/18/36 底18/26	口斜 底斜	23a 白	帶支座	素口・失燒	[9C]		109001-0032	
P014	磁器	碗	III	東 上面	[9.1]	3.0	4.7	11/18/36 底27/36	口斜 底斜	23a 白	帶支座	素口・失燒	[9C]		109001-0033	
P015	磁器	碗	I	西 上面	[73.1]	1/3.1	1/3.1	1/12.26 底15/26	口斜 底斜	23a 白	帶支座	素口・失燒	[9C]		109001-0019	
P016	磁器	碗	I ~ V	上面	[10.16]	3.7	5.4	11/13.76 底18/35	口斜 底斜	23a 白	帶支座	內側九谷?	[9C末?]		109001-0099	
P017	磁器	碗	III	東 上面	[10.2]	4.0	5.7	11/29/36 底18/36	口斜 底斜	23a 白	帶支座	素口・失燒	[9C]		109001-0100	
51	P018	磁器	V	東 上面	[10.4]	3.6	5.1	11/22/36 底26/36	口斜 底斜	23a 白	小底斜	影繪			109001-0014	
P019	磁器	碗	III	東 上面	[10.1]	3.7	5.0	11/14/36 底16/36	口斜 底斜	23a 白	小底斜	影繪			109001-0029	
P020	磁器	碗	V	上面	[9.2]	3.4	5.1	11/11/36 底13/36	口斜 底斜	23a 白	小底斜	影繪	[9C後期]		109001-0052	
P021	磁器	碗	V	東 上面	[9.0]	4.7	5.7	11/16/36 底17/36	口斜 底斜	23a 白	腰鼓形	影繪	[9C後期]		109001-0025	
P022	磁器	碗	V	東 上面	[7.9]	3.0	4.7	11/9/26 底14/26	口斜 底斜	23a 白	腰鼓形	影繪	[9C後半~		109001-0026	
P023	磁器	碗	II + III	東 上面	[8.6]	(4.9)	5.0	11/9/26 底14/26	口斜 底斜	23a 白	腰鼓形	影繪	[9C後半~		109001-0028	
P024	磁器	碗	V	上面	[9.7]	3.2	5.4	11/26/36 底20/36	口斜 底斜	23a 白	腰鼓形	影繪	[9C後半~		109001-0030	
52	P025	磁器	V	V	上面	[9.2]	3.4	5.9	11/1/36 底21/36	口斜 底斜	23a 白	腰鼓形	影繪	[9C後半~		109001-0031
P026	磁器	碗	IV	東 上面	[7.5]	(5.6)	5.0	11/9/26 底13/26	口斜 底斜	23a 白	碗形	影繪	[9C後半~		109001-0027	
P027	磁器	碗	I	西 上面	[7.2]	(5.5)	5.0	11/9/26 底13/26	口斜 底斜	23a 白	碗形	影繪	[9C後半~		109001-0017	
P028	磁器	碗	I	東 上面	[10.22]	6.0	4.9	11/14/36 底20/36	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[9C後半~		109001-0012	
P029	磁器	碗	V	上面	[10.1]	3.8	4.7	11/21/36 底21/36	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[9C後半~		109001-0019	
P030	磁器	碗	II + III	上面	[8.8]	(3.4)	5.0/26	11/2/36 底18/36	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[9C後半~		109001-0032	
P031	磁器	碗	III	東 上面	[8.7]	[3.1]	6.1	11/8/36 底24/36	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[9C後半~		109001-0024	
P032	磁器	碗	V	東 上面	[8.8]	2.4	6.3	11/18/36 底18/36	口斜 底斜	23a 白	淺打・ゴン ニヤク付	影繪?	[17C末~18C H]		109001-0023	
53	P033	磁器	V	東 上面	[6.0]	[2.6]	6.0	11/7/26 底5/26	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[17C後半~		109001-0046	
P034	磁器	碗	V	上面	[8.5]	[3.8]	6.4	11/5/26 底3/26	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[17C後半~		109001-0048	
P035	磁器	小碗	V	東 上面	[8.2]	[3.1]	4.1	11/4/26 底3/26	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[17C末~18C		109001-0034	
P036	磁器	小碗	I	西 上面	[7.4]	[2.9]	4.1	11/1/26 底1/26	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[17C後半~		109001-0015	
P037	磁器	碟口	V	上面	[5.6]	[2.6]	4.4/26	11/4/26 底1/26	口斜 底斜	23a 白	浅腹盤形	影繪	[17C後半~		109001-0020	

第11表 出土遺物觀察表 本丸附段 陶磁器・土器5

図版番号	種類	器種	地区	出土地点	1114 断面 (cm)	断面 (cm)	断面 (cm)	断面 (cm)	断面・ 経年 変化	断面・ 経年 変化	断面・ 経年 変化	断面・ 経年 変化	断面・ 経年 変化	年代	特征	ID(実測番号)		
53	P098	碗	海	東	上層	(4.9)	3.6	3.6	口内深 11.16 13.21	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	東口・尖底 直口	109001-B035		
59	P099	碗	海	I	Ⅳ	上層	[8.6]	[7.9]	3.3	11.4~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B038
P100	碗	黑	I	東	上層	[15.9]	[8.2]	2.4	11.0~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B029	
P101	碗	黑	II	東	上層	[13.2]	6.1	2.9	11.9~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B074	
54	P102	碗	黑	V	上層	[13.4]	[9.0]	2.7	11.4~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B031	
P103	碗	黑	IV	上層	[13.4]	[9.0]	2.7	11.4~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B039		
P104	碗	黑	II	上層	[13.2]	[8.6]	4.8	11.9~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B038		
P105	碗	黑	IV	上層	[10.1]	[8.6]	2.7	11.2~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B035		
P106	碗	黑	V	上層	[13.9]	[7.9]	3.8	12.4~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B036		
P107	碗	黒	V~VII	上層	[13.2]	[8.5]	3.6	12.7~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B037		
55	P108	碗	黒	II	上層	5.9	[1.7]	真先	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B041		
P109	碗	黒	V	東	上層	[6.6]	[6.7]	底5.96	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B040		
P110	碗	黒	VII	上層	[2.2]	不明	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B033			
P111	碗	黒	VII	上層	[2.0]	不明	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B062			
P112	碗	黒	VII	上層	[2.4]	[1.8]	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B032			
56	P113	碗	VII	上層	[15.9]	[8.6]	3.8	12.4~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B033		
P115	碗	黒	V	上層	[6.6]	6.5	11.1~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B037			
P116	碗	黒	VII	上層	[5.8]	11.4~12.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B039			
P117	碗	黒	VII	上層	[4.3]	[5.9]	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B050			
P118	碗	黒	VII	上層	[19.4]	[6.1]	底5.96	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B051			
58	P119	碗	VII	上層	[16.2]	[24.0]	16.6	底4.0~6.0	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B058		
P120	碗	黒	VII	上層	[14.6]	[1.2]	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B042			
P121	碗	黒?	V	上層	[12.7]	小片	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B047			
59	P122	碗	黒?	III	東	上層	[15.2]	[16.1]	底1.5~2.6	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	口内深 11.16 13.26	?	?	?	109001-B043	
P123	碗	黒?	III	東	[4.2]	[14.2]	[4.3]	[6.2]	外縁剥離	外縁剥離	外縁剥離	外縁剥離	?	?	?	109001-B021		
P124	碗	黒?	IV	上層	[14.2]	[3.1]	[4.3]	[6.2]	外縁剥離	外縁剥離	外縁剥離	外縁剥離	?	?	?	109001-B045		
P125	碗	黒?	IV	上層	[14.6]	[3.1]	[4.3]	[6.2]	外縁剥離	外縁剥離	外縁剥離	外縁剥離	?	?	?	109001-B034		

編號	番号	種類	器種	地区	出土地点	高さ (cm)	直径 (cm)	厚さ (cm)	保存状	輪郭・ 縁目 等	輪郭・ 縁目 等	胎土・色調等	形状特徴	產地	年代	特征年号	ID(実測番号)
P126	69	罐	合子	V	東・上面	最大:1.7	最大:1.7	1.9	不規	タガワ付	斜方	24.9°	白:	方系タ合子	中期	109001-0036	
P127	70	罐	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0063		
P128	71	罐	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0030		
P129	72	罐	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0014		
P130	73	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0057		
P131	74	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0069		
P132	75	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0053		
P133	76	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0034		
P134	77	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0058		
P135	78	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0071		
P136	79	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0046		
P137	80	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0009		
P138	81	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0047		
P139	82	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0100		
P140	83	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0049		
P141	84	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0097		
P142	85	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0004		
P143	86	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0070		
P144	87	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0048		
P145	88	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方?	11.0°	白色?	中間直筒	中期	109001-0065		
P146	89	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0051		
P147	90	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0052		
P148	91	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0045		
P149	92	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0096		
P150	93	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0003		
P151	94	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方?	11.0°	白色?	中間直筒	中期	109001-0050		
P152	95	陶器	直?	V	上面	最大:1.7	最大:1.7	1.65	不規	斜方	11.0°	白色	中間直筒	中期	109001-0072		

編號	番號	器種	器形	出土地點	尺寸 (cm)	質地 (色)	保存状	備註 等	附註・色調等	形状特徴	產地	年代	特征項	ID(索識番号)	
P153	1	陶器	罐	Ⅳ 上面	[12.8]	4.0	[11.3]~[16.26]	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口・灰褐			109001-0072	
62	P154	陶器	罐	Ⅴ 上面	[8.1]	[1.2]	[1.2]~[17.26]	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0000	
P155	陶器	瓶?	V1	上面	4.8	[0.7]	高17.26	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0096	
P156	陶器	瓶	I	東 上面	[13.4]	[5.6]	[3.7]~[11.26]	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0096	
P157	陶器	瓶	I	西 上面	5.0	[4.7]	高14.26	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0035	
P158	陶器	瓶	II	上面	5.5	[3.6]	高28.26	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0013	
63	P159	陶器	H9	V1 上面	5.2	[1.6]	高18	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0091	
P160	陶器	瓶?	V1	上面	4.8	[1.9]	高18	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0092	
P161	陶器	瓶	IV	上面	5.8	[3.6]	高20	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0044	
P162	陶器	瓶	I	西 上面	[6.9]	今井	[10.9]~[17.26]	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0038	
64	P163	陶器	瓶	V1	上面	[14.2]	[14.2]	高17.26	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0080
P164	陶器	瓶	II	上面	[12.4]	[4.2]	[11.3]~[16.26]	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0079	
P165	陶器	瓶	V1-V4	上面	[96.5]	[2.6]	[3.6]~[36]	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0101	
P166	陶器	瓶	IV	上面	[4.8]	[3.9]	[11.3]~[16.26]	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	素口		高台内上部に施用(施用箇)△	109001-0006	
65	P167	陶器	合子	III	東 上面	[6.3]	[4.9]	2.8	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	直垂		109001-0051	
P168	陶器	壺	III	東 上面	5.0	6.7	元	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	合子壺	直垂	109001-0052		
P169	陶器	壺	I	西 上面	7.1	5.8	1.2	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	合子壺	直垂	109001-0057		
P170	陶器	壺	V1	上面	7.4	5.8	1.05	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	合子壺	直垂	109001-0102		
66	P171	陶器	壺	I	西 上面	10.0	5.2~5.8	2.2	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	合子壺	直垂	109001-0075	
P172	陶器	壺	IV	上面	9.4	[8.4]	12.2	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	合子壺	直垂	109001-0076		
P173	陶器	甕	IV	上面	7.5	2.2	3.6	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	合子甕	直垂	109001-0053		
67	P174	陶器	甕	III	上面	[8.9]	[4.9]	[11.3]~[16.26]	口少口	外:灰褐色、内:白	13Bn灰	合子甕	直垂	109001-0054	
68	P175	陶器	H+	上面	72.0	23.5	71.4	口少口	灰褐色、斑点	13Bn灰	合子甕	直垂	109001-0111		

編號	番号	種類	器種	地区	出土地点	層位 (cm)	層位 (cm)	遺存度	性質 目録	性質 目録	性質・ 特徴	性質	年代	特征項	ID(索引番号)
69	P176	陶器	壺	I	東 上面	14.4	(8.8)	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0004
	P177	陶器	壺	IV	東 上面	[15.3]	[7.7]	8.7	[11.7]26	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0005
70	P178	陶器	壺	IV	上面	[20.6]	[8.7]	12.826	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0006
	P179	陶器	壺	III	西 上面	[12.6]	[5.9]	12.912	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0007
	P180	陶器	壺	IV	上面	[14.0]	[8.9]	12.912	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0008
	P181	陶器	壺	V	上面	[8.6]	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0009
71	P182	陶器	壺	V1	上面	[8.0]	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0010
	P183	陶器	壺	IV	上面	[8.3]	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0011
	P184	陶器	壺	V	上面	[15.0]	[9.8]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0012
72	P185	陶器	壺	IV	上面	[7.25]	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0013
	P186	陶器	壺	III	東 上面	[15.9]	[9.8]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0014
	P187	陶器	壺	II	上面	[22.3]	[4.7]	12.736	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0015
	P188	陶器	壺	V1	上面	[13.65]	[8.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0016
	P189	陶器	壺	V1	上面	[6.95]	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0017
	P190	陶器	壺	V1	上面	[9.95]	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0018
74	P191	陶器	壺	V1	上面	[26.9]	[6.45]	10.96	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0019
	P192	陶器	壺	V1	上面	[18.0]	[6.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0020
	P193	陶器	壺	V1	上面	[6.11]	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0021
	P194	陶器	壺	I	西 上面	[10.8]	[5.8]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0022
	P195	陶器	壺	II	上面	[8.7]	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0023
75	P196	陶器	瓶?	IV	上面	(1.4)	[3.9]	□21.36	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0024
	P197	陶器	瓶	V1	上面	[16.2]	[6.5]	12.936	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0025
	P198	陶器	瓶	V1	上面	[11.3]	[5.8]	12.936	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0026
	P199	陶器	瓶	V1	上面	[8.8]	[3.9]	12.936	□21.36	□21.36	同前	同前	同前	同前	109001-0027
	P200	土器	打削器	V1	上面	[19.9]	1.7	12.936	12.936	12.936	同前	同前	同前	同前	109001-0028
76	P201	土器	土器	I	東 上面	[12.7]	[5.4]	2.2	11.12.26	12.936	同前	同前	同前	同前	109001-0029
	P201	土器	土器	IV	上面	[11.2]	2.2	11.12.26	12.936	12.936	同前	同前	同前	同前	109001-0030

第15表 出土遺物觀察表 本丸附段 陶磁器・土器 9

編號	番号	種類	器種	地区	出土地点	層序 (cm)	層位 (cm)	遺存度	輪郭・ 縫合	輪郭・ 縫合	輪郭・ 縫合	輪郭・ 縫合	輪郭・ 縫合	輪郭・ 縫合	輪郭・ 縫合	年代	特征項	ID(実測番号)		
76	P202	土器	土瓶	IV	上面	31.8	2.8	II(20.36) 底(23.36)	手づく口	E2	瓦真實	相合少	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭(口縫合?)	109001-00177	
	P203	土器	土瓶	V1	上面	[12.7]	[2.4]	II(5.26) 底(8.26)	手づく口	E2	瓦真實	相合・最少	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭(口縫合?)	109001-0113	
	P204	土器	土瓶	IV	上面	[13.8]	[2.4]	II(4.76) 底(12.26)	手づく口	E2	瓦真實	相合・最少	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭(口縫合?)	109001-00179	
	P205	土器	土瓶	V	上面	[13.8]	2.2	II(5.26) 底(12.26)	手づく口	E2	瓦真實	相合・最少	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭(口縫合?)	109001-00081	
	P206	土器	土瓶	IV	中盤	6.6(14.0) [3.0]長颈瓶	[2.5]	[6.2] 底(2.26)	II(11.26) 底(2.26)	手づく口	E2	瓦真實	相合少	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭(口縫合?)	109001-0026	
77	P207	土器	土瓶	IV	上面	[12.9]	2.2	II(4.76) 底(2.26)	クロタケ×2	E2	瓦真實	相合	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0078	
	P208	土器	土瓶	V1	上面	[12.8]	[1.95]	II(5.26) 底(2.26)	手づく口	E2	瓦真實	相合少	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0114	
	P209	土器	土瓶	V1	上面	[12.9]	[1.85]	II(5.26) 底(2.26)	手づく口	E2	瓦真實	相合少	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0112	
	P210	土器	施釉壺	V1	上面	龜入A [9.4]	[8.8]	2.5 II(4.48) 底元	笠形9 [2.48]	E2	瓦真實	相合・白色釉	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0117	
	P211	土器	施釉壺	H	上面	4.2	[14.48]	底元	笠形9 [2.48]	E2	瓦真實	相合・白色釉	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0082	
	P212	土器	壺	V1	上面	7.9	8.0	II(20.26) 底元	手正絞	E2	瓦真實	相合	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0078	
	P213	土器	火鉢	III	東上面	[19.3]	[8.2]	II(15.26) 底元	手正絞 文	E1	瓦真實	相合・白色釉	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0083
	P214	土器	火鉢	V1	上面	[15.9]	[6.3]	II(9.26) 底元	ヨコナガ 文	E1	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0116
79	P215	土器	火鉢	IV	上面	[23.0]	[6.7]	II(6.26) 底元	ヨコナガ 文・波綱	E2	瓦真實	相合少・少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0007
	P216	土器	火鉢	IV	上面	7.3	7.3	II(12.26) 底元	手正絞	E2	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0006
	P217	土器	火鉢	IV	上面	[29.7]	[6.3]	II(7.26) 底元	ヨコナガ 文	E1	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0005
	P218	土器	火鉢	V1	上面	[6.6]	[4.5]	II(12.26) 底元	ヨコナガ 文	E2	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0115
	P219	土器	火鉢	I	西上面	[21.0]	[4.5]	II(12.26) 底元	ヨコナガ 文	E2	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0010
	P220	土器	瓶	III	東上面	[28.3]	[6.9]	II(7.26) 底元	ヨコナガ 文	E1	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0004
	P221	土器	火鉢	I	東上面	15.3	16.4	II(2.26) 底元	ヨコナガ 文	E1	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0011
	P222	土器	火鉢	I	西上面	18.1	[14.1]	II(30.26) 底元	ヨコナガ 文	E2	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0012
80	P223	土器	火鉢	II	上面	[20.3]	[9.9]	II(4.26) 底元	ヨコナガ 文	E1	瓦真實	相合少	瓦多 白地施釉・輪郭	瓦真實	瓦真實	瓦真實	瓦真實	17世紀	輪郭	109001-0008

第16表 出土遺物觀察表 本丸附段

編號	番号	器種	施K	出土點	表面	鉢	輪	足	寸法(OK%) (cm)				寸法(体形) (cm)				地主	特記事項	(B) CE番号
									a	b	c	d	e	f	g	h	i		
7001	R	IV	レシナチ4	西	砂質土A				(13.1)	(11.4)	5.0	(9.0)	6.8	3.1	3.8			E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0126
7002	平	IV	レシナチ4	西	砂質土A				(13.1)	(11.4)	5.0	(9.0)	6.8	3.1	3.8			E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0127
7003	塵	VII	セラミクスB	東					(11.7)	(12.0)								E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0128
7004	灰子	VIII	セラミクスB	東	鐵製				(29.1)	(23.0)								E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0129
90	1005	灰丸	V	西	S804	焼	巴H-2n	(15.6)	11.5	2.6								A1 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0122
7006	灰丸	V	西	S804	焼	巴H-2c	15.2	10.7	7.7	2.4								A1 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0123
7007	灰丸	V	西	S804	焼	巴H-2c	(17.0)	12.2	9.1	2.6								A1 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0124
7008	R	V	西	S804	焼													E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0125
7009	平?	V	西	S803	焼	セラミクスC												1 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0131
7010	R	IV	西	S803	焼													E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0132
7011	灰?	IV	西	S803	焼	セラミクスC												E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0133
7012	灰丸?	IV	西	S803	焼	セラミクスC												E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0134
7013	灰丸	V	西	S805	焼	セラミクスC												E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0135
7014	灰丸	I	上西	アゼ 上面	焼	黒釉	輪付罐	(15.4)	(11.2)	2.8								E6 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0136
7015	灰丸	I	上西	アゼ 上面	焼	灰釉	巴H-2c											E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0137
92	1016	灰丸	IV	上西	焼	巴H-2n	(16.0)	11.7	8.0	2.6								E2 灰白色・無斑、無縫合、無目地、無輪、無足。	198001-0138

第17表 出土遺物觀察表 本丸附櫓

編號	番号	形態	種類	由上而下	表面	底面	反面	寸法(OK%) (cm)								寸法(OK%) (cm)								特記事項 (ID CE番号)		
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	底面地	a	b	c	d	e	f	g	h	
7017	井干	V	上面	鐵				(8.2)								(16.2)	13.8								C2 ○灰白色、有 凹凸感、有 裂隙少、 [16]	
7018	井干	V	上面	鐵	鐵下盤 三葉			(11.8)			(9.3)	2.7	3.2	1.7												C2 ○灰白色、有 凹凸感、有 裂隙少、 [16]
7019	井干	V	上面	鐵		三葉 I		(11.8)			(9.3)	2.7	3.3	2.1											C2 ○灰白色、有 凹凸感、有 裂隙少、 [16]	
7020	井干	V	上面	鐵		三葉 I	(10.0)	(11.8)		(10.0)	2.7	4.8	1.2	2.1		(9.8)									199801-0143	
92	7021	井干	V	側	鐵	三葉 II	(16.0)	(17.0)	4.9	(13.8)	2.8	4.9	2.8	1									B1 ○鐵系、扁 平	199801-0143		
7022	井干	I	上面	鐵	玉鉢花	鐵絲 III (小兒)	(13.0)	(8.0)		(5.0)	(2.4)	(4.3)	(2.6)	(2.6)											1.8 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0135
7023	井干	I	上面	鐵	玉鉢花	玉鉢花	(15.6)	(16.7)	(7.5)	(8.0)	2.7	4.4	2.9	3.8										1.9 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0136	
7024	井干	II	西	鐵	玉鉢花				2.4			2.8	4.5	2.9	2.2		(12.9)								1.8 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0135
7025	井干	III	東	上面	鐵	鐵繩 (素)	玉 II-3	(21.5)	(19.0)	(9.3)	2.6	14.0	2.0	4.3	2.5	(12.2)									1.8 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0136
7026	井干	VI	上面	鐵	鐵繩 (素)	玉 V	(12.0)	(14.8)	5.2	(9.3)	2.6	4.7	2.9	1.9	(8.6)									1.9 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0133	
93	7027	井干	III	上面	鐵	鐵繩 (素)	鐵絲 IV	(20.10)	(17.20)	—	(9.82)	2.83	4.76	2.90	1.94	(17.40)									1.96 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0136
7028	井干	II	上面	鐵	鐵繩 (素)	鐵繩 II	(16.0)	(21.7)	6.5	(2.5)	13.5	2.7	4.5	2.6	1	(11.7)									2.0 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0138
7029	井干	V	上面	鐵	鐵繩 (素)	鐵繩 V	(9.1)	(6.4)	2		火腿區 K	7.0	7.0	7.0	7.0	3.1	7.0								3 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0142
7030	井干	III	東	鐵	鐵繩 (素)	鐵繩 III	(25.0)	(26.5)	5.0	(6.0)	8.1	2.5	4.6	2.9	1.9	(25.8)									1.96 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0147
7031	井干	V	西	上面	鐵	鐵繩 (素)	鐵繩 V	(14.30)	—	—	—	—	—	—	—	(11.7)									2.4 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0137
94	7032	井干	II	上面	鐵	黑鐵	寶	(11.18)	(14.14)	—	(6.77)	(7.64)	2.8	4.5	2.50	1								2 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0135	
7033	井干	IV	上面	鐵	黑鐵	鐵絲 III (小兒)	(11.0)	(12.2)																2 ○鐵色、 圓形、空隙	199801-0141	

第18表 出土遺物觀察表 本丸附段 瓦3・石製品

瓦

図版 番号	番号	器種	断面	出土場所	断面	大きさ 支縁	寸法(%) (cm)						寸法(体積) (cm)						地主	特記事項	10 (実測番号)						
							a	b	c	d	e	f	r	t	h	i	底支持	a	b	c	d	e	g	h	i		
94	T034	丸	III	西	上面	輪	直径 (cm)											(20.4)	18.2	3.6	13.0	6.9	2.4	5.5		11.5(横)、白 色地・黒色範 (C)	109801-9132
T035	R.	V	上面	輪	輪	直径 (cm)												(13.4)	(12.8)	3.6	10.9	6.9	2.0	4.5		11.5(横)、白 色地・黒色範 (C)	109801-9136
T036	R.	V	上面	輪	輪	直径 (cm)												(7.9)	(7.7)							11.5(横)、白 色地・黒色範 (C)	109801-9154
95	T037	平?	V	上面	輪	直径 (cm)												(4.75)	(4.8)							A2 11.5(横)、空腹少 (C)	109801-9153
T038	R.	IV	裏	レシード	輪	直径 (cm)												(15.2)	(15.7)	4.5	(9.5)	(7.1)	2.1	4.4		11.5(横)、空腹少 (C)	109801-9130
T039	R.	III	裏	上面	輪?	直径 (cm)																			11.5(横)、空腹少 (C)	109801-9126	
T040	丸	III	西	上面	輪?	直径 (cm)																			11.5(横)、空腹少 (C)	109801-9137	

## 石製品

図版 番号	器種	断面	出土場所	全長 (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	6面	地主	特記事項	10 (実測番号)	
							(A)	(B)	(C)		
S001	鏡	V	上面	13.7	6.8	12.7	(86.2)			109801-9139	
S002	鏡	Ⅳ	上面	(7.65)	(6.15)	3.25	(116.9)			109801-9140	
96	S003	6(1)	I	西	上面	底径 (19.0)	—	(7.8)	(2020)	底径半径1.9cm×2.6cm、深さ4.6 (C)	109801-9136
S004	丸鉢	V	上面	(11.3)	(7.5)	(8.7)	(311.6)	底径22 (C)		109801-9138	
S005	円盤	Ⅲ	裏	上面	(14.6)	14.8	—	(2260)	浅形、深部切欠き有	109801-9137	

番号	部 分	種 別	器 様	地 区	出土地点		合計 (枚)	W (cm)	重 量 (g)	特記事項	10 (実測値)
					高さ	幅					
W001	圓	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	3.5	1.6×0.3	1.1	1.1	0.1×0.2		[19801-8033]
W002	圓	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	2.1	0.75×0.3	2.5	2.5	0.15×0.2		[19801-8032]
W003	圓	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(8.17)	1.69×0.81	1.1	0.35×0.3	1.1		[19801-8001]
W004	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(6.72)	0.96×0.76	17.8	17.8	0.12×0.2		[19801-8001]
W005	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(12.40)	0.96×0.76	22.5	22.5	0.12×0.2		[19801-8002]
W006	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(11.60)	0.95×0.79	22.5	22.5	0.12×0.2		[19801-8003]
W007	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(9.65)	0.97×0.73	17.1	17.1	0.12×0.2		[19801-8004]
W008	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(5.14)	0.61×0.73	0.8	0.8	0.12×0.2		[19801-8005]
W009	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(3.90)	0.82×0.82	8.8	8.8	0.12×0.2		[19801-8006]
W010	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(30.72)	1.08×0.70	20.6	20.6	0.12×0.2		[19801-8007]
W011	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	—	0.51×0.51	12.6	12.6	0.12×0.2		[19801-8008]
W012	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(14.76)	0.77×0.61	31.7	31.7	0.12×0.2		[19801-8009]
W013	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(5.90)	1.66×0.64	8.5	8.5	0.12×0.2		[19801-8010]
W014	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(7.69)	1.29×0.60	8.2	8.2	0.12×0.2		[19801-8011]
W015	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(6.62)	0.93×0.57	7.9	7.9	0.12×0.2		[19801-8012]
W016	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	12.16	1.34×0.62	21.4	21.4	0.12×0.2		[19801-8013]
W017	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(6.37)	0.61×0.28	9.6	9.6	0.12×0.2		[19801-8014]
W018	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(10.66)	0.61×0.71	21.6	21.6	0.12×0.2		[19801-8015]
W019	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(3.89)	—	—	—	0.12×0.2		[19801-8016]
W020	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(8.60)	0.65×0.55	7.1	7.1	0.12×0.2		[19801-8017]
W021	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(10.10)	1.57×0.49	18.0	18.0	0.12×0.2		[19801-8018]
W022	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(6.27)	—	—	—	0.12×0.2		[19801-8019]
W023	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(11.71)	1.07×0.49	23.4	23.4	0.12×0.2		[19801-8020]
W024	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(8.99)	0.41×0.35	20.9	20.9	0.12×0.2		[19801-8021]
W025	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(12.74)	—	—	—	0.12×0.2		[19801-8022]
W026	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(10.12)	—	—	—	0.12×0.2		[19801-8023]
W027	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	7.16	1.44×0.74	21.0	21.0	0.12×0.2		[19801-8024]
W028	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(8.07)	0.61×0.61	12.4	12.4	0.12×0.2		[19801-8025]
W029	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(10.68)	—	—	—	0.12×0.2		[19801-8026]
W030	圓+木	刃	IV	御殿 (1413年-59年) 銀鏡片中継	(11.77)	—	—	—	0.12×0.2		[19801-8027]
W031	圓	刃	V	S.K01	12.46	1.38×0.6	19.0	19.0	0.12×0.2		[19801-8029]
W032	圓	刃	V	S.K01	12.05	1.5×0.5	23.3	23.3	0.12×0.2		[19801-8030]
W033	圓	刃	V	S.K03	2.65	1.1×0.2	1.5	1.5	0.12×0.2		[19801-8032]
W034	圓	刃	V	S.K04	3.15	0.5×0.2	2.3	2.3	0.12×0.2		[19801-8034]
W035	板	板	V	上面	11.85	4.5	81.8	81.8	—		[19801-8035]

## 第4節 小結

### 1. 階段（雁木坂）と周辺施設について（第100図）

本丸附段北部の階段（雁木坂）は、近代以降幅5.5mの規模となっていたが、発掘の結果、本来は幅18.8m、最下段から最上段前端までの長さ12.7mに及ぶものであったことが確認された。段の延石は大部分が抜き取られていたが、構造が規格的で、抜き取り痕や根固の状況から、各段を復元することは可能であった。また階段周囲の石垣も、大部分が改変を受け、露呈部分は限られていたが、根石・抜取痕が検出され、位置・平面形状が判明した。

ただし、近世後期の絵図には、階段北部（I区）・南西部（IV・VI区）に壇状・橹台状の施設が表現されているが、これについては、基礎遺構が部分的にみられるのみで、遺構のみから全体形状を推定するのは困難である。

階段（雁木坂）を描く近世の絵図は比較的多く、とくに後期の代表的な絵図には詳細な表現がみられ、1830年以前の景観年代が推定される「金沢城本丸・東丸之図」（A、第100図下段右）、嘉永3年（1850）作成の「御城分間御絵図」（B、同左）には、主要部に寸法が記載されている。概してA図の方が詳細であるが、段の位置や数については、よりB図に合致するところが多い。第100図や第16～21図等では、検出遺構をベースとしつつ、不明な部分について、B図の寸法記載値を優先し、A図で補足したものを合成し、階段（雁木坂）及び周辺施設の推定復元ラインを示した。

近世後期の絵図においては、詳細な表現があるにも関わらず、上記A・B図のように微妙な相違も認められる。近世後期における改修を反映しているのかも知れないが、描写・表現の違い（誤認・誤り）の可能性も否定できない。一方で、近世前期絵図と後期絵図（第6・7図）との描写の違いはかなり大きい。まず前者では、階段南部（上方）に門を表現する事例が多いが、後者では描かれていない。発掘調査では門柱基礎2箇所が検出されているが、これは近世前期に伴う遺構と考えられる。

### 2. 階段（雁木坂）付近の変遷（第101図）

階段（雁木坂）は、その下部で検出された土層や遺構の出土遺物や、一体的に作られた石垣基礎部の特徴等から、寛永8年（1631）の大火後に整備されたと判断される。

階段（雁木坂）に先行する遺構には、通路（坂道）の一部と目される地山掘削面、その東西に斜面をベースに掘削された掘り込み（SK04・SX01）、上手側の盛土等がある。

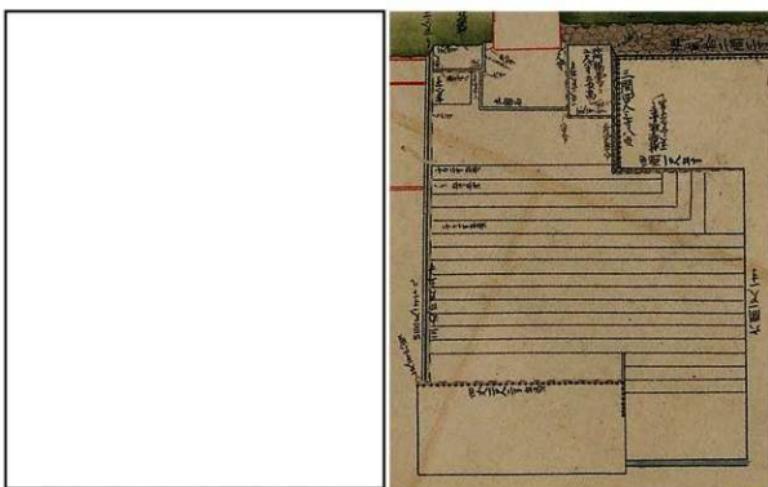
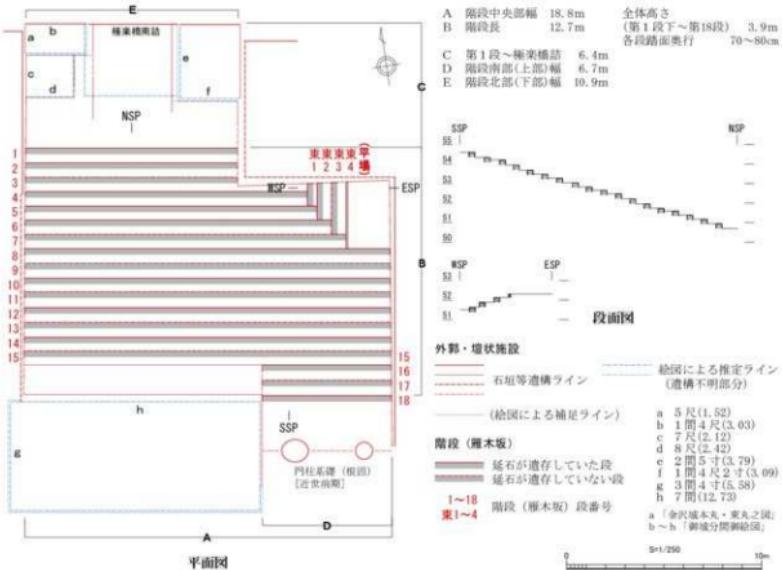
SK04は西側が明確ではないが、斜面をコの字状に掘り取ったとみられる土坑で、検出された東壁・南壁はともに垂直に近い傾斜を呈する。通路推定部分に近接しており、通路を挟んだ向かい側のSX01とも連動した機能の可能性が考慮されるもので、既刊の報告書[石川県金沢城調査研究所2014d]等では切岸状の遺構と表現した。ただし垂直気味とは言え壁面の高さは約1.5m、幅も推定4m程度であり、性格の確定には至っていない。

上手側の盛土も断割（トレーンチ1）で確認されたもので、平面形状ははっきりしないが、一帯に面的に広がる可能性は小さいようであり、低い土居状の施設を想定している。

いずれも全容は明確ではないが、二ノ丸から空堀に架かる橋を渡り、本丸附段平坦面に至る連絡ルートに関わる遺構と推定しておきたい。

1610～31年頃の本丸附段は、南部を中心に、地下室状遺構、廃棄土坑、堀、金属加工関連遺構が展開し、本丸への出入口としては、大手である東ノ丸附段・東ノ丸唐門前に対し、御殿奥側に位置づけられる区域であった（初期遺構面I（古・新））[石川県金沢城調査研究所2008d]。

ただし郭北部には廃棄土坑等の遺構は展開しておらず、本丸西堀と同じ頃まで南側より一段低い落ち込み（2004-1SX02）があったが埋め立てられた後、広場のような空間となっていたようで、本丸区



「御城分間御駿院」 ((公財)前田育德会蔵) 嘉永3年(1850)

「金沢城本丸・東丸之図」 (金沢市立玉川図書館蔵)

文化3年～天保元年頃(1806～1830)

絵図に描かれた階段 (雁木坂)

第100図 階段(雁木坂)とその周辺施設

域出入口部分外側としての体裁は保っていたとも思われる。なお、2004-1SX02埋立土上面の高さは54.82～84mで、今回調査区の地山削平面段（標高53.68m）から1.14～1.16m、土居状と推定した盛土上面（標高54.2m）より62～64cm高い。

寛永8年（1631）の大火以降、城郭の中核機能は二ノ丸に移ったが、本丸には「御広間」等と絵図に記載された、御殿の儀礼的な機能を一部留めたとみられる建物が再建されている。この段階になつて、二ノ丸御殿との連絡が考慮され、本丸附段が本丸の正面（大手）として、改めて位置づけられることとなった。郭北部においても、それまでの施設は廃絶されるとともに、象徴的・儀礼的空间としての性質を強めた本丸の正面にふさわしい格式ある施設として、形式化された樹形状を呈し、実用以上の規模を備えた大規模階段（雁木坂）が構築されたと推定される。

ただし第2節で触れた通り、階段直下の造成土（E層）の出土土師器皿は、1630年前後の年代を目安としつつも、多少下る可能性も含んでおり、大火直後か数年後といった階段整備の詳細時期については検討の余地を残している。

成立した階段（雁木坂）は、大きく形状を変えることなく近世を通じて存続したが、調査では、段の裏込土、石垣の形状、門柱基礎、一帯の整地状況等から、改修が行われていることが確認された。

その時期については、17世紀後半頃、18世紀後半頃、藩末期頃等が想定される。近代における改変については、本章第2節でも記した通り、明治末頃と推定される排水路設営に伴うと考えられる。

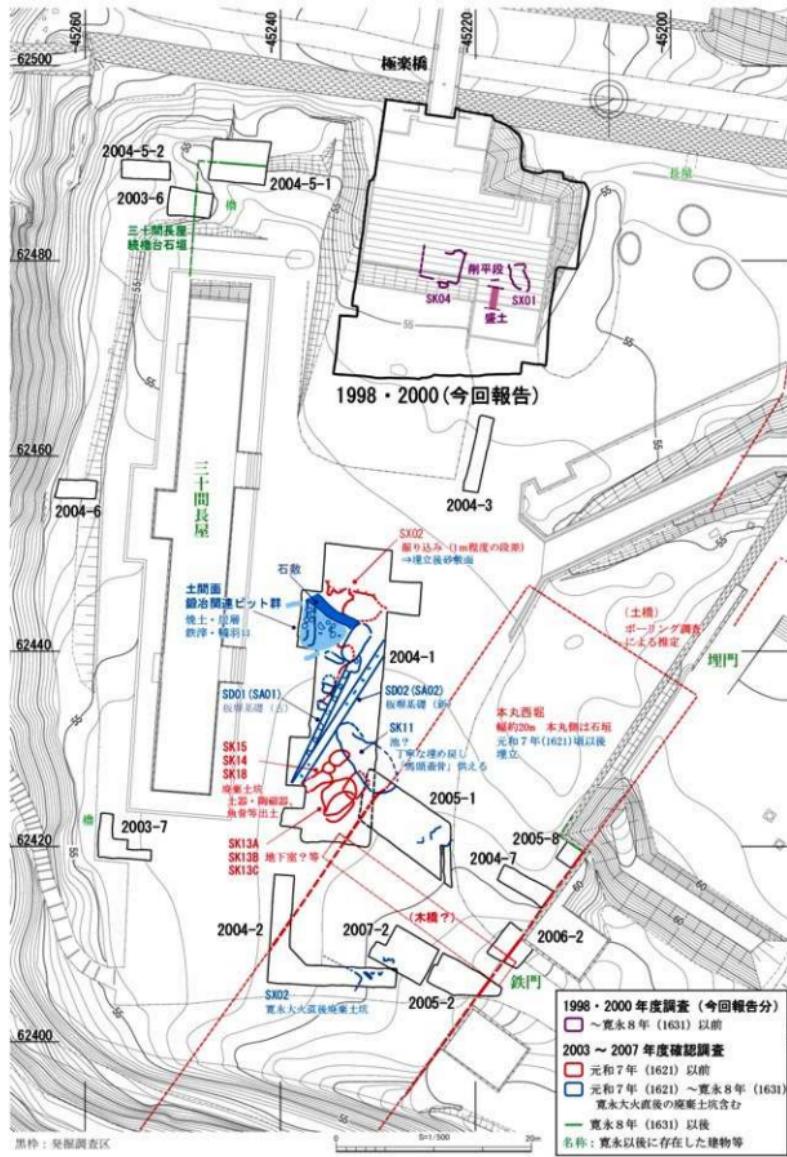
なお石垣のうち、調査区南部の1415E（SW06）・1415N（SW08）については、掘方内外の土層や出土遺物から、遺存する根石は創建当初（石垣築年4期・寛永年間）に据えられた状態を保持していることが明確になった。一方調査区北部の1413S（SW02）については、根石は4期の石材であるが、上部は5期（寛文～元禄年間）の切石積となっている。当該一帯は寛文2年（1662）に地震の被害にあつたこともあり（「加州金沢城絵図」（（公財）前田育徳会蔵）等）、根石が創建時のままであるかどうか特定できていない。根石の詳細は明らかではないが、対面する1412E（SW01）も同様の問題を有する。また1412W（SW03）については、南端部が近世後期に改修されている。

### 3. 出土遺物について

前項の記述の通り、今回調査区では、階段（雁木坂）造成以前に遡る17世紀前半の土師器皿を中心とした一群や、階段存続末期の改修に伴うもの、その他遺構出土資料があるが、大半は廃絶後の二次的な流入によるもの（上面出土遺物）である。上面出土遺物は、①ごく少数として、下層出土遺物と同時期の一群、②宝暦9年（1759）大火で被災した一群、③18世紀末～19世紀前半の流行年代を示す一群、④近代階段への改修後、明治期に生産された一群に大別される。

このうち②には鉛瓦が溶解し、釉薬状に付着した資料がみられる。また口径30cmを超える肥前磁器大皿なども含まれ、これらは大火で焼失した三十間長屋が、絵図において「御台所方預り」（「金沢城薪丸絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）等と記載されていることからも、ここに保管されていた什器類であったことを示唆している。なお擂鉢はほぼ堺産の製品で占められており、肥前陶器擂鉢が主体的な金沢地域にあって、特徴的な状況を示している。

③については、SK01・整地土Bの主要出土遺物等と同時期であり、火鉢類や肥前磁器V期等の碗類、京・信楽系の小型碗類等が相当する。これらが本来どこに保管されていたのか明確ではないが、天保期以後の絵図には、階段東側に「御座敷方物置」（第13図等）が描写されている。例えば安政5年（1858）の地震等の災害により、物置保管出土遺物の廃棄と階段の補修が行われたとすれば、調査の知見と整合するが、憶測の域を出ない。





調査区遠景（空撮）（北東から）



調査区遠景（空撮）（北西から）

写真図版1 本丸附段遺構写真1



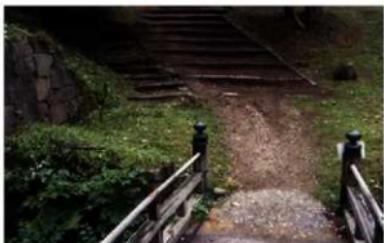
調査区着手前状況（南から）



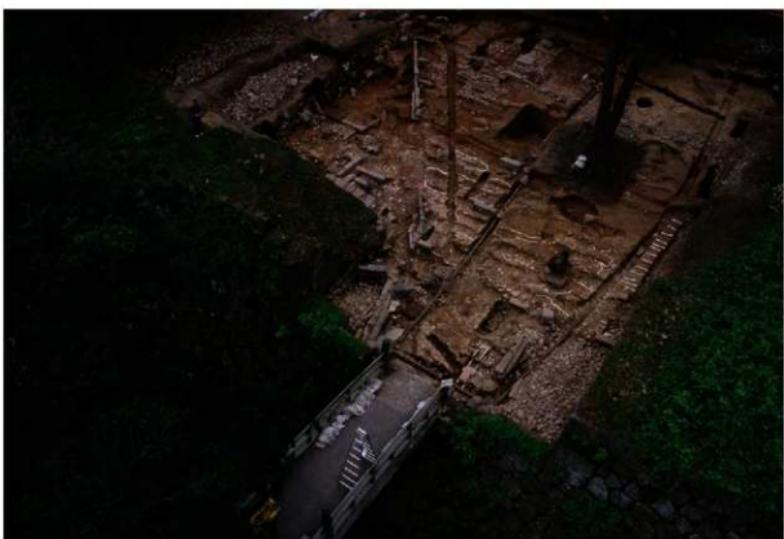
調査区着手前状況（北から）



調査区着手前状況（東から）



調査区着手前状況（北から）



調査区全景（空撮）（北西から）

写真図版2 本丸附段遺構写真2



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



調査区全景（北東から）



調査区全景（南東から）



調査区全景（北西から）

写真図版3 本丸附段遺構写真3



階段（雁木坂）上部（南東から）



階段（雁木坂）下部（東から）



階段（雁木坂）下部西（南東から）



階段（雁木坂）上部（西から）



階段（雁木坂）下部（西から）

写真図版4 本丸附段遺構写真4



階段（雁木坂）下部東（南西から）



階段（雁木坂）下部東（西から）

写真図版5 本丸附段遺構写真5



階段（雁木坂）下部東（西から）



階段（雁木坂）下部東（平場付近）（北から）

写真図版6 本丸附段遺構写真6



階段（雁木坂）下部東（北から）



階段（雁木坂）第4～5段・東第1～2段（北から）



階段（雁木坂）第4～5段・東第1～2段（南西から）



階段（雁木坂）第4～5段・東第1～2段（南から）



階段（雁木坂）第4～5段・東第1～2段（東から）

写真図版7 本丸附段遺構写真7



階段（雁木坂）南北軸断面（第16～18段）（北東から）



階段（雁木坂）南北軸断面（第16～18段）（南東から）



階段（雁木坂）南北軸断面（第14～16段）（東から）



階段（雁木坂）南北軸断面（第5～6段）（東から）



階段（雁木坂）南北軸断面（第1段以下）（西から）



階段（雁木坂）第1段西（北東から）



階段（雁木坂）第1段西断面（東から）



階段（雁木坂）第2段東（西から）

写真図版8 本丸附段遺構写真8



階段（雁木坂）第4段西（北から）



階段（雁木坂）第6段中央（東から）



階段（雁木坂）第8段東（南西から）



階段（雁木坂）第8段東断面（西から）



階段（雁木坂）第10段中央（東から）



階段（雁木坂）第14段東（西から）



階段（雁木坂）第16段東（西から）



階段（雁木坂）第18段東（西から）

写真図版9 本丸附段遺構写真9



階段（雁木坂）上部（第2次調査）（南東から）



階段（雁木坂）上部（第2次調査）（北東から）

写真図版10 本丸附段遺構写真10



階段（雁木板）上部（第2次調査）（南西から）



階段（雁木板）上部（第2次調査）（北から）

写真図版11 本丸附段遺構写真11



階段（雁木坂）上部（第2次調査）（東から）



階段（雁木坂）第12～13段西断面（北東から）



階段（雁木坂）第12～14段西（東から）



階段（雁木坂）第11～13段西（東から）



階段（雁木坂）上部（第2次調査）（北東から）



階段（雁木坂）上部（第2次調査）（西から）



階段（雁木坂）第14～15段西（西から）



階段（雁木坂）第10～12段西（西から）

写真図版12 本丸附段遺構写真12



石垣1412E (SW01) • 1414S (SW04) (東から)



石垣1411W (SW02) • 1413S (SW05) (西から)

写真図版13 本丸附段遺構写真13



石垣1412W (SW03) 南部 (西から)



石垣1412W (SW03) 南部 (北西から)



石垣1412W (SW03) 南部断面 (南から)



石垣1415E (SW06) (南東から)



石垣1415E (SW06) (北東から)

写真図版14 本丸附段遺構写真14



石垣1415E (SW06) 前面断面(北から)



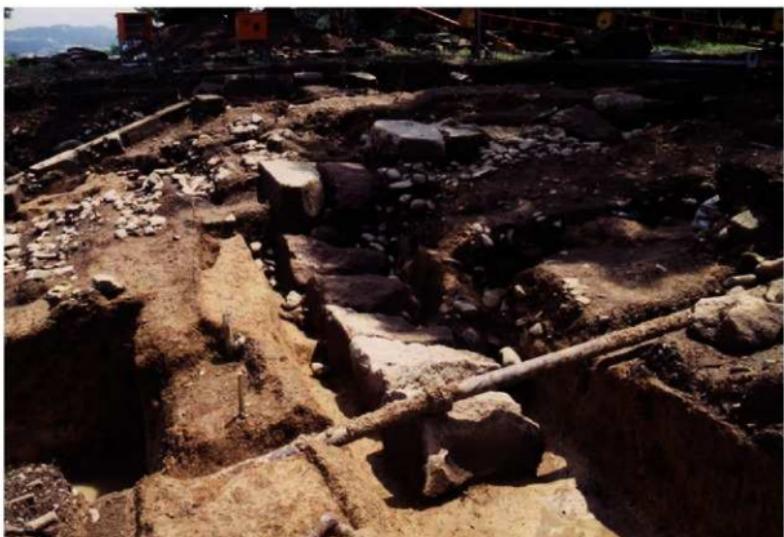
石垣1415N (SW08) (西から)



石垣1415N (SW08) (東から)



石垣1415N (SW08) 東部根石(西から)



石垣1415N (SW08) 東部根石(北西から)

写真図版15 本丸附段遺構写真15



石垣1415N (SW08) 東部断面(西から)



石垣1415N (SW08) 東部根石根固(西から)



石垣1415N (SW08) 東部根石(北から)



石垣1415N (SW08) 東部根石(北から)



石垣1415N (SW08) 西部断面(東から)

写真図版16 本丸附段遺構写真16



階段（雁木板）上部 門柱西側基礎（根固）（東から）



階段（雁木板）上部 門柱東側基礎（根固）（南西から）



排水溝SD01・SD02（北から）



排水溝SD01（南から）



排水溝SD01（北から）



排水溝SD01北部断面（北から）



排水溝SD01南部断面（北から）



排水溝SD02（北西から）

写真図版17 本丸附段遺構写真17



排水溝SD02 (北から)



排水溝SD02 (南から)



排水溝SD02 釘検出状況 (南西から)



排水溝SD02断面 (北西から)



壇状施設 (北東) 石列根石 (南から)



トレンチ4 下層造成土 (E層) (東から)



下層遺構SK04 (北西から)



下層遺構SK04断面 (東から)

写真図版18 本丸附段遺構写真18



下層遺構SK04（北から）



下層遺構SX01断面（北東から）

写真図版19 本丸附段遺構写真19



調査区南西部（南西から）



P01（北西から）



トレンチ3 SK05（南から）



SK05断面（西から）



SK01・SK02（北東から）



SK03（南東から）



発掘作業風景（北から）



測量作業風景（南西から）

写真図版20 本丸附段遺構写真20

## 第4章 御宮

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査区の位置と調査の概要（第102～104図）

御宮地区は、小立野台地先端につくられた金沢城の北西部に位置し、北端の藤右衛門丸とともに「北ノ丸」と呼ばれるが、寛永20年(1643)に前田家四代藩主光高がこの地に東照宮を勅進したことから、「御宮」と呼ばれるようになった。明治期から昭和20年までの旧陸軍期に病院や被服庫、将校集会所がつくられ、金沢大学期にも基本的な建物は跡襲されていったようである。

本調査は、金沢城公園整備事業に伴う排水溝の敷設に伴うものである。郭の縁辺部に沿うように調査区が設定されており、現在、郭中央を南北に縱貫する道路が境となって、東側はSE区、西側をSW区とした。調査区の屈曲ごとに一つの小区として設定した。

SE区は郭の東辺と北辺にある。SE3区においては、東照宮の北東端にあった宝蔵や、本地堂が重複する時期もあるが、大部分が近代以降の造成や金沢大学の理学部実験室等による改変を受けていたようで、金沢大学期の最後には理学部の実験棟や付属の施設がつくられている。

西側のSW区は、郭の西辺と西半の北辺に沿うように設定した。近世の整地土や郭の西端において南北に延びる石垣を確認した。絵図と照合すると、SW5・6区において甚右衛門坂門の一部と参道の一部と重複するが、旧陸軍期以降の建物とも重なっている。

また、両調査区の北辺の一部が藤右衛門丸側に延びているが、それぞれNS1区(SW区)とNS2区(SE区)とした。郭北辺の石垣や御宮造成以前の空堀跡を確認したほか、NS2区では東照宮の建物に関連すると思われる石瓦が出土した。

本調査の原因是、郭内に排水溝を敷設するためで、その影響範囲内での掘り下げに留めていた。基本的に近世以降の堆積層のレベルでの施工が可能であったことから、近世段階の遺構や整地土の大部分は現状のまま保存されることとなった。従って遺構は基本的に検出のみに留めている場合が多く、同一レベルで検出されたものが、遺構か整地土の層境かといった点も十分に追及できたとはいえない。大型の擾乱や、遺構が希薄な箇所において、調査区壁面にかかるように一部深掘りを行い整地土や地山の状況を確認した。

#### 2. 基本層序

御宮地区的層序は、NS2区の土層をベースにV層に大別した。

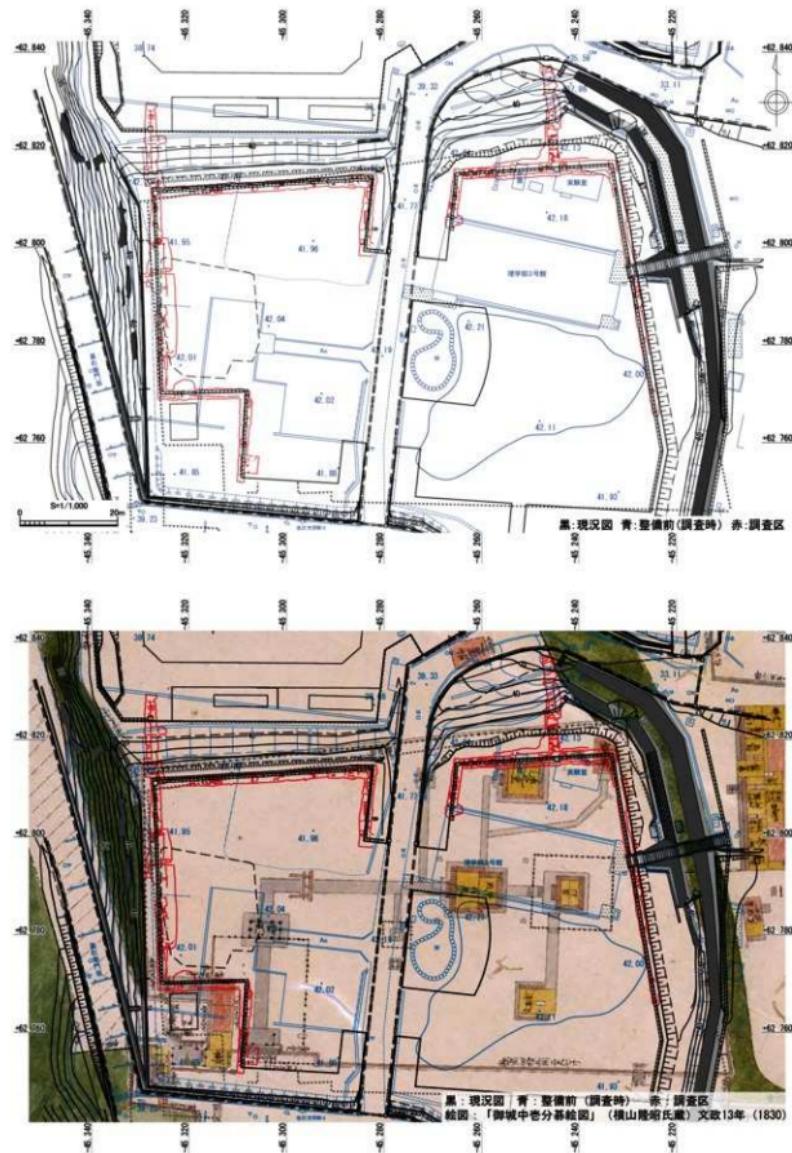
I層は、近代から現代層で、標高41.8m前後で確認した。地点によって若干の差があり、近代の建物基礎等により、標高41.4m前後とやや深くまで及んでいる地点もある。

II層は、近世段階の整地土及び遺構で、NS2区の斜面流土層が該当する、標高41.0～41.4mのレベルで黄灰褐色系の砂質土の面もII層の可能性がある。

III層は、北辺の空堀埋立て、平坦面の造成、棟石転用石段の埋没までの層が該当する。更に遺物の出土状況から細分可能である。他の調査区ではII層とIII層の区別は難しい。

IV層は、近世段階の整地土及び遺構であるが、東照宮創建以前の層とした。NS1・2区において確認した空堀の基盤層が該当する。

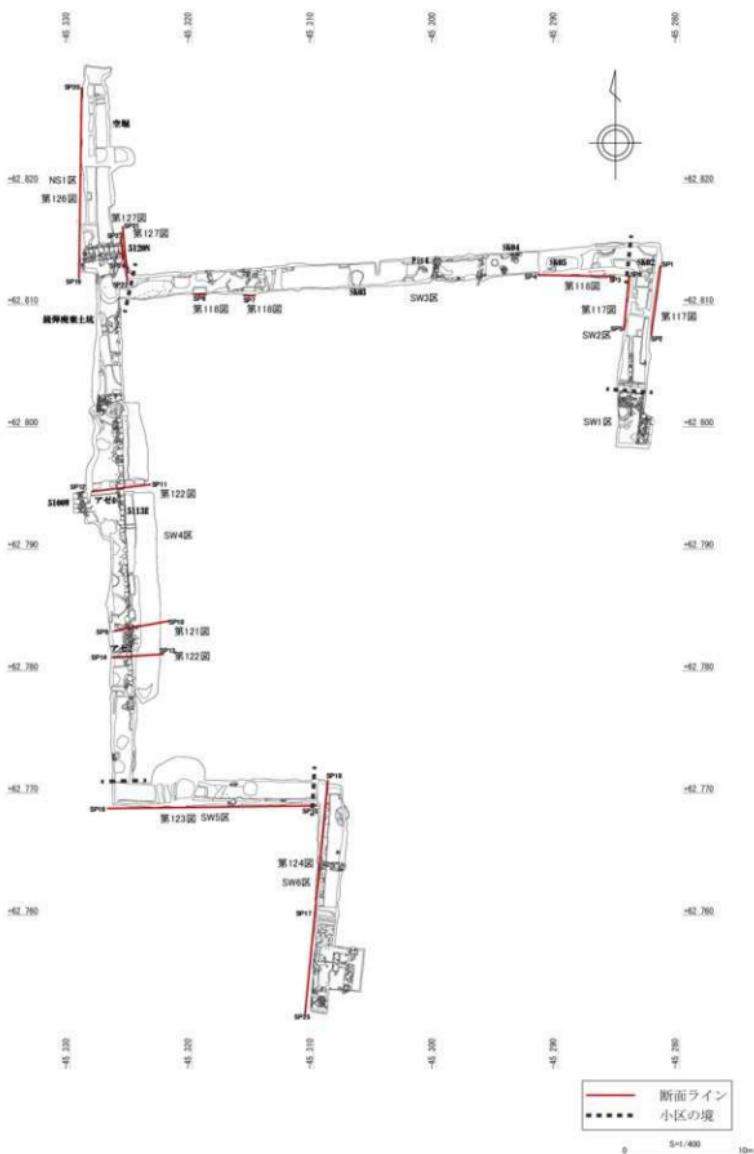
地山を確認できた地点は少なく、NS2区において確認したにとどまった。地山は標高41.6m前後で確認したが、その他の地点では、それ以下の標高まで掘り下げているが、いずれも整地土であった。



第102図 御宮 調査区位置図・絵図照合図



第103図 御宮東 調査区全体図



第104図 御宮西 調査区全体図

## 第2節 遺構

### 1. 東調査区（第105～109図）

東調査区は、郭の東辺と東半部の北辺に位置する。幅約2m（最大3.5m）で、調査区の総延長が約94mを測る東辺を長軸とする逆L字形の調査区で、北側にNS2区が延びており幅2.5m、長さ24mを測る。全体として遺構密度は希薄で、SE3区からNS2区南半にかけてやや密度が高くなるが、近代以降の地下埋設物や建物の基礎部分や、整地土壌か遺構なのか判別できないものが多い。

#### SE2区（写真図版21）

遺構及び整地土検出面まではI層の黒色土が堆積する。調査区南側は搅乱が大きく入るが、北側のSE3区との境では、少なくとも2段階の整地土の切り合いを確認した。南北方向の調査区を横断する溝を2条検出した。

SD01 調査区南側で検出。黒褐色土（I層）から切り込んでおり、近代以降の溝である。幅1mで南側が浅く北側に向かって段掘り状に深くなっている。

SD02 調査区中央部で検出。幅50cmを測る。東から西に向かって一段低くなっていく。

#### SE3区（第116図）

東西方向に長い調査区。金沢大学期の建物基礎等により搅乱された箇所もあり、遺構の遺存状態も良好ではないが、II～III層に対応すると思われる整地土を確認した。西半には、「本地堂」があった地点だが（第102図）、旧陸軍期の溝や、大学期の建物基礎等により江戸期の遺構を特定することはできなかった。

SE4区との境となる調査区北東コーナー部分については、文政13年（1830）の「御城中毫分基絵図」（横山隆昭氏蔵）では宝蔵が建っていた地点とほぼ一致する。コーナー部にはコンクリート基礎が南北方向に入っており、大きく搅乱を受けていたが、部分的に深掘りを行っており、30cmほど検出面より掘り下げたところで河原石が集中した遺構を確認した。河原石は石敷き状に検出したが、深掘り部分の一部で確認したのみで、その広がりや石敷きの性格、周辺の整地土等との関係は不明である。

SK01 調査区の西側で検出。短辺（東西）1.3m、長辺は南北とも調査区外に延びており、全体形状・規模は不明。北から南に向かって徐々に深くなっている、南端で検出面から約10cmで、北端は浅く5cm程度である。出土遺物から近代以降の遺構である。

#### SE4区（第116図）

御宮の東辺を南北方向に延びる調査区である。遺構と整地土の土質境を複数検出したが、いずれも検出で留めており、詳細な遺構形状や規模、時期等は不明である。

#### SE5区（写真図版22）

SE4区と同じく南北に延びる調査区である。近代以降の建物基礎などの搅乱をうける箇所も多くあるが、北半部では遺構や整地土の土質境を検出した。南半部ではやや希薄となる。

SE01 一辺約2m、深さが約70cmを測る。正方形もしくは長方形の平面形状と推測する。南北方向に細長い調査区に対して、軸が45°ずれた状態で、そのうちコーナー部を含む2辺を検出した。

壁面は河原を使用した石積みがされており、ほぼ垂直に立ち上がる。石積みは布積みで、現状では3段を確認しており、天端部分は既に欠落したとみられる。やや不整形な長楕円形の川原石の短辺を打割り、小面として仕上げている。平滑な面をもつ川原石の場合は野面のまで積まれる。おおむね面の幅や高さは30cm前後で、控えもほぼ同様か若干長い程度である。石材間の詰石は少ない。石積み背後には一部だが掘方のラインを確認した。内部は石尻付近に少量ではあるが円礫を主体とした栗石が入るが、大部分は土で埋め戻されている。規模・形状から一乘谷朝倉氏遺跡などで検出されているような便所遺構の可能性もあるが、年代等は不明で、戦国期に該当するような遺構はその他には確認

されていない。近世から近代についても、絵図を見る限り、この地点に井戸や便所は描かれていない。

## 2. 西調査区（第110～115図）

西調査区は郭の西辺と西半部の北辺に調査区が位置する。幅約2m（最大4m）、総延長は約135mを測る。北西端から北側に向けてNS1区が延びており、幅約2.5m、長さ約17mを測る。

土坑やピットといった遺構はあまり良好には確認できなかつたが、石垣や近世段階の生活面と推測される整地土を確認した。

### SW1区（写真図版23）

西側調査区でも東寄りの位置にあり、SW2区とはコンクリート基礎構造物を境とした、ごく小規模な範囲が該当する。SW2区との境とした東西方向に軸をもつコンクリート基礎に沿って幅2mの礫が充填された溝状遺構を検出した。更にこの溝状遺構は調査区東壁の付近で南側に折れ、南に延びていくような状況であったことから、調査区を東側に1m拡張した。礫は表土直下から検出されている。また、礫を含んでいる溝状遺構に囲まれた中では、II層とみられる整地土を確認しているが、その土を掘り込んでいる。旧陸軍期の絵図と重ね合わせると、建物の北東角部がほぼこの位置にきており、礫の充填された溝状遺構のL字形の折れが建物の角とほぼ一致すること、遺構の切り合いから近代以降であることなどから、旧陸軍の建物基礎の可能性がたかい。

### SW2区（第117図）

SW1区との境としたコンクリート基礎構造物から調査区が直角に西に折れる手前までの範囲をSW2区とした。調査区の北側において東壁と西壁で土層の堆積状況を観察した。

調査区東壁・西壁ともに地表面から約50cmの厚さでI層（1・2層）がほぼ水平に堆積している。その下にII層と思われる整地層が50cm程の厚さで、こちらもほぼ水平に堆積する（西壁3～6層）。このII層の下にある整地土層は、堆積状況がやや異なつておらず、遺構か一連の整地土層か、又はIII層に該当するのかは判断できなかつた。西壁では、北から南側に向かって斜めに堆積する状況が見て取れた。地表面から約2m掘り下げてもなお地山面まで到達しておらず、近世の整地層が厚く堆積する。

遺構は希薄で、北側の東壁際でSK02（東壁12・13層）を確認した。南半部においてSW1区のコンクリート基礎に直交するように伸びる近現代の河原石列を確認した。

**SK02** 調査区の北東部で検出した土坑である。東壁断面の12・13層が該当するが、壁面の立ち上がりや、底面も未完掘のため詳細は不明である。西側の立ち上がりは確認したが、東側が調査区壁の下に入り込んでいるため、東西方向の規模も不明である。

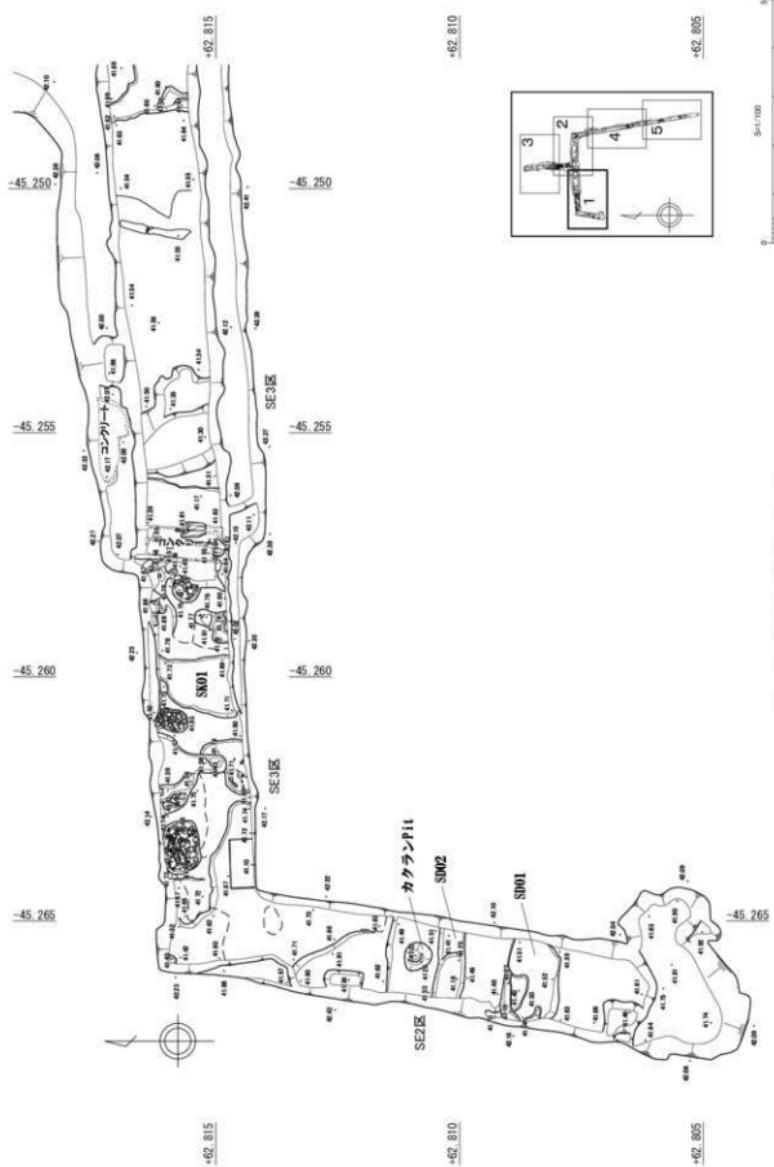
### SW3区（第118図）

郭の北縁にあたる、東西方向の調査区。I層は東側で標高41.9m、西側で41.6～7mと、若干西に向かって深くなる。I層の直下には、東側で緑色凝灰岩と戸室石の石屑が踏み固められ薄い層状となつた層を確認した。この層は調査区の西側では確認できなかつた。断面図上では、面的な広がりがあるように見えるが、隣接したSW2区の西壁には同様の層は確認できないことから、局所的な層とみられる。調査区西側の南壁SP7・SP8の柱状図では、標高41.5mと41.7m付近でI層直下の整地層を確認している。SP8は41.2mで更にもう一面整地層を確認しているが時期等は不明である。

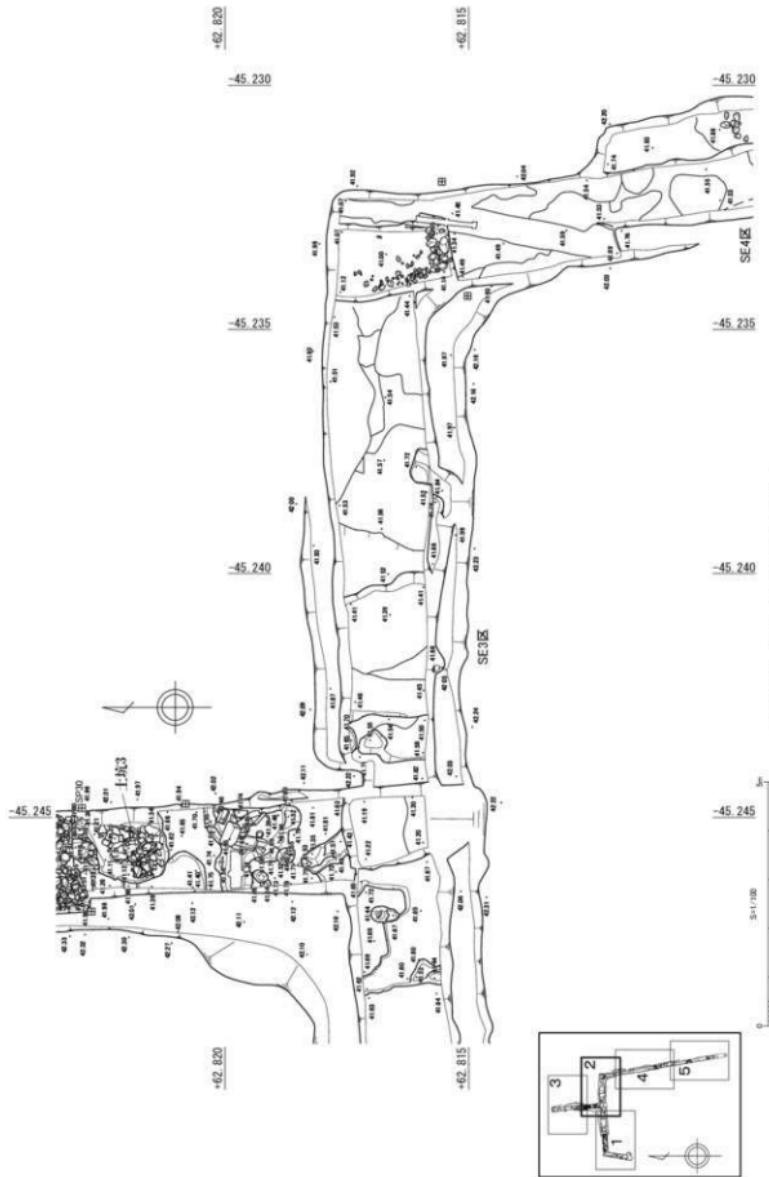
遺構はSK01、SK03～05、Pit01～04を検出した。いずれも東側で検出した。SK01、03はいずれも近代以降であった。Pitは調査区の比較的密集して検出し、いずれも径20～30cm前後の不整円形を呈している。半裁して断面を確認したが、いずれも明確な柱穴とは認められなかつた。掘り下げに伴つて小礫が出土したように見えたが、周辺の整地土中に含まれる礫と考えられる。

**SK05** 近代以降の擾乱が切り合う面を掘り下げていったところ、平面では確認できず、調査区南側壁を精査する際に断面で確認した（南壁15～17層）。壁面で確認した規模は、幅1.6m、深さ1mであつ

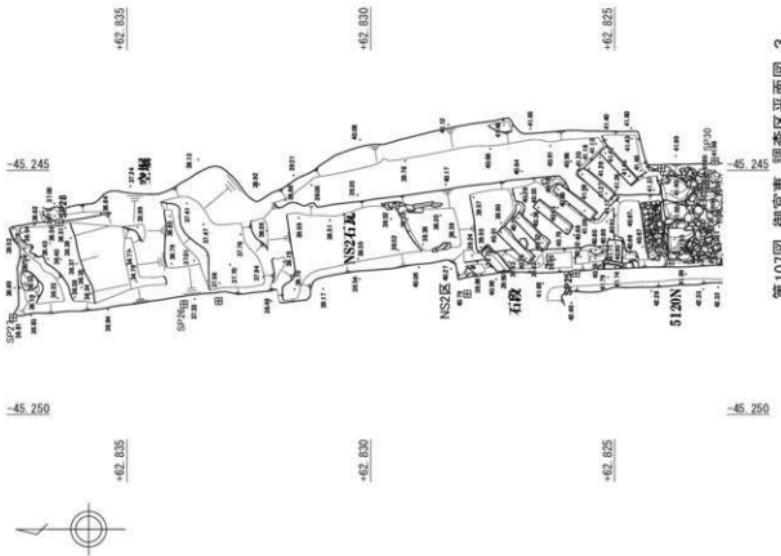
第105図 御宮東 調査区平面図 1



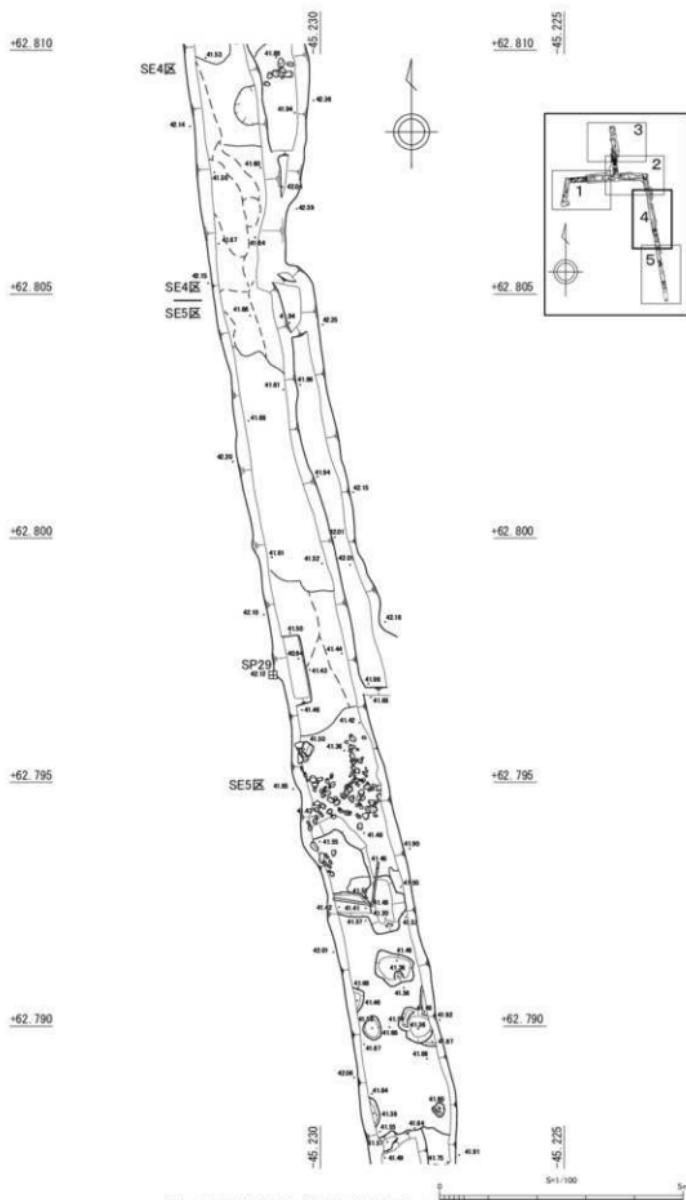
第106図 神宮東 調査区平面図 2



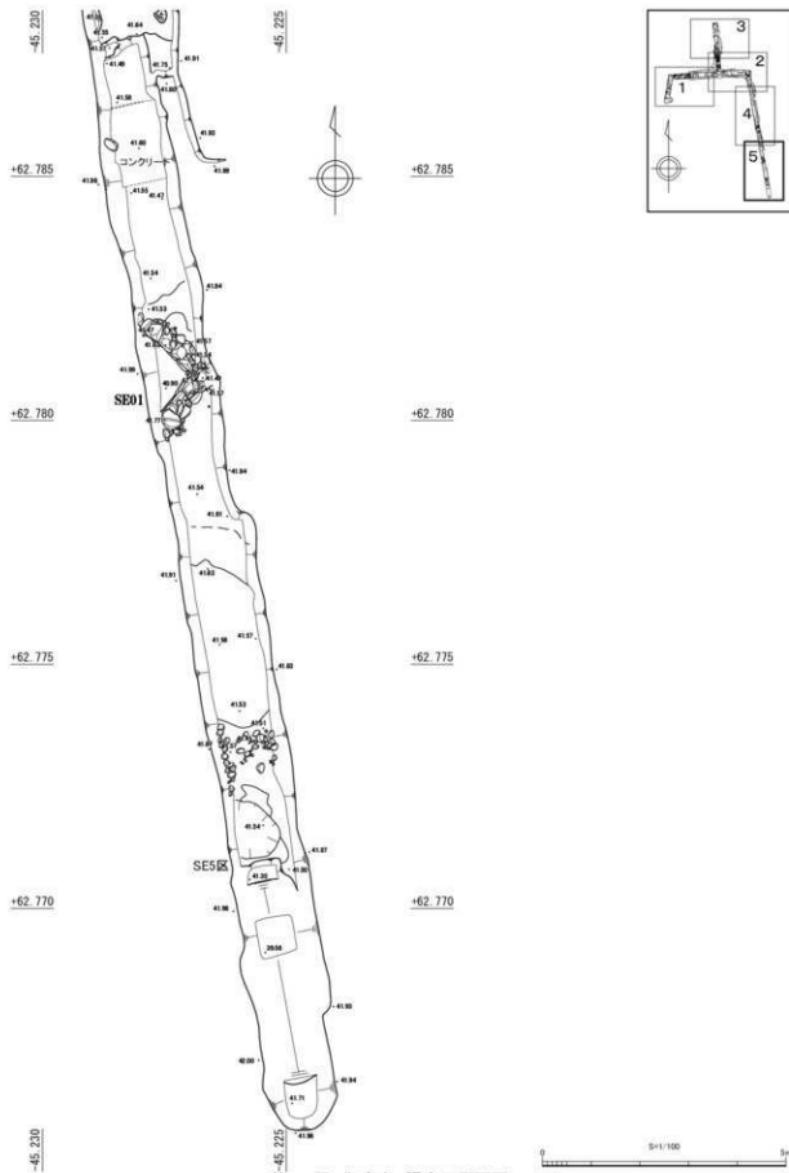
51100  
51100



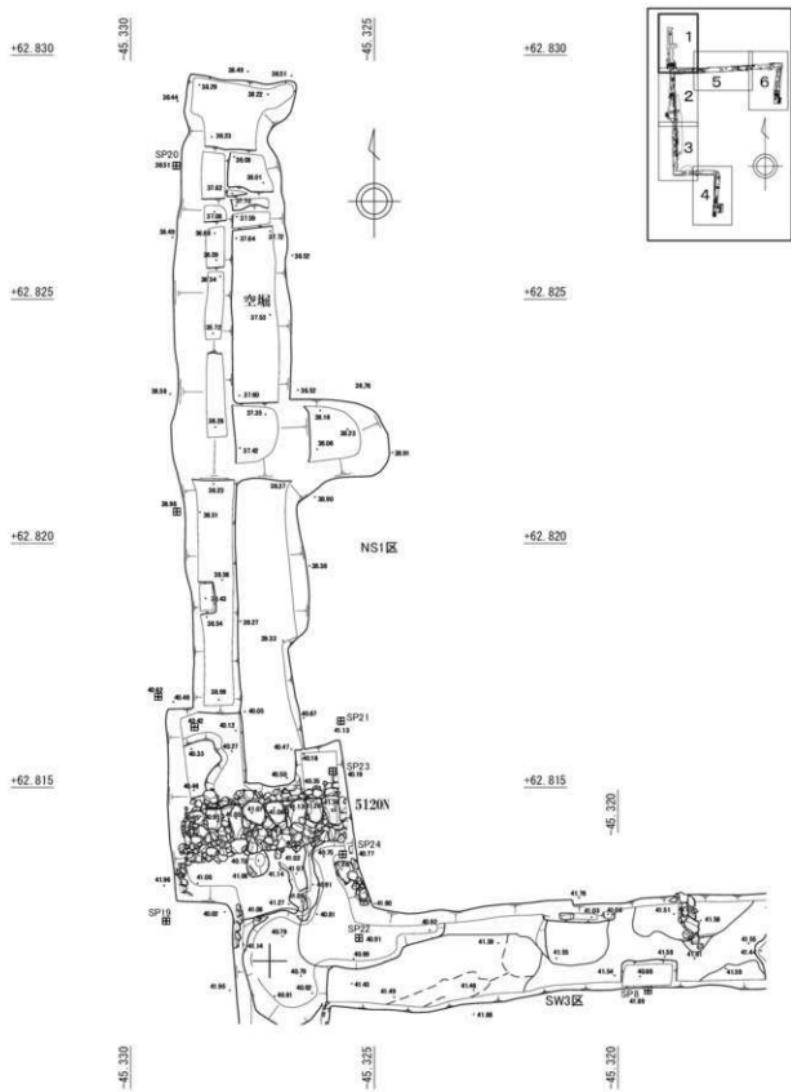
第107図 御宮東 調査区平面図 3



第108図 御宮東 調査区平面図 4

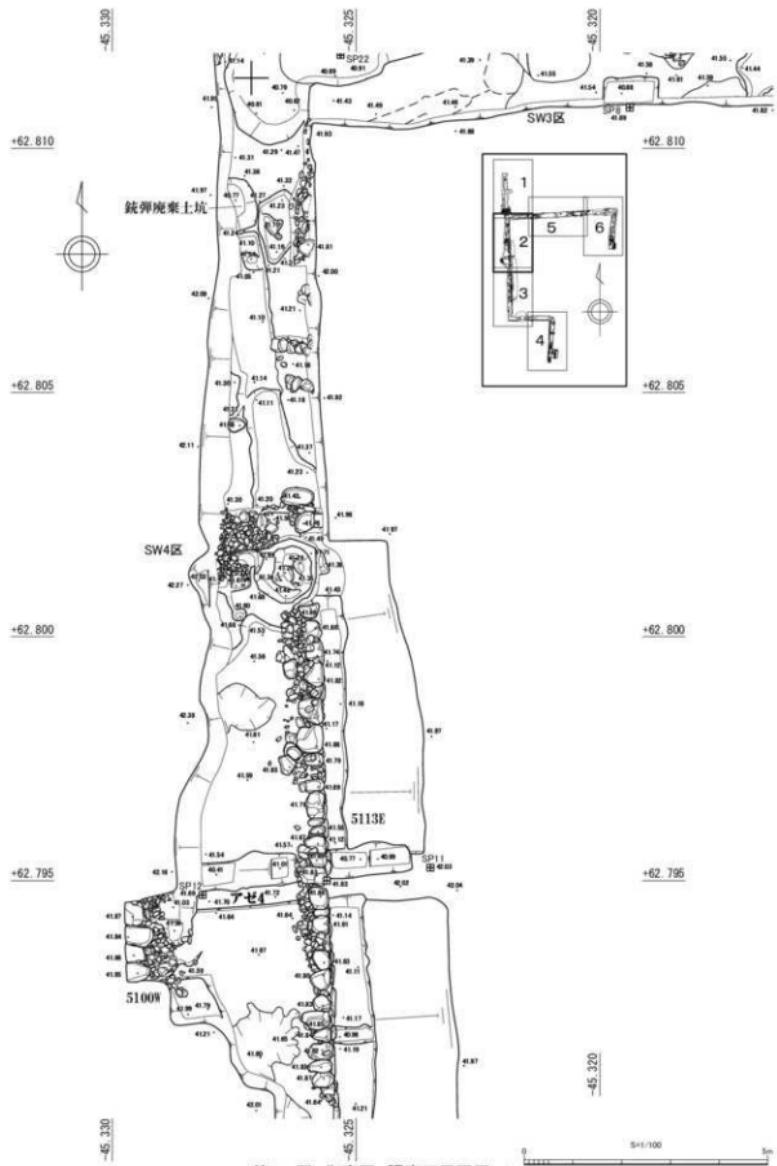


第109図 御宮東 調査区平面図 5

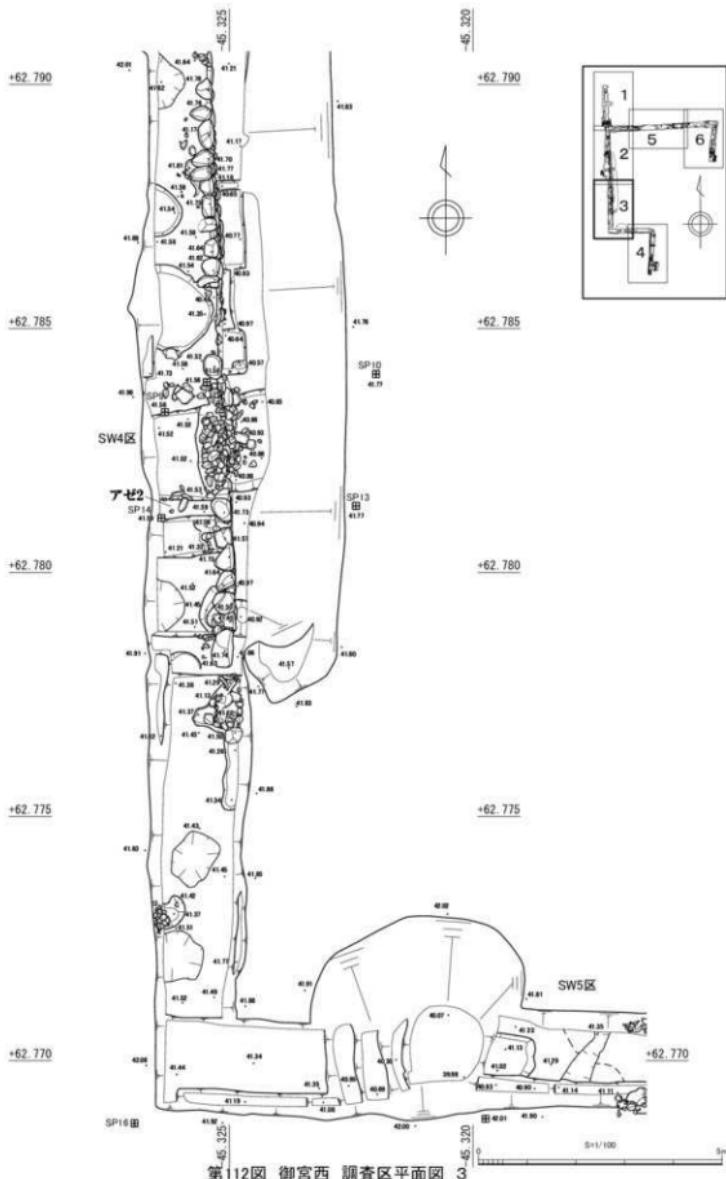


第110図 御宮西 調査区平面図 1

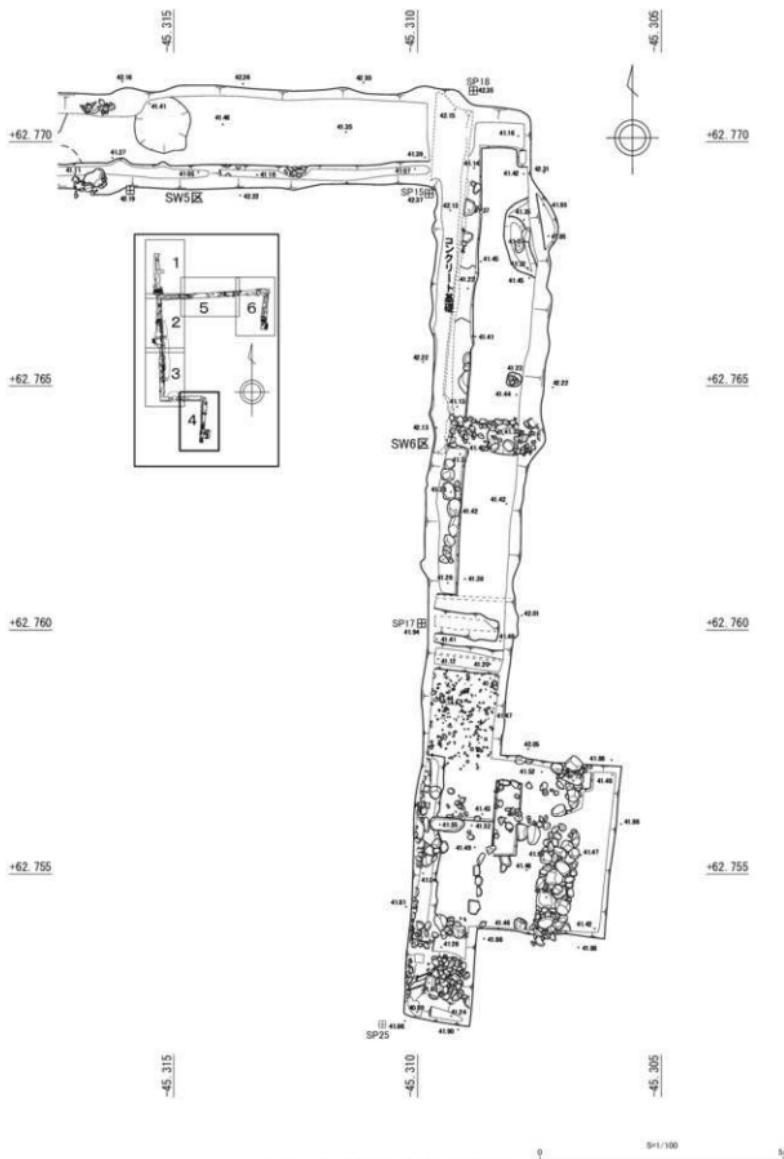
0 5m 50m S+1/100



第111図 御宮西 調査区平面図 2

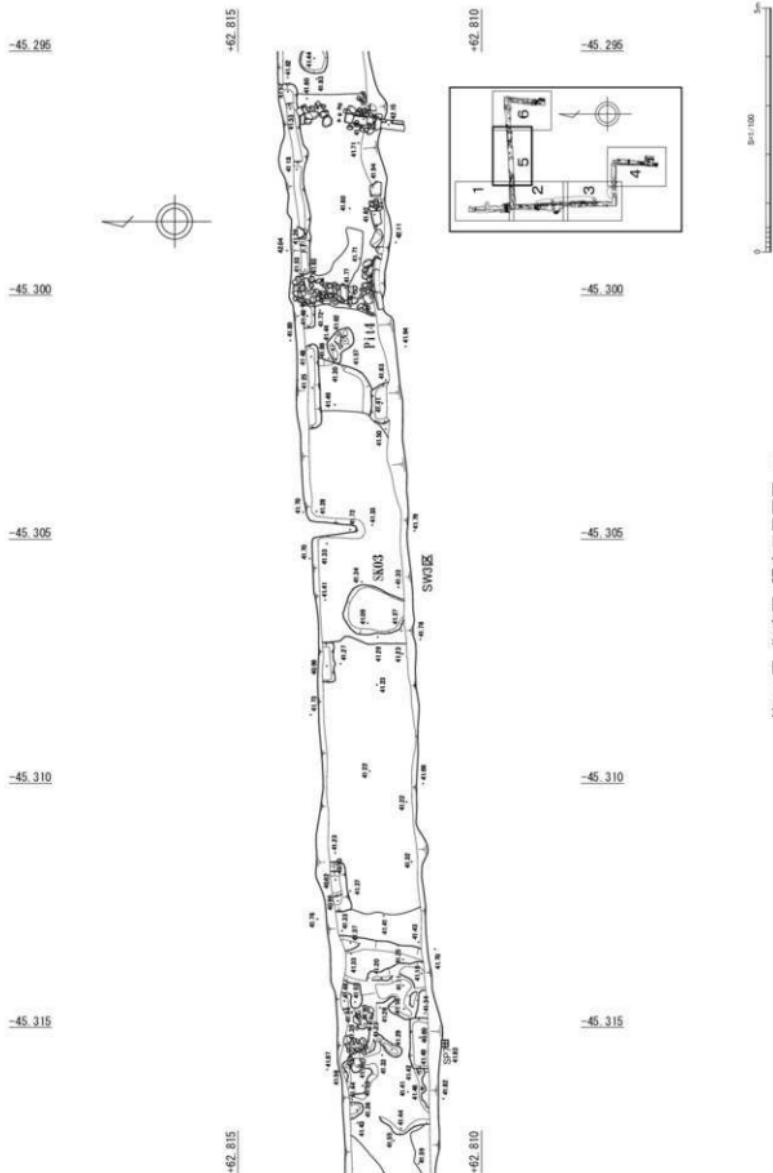


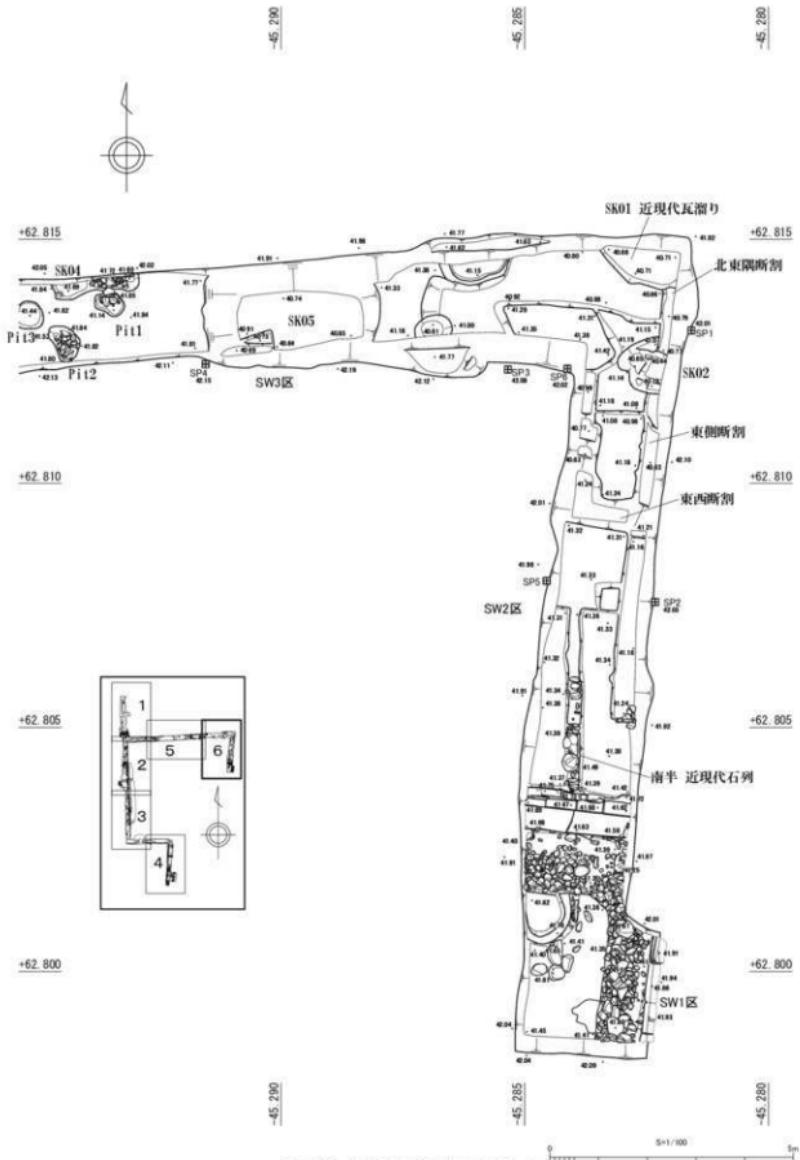
第12図 御宮西 調査区平面図



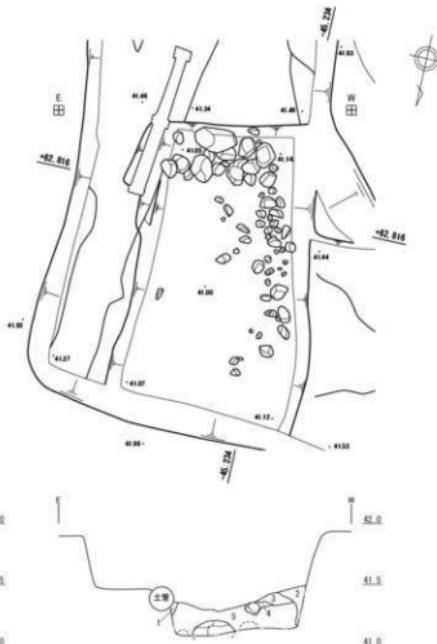
第113図 御宮西 調査区平面図 4

第114図 御宮西 調査区平面図 5



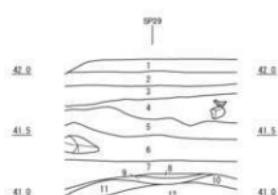


第115図 御宮西 調査区平面図 6



- 1 棕色土 (小礫・粗砂含む)
- 2 淡黄色褐色土 (小礫～約5mmの石・黄褐色粘質土ブロック・褐色土粘土ブロック含む)
- 3 増褐色土 (小礫・淡黄色褐色土ブロック含む)
- 4 黄褐色土
- 5 黄褐色粘土 (黄褐色粘土ブロック (径約3cm以内)・小礫・褐色土ブロック (径約5mm以内)・10～30cm位の円錐含む)

河原石敷集中部石敷集中部平面・断面図

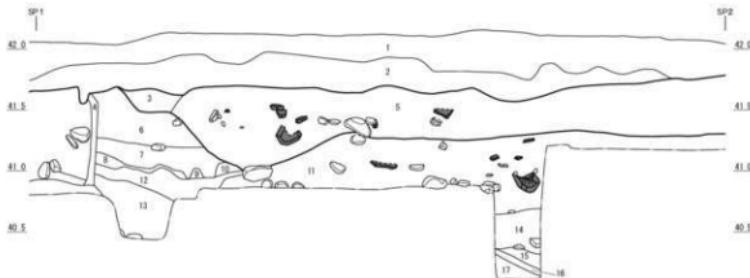


- 1 灰褐色土 (粘質土・コングリート・砂利含む)
- 2 砂利灰褐色土 (小礫～約5mmの石・黄褐色粘質土ブロック (径約5mm以内) 含む)
- 3 灰褐色土 (粘質土・小礫・褐色土粘土ブロック (径1cm以内) 含む)
- 4 増褐色土 (小礫～約5mmの石・褐色土粘土ブロック含む)
- 5 増褐色土 (粘質土・小礫含む・黄褐色土ブロック (径5mm以内)・炭化物含む)
- 6 砂利灰褐色土 (粘質土・シルト・黄褐色土及び黑褐色土がブロック状又は層状に入る)
- 7 増黒褐色土 (粘質土・シルト)
- 8 黑褐色土
- 9 黄褐色土 (粘質土・シルト)
- 10 增黄褐色土 (礫混じり・しまりなし)
- 11 増黄褐色土 (粘質土・シルト (地山質))
- 12 黄褐色土 (小礫～10mm以下の石が多く入る・粗砂)

SP29柱状図

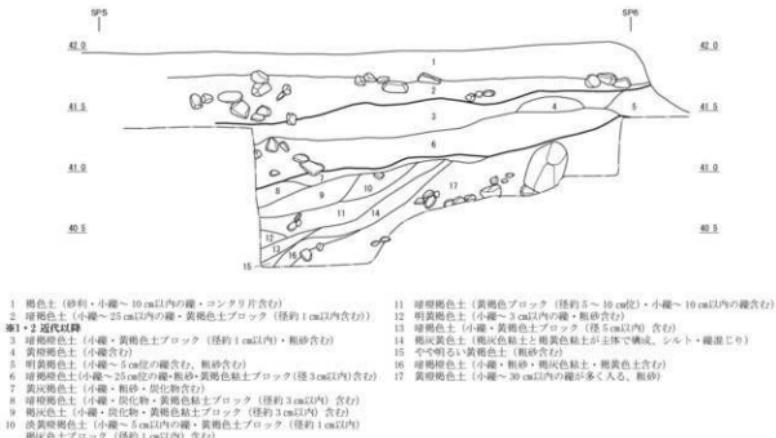
第116図 SE3・4区 断面図





1. 塗覆紫色土（小礫～10 cm以内の礫多く入る）  
 2. 塗覆黒褐色土（小礫・炭化物含む）  
**第1・2 近代以降**  
 3. 今や堆い褐色土（小礫・炭化物含む）  
 4. 塗覆紫色土（小礫・粗砂含む）木の根か。  
 5. 塗覆紫色土（小礫～10 cm以内の礫・炭化物・いぶし瓦片・土師器部品含む）  
 6. 塗覆灰色土（小礫～10 cm以内の礫・炭化物含む）  
 7. 今や堆い褐色土（小礫含む）炭化物多く含む。黃褐色土ブロック（約10 cm）点々と含む）  
 8. 黃灰褐色土（小礫多く含む）  
 9. 明黄褐色土（シルト・粗砂・炭化物含む、粘質土）  
 10. 黃褐色土（シルト・粗砂・炭化物含む）  
 11. やや堆い褐黃灰色土（小礫・炭化物・いぶし瓦片・かわらけ含む）  
 12. 塗覆褐色土（小礫含む・炭化物多く含む）  
 13. 黃褐色土（小礫・炭化物含む）  
 14. 褐褐色土（褐色土ブロック（径約1 m）少し含む）  
 15. 明黄褐色土（小礫～10 cm以内の礫含む）  
 16. 塗覆褐色土（小礫含む）  
 17. 褐色土（小礫含む）

東壁(南北面)断面図

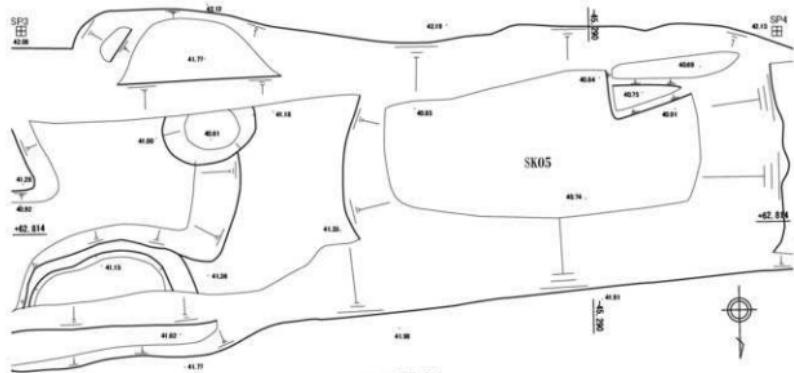


1. 極褐色土（砂利・小礫～10 cm以内の礫・コンクリット含む）  
 2. 塗覆土（小礫～25 cm以内の礫・黄褐色土ブロック（径約1 cm以内含む）。  
**第1・2 近代以降**  
 3. 塗覆褐色土（小礫・黄褐色土ブロック（径約1 cm以内・粗砂含む）  
 4. 黃褐色土（小礫含む）  
 5. 明黄褐色土（小礫～5 cm以内の礫含む・粗砂含む）  
 6. 塗覆褐色土（小礫～25 cm以内の礫・粗砂・黄褐色粘土ブロック（径3 cm以内）含む）  
 7. 塗覆褐色土（小礫・粗砂・炭化物含む）  
 8. 塗覆褐色土（小礫・炭化物・黄褐色粘土ブロック（径約3 cm以内）含む）  
 9. 褐色土（小礫・炭化物・黄褐色粘土ブロック（径約3 cm以内）含む）  
 10. 成黄褐色土（小礫～5 cm以内の礫・黄褐色土ブロック（径約1 cm以内）  
 塗覆褐色土ブロック（径約1 cm以内）含む）  
 11. 塗覆褐色土（黄褐色土ブロック（径約5～10 cm）・小礫～10 cm以内の礫含む）  
 12. 明黄褐色土（小礫～3 cm以内の礫・粗砂含む）  
 13. 塗覆褐色土（小礫・黄褐色土ブロック（径5 cm以内）含む）  
 14. 褐灰褐色土（褐色粘土と褐色黄色粘土が主体で構成、シルト・繊混じり）  
 15. やや堆い黄褐色土（粗砂含む）  
 16. 塗覆褐色土（小礫・粗砂・褐色粘土・褐色砂土含む）  
 17. 黃褐色土（小礫～30 cm以内の礫が多く入る、粗砂）

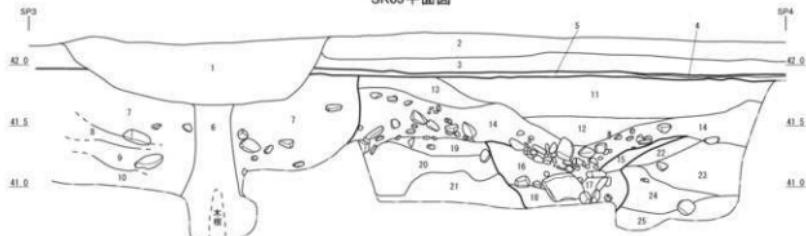
西壁(南北面)断面図

0 50 100

第117図 SW2区 断面図



SK05平面図



- 1 橙色土（コンクリート基礎、河原石・小礫入る）複瓦
- 2 橙色土（コンクリート一面に入る）
- 3 塗被灰白色土（小礫・豆升井含む、上層に固化物含む）
- 4 緑白色凝灰岩粒（詰み固められ難状になつてゐる）
- 5 青色土質砂岩層（詰み固められ難状になつてゐる）
- 6 塗被灰白色土（砂質土・小礫含むなし、炭化物多く含む、木の根）
- 7 塗被灰白色土（小礫含む）
- 8 塗被灰白色土（小礫含む）
- 9 黄褐色土（小礫～30 cm位の縫合む）
- 10 成被灰白色土（小礫～5 cm位の縫合む）
- 11 塗被黄色土（小礫～10 cm以内縫合む、炭化物、明黄褐色土ブロック（径1～5 cm）含む）
- 12 小や離い黃褐色土（小礫含む）
- 13 小や離い灰白色土（小礫含む）
- 14 淡黄褐色土（小礫～25 cm位の縫が非常に多く入る。同付法の石が集中して集まる）
- 15 塗被灰褐色土（小礫含むしむか、明黄褐色土ブロック（約1～5 cm）含む）
- 16 黄褐色土（小礫～約1 cm位の縫が土体になつて構成）
- 17 斜黄褐色土（小礫・20 cm位の縫を含む）
- 18 黄灰褐色土（小礫～約1 cm位の縫が土体になつて構成）
- 19 黄褐色土（小礫～5 cm位の縫合む）
- 20 塗被灰褐色土（小礫～10 cm位の縫合む）
- 21 明黄褐色土（小礫・粘質土ブロック（径約5 cm）含む）
- 22 塗被灰白色土（小礫含む）
- 23 塗被灰褐色土（小礫・黄褐色土ブロック（径約5 cm）含む）
- 24 明黄褐色土（小礫含む）
- 25 灰褐色土（小礫～3 cm位の縫が土体）

南壁(東西面)断面図



南壁SP7柱状図

第118図 SW3区 断面図

た。覆土中には小礫を中心とし20cm程度までの礫を多く含んでいる。時期や性格等は不明である。

#### SW4区（第119～122図）

郭の西辺で南北に延びる調査区である。調査区と同一方向に延びる、郭の内側を向いた石垣5113Eを検出し、標高41.0～41.2mのレベルで整地層を確認した。この整地層は、石垣5113Eの根石部分を覆っており、この整地層下から16世紀代の土器片が出土していることから、III層もしくはIV層の可能性がある。その他に、近代以降ではあるが、旧陸軍が所持していた銃器に関連する器具を廃棄した土坑を確認した。

**銃弾廃棄土坑** SW4区の北端部において南北約1m、深さ約0.5mを測る土坑を検出した。調査区の西壁にかかるとおり全体形状は確認できなかったが、隅丸長方形を呈するとみられる。覆土中からは、機関銃の演習用銃弾や、それらに関連する革製品の一部、金具等が出土した（詳細は本章第3節を参照）。硬質陶器の小皿や国民食器の皿等も出土しており、旧陸軍が駐在していた昭和20年までに、一括廃棄されたとみられる。

**石垣5113E（第119、122図）** 郭の西縁辺部にある内向きの石垣である。長さ約22m、高さ70cmを測る。現状で根石を含め4段の石積みを確認した。石垣の南端を0mとして、北に約4mから6mの範囲は石積みが切れて、かわりに円礫が集中する。7mから8.4mにかけて石積みは再び現れるが、根石の高さが一段分高くなっている。石垣構築以前の遺構や地形の影響を受けているようにもみえる。また、23m付近の石垣背後にも1.5m四方に円礫が集中するが、その脇に石垣を寸断して直径約80cm、深さ約40cmの土坑が掘り込まれている。円礫の集中はこの土坑が掘削された際に裏込めとして入っていた栗石がよけられて、残置された可能性がある。土坑の時期・性格は不明である。

石垣に使用される石材は、河川転石を主体としており、石質も多様である。戸室石系の河川転石も使用され、その使用率は全体の約4割弱である。

石材の寸法は高さが20～40cm、横幅は30～60cmと、やや横長形状の石材が中心となる。高さは比較的均一だが、横幅はやまとまりに欠ける。また、高さ、幅とともに60cmを越える大型の河原石が点々と配置されている点が特徴的である。石積みの西端から4mまでは石材の寸法が高さ30～40cm、横幅40～50cmとほぼまとまっている。石材の控えの長さは、35～60cmとなり、面が横長傾向にある石材は控えの長さが1：1に近い比率となっている。

石積みは、上述の西端から4m地点までは、石材の寸法がまとまっているので、面を横長に置いた布積みである。残りの石積みは、石材の寸法がややばらつくため乱積みとなる。大多数が小口部分を面としているが、1m程度の間隔で、石材を横置きして積んでいる。13m地点では幅80cmもある大型の石材の平らな面を見せるよう据えられている。

石材加工は、戸室石系石材では面整形もごく一部にとどまり、割石としての意識が認められるものは、赤戸室石と青戸室石とも2点ずつ、矢割り痕を残すものは1石にとどまる。戸室石として石切り丁場から選択されてきたというより、石垣石材として手頃な寸法・形状・強度のものを河川周辺から採集した可能性が高い。青戸室に関しては表面風化が著しく、淡黄～淡緑色となる。非戸室系の円礫（河原石）は、正面（前面）をはつりとするものもある。但し、間詰石は破片が多い。

石垣の背後は大部分が礫混じり土で、石尻を中心として部分的に円礫が集中して入る状況で、背後の掘方内が基本的に栗石層である5120Nや5100Wとは異なる。

石垣背後の盛土は、西縁辺に築かれた石垣5100Wの掘方により一部削平される。9～25層は10～20cmの厚さではほぼ水平に堆積しているが、この一群は東から西側に向かって約50cmの厚さで斜めに堆積している盛土層上に盛られている。この斜めの層は5113Eの石積み背後の礫混じり層と互層状に堆積していることから、5113E構築時の土と考えられる。石垣前方では、最下段の石材にむかって下がる掘方状の40層がみられ、背後の28・29層と同じ石垣構築時の土と考えている。石垣前面においては、

標高約41.1mで掘方状の40層と5113Eの根石を覆うように面的に広がる整地層（35～38層）を確認している。この整地層の下から16世紀代の土器片が出土している。30層は東側から西側に向かって斜めに下がる堆積にみえる土だが、近代以降に東側から削平を受けたためこのような堆積状況となっていると思われる。

**石垣5100W**（第119、120図） 石垣5110Wは郭西縁辺に現存する鉢巻石垣で、本調査では裏込め層の一部を検出し、その構造を確認した。長さ約59m、高さ2.9mを測る。北側は現状で1段分しか石材は見えていないが、南西隅角部に向かって徐々に石積みが見えるようになり最大で6段までが地表面より確認できる。石材は戸室石を使用し、正方形又はやや横長の長方形の粗加工石材を布積みする。石垣の北端を0mとして南に向かって38m地点から石材に自然石が混じり、規格も不揃いとなり、乱積みとなる範囲がある（38～42m付近）。42m付近からは、再び布積み石垣となるが、これより南側は近世段階では甚右衛門坂門があつた範囲となるため、近代以降に付け足した石垣である。粗加工石を中心とするが、切石材が混入する点が発掘調査地点周辺の石積みと異なる。また、宝暦3年（1753）9月に東照宮西側の櫻下土留石垣、修復完了するという記事があるが（第2章第4表参照）、5100Wの可能性もあり、38m付近の自然石混じりの乱積み石垣がそれ以前の姿を残している可能性もある。

裏込め層の上面を検出した位置は13mから14.5mにかけての4石分の範囲である。表土層を取り除くと、石材の上面及び背面の栗石層が顔をだす。石材上面はノミによりやや粗く均されている。石垣の掘方は石積み1段目の背後で約80cmを測るが、それ以下では50cm以下となり、急激に狭くなる。掘方内は握り拳大から人頭大の河原石が入る。

5100Wの掘方は現状の石垣が築かれる以前の整地土層（IIb層）を掘り込んでいる。

#### SW5区（第123図）

東西方向に延びる調査区である。I層は東側で42.1m、西側で41.6mと西側で深くなる。標高41.4mで均一な砂層が広がるが、この砂層は下の遺構の窪みに合わせて落ち込む場合もあり、下の遺構が埋め戻されたと同時に面的に整地したため、埋戻し土の沈下と同じ形状で整地層も落ち込んだ可能性がある。東側では厚さ10cm程度で均一に残るが、西側にいくにつれて同層はみえなくなる。近世、近代以降においても、砂層が切れるあたりで建物などの上部が変化することとも関係があるのかもしれない。また、砂層にパックされている層序にあたる38層が一段高くなっている。郭の西辺にむかって高くなるのは石垣背後に土壠状の高まりがあった可能性がある。

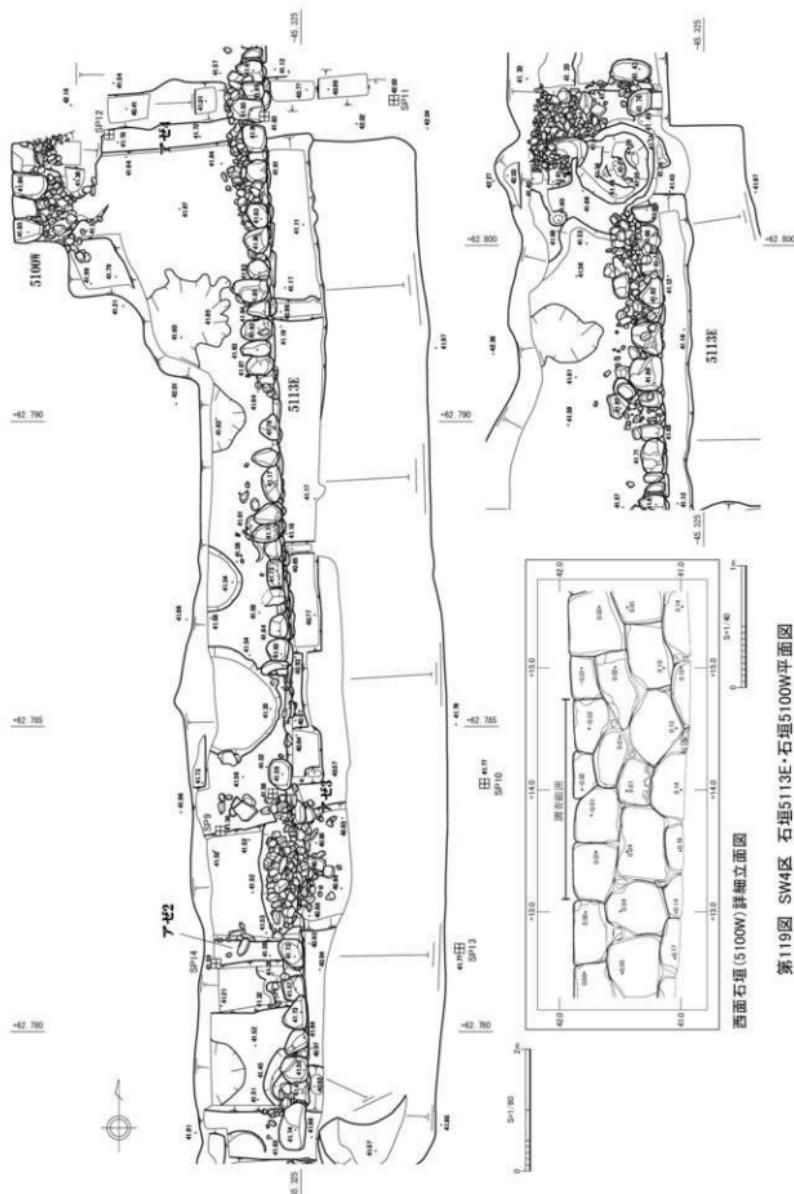
この周辺では、地表面から約2m掘り下げを行ったが、地山面は確認できなかった。

#### SW6区（第124図）

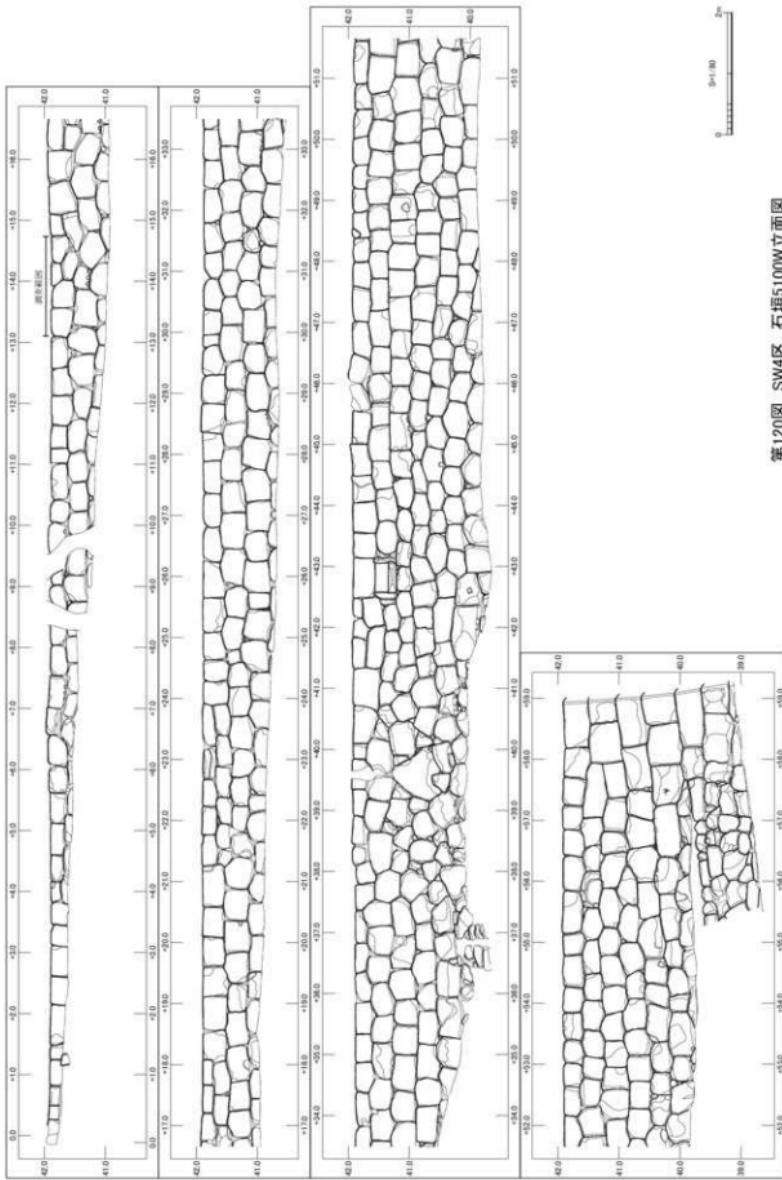
北側で地下埋設物や建物基礎によりI層は標高41.4m付近まで下がっているが、南側では標高41.6～41.9mである。コンクリート管や鉄管の掘方をパックしており、建物のコンクリート基礎やその直下の河原石層に伴った盛土層とみられる。

調査区の南側では標高41.4mで明黄褐色砂質土の整地層（32層）を確認した。SW5区において確認した砂層24層と同一の層である。SW6区南端から約5mの地点において、東西1.5m、南北2mの範囲で32層直下に砂利敷きの硬化面が広がっていることを確認した。調査区の南側では32層も砂利面も見られなくなる。32面よってパックされる整地層や遺構とみられる掘り込みも確認された。それら規模や性格は不明であるが、17世紀初頭の土師器皿が出土している。

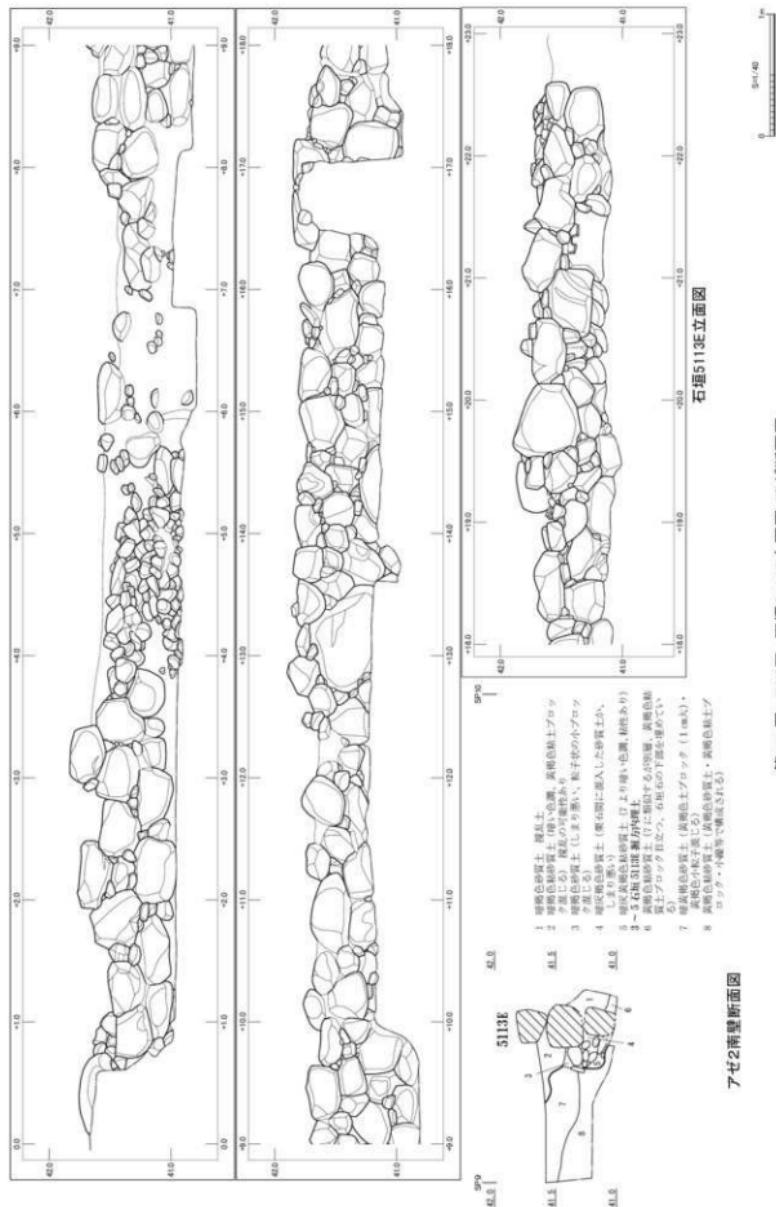
調査区南端部にある栗石が密に詰まった掘り込みは、I層にパックされるが、その他の層を掘り込んでおり、19世紀代の遺物が出土している。明治32年（1899）の「歩兵第七連隊構外木柵解除之圖」では、御宮に病院がつくられており、ちょうどその廻付近であることがわかる。近世段階では御宮への入口となる門がつくられていたが、これだけの規模の掘り込みを持つとすれば、廻の下部施設の抜き取りの可能性が高い。



第119図 SW4区 石垣5110W平面図

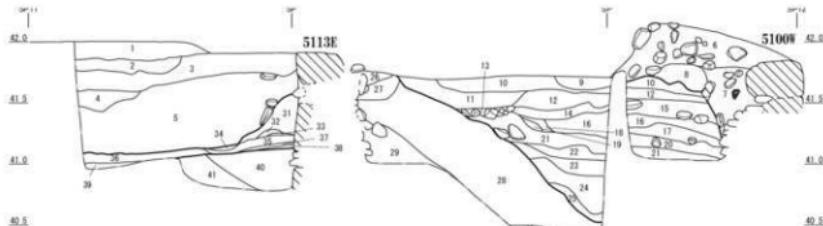


第120図 SW4区 右垣5100W立面図



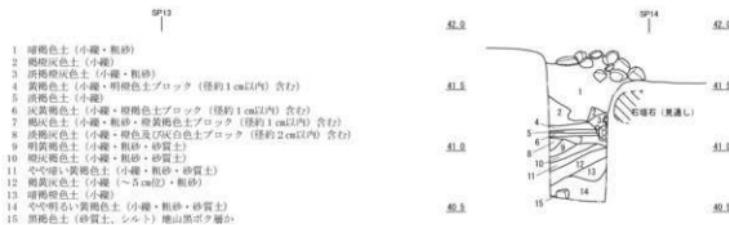
第121図 SW4区 石垣5113E立面上図・アゼ断面図

アゼ2南壁断面図

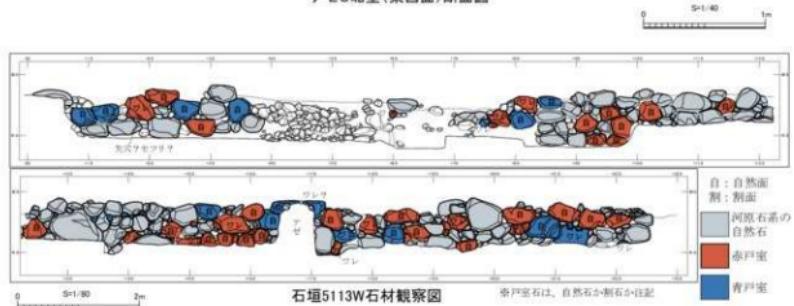


- 1 墓園灰白色土 (小礫・粗砂が多入る)  
 2 墓園灰白色土 (小礫・粗砂・細粒土ブロック (約5 cm以内) 含む)  
 3 墓園灰白色土 (小礫・粗砂・細色土ブロック (約1 cm以内) 含む)  
 4 墓園灰白色土 (小礫・小石・粗砂)  
 5 墓園灰白色土 (小礫・小石・粗砂)  
**※1-5 近代以降**  
 6 深褐色土 (小礫・粗砂・細粒土・約20 cm以内の河原石含む)  
 7 深褐色土 (小礫・粗砂・細粒土・いんじや・約10 cmの河原石含む)  
 8 深褐色土 (小礫・小石・芦茎石片含む)  
**※6 - N 石垣 5100W 補刀**  
 9 明黄褐色土 (小礫・小石・黄色及び橙色粘土ブロック (約1 cm) 含む)  
 10 黄褐色土 (小礫)  
 11 やや明るい褐色土 (小礫)  
 12 淡黄褐色土 (小礫・黄色土ブロック (約2 cm以内) 含む)  
 13 やや明るい褐色土 (小礫・約10 cm以内の河原石含む)  
 14 淡褐色土 (小礫・粗砂・約10 cmの河原石含む)  
 15 暗褐色土 (小礫・粗砂・約10 cmの河原石含む)  
 16 淡灰褐色土 (小礫)  
 17 やや明るい褐色土 (粘質土・シルト・小礫)  
 18 墓園灰白色土 (小礫)  
 19 墓園灰白色土 (小礫)  
 20 やや明るい褐色土 (小礫・10 cm以内の河原石)  
 21 淡褐褐色土 (小礫・粗砂)  
 22 淡褐褐色灰白色土 (小礫)  
 23 淡褐灰白色土 (小礫)  
 24 淡灰褐色土 (小礫・淡黄褐色土及び淡褐色土ブロック (約1 cm以内) 含む)  
 25 淡灰黄褐色土 (小礫・淡黄褐色土ブロック (約1 cm) 含む)  
 26 淡灰褐色土 (小礫)  
 27 やや明るい褐色土 (小礫・細粒・粗粒粘土ブロック (約1 cm以内) 含む)  
 28 淡灰褐色土 (小礫・細粒・粗粒粘土ブロック及び細粒土ブロック (約1 cm) 含む)  
 29 淡褐色土 (小礫・褐色土ブロック (約1 cm) 含む)  
 30 淡褐色土 (小礫・粗砂・褐色土が層状に東上から西下に帯状に入る)  
 31 明黄褐色土 (小礫・粗砂・褐色土が層状に東上から西下に帯状に入る)  
 32 淡黄褐色土 (小礫・粗砂)  
 33 明黄褐色土 (シルト)  
 34 淡灰褐色土 (砂質土・粗砂・小礫)  
 35 明褐色土 (小礫・細粒・褐色土・褐色土ブロック (約0.5 cm以内) 含む)  
 36 淡灰褐色土 (小礫・細粒・褐色土・褐色土ブロック (約5.0 cm以内) 含む)  
 37 淡灰褐色土 (砂質土・粗砂・小礫)  
 38 明灰褐色土 (砂質土・粗砂・小礫)  
 39 淡灰褐色土 (小礫・粗砂)  
 40 やや明るい褐色土 (小礫)  
 41 やや明るい褐色土 (小礫・褐色土ブロック (約5 cm以内) 含む)  
 ※26 - 29, 30 石垣 5113E 構築に伴う理土, 35 - 37 石垣 5113E 前面整地土

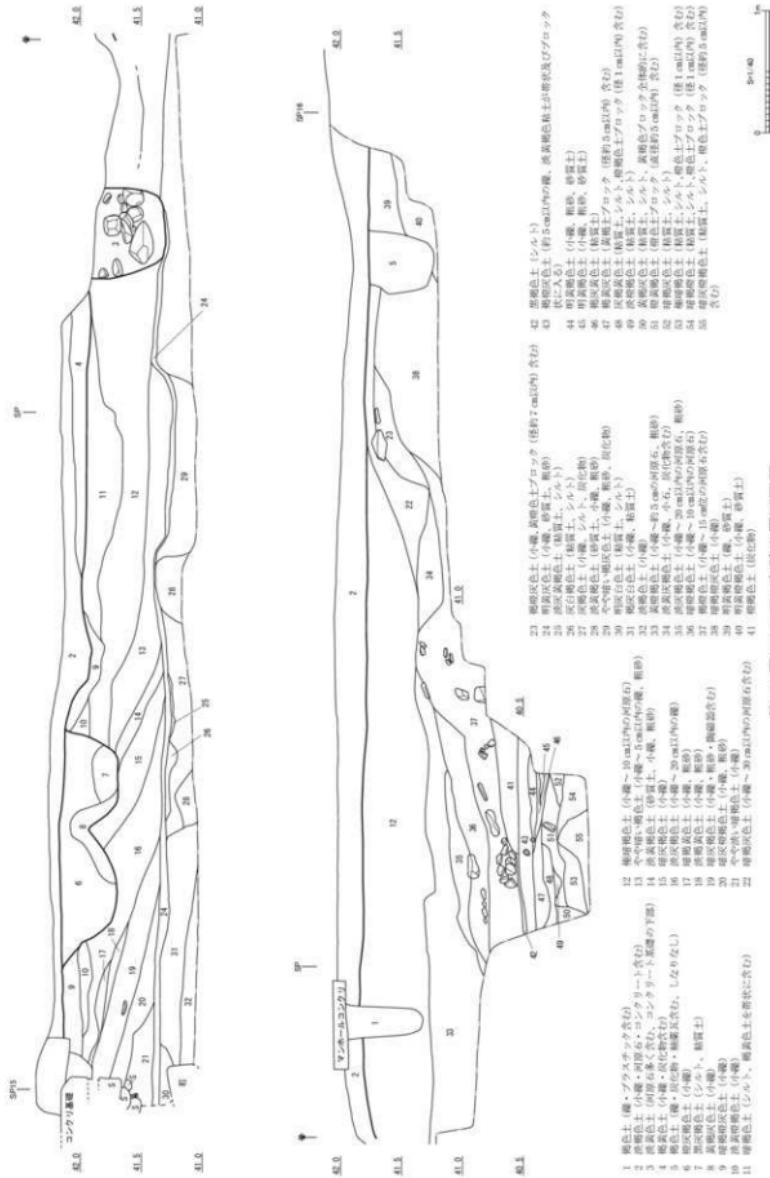
アゼ4南壁(東西面)断面図



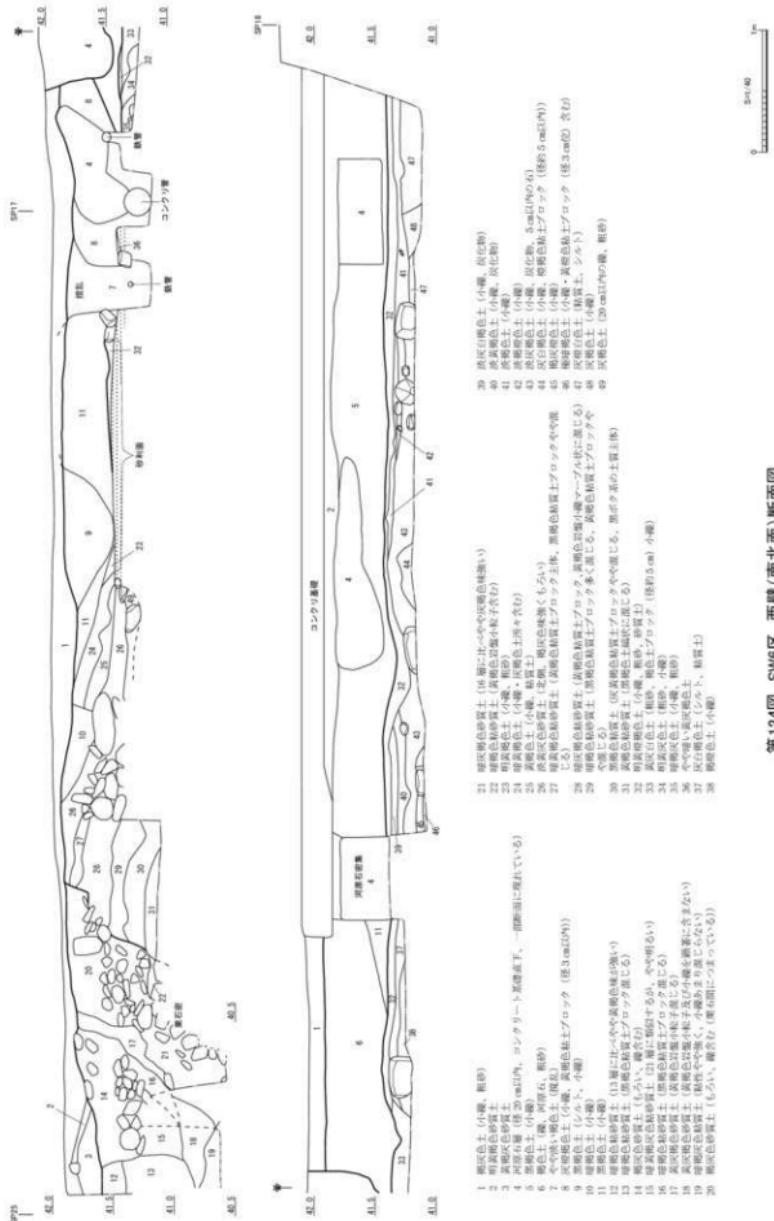
アゼ3北壁(東西面)断面図



第122図 SW4区 石垣5113Eアゼ断面図・石材観察図



第123圖 SW5區 南壁王層斷面圖



第124図 SW6区 西壁(南北面)断面図

## NS1・NS2区（第125～134図）

両調査区とも、北側の藤右衛門丸との境にある斜面上に延びる調査区である。地表面から約50cmまでがⅠ層とした近現代層で、標高にして約41.8mを測る。主な遺構として、両調査区の南側で石垣5120N、藤右衛門丸側に下った北側では空堀を確認した。NS2区の斜面地では、空堀の埋め立て後から斜面地になるまでの変遷が確認できた。

まず、東照宮造営を契機とした造成が行われた。北側の空堀は埋め立てられ平坦面の造成がそれにあたる。その後は徐々に南側（御宮側）からの流土等により傾斜地となっていくが、堀の埋立てから平坦面の造成、流土による平坦面の埋没と石段の設置に至るまでは大別のⅢ層に該当する。遺物の出土状況から更に3段階に細分可能で、Ⅲ-a～c層とした。石段の廃絶以降、旧陸軍期までの斜面への流土層は大別のⅡ層に該当する。

### 平坦面

御宮の北辺に築かれた石垣5120Nの前面には、幅2mほどの犬走状の平坦面が設けられるが、更に藤右衛門丸に向かって一段下がった、藤右衛門丸と同じレベル（約38.5m）でも平坦面が造成される。この平坦面はそれ以前にあった空堀を埋立てし、造成されたものである。NS1区では、石垣前面の犬走上の平坦面がやや不明瞭だが、NS2区では明瞭に確認できる。NS2区では藤右衛門丸と同一レベルの平坦面から緑色凝灰岩製の石瓦が出土している（第131図）。緑色凝灰岩は笏谷石と呼ばれる現在の福井県福井市足羽山周辺で探掘された石材とみられる。鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦・丸瓦・平瓦等で構成されており本瓦葺の屋根を構成すると推測できる（本章第3節参照）。鬼瓦には三葉葵文が刻まれていることや、出土地点からみても、東照宮に関連する屋根瓦と考えられる。

ほぼ完形品の丸瓦や平瓦の一部の出土状況は、現地に集積状態であったものが崩れたかのような状態であった。この層は17世紀中葉の遺物を含んでおり、東照宮造営の寛永20年（1643）からあまり経っていないタイミングで埋まつたものとみられる。Ⅲ-c層（27・28層）とした。

その後徐々に斜面からの流土によって平坦面が埋まっていくが、焼瓦が石瓦を面的に覆うように広がる。23～25層をⅢ-b層とした。Ⅲ-b層からは17世紀後半の遺物が含まれておらず、特にⅢ-c層との間に17世紀後半の土師器皿が正位で重なった状態で出土している。

**石段（第134図）** NS2区においては、Ⅲ-b層の上位に、緑色凝灰岩製の棟石を雁木として転用した簡易な石段がつくられ、御宮と藤右衛門丸をつなぐ通路として利用されていた。石段を据えた基盤である21・22層をⅢ-a層とした。この層中からは、廃棄されたとみられる大量の焼瓦が出土しており、少量ではあるが、越前赤瓦が含まれている。

石段は8段を確認しており、南東から北西に向かって斜めに下っていくように配置され、棟石の上面を踏面としている。踏面は斜面とほぼ同じような角度で斜めに傾いた状態となっている。設置に際して棟石の下に焼瓦が敷き込まれたようになっているものもある。各段は棟石を段の手前に置いて、土留めした状態になっており、一段毎の奥行きは55cm前後で、蹴上の高さは概ね30cm前後である。御宮の平坦面付近となる1・2段目の蹴上は、20cm程度と、やや低くなり、奥行きも60cmを越える。

近世後期に描かれた「金沢御城内外建物絵図」（（公財）前田育徳会蔵）には、郭北辺に柵列と石垣が直線的に描かれ、その東側に木戸状の出入り口があり、出入り口から藤右衛門丸にむかって一定幅で色塗りされておらず、簡易な通路を表現したものと考えられ（第207図参照）、石段の表現はないが位置的には合致する。

石段の廃絶年代は定かではないが、石段自体は斜面上方からの流土とみられる、砂礫混じりのシルト質土によっておおわれている（Ⅱ層）。また、石垣5120N前面も同様に埋没していく。

Ⅱ層の出土遺物には石瓦の棟瓦が含まれるが、Ⅲ-c層出土に比べ少量かつ散布的なあり方から、廃棄に伴うものと考えられる。

**空堀**（第126、132図） NS1・2区両調査区の北端部において、空堀を確認した。空堀は、それ以前の郭造成と考えられる整地土層（46～50層）を掘り込んでおり、幅は4.6m、深さについては最深部を未確認だが、1.6m以上を測り、断面はU字状の形状と考えられる。埋土の堆積状況から、埋め立ては北側（藤右衛門丸側）から行われており、暗褐色土と地山由来の黄褐色土が互層状に入れられている。NS1区では、埋土中に円礫が極めて多い層がほぼ中央に何層か入っている。堀の埋土からは16世紀末から17世紀前半の遺物が出土している。

空堀の基盤層となる郭造成土は大別IV層に該当する。III層に含まれる遺物の年代や内容から、空堀は寛永20年（1643）に東照宮が造営される以前には埋め立てられていたと推測する。

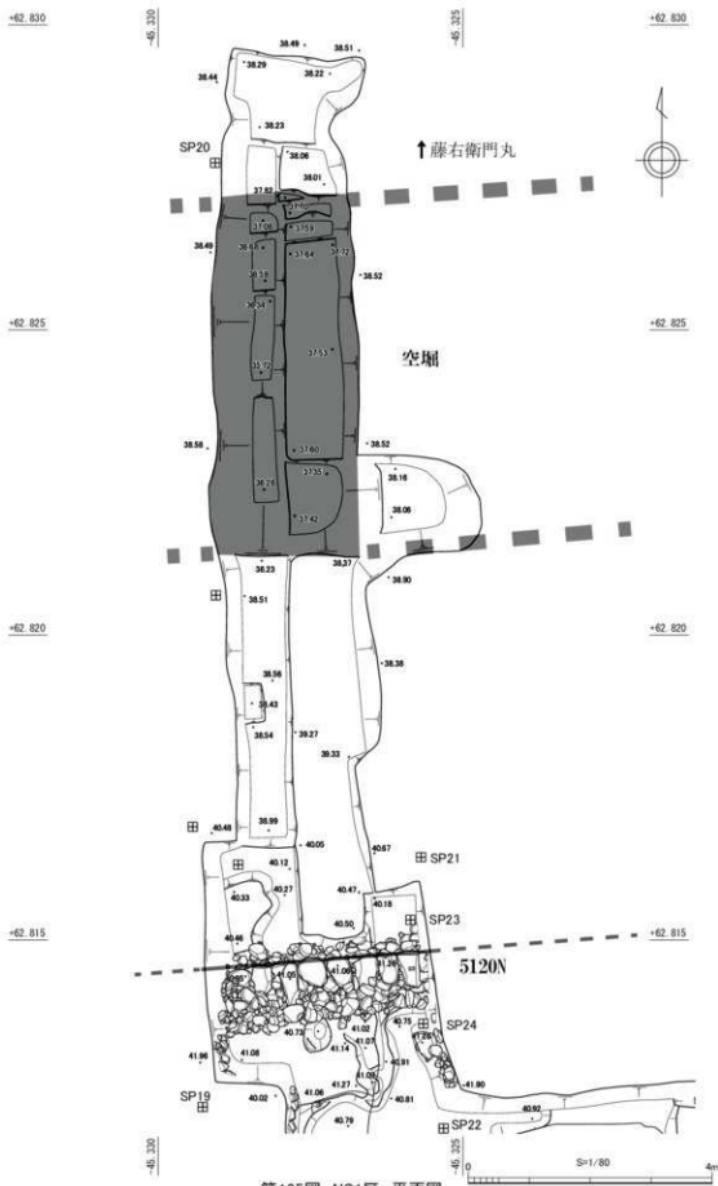
**御宮北石垣5120N**（第127、133図） NS1区とNS2区で確認した石垣である。現在の御宮から藤右衛門丸へとむかう通路は、近代以降につくられたもので、近世の絵図をみると、御宮の北辺には直線的な石垣が築かれ、藤右衛門丸とは基本的に仕切られた状態であった。本調査で確認したのはその一部と考えられる。

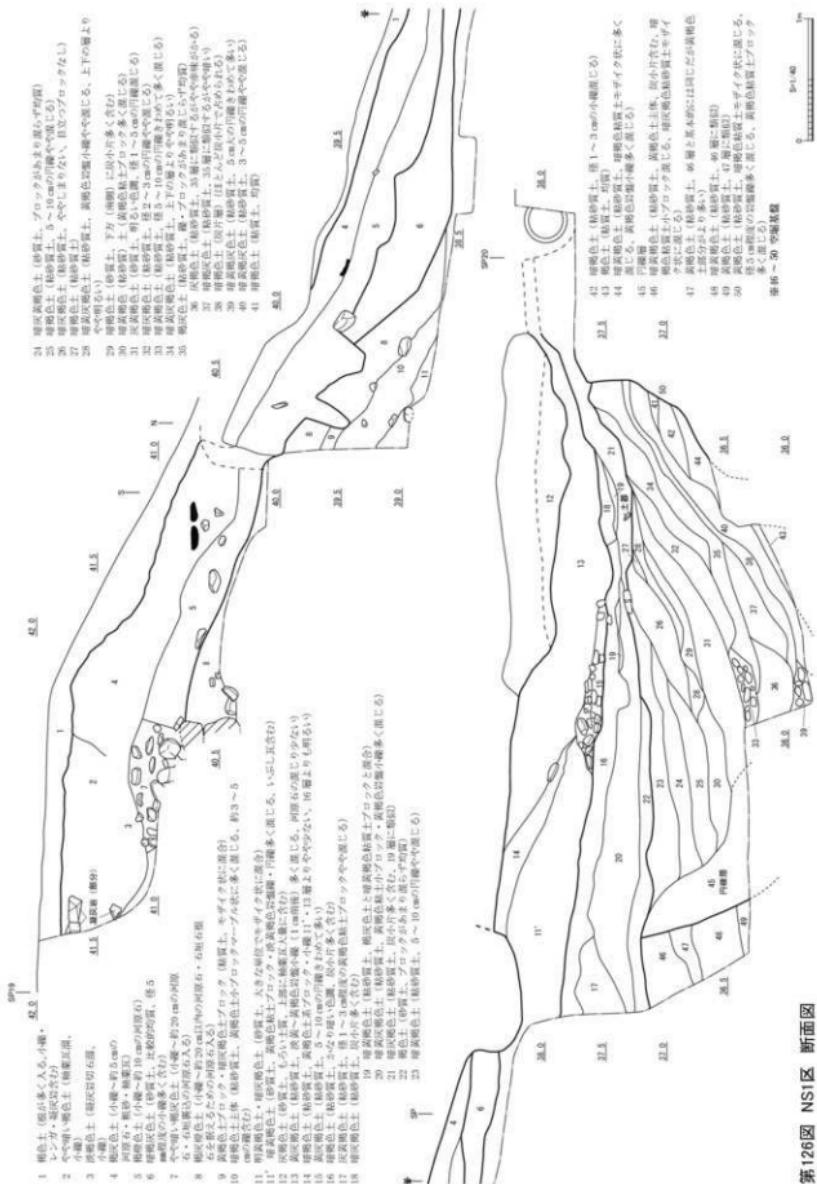
石垣はNS1区で長さ3.2m、高さ1.1mを測り、NS2区では長さ1.8m、高さ1.1mを測る。二カ所の石垣を単純に繋ぐと延長約84mを測る。東西方向に延びるが、NS2区に向かって約5.4°北に振っている。いずれも3段の石積みを確認した。築石は自然の平坦面をもち角が丸みを帯びた河川転石を使用し、戸室石系の石材も約半数含まれる。戸室石系の石材は一部に面割りが確認されるが、基本は自然石積みである。石材形状は長楕円で、正面は小口方向をむけ、石面に比べて控えが長くなるように据えられる。石材の寸法は正面の高さが25～35cmと揃うが、横幅は20～50cm前後とややばらつく。控えについても45～70cmとばらつくが、概ね面に対して1.5倍以上の長さを維持している。ただし、横幅が50cm前後あるものは最下段にあるため、その控えが同様に1.5倍の長さを有しているかは不明である。正面は自然面だが、平らな形状が多く、意識的に石材の選択が行われたと考えられる。側面などの他の築石との接点を打ち欠くような合端調整は未確認である。石積みは石材の規格が不揃いなため乱積みとなるが、石材形状が揃う部分では布積み傾向にもみえる。築石間の隙間は裏込めに使用されている円礫と類似する石材を間詰石としている。

背後の裏込め掘方は幅が約40cmで、掘方内はやや扁平な円礫を充填した栗石層となっている。円礫は径30cm程から10cm程度まで粒径の差はみられるが、割栗材はみられない。

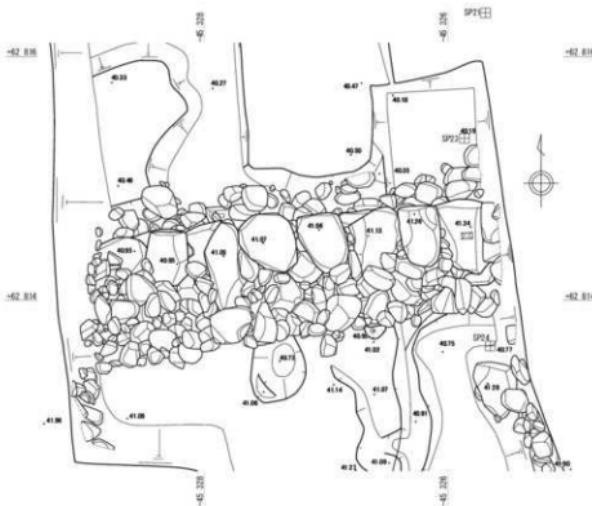
掘方は基盤層を掘り込んで根石を据えており、根石前面には前込めとして円礫が充填される。NS2区においては、石垣背後の掘方は地山を掘り込んでいる。ただし、掘り込み面は上部が1層により削平されているため把握できていない。石垣前面も地山を掘り込んでいるが、石垣の背後と前面とで遺存する地山の最高所のレベルが約80cm異なり、石垣前面が低くなっている。地山部分を深掘りしたところ、黄橙色粘質土から、黄白色のシルト質土、細砂の層へと漸移的に変化しているが、南から北に向かって傾斜しているような状況は見られないことから、旧地形によるレベル差とみるより、石垣築造にあたり、地山を削り込んで犬走り状の平坦面を造り出したと考えられる。NS1区では、地山は確認できず、斜面側の堆積状況からも整地層を掘り込んで掘方としている。

NS2区では、石垣を据えた際の前込め層から17世紀初頭かと考えられる遺物が出土している。

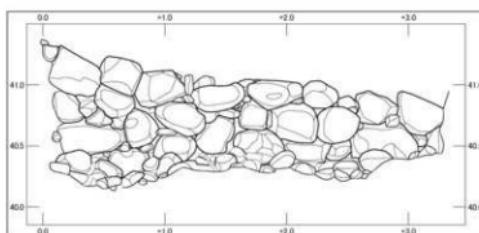




第126図 NS1区 断面図

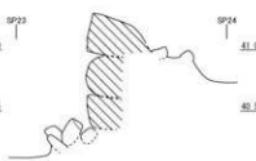


北面石垣(5120N)平面図



北面石垣(5120N)立面図

SP23



北面石垣(5120N)断面図

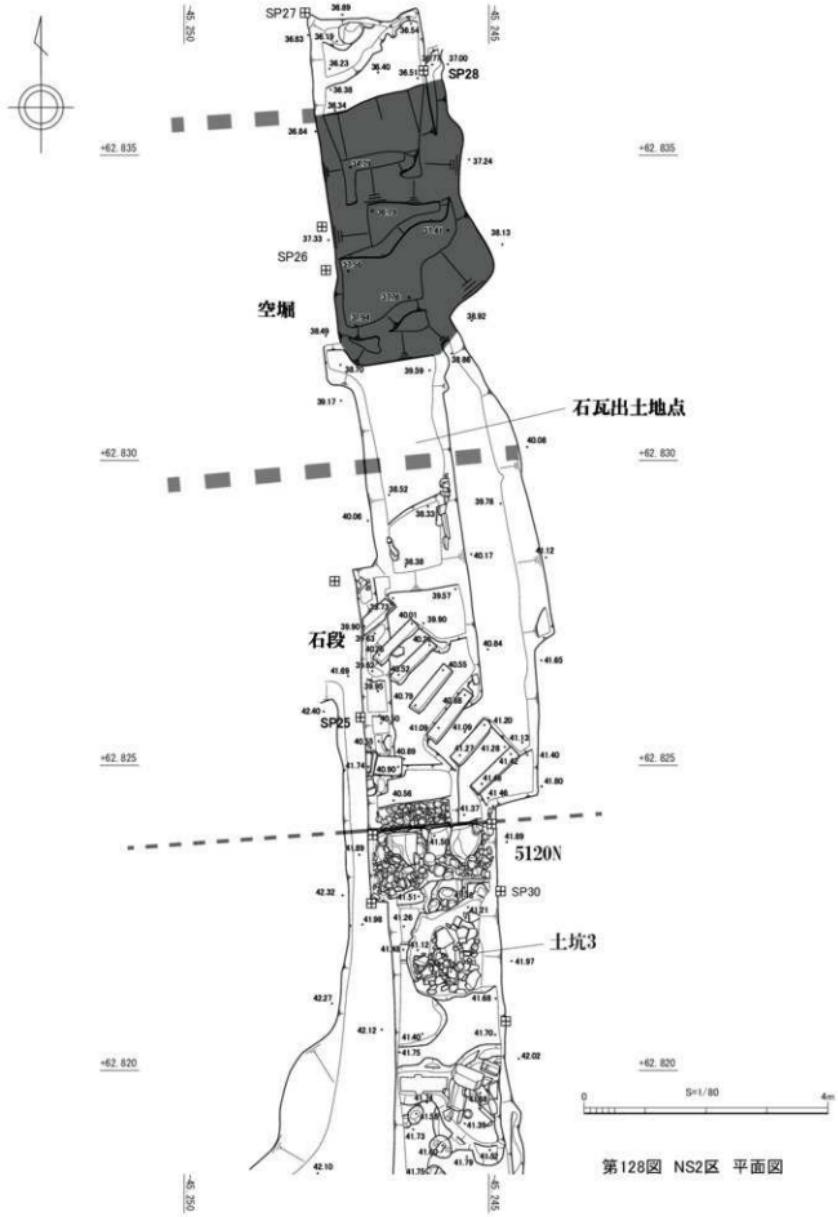


東壁断面図

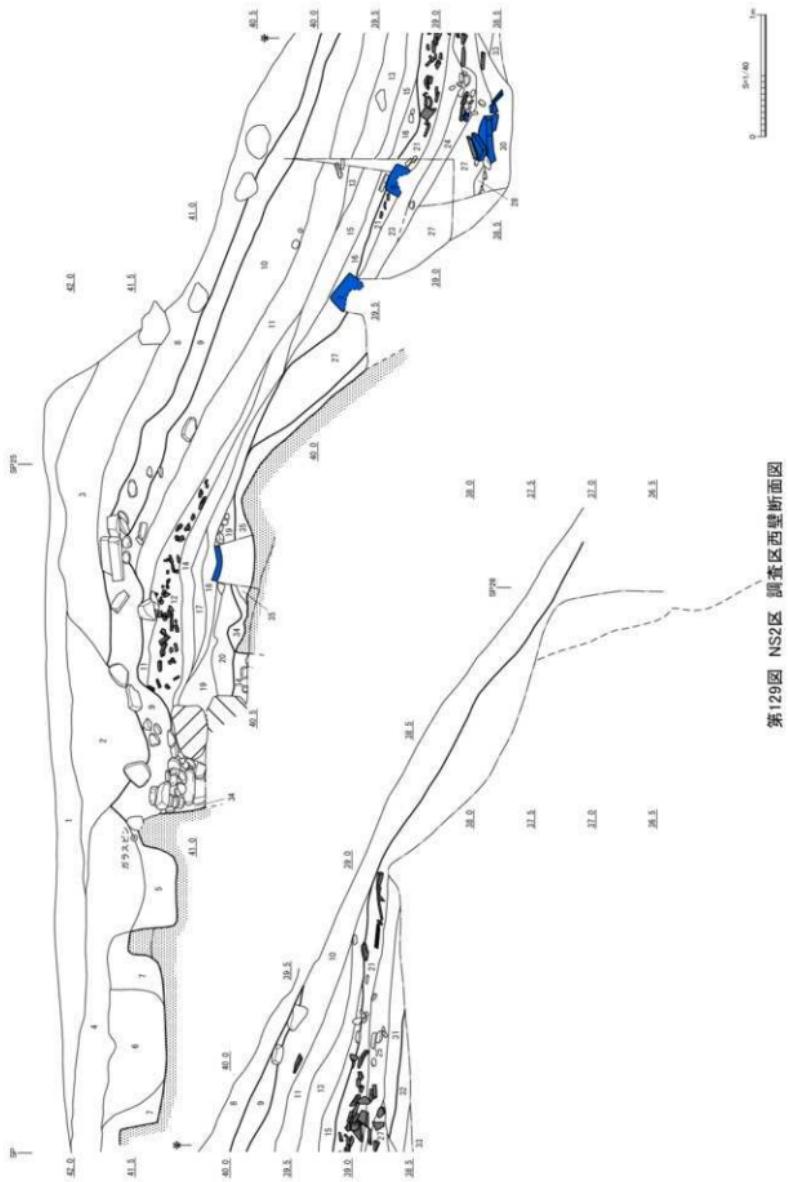
- 1 河原石・砾状質土
- 2 砂質灰褐色(砂質土、もろい) 地盤上
- 3 砂質灰褐色灰灰色土
- 4 (下部~約20 cm以内の河原石・石組裏込の河原石入る、西壁7層と対応)
- 5 黄褐色細色砂質土(白色小粒子多含む、堆灰褐色砂質土をモザイク状に含む) 配方理上
- 6 黄褐色細色砂質土ブロック+堆灰褐色砂質土 西壁地盤上

0 1/40 1m

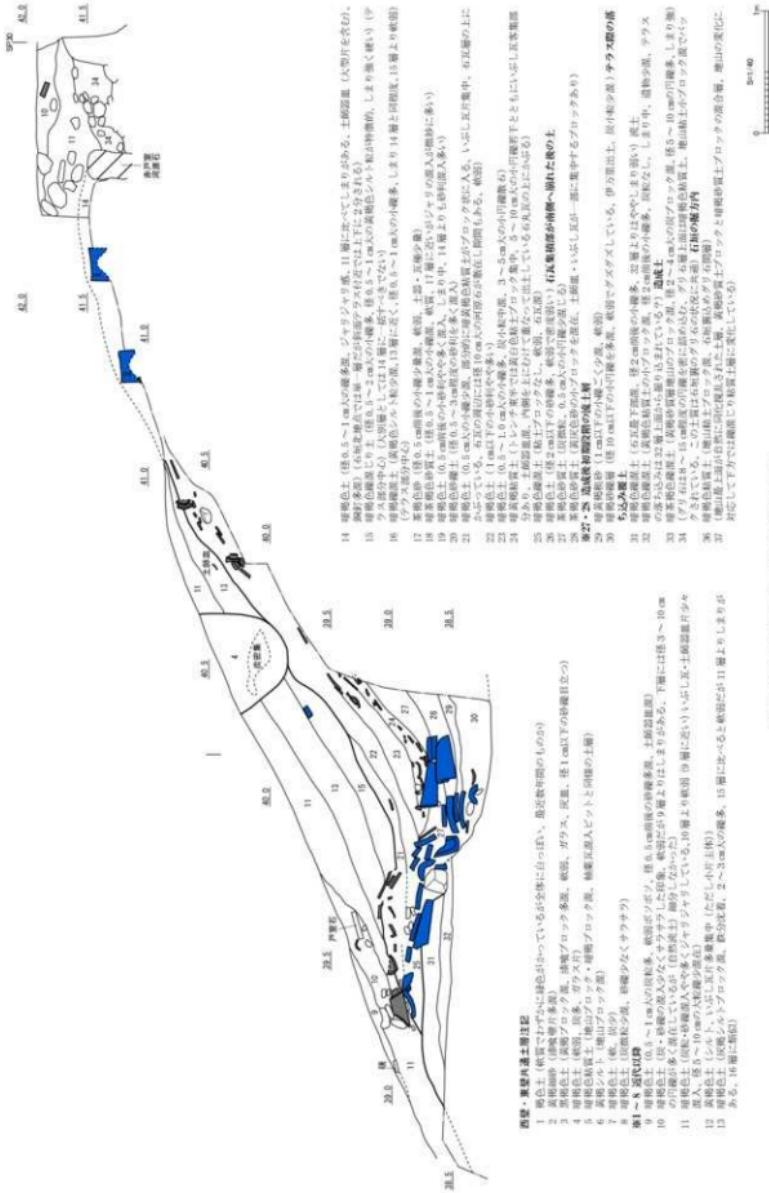
第127図 NS1区 石垣5120N平面図・立面図・断面図



50(40)  
100



第129図 NS2区 調査区西壁断面図

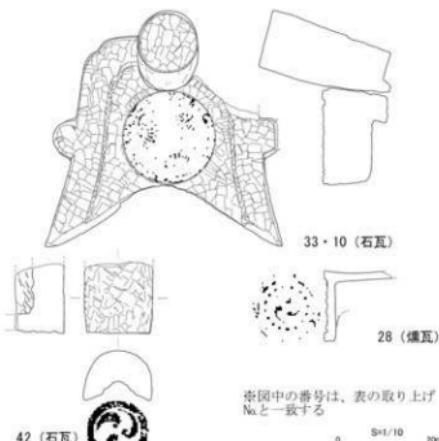


第130図 NS2区 調査区東壁断面図



第20表 主な瓦の取上げ番号と器種

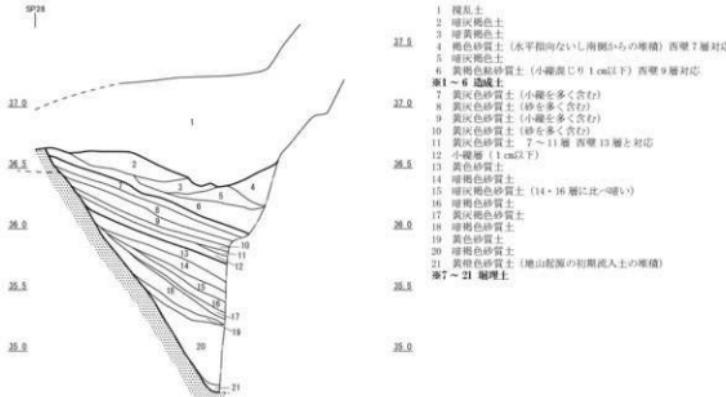
取上げNo.	器種	ID (実測番号)
3	丸瓦	200003-502
4	丸瓦	200003-5060
5	丸瓦	200003-5023
6	丸瓦	200003-5056
8	丸瓦	200003-5028
9	丸瓦	200003-5025
10	鳥食	200003-5063
12	平瓦	200003-5034
14	丸瓦	200003-5011
17	丸瓦	200003-5011
22	平瓦	200003-5007
23	平瓦	200003-5001
26	平瓦	200003-B117
28	軒丸	200003-5001
29	丸瓦	200003-5014
30	丸瓦	200003-5029
31	丸瓦	200003-5005
32	丸瓦	200003-5038
33	窓瓦	200003-5001
36	軒丸瓦	200003-5002
37	丸瓦	200003-5071
37	平瓦	200003-5010
42	軒丸瓦	200003-5079
47	平瓦	200003-5012
67	平瓦	200003-5050
78	平瓦	200003-5019
83	平瓦	200003-5055



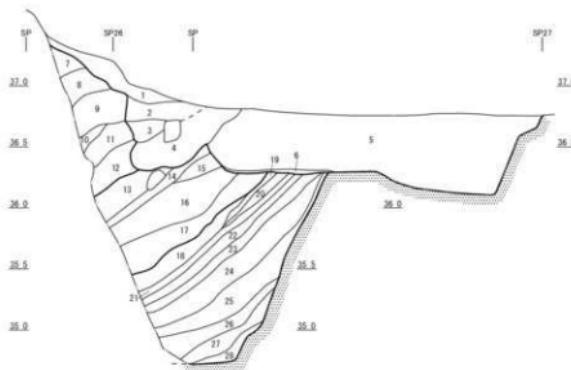
\*図中の番号は、表の取り上げNo.と一致する

出土瓦の一部

第131図 NS2区 石瓦出土状況



北端部東壁断面図



1. 暗灰褐色砂質土  
2. 墓灰褐色砂質土  
3. 墓褐褐色砂質土  
4. 褐褐色砂質土  
5. 黄褐色砂質土 (黄褐色土ブロック定量測定)  
6. 1~5 地上・堆积土  
7. 黄褐色砂質土 (1cm以下・2cm以上の繊維多く混じる) 東壁6層対応  
8. 黄褐色砂質土 (2cm以上)の繊維混じる  
9. 黄褐色粘砂質土 (径1~2cm小礫定量測定) 下部粘性あり  
10. 墓褐褐色砂質土 (小礫度じりなく均質)  
11. 墓灰褐色土 (土より砂の混じり少ない)  
12. 墓褐色砂質土 (径1~2cm小礫定量測定) 10~12層には見当たらない  
6~12 地成土  
13. 明灰黄褐色砂質土 (小礫度じり少なく均質 粒子子細かい) 西壁7~11層対応  
14. 墓黄褐色砂質土 (1cm以下・0.5cm前後小礫混じる)  
15. 墓灰褐色砂質土 (1cm以下の小礫定量測定)  
16. 墓黄褐色砂質土 (径1cm程度の小礫 (多)・5~10cm前原土 (少) 混じる)  
17. 墓灰褐色砂質土 (径1~2cmの小礫多く混じる (小礫の量も多い土層))  
18. 墓褐色砂質土 (径1~2cmの小礫定量測定)  
19. 墓黄褐色砂質土 (径1~2cmの小礫定量測定)  
20. 墓褐色砂質土 (径1cm以下)  
21. 墓黄褐色砂質土 (径1cm以下)の小礫定量測定 (黄色味の目立つ層)  
22. 墓褐色砂質土 (小礫や骨混じるが上部より目立たない) 层小片定量含む  
23. 黄(灰)褐色砂質土 (径1cm以下)の小礫定量測定 21層より黄色味弱いが比較的明るい  
24. 墓褐色砂質土 (22層に類似)  
25. 墓褐色砂質土 (小礫の量じり少く均質 微小片定量含む 土器出土)  
26. 墓褐色砂質土 (小礫の量じり少く均質 上下層より少少明るい)  
27. 墓褐色砂質土 (小礫の量じり少く均質 片片言まない)  
28. 墓黄褐色砂質土 (12層混じる) 前期流入土 地山起源  
29~21 地理上

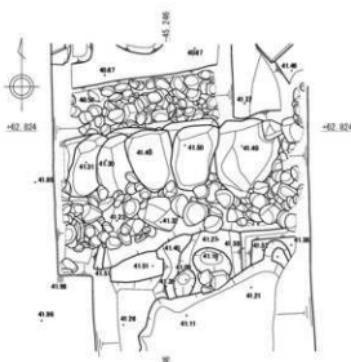
北端部西壁断面図

第132図 NS2区 調査区北端部断面図

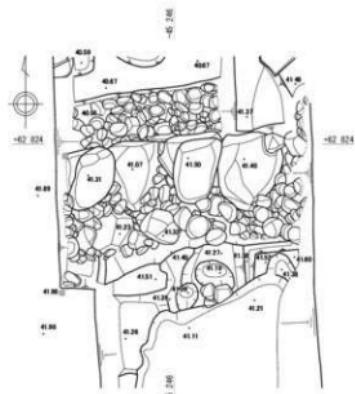
5-1/40 1m



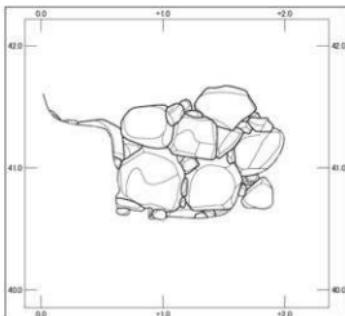
北面石垣(5120N)上段



北面石垣(5120N)中段



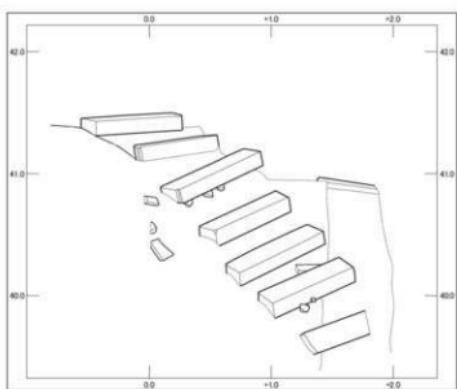
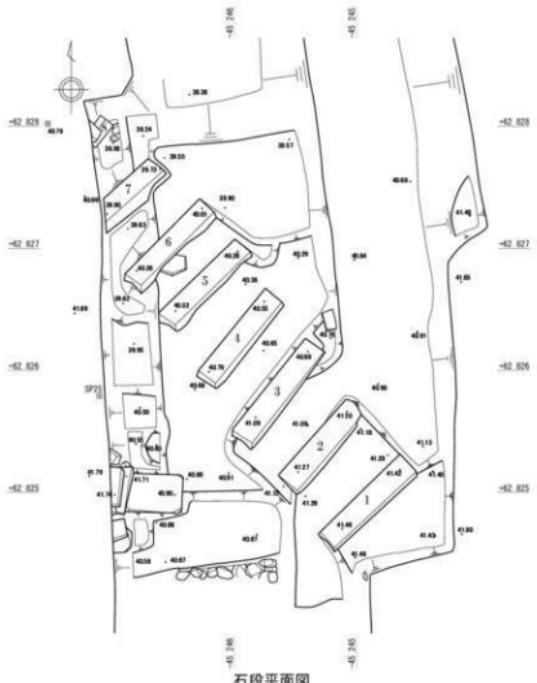
北面石垣(5120N)下段



北面石垣(5120N)立面图

第133図 NS2区 石垣5120N平面図・立面図





第134図 NS2区 石段平面図・立面図

0 5-1:40 1m

### 第3節 遺物

#### 1. 概要

本調査区からは、陶磁器・土器・瓦・石製品・金属製品が出土し、図示していないが、近代以降のガラス製品も見られる。以下に材質ごとに記述していくが、器種・胎土などの分類、年代観などは、本丸附段調査区に準じている。

#### 2. 陶磁器・土器（第135～159図、第21～25表）

本調査区から出土している陶磁器は、近代に入って旧陸軍が使用したと思われるものを除けば、16世紀末から17世紀の中国製品、国内産陶器が主体で、肥前磁器染付はほとんど見られない。また、SW2区・NS2区からは17世紀の土師器皿がまとまって出土している。

##### SW2区（第135図～第137図P238）

図示した遺物はほとんどが近世整地土からの出土である。近世整地土からは中国磁器青花碗・肥前陶器絵唐津皿などのほかに、17世紀前葉から中葉の土師器皿が多数出土している。

P224～P226は中国の磁器青花碗・小碗である。P224は端反り碗の口縁片で景德鎮窯系の製品であろうか。P225は碗底部で、見込に二重圈線と花纹がある。高台はやや内傾し、釉剥ぎした疊付に砂が付着している。16世紀の景德鎮窯系の製品である。P226は景德鎮窯系磁器青花小碗の口縁片で、16世紀の製品である。P227は17世紀の漳州窯の大振りの碗と思われる口縁片で、陶胎に白泥を塗った上に文様を描いている。P228は肥前陶器絵唐津皿で、口縁は欠損している。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P229は肥前陶器鉄釉袋物底部である。内面には渦巻状の強いナデが残り、透明感のない鉄釉が掛かっている。外底面はケズリによってわずかに高台状にしているが、糸切り痕が残っている。16世紀末から17世紀初頭の製品であろうか。P230は織部焼の持ち手である。上面には格子状の刻みがある。P231は肥前陶器播鉢底部片で、内面は御目（2.6cm、9本以上）が密に入り、胎土目跡が2か所見られる。外面は立ち上がり部に御目と同じ櫛状具の圧痕があり、盛り上がっていった粘土に重ね焼き時に下の播鉢の御目がついたものかと思われる。外底面にうっすらと見える櫛状具の痕は、櫛状具で撫でた後、回転ケズリで消している。

P232～P236は17世紀前葉から中葉の土師器皿で、P233が大型である以外は中型である。P232は平底からあまり開かずに立ち上がり、内底面と体部の境は凹線状のナデが内底のナデを切るように巡っている。外面の口縁と体部の境には明瞭な稜線が入り、口縁の摘み上げは殆ど見られない。遺存部分は全部に油煙痕がある。P233は大型で平底から体部が短く立ち上がり、外底面には板目状圧痕が見られる。内底面は不定方向ナデと思われ、体部との境の稜線は体部側にある。口縁外側は強くナデで、体部との境に明瞭な稜を持つ。口縁は内齊しておらず、遺存部分では口縁全部に油煙痕がある。P234はわずかに板目状圧痕が残る平底から体部が短く立ち上がり、内底面と体部の境の稜線は体部側にある。口縁は端部に面を作り、外面は強くナデで体部との境に明瞭な稜を持っている。口縁には油煙痕がある。P235は平底で、体部は緩やかな「く」の字状に開き、口縁端部はわずかに内齊するように摘み上げている。摩耗のため内底面の調整は不明であるが、体部のヨコナデが底面の調整を切っている。胎土は砂粒を多く含んでいる。P236は中央部がやや上がった平底で、外底面は指押えである。体部は緩やかな「く」の字状を呈し、口縁は内齊するように摘み上げている。内面は底面の調整を体部のヨコナデが切っている。胎土には海綿骨針をわずかに含んでいる。

P237・P238は出土層位が不明であるが20世紀の製品である。P237は白磁筒丸碗である。胎土に気泡を多く含んでいるためか、小さな凹凸が多く見られる。P238は硬質陶器の小皿で、内面に青と赤の圈線が11本描かれ、外底面に緑色のプリントで「日本硬陶」の銘がある。金沢市長町にあった日本硬質

陶器会社（現在の『ニッコー株式会社』）の製品である。

#### SW3区（第137図P239～P241）

P239は北東隅断割から出土した中国景徳鎮窯系かと思われる磁器青花鉢の口縁片である。P240・P241は表上から出土した磁器徳利で、P240は頸部と肩部に暗緑色の帯状の圓線を巡らせて、搔き落とし技法で簡略な松竹梅の文様を描いている。外底には戦時統制番号「岐730」が陰刻されている。P241は外側面に平行沈線が巡り、口縁と底部付近に暗緑色の圓線が施され、外底面には戦時統制番号「岐792」が青でプリントされている。どちらも戦時統制番号から、1940年代の美濃の製品と分かる。

#### SW4区（第138図～第144図P258）

SW3区とSW4区の境にある擾乱および現代土坑からは19世紀末から20世紀の陶磁器が多く出土している。P242～P244は磁器である。P242は染付端反碗で、高台脇には草文、外側面は花文と棕櫚の葉のような文様が交互に描かれている。被熱しているのか煤が断面にも付着している。明治前半の瀬戸・美濃の製品であろうか。P243は色絵金彩の湯呑碗である。白濁した釉の上に、赤・緑・黒・金と白泥の斑点でつる草のような文様を描いている。高台内に朱書きで「加賀九谷」の銘があり、20世紀の再興九谷の製品である。P244は染付小碗で、丸文の中に「福」・「寿」の文字が書かれている。

P245はSK07から出土した磁器筒丸碗で、口縁付近に緑色の二重圓線が巡る国民食器と呼ばれるものである。高台内に緑色のプリントで「岐413」の戦時統制番号があるので、美濃の製品と分かる。

P246はSD01から出土した陶器通い徳利で、鉄絵で文字が書かれている。「京口」「百口口 二升入」ともう一例ある。図示していないが同様の通い徳利が出土していて、それに「電話」の文字があることから電話番号が書かれていたと思われる。

SW4区北擾乱からは主に19世紀後葉の陶磁器・土器が多数出土している。P247～P250は磁器染付端反碗で、見込みは寿字文である。酸化コバルトを用いているので、19世紀後葉以降の瀬戸・美濃の製品であろう。P251も瀬戸・美濃の磁器染付端反碗であるが、見込み文は異なる。焼成不良のためか、胎土は灰白色で染付の発色も悪い。19世紀後葉以降の製品である。P252は瀬戸・美濃の磁器染付飯碗である。酸化コバルトで花と葉を描いている。高台内には手描き染付で、角福のような銘がある。P253は磁器染付端反り形小碗で、外側面には隸書文を描き、見込み文もある。再興九谷の若杉窯の製品であろう。P254・P255は施釉土器鉢で、小型の火鉢であろうか。外底面から立ち上がり部はケズリ、ほかはヨコナデで、全面に鉛釉が施されている。P255の胎土はP254より砂粒を多く含み、赤色粒も含んでいる。この擾乱からは、ほかにも同様の火鉢が4個体出土している。P256は陶器蘭引の上半部のみである。白泥と鉄絵で梅花文が描かれている。内面は口唇部から頸部までは露胎だが、それ以下は透明釉が掛かっていて、一部砂が付着している。

P257は中央の表土・擾乱から出土したもので、肥前磁器染付筒碗の体部片である。被熱により内外面とも釉が沸いている。P258は擾乱から出土した国民食器と呼ばれる口縁に緑色の2本線が巡る蓋で、形状から井の蓋と思われる。上面摘み内に青色の上絵付で「将集」の銘がある。第207図ではSW区にあたる地点に将校集会所がある。そこで使用されたものであろうか。北表土にも、同様の蓋が出土している。

#### SW5区（第144図P259～第145図）

P259は19層から出土した瀬戸陶器灰釉内ハゲ皿である。被熱により釉は沸き、内外面全体に煤が付着している。16世紀後半の製品である。P260は肥前陶器皿で、16世紀末の製品である。見込みに胎土目跡が4か所ある。口縁端部に油煙痕があるので、灯明皿に転用していたと思われる。P261～P263は土器師皿である。P261は厚手で、見込みと体部の境に強い凹線状のナデが入っている。P262は大型で、胎土は灰白色だが、表面は内外面全体が暗褐色になっている。平底で体部はあまり開かず、外面は丸く立ち上がるが内面は底部との境が明瞭である。P263は平底で外底面には板目状压痕があり、口縁外面は強いナデにより体部との境に強い稜がある。内底面はナデられているが指押えによる凸凹が

残っている。口縁端部は丸く收められている。P262は17世紀前葉の、P263は17世紀中葉の製品であろう。3点とも遺存部分には全部、口縁内外面ともに厚い油煙痕がある。

#### SW6区（第146・147図）

P264は攪乱から出土した瀬戸・美濃磁器染付端反小碗である。外面に捺り文が描かれ、輪高台で疊付は釉剥ぎされている。P265は陶器折線皿である。小型品で、内面中央を除き全体にオリーブ色の灰釉が掛けられている。16世紀後半の瀬戸・美濃の製品である。P266～P270は32層より下部から出土している。P266は陶器擂鉢の口縁小片である。焼成不良で外側は黄色味を帯びた灰白色、中は灰色に近い灰白色のサンドイッチ状になっている。御目は幅3cmで、11本ある。越前の製品であろうか。P267～P269は土師器皿である。大型で平底、あまり開かず<sup>2</sup>に立ち上がり、口縁は内面に回線が巡るように摘み上げている。見込みには櫛描き状の一方向条線があり、それを切るように体部のヨコナデが入っている。P270も土師器皿である。中型で、底部中央が上がるへそ皿風になっていて、板目状圧痕がわざかに残っている。口縁は内面が沈線状になるように摘み上げ、外面には口縁と体部の境に稜線が入っている。いずれも17世紀初頭の製品である。

#### NS1区（第148～151図）

P271は表土から出土した磁器皿で、胎土は陶器質に近い。外面は染付がなく、赤の上絵付で2本の園線と3つに区画する2本1組の縦線、アラビア数字の「2」が描かれている。見込みにはわざかに降灰が見られる。19世紀後葉の瀬戸・美濃の製品であろう。P272は石垣（5120N）裏込めの栗石中から出土した磁器染付鉢である。内面上方に酸化コバルトの銅版転写で旧陸軍の星章がプリントされている。外底面には製造会社である名古屋製陶所の「名陶」の染付銘がある。P273・P274は土師器皿である。P273は小型で、平底だが体部との境に稜は持っていない。外面は指壓痕が残るが、内面は不定方向のナデできれいに調整されている。口縁端部には端面が形成されているが、伸長は顕著ではなく、口縁部に油煙痕がある。17世紀中葉の製品であろう。P274は小型土師器皿である。平底であまり開かず<sup>2</sup>に立ち上がり、口縁端部は内弯している。内面は底部と体部の境に回線状のヨコナデが巡っている。17世紀前葉の製品であろう。

P275～P290は空堀覆土からの出土である。P275は中国景德鎮窯系磁器青花鉢である。薄手で呉須の発色もいい。P276は中国磁器青花碗の体部小片である。呉須の発色は悪い。P277～P279は陶器碗である。P277は口径に対し器高が高く筒丸形に近い鉄釉丸碗で、高台は丸味を帯びていて、高台内側の底部が厚くなっているため、高台は外側では高く、内側では低くなっている。1610年代後半の美濃の製品である。P278は肥前の鉄釉碗である。口縁部が欠損しているので明確ではないが、体部下間に丸味を帯びる天目形であろうか。被熱により釉は内外面とも白濁している。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P279は肥前の鉄釉碗口縁片である。口縁はほぼ直立し、端部の稜がはっきりしている。P280～P282は陶器皿である。P280は肥前灰釉皿で、内面は体部と底部の境にはっきりした稜を持つ段があり、口縁端部は摘み上げている。見込みには胎土目跡が2か所残っている。P281は越中瀬戸の印花文皿の底部である。見込みは使用により平滑になっていて、菊花の印花文が1個ある。口縁部には釉が掛かっていると思われるが、欠損しているために釉は不明である。P282は灰釉丸皿である。高台は小さく、内外面とも被熱により釉が白濁している。P280は17世紀前半の、P281・P282は16世紀末から17世紀初頭の製品である。P283は美濃陶器御深井袖鉢の口縁である。口縁は逆「く」の字状を呈し、口縁帶には細い園線と縦の沈線、その下には、縦の回線が施されている。P284は越中瀬戸の陶器擂鉢口縁片で、内外面に薄い鉄釉が掛かっている。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P285は肥前陶器鉄釉擂鉢の口縁片である。小型の擂鉢であろうか。鉄釉は内面の口縁端部と外面上半に掛かり、外面上半には強いケズリが入っている。御目は幅2.8cm、8本以上である。

P286～P290は土師器皿である。P286は小型の土師器皿で丸底である。内面と口縁外面はヨコナデで、

口縁端部の摘み上げは明瞭である。外面には指頭圧痕が残っている。P287～P290は中型土師器皿である。P287は平底で、外底面には板目状圧痕があり、見込みのナデは体部のヨコナデを切っている。口縁端部は内湾するように摘み上げている。17世紀前半の製品である。P288は内面底部と体部の境に凹線状のナデが巡り、体部のヨコナデへと続いている。外面には掌圧痕がある。口縁端部はわずかに摘み上げている。油煙痕が2か所ある。P289は見込みの一方向条痕ははつきりせず、内面底部と体部の境の凹線状のナデは弱く、体部のヨコナデに続いている。底部外面は指頭圧痕が残り、口縁部に油煙痕が3か所ある。歪みが著しい。P290は内面の一方向条痕は不明だが、外面は指押えである。口縁に1か所油煙痕がある。P288～P290は17世紀前葉の製品である。

#### NS2区（第152～159図）

NS2区ではⅠ層からは近代の陶磁器が多く出土しているが、Ⅱ層以下では土師器皿が主体であり、陶磁器は多くない。P291は表土から出土した瀬戸・美濃の磁器染付皿である。蛇の目凹型高台で、旧陸軍が使用したと思われる皿に使用されるものと同タイプである。P292は8層から出土した硬質陶器の井である。口縁外面に青と赤の圍線が17本描かれている。外底面に緑色のプリントで「日本硬陶」の銘があり、日本硬質陶器会社の製品である。

P293～P316はⅡ層から出土している。P293は15層から出土した中国景德鎮窯系磁器青花皿の底部片である。高台は断面三角形で、端部は釉剥ぎしているが砂が付着している。P294は9～11層から出土した肥前陶器三島手皿底部片である。釉は透明感があるが、被熱により一部白濁している。P295は12層から出土した陶器灰釉皿の底部片である。釉は透明感があり、細かい貫入が入っていて、疊付にも掛かっている。

P296～P319は土師器皿である。P296・P297は9層から出土した薄手大型土師器皿である。平底で体部は緩やかな「く」の字状で外に開いている。P296は見込み「の」の字状ナデ、P297は見込み一方向ナデで、口縁端部の摘み上げはほとんど無く、口縁に油煙痕がある。17世紀中葉の製品である。P298は11層出土から出土している。丸味を持った底面から上へ立ち上がった後、外へ開き、口縁内部の端面の形成は明瞭ではなく、口縁外側に稜を持つている。見込みは一方向ナデで、体部のヨコナデがそれを一部消すように入っている。口縁部には遺存部分全周に油煙痕があり、内外面全体に黒色の付着物（煤であろうか）がある。P299・P300は9～14層出土で、17世紀後葉の製品である。P299は薄手で、精良な胎土で丁寧な作りである。底部は平らにはなっていないが、体部との境に稜を持ち、体部は外反している。口縁端部の摘み上げは明瞭ではないが名残を残している。見込みは「の」の字状ナデで、体部のヨコナデがそれを切っている。P300はやや平底で、体部はわずかに「く」の字状に外へ開き、口縁端部の摘み上げも認められる。見込みは「の」の字状ナデで、体部との境に浅い凹線状のナデがある。P301は11～13層出土である。薄手大型で、底部は丸底に近くなるが、体部との境は比較的明瞭で、体部は外反するように開き、口縁で端面を形成している。P302は13層から出土している。丸底で、底部と体部の境ははつきりしない。体部は外反するようにして大きく開き、口縁端部の摘み上げは見られない。見込みは「の」の字状ナデで、外面のナデは口縁端部付近のみになる。遺存部分には油煙痕は見られない。

P303～P310は14層から出土している。14層からは17世紀中葉から後葉の土師器皿が大量に出土している。P303が17世紀後葉、ほかは17世紀中葉の製品である。P303は平底に近く、体部との境は比較的明瞭で、体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁端部の摘み上げは、わずかに名残がある程度である。口縁部には油煙痕があり、そのうち1か所は幅5.5cmにわたって墨を塗ったようになっている。P304・P305は一括して出土したもので、ほぼ完形である。やや丸底で体部は真っ直ぐ開き、見込み凹線状のナデ、口縁の摘み上げはない。P304は口縁の2/3に、P305は口縁の3/4に油煙痕がある。P306は体部が外反し、口縁端部はわずかに摘み上げている。P307と同じだが、やや丸底に近い。内面

は一方ナデである。口縁の1/3程度に油煙痕がある。P307は平底で、体部との境は比較的明瞭、体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁は内湾するように端部を摘み上げている。P308は体部がやや開いている。P307と同じだが、やや薄手で、体部の外への開きはP307より少ない。口縁には油煙痕がある。P309はP307と同じだが、体部はP308より立っている。口縁端部の摘み上げは見られず、口縁に油煙痕がある。P310は灰白色で精良な胎土を持っている。薄手で丸味のある平底で、体部との境は比較的明瞭であり、底面には板目状圧痕がわずかに認められる。体部はP307～P309ほどには開かず、緩やかな「く」の字状に外へ開いた後、口縁は内湾するようにして摘み上げている。見込みは一方ナデが施され、口縁に油煙痕がある。

P311～P314は15層から出土して、P312が17世紀中葉かと思われるほかは17世紀後葉の製品である。P311は、体部が緩やかに立ち上がり外に開くが、口縁内面の端面は明瞭ではない。内外面ともヨコナデしている。P312は大型土師器皿である。立ち上がりは緩やかで丸底に近いが、板目状圧痕があり、底部中央がやや厚くなっている。底部と体部の境ははっきりしないが、体部はヨコナデされている。体部は外反するように大きく開き、口縁には端面がわずかに作られている。口縁には油煙痕がある。P313は中型土師器皿である。底部は丸味を帯びた平底で、体部との境は明瞭な稜は持たないものの明確である。内面も底部と体部の境には弱い圓線状の凹みがある。体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁はわずかに摘み上げの名残を残している。口縁部に1か所油煙痕がある。P314は、底部は丸底化し、体部との境は不明瞭になる。内面も底部と体部の境にはわずかな凹みが見られるだけである。体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁の摘み上げは認められない。口縁端部に油煙痕がある。P315・P316は18層から出土していて、どちらも薄手で平底である。P315は底部と体部の境は比較的明瞭で、内面は体部側に稜を持ち、口縁端部は内湾するように摘み上げている。胎土は精良でナデも丁寧、わずかに雲母を含んでいる。P316は底部と体部の境がはっきりしてきて、体部は大きく開かず、口縁端部は内湾するように摘み上げている。胎土は精良である。どちらも17世紀中葉の製品である。

P317は15層～21層上層から出土した16世紀の中国景德鎮窯系磁器青花碗、いわゆる「蓮子碗」の体部片で、釉は白濁している。漆縫の痕跡がある。P318は瓦溜から出土した肥前陶器灰釉碗である。口縁は欠損しているが、径が小さく細長い形の碗で、内底面と体部の境には段を持っていて。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P319は瓦溜から出土している薄手大型土師器皿である。やや平底で、体部は外へ開いている。見込みは一方ナデで、口縁端部には摘み上げがわずかにある。

P320～P329はIII層から出土している。P320は24層から出土した中国景德鎮窯系磁器青花の輪花皿の口縁小片である。内面には蓮弁文と思われる文様がある。P321・P322は34層から出土している。P321は肥前磁器染付碗の底部である。体部径に対してあまり大きくなない高台は、疊付のみ釉剥ぎされ平らになっていて、砂が付着している。文様は網目文であろうか。P322は肥前陶器鉄絵皿の口縁片である。16世紀末から17世紀前半の製品であろう。P323～P329は土師器皿で、P328は31層、P329は29～32層、それ以外は24層から出土している。P323は体部が外反し、やや平底で、体部との境は明瞭ではない。外底面には板目状圧痕のようなものが見られる。口縁に油煙痕が1か所ある。P323・P326は17世紀後葉の製品であろう。P324は薄手で、平底から体部は直線的に外に開いている。胎土は精良で粉質である。17世紀中葉の製品である。P325は小型土師器皿である。小さめの平底で、内面は底部と体部の境に凹線状のナデが入る。体部は緩やかな「く」の字状に開き、口縁端部はわずかに摘み上げている。胎土は精良でナデも丁寧である。P326は薄手で、外底面は底部と体部の境が不明瞭になり、板目状圧痕かと思われるものがわずかにみられる。内面は底部と体部の境に凹線状のナデがわずかにあり、口縁は内外面ともきれいにナデられているが、摘み上げは見られず、油煙痕がある。P327はやや平底から丸く屈曲して立ち上がり、口縁は外反するが、端部を少し摘み上げている。内面から口縁外面はヨコナデを施しているが、特に口縁外面は強くナデられているので、体部との境に明瞭な稜を

持つ。胎土は硬質で、砂粒を多く含んでいる。17世紀前葉の製品である。P328は薄い中型土師器皿である。平底で体部は緩やかな「く」の字状に外へ開き、口縁は摘み上げている。内底面は一方向ナデが施されている。精良な粉質胎土で、口縁に油煙痕がある。17世紀中葉の製品である。P329は小型土師器皿である。口縁端部の摘み上げは無く、器厚9mmと厚手で、胎土は粉質である。17世紀初頭の製品であろうか。

P330・P331はIV層から出土している。P330は瀬戸・美濃の陶器灰釉皿底部片である。内外面に透明感のあるオリーブ灰色の釉が掛かっている。P331は土師器皿である。凸凹した平底で、そのまま丸く立ち上がるため体部との境は明瞭ではない。外面は口縁部のみ強くナデられているので、体部との境に強い稜を持つ。内面は底部と体部の境に、弱い凹線状のナデが入っている。口縁端部は内湾するようすに摘み上げている。胎土は砂粒を多く含み、海綿骨針・雲母も含んでいる。17世紀初頭の能登の製品であろうか。

P332は空堀覆土上層出土の中国景德鎮窯系磁器青花皿の底部片である。高台内には染付の二重圓線があり、平行線状の擦痕が多くある。

### 3. 瓦（第160～174図、第26～28表）

本調査区からは粘土瓦・石瓦が多数出土している。石瓦については石製品の項で述べることとして、ここでは焼瓦が主体を占め、若干の釉薬瓦・越前赤瓦を含む粘土瓦について地点ごとに記述していく。なお、胎土および瓦当文様の分類は第84～89図に依っている。

#### SE3区（第160図T041）

T041は両面に光沢のある黒褐色の釉が掛かる袖軒平瓦で、瓦当文様は九曜文である。

#### SW2区（第160図T042～T046）

図示したものは全て焼瓦である。T042は東側断割の近世整地土出土の軒平瓦である。胎土はA2で、厚手である。瓦当文様は三葉文Iと思われ、唐草文は左右で異なっている。T043は東側断割出土で、凸面側をきれいに調整し、凹面側はナデのみであるので、棟瓦か熨斗瓦と思われる。T044も東側断割出土で、器種は不明だが隅瓦であろうか。胎土は砂粒を多く含み、細かい空隙も多く、厚手である。T045は11層出土の丸瓦である。胎土はB1であろうか。厚手で、内面調整はコビキBと刺縫痕に棒状圧痕がわずかに見られる。T046は5層出土の熨斗瓦である。使用時には下になる凹面側は丁寧に調整されているが、上になる凸面側は未調整のままになっていて、側面に切断痕があるので、平瓦を半分に切っていると思われる。

#### SW4区（第161図T047～T049）

図示したものは全て光沢のある釉が掛かった釉薬瓦で胎土はIであり、近代以降のものと思われる。T047は銃弾廐棄土坑から出土した鬼瓦の一部で、胎土は赤橙色、両面に光沢のある黒褐色の釉が掛かっている。T048・T049は、表土・撓乱層から出土した軒棟瓦である。T048は、両面に光沢のある濃紫色の釉が掛かり、胎土は橙色である。瓦当文様は星文で、同タイプのものが石川門附属太鼓櫓の平成19年からの解体修理時に、少數ではあるが屋根に葺かれていた〔金沢城調査研究所2014c〕。T049は光沢のある黒褐色が両面に掛かり、胎土は暗赤褐色、瓦当文様は玉文IV類である。

#### NS2区（第161図T050～174図）

NS2区からは石瓦と共に大量の粘土瓦が出土している。

T050・T051は越前赤瓦の軒平瓦で、T050は土坑1から、T051は土坑3から出土している。瓦当文様は半葉文である。胎土は硬質緻密で縞状を呈し、瓦当面と上面・側面に鉄漿が掛かっている。T050はT051より厚手である。T052は土坑3から出土した棟瓦で、ほぼ完形である。光沢のある黒褐色が全面に掛かり、胎土は橙色で5Iであろうか。山部尻側に釘穴が1個ある。

T053～T060は軒丸瓦で、T053はII層、T054はII・III層、T055～T058はIII層、T059は斜面下造成土、T060は斜面瓦溜から出土している。T053は梅鉢文II類かIII類の焼瓦で、花弁は丸く盛り上がっている。T054～T059は巴文の焼瓦で、同范と思われる。瓦当文様は巴文II-1c類で、珠文は16個、巴の尾は細く稜を持っている。瓦当面に木型の木目が強く残り、T055・T057・T058は木型を当て直したのか、少しずれている。内面調整はコビキBと布压痕が見られ、一部縫合せ痕のようなものもある。胎土がT054・T056・T059はA2、T055・T057・T058はC2と異なっているのは、焼成の違いであろうか。T060は越前赤瓦で、遺存部分は全部鉄漿が塗られている。瓦当文様は巴文II-2a類で、盛り上がった珠文とやや扁平な巴文からなっている。瓦当面と体部内面には自然釉が掛かっている。

T061～T065は焼軒平瓦である。瓦当文様は中心飾りの無いものもあるが、三葉文VI類と思われる。左右の唐草の形が異なり、三葉文の向かって右上に短い縦線があるなど、全て同范と思われる。瓦当面の後ろの屈曲部に櫛目が残るなど成形技法も同じであるが、胎土はT061～T063がC2、T064・T065がA2と異なっている。T061・T062がII層から、ほかはIII層から出土している。T066は光沢のある黒褐釉が掛かった軒桟瓦の小丸部で、表土から出土している。瓦当文様は「卍」で、胎土は灰褐色の5Iであろうか。

T067～T087は丸瓦で、T067が越前赤瓦である以外は全て焼瓦である。T069がI～II層、T067・T070～T076がII層、T068・T078～T081が斜面瓦溜、T082～T086がIII層、T087が斜面瓦溜下から出土している。T067は被熱のためか外面が灰色を呈し、一部に自然釉が付いている。胎土は硬質緻密で縞状を呈し、内面調整はコビキBと刺縫痕で、体部上面に径2.3cmの釘穴が縦に2個あけられている。T068～T087は、胎土はT074・T084・T085がC2、T080がB1、T081～T083とT086・T087がA2である以外はB2であり、内面調整はコビキBと布目痕・刺縫痕があり、棒状压痕が見られるものもある。T071は体部上面中央に「○」の陰刻のようなものがある。そのほかに「○」の墨書のようなものが見られるものがあり、T075は側面に2個、T078は内側面割れ口近くに、T081・T083は外側に1個ある。T083は玉縁の先端を斜めのヘラケズリを入れて細くしている。T085は外面に煤が付着していて、一部平坦になっている。

T088～T102は平瓦である。T088は越前赤瓦の尻部で、搅乱1から出土している。胎土は硬質緻密だが縞状を呈し、所々に空隙がある。鉄漿を上面と側面に刷毛塗りしている。T089～T099・T102は焼瓦で、T100・T101は越前赤瓦である。T089～T092がII層から、T093・T094・T101・T102がIII層から、T095～T100が斜面瓦溜から出土している。T095はほぼ完形で、凹面は丁寧にナデて銀色を呈しているが、凸面は未調整でザラザラしている。正面に四角い焼台の痕跡があり、側面には「○」の墨書がある。T096は凹面にはナデの横方向の線状痕が残り、凸面には縦の刷毛目状の調整痕がわずかに見える。T100は胎土は硬質で白い縞が入り、凹面と正面のみに薄い鉄漿が塗られている。T101は胎土は硬質緻密だが強い縞状を呈し、わずかに空隙がある。鉄漿を凹面と側面に刷毛塗りしている。

T103・T104はII～III層から出土している越前赤瓦の熨斗瓦である。T103の胎土は硬質で縞状を呈する。側面は両側ともきれいに調整され、凸面の1/3程度と一方の側面にだけ鉄漿が塗られている。凹面には櫛状具による平行沈線が引かれている。T104は切り口が波状を呈していて、平滑になっている。胎土は硬質緻密で大きな空隙がある。T105は焼瓦の右谷丸瓦で、ほぼ完形である。II層から出土していて、胎土はB1、内面調整はコビキBと刺縫痕がある。玉縁部近くには径1.7cmの釘穴が1個ある。T106はIII層から出土している焼瓦の左谷丸瓦で、内面調整はコビキBと布目痕が見られる。体部の玉縁側に焼成前に開けられた径1.4cm程度の釘穴があるが、両面とも縁が割れている。T107はII層から出土した焼瓦で、隅平瓦であろうか。T108も焼瓦で、掛瓦であろうか。水返しが付いていて、上面は丁寧にナデが施されている。斜面瓦溜から出土している。T109・T110は焼瓦の棟込瓦で、菊丸瓦の体部と瓦当面であろうか。T109は斜面瓦溜とII層から、T110は斜面瓦溜から出土している。T110は、瓦

当文様は菊花文で、手前に8弁、奥に8弁の16弁の菊花であろうか。

#### 4. 石製品 (第175 ~ 198図、第29 ~ 31表)

本調査区では、NS2区から石製の瓦がまとまって出土している。笏谷石と思われる緑色凝灰岩をツル・チョウナなどの工具を用いて加工しており、福井県丸岡城の天守閣に葺かれている石瓦と似ているが、丸岡城のものはコタタキでチョウナ痕を丁寧に消しているが、金沢城のものはチョウナ痕が残るなど、やや粗い作りに見える。以下に、器種ごとに述べていく。なお、図版において実測図中に工具痕を描き入れたものと拓本を添付したものがあるが、遺存度の高いものなど一部にのみ工具痕を描き入れたものであり、工具痕の強弱ではない。また、写真的色調にはバラつきがあり、必ずしも遺物の色を正確に表現しているものではないことをお詫びしておきたい。

##### 鬼瓦・鳥衾 (第175図)

S006は鬼瓦、S007は鳥衾で、III層から出土している。鬼瓦は両側面に突起がある形で、上面が丸く割り込まれていてそこに鳥衾が乗ると思われる。中央には三つ葉葵の紋が陽刻されているが、茎が長い古い形であり、本来葉脈が描かれているところに丁子のようなものが陽刻されている。背面には、上端幅16.4cm、深さ2.8cmのわずかに下広がりの台形の窪みがある。良質の石材を使い、非常に丁寧に作られている。

##### 掛瓦 (第176・177図)

S008は軒桟瓦のようではあるが、ほかの桟瓦が左桟瓦であるのに対して山部の位置が逆であり、長さが短いので掛瓦（箕甲瓦とも呼ばれる）と思われる。III層から出土している。軒平部は文様区がS011・S012のように四角ではなく木瓜形であり、文様区の輪郭と唐草文の周囲を沈線状に窪ませている。中心飾りが欠損しているが唐草文はそれぞれが独立した形であり、S012と似ている。小丸部は扁平な左回りの巴文I類で、軒丸瓦と同じである。

##### 軒丸瓦・軒平瓦 (第178図)

S009・S010は軒丸瓦で、巴文が陽刻されている。2点とも左回りの巴文で、珠文が無いI類である。巴は扁平で頭部が小さく尾が幅広い、粘土瓦には見られないタイプである。福井県丸岡城の天守閣に葺かれている石瓦の軒丸瓦は巴文であるが、陰刻で巴の形は粘土瓦のものと似ている。

軒平瓦には、文様区の輪郭と唐草文の周囲を沈線状に窪ませているS011と、文様区全体を窪ませて、中心飾りと唐草文を浮き彫りにしているS012がある。S011は中心飾りが欠損しているので分類不明である。S012は唐草が1本ずつ独立していて、粘土瓦の三葉文VI類に似ているが、中心飾りは四葉である。軒丸瓦・軒平瓦ともIII層から出土している。

##### 丸瓦 (第179 ~ 185図)

S013 ~ S039は丸瓦である。図示したものは全てIII層から出土している。完形であれば長さ47cm、幅15cm、厚さ11cm程度になり、上面はチョウナによってきれいに調整されているがチョウナ痕が残り、下面はV字状に抉られていて斜め方向のツル痕が強く残っている。体部は玉縁側が厚く、正面側が薄いが、玉縁側の断面形で分類すると、厚く、側面が垂直に近く、下面の抉りはV字状で深いI類と、厚さがやや薄くなり、側面は横に開き、下面の抉りが浅くなる2類がある。玉縁部は直線的で稜を持つ山型のものをA類、緩やかなカーブの山型のものをB類、A類とB類の中間で、直線的だが中央に稜を持たないものをC類とした。S013 ~ S016は体部形状が1類で、玉縁はS016がC類であるほかはB類である。S017 ~ S033・S037は体部形状が2類で、玉縁はS020 ~ S022・S026 ~ S029がA類、S017 ~ S019・S025・S031・S032がB類、S023・S024がC類である。S038・S039は玉縁部が無く両端が平らに調整されている。棟込み瓦に似た形状であるが、断面形などが丸瓦の正面側と同様であるので、棟瓦に接する部分の丸瓦と考えた。長さは24.8cmと16.2cmと異なるが、幅は共に14.3cmでほかの丸瓦よりやや細い。

### 平瓦（第186～191図）

S040～S059は平瓦である。S040～S042がⅡ層、それ以外はⅢ層から出土している。上面と正面・側面はきれいに調整され、下面是頭部側1/3程度を平滑に調整し、残りはツル痕が強く残っている。S040は尻部側、S041は頭部側である。S042・S043は完形に近く、S042は全長54.8cm、広端遺存幅31.0cm、S043は全長55.35cm、広端幅30.7cmを測る。S046は上面尻部側1/2程度が湾曲せず水平になり厚くなっているので、面戸付平瓦と思われる。S047・S048は長さが31.2cmと23.2cmと短いので、棟瓦に接する部分と思われる。どちらも尻部側端面が斜めに調整されている。

### 棟瓦（第192図～第195図S070）

S060～S070は全て左棟瓦である。上面と正面・側面は平滑に調整されているが、下面是頭部側10～15cm程度と山部は比較的きれいに調整されているが、それ以外はツル痕が強く残っている。平部側縁は3cmほど肥厚し上面側に段を持ち、正面も3cm程度肥厚し下面側に段を持っている。完形であれば長さ55cm、幅40cm程度になるとと思われる。S065には下面に「△」の中に「・」の陰刻のようなものがある。ほかの石瓦が殆どⅢ層から出土しているのに対して、棟瓦はⅡ層や斜面上部流土から出土している。

### 棟瓦（第195図S071～第198図S078）

S071～S077は石段の雁木石に転用されている。四角い棒状で、側面は平滑に調整されているが、上面にはツル痕が残り、下面是深いV字形に抉られていてツル痕も強く残っている。片方の端部に幅19cm程度、長さ1～2cmの突起があるもの（S071・S072）と、突起のないもの（S073～S077）がある。長さはS072が86cmと最も短く、S071が102cmと最も長い。ほかは92～94cmである。幅は22cm程度、高さは12.5cm程度である。上面の中央部分は、角などが少し摩耗していて、石段として使用された痕跡と思われる。S078は正面と側面付近は平滑に調整されていて、ほかの部分にはツル痕が残っている。

### その他（第198図S079～S084）

S079は平らな板状の石製品で片側が厚くなっている。S080～S082・S084は平瓦のようなカーブがなく平らな石製品で、上面と側面は平滑に調整されているが、下面是ツル痕が強く残っている。S083は四角い穴が開けられた石製品で、石瓦の尻部付近に開けられた穴の周辺かとも思えるが、穴の位置が角に近すぎる所以、明確ではない。

### SW3区（第198図S085）

S085はSW3区西の旧陸軍施設側溝出土で、最大厚が11.7cmと厚く、形はややカーブしていて、凸面側は平滑に調整され、凹面側はチョウナ痕が残っている。

## 5. 金属・革製品（第199～206図、第32・33表）

本調査区ではSW4区の銃弾廃棄土坑から大量の金属製品・革製品が出土していて、ベルトとバックルのように一体化している製品も多いので、一括して記述していく。

M036～M070は、銃弾廃棄土坑から出土したものである。M036～M047は銃弾であるが、薬莢に2本の筋が入れられていることから、演習用で実際には発火しない擬製弾（演習弾）である。M036～M038は九九式小銃用か九二式重機関銃用の擬製弾である。M039は擬製弾が5発、ひとつの挿弾子に載った状態で、M040は4発、載った状態である。M041～M045はM036～M038より弾頭が尖っているので、三十八年式小銃の擬製弾である。M044は5発、M045は3発がひとつの挿弾子に載った状態である。M046・M047は、先端が丸く、その下に横に2本沈線が巡っている。三十年式小銃の擬製弾である。九九式小銃は昭和14年（1939）皇紀2599年に、九二式重機関銃は昭和7年（1932）皇紀2592年に制定された。三十八年式小銃は、明治38年（1905）に制定になり、翌年より生産開始、昭和16年（1941）まで生産された。常設師団への配備が完了したのは大正3年（1914）頃である。三十年式小銃は、明

治30年（1897）に制定され、主に日露戦争に使用された。7年間しか作られていないが、三十八年式が登場すると、第1次世界大戦にかけて中古兵器として輸出されたり、国内では各種学校の教練に使われた〔須川薰雄1995〕。M048・M049は機関銃へ送る弾薬を載せた真鍮製の保弾板である。九二式重機関銃、または大正3年（1914）に制式化された三年式機関銃の保弾板と思われる。M048は幅6.55cmの薄い真鍮製の板に3列に連続して穴を開けて片側に折り込んでいる。平らな側には一部布が付着している。M049も同様のもので、平らな面には漆喰のようなものが付着している。弾薬廃棄土坑からはほかにも多数出土している。

M050・M051は革製ベルトのバックル付近であろうか。バックルは鉄製である。M051はM055のベルトより細く、2枚縫い合わせていないようと思われる。M052は鉄製品で、ベルト等の長さを調節するための部品であろうか。M053・M054は革製品である。M053は拳銃の、M054はライフル銃のケースであろうか。袋状に縫い合わされている。M055は革のベルトの先端部分。2枚の皮を糸で縫い付けて、先端近くに銅製（一部鉄製）のスナップボタンが付いている。同様のものが大量に出土している。M056は革製品に銅製かと思われるのスナップボタンが付いている。M055のベルトと同様のものであろう。M057は革製品で、馬具であろうか。留め穴の開いたベルト状の革を縫い合わせてある。M058はハトメであろうか。M059は先端がU字状になり、何かに引掛けるような金具である。背面に今は外れているが布状のものが付着していた。騎兵銃用の負革の先端の金具であろうか。M060は鉄製品で、輪状のものに直径の位置に真っ直ぐな棒状と、それと直交する位置に跨ぐように曲げられた棒状のものがついていて、更にS字状のものが輪状の部分に引掛けるように付いている。馬具の一部であろうか。M061はT字状の鉄製品である。断面は円形で、綱棒の下端には小さい突起が2か所付く。スコップなどの持ち手部分であろうか。M062・M063は木製の瓢箪型の握り部分に、板状で先端が細くなっている鉄製品が付けられている。工具であろうか。M064・M065は、下部は鉤状になり、上部は薄い板を三角形の袋状に折って、糸で留めている。M066は鉄製品で、輪状の部分に通っているU字状の部品は断面が逆U字状になっているので、木・皮などにつけてフックが掛かる形になっていたのであろうか。M067は鉄製のチェーンで、三角形のものが繋がっている。現在は錆のために曲がったままであるが、図は伸ばした形に復元した。M068は四角い輪にバックルが付いたような鉄製品である。

M069は立方体の缶である。上面には一つの隅にネジ式の蓋が付くと思われる口がある。裏面には、×形の沈線があり、正面には、×形の沈線の中央に、おそらく商品名等が書かれた紙が貼られていたのであろう方形の凹みを作っている。凹みの下には、墨で「内容液ハ上ノ線以上ニ收容スヘカラス」と2行で書かれている。凹みの上部にも2文字の墨書があるようと思われるが判読できない。M070は直径9.3cm、高さ3cmの円筒形の合子である。蓋には梅の木と鳥（鳳凰か）が陰刻されている。陰刻部分に一部赤い色が見えており、赤彩されていたのであろう。包んでいたと思われる薄い布が一部残っている。蓋と身が接着した状態で、開けることはできないが、重いので、内容物が入っていると考えられる。

SE3区とNS1区の表土から出土した銅錢を図示した。M071は寛永通宝である。裏面には孔の対角線方向に線が入る。鋳キズであろうか。M072は1/2遺存しているが、表面の文字は読めない。M073～M085はNS2区から出土したものである。M073は、腕時計のベルトのバックルであろうか。裏面に「PATENT」と陰刻されている。M074～M076は銅釘である。体部断面は方形ないしは不整四角形で、頭部は略円形である。M077・M078は鉄釘で、頭巻き釘かもしれない。体部断面は四角形である。M079～M082も鉄釘である。M081には木質部が残っている。M083は目錠か。錆びているためにはつきりしないが、鉄製貝折れ釘が付いていると思われる。M084は鉄製品の持ち手部分であろうか。断面が扁平な隅丸方形の棒状のものの方の隅に穴が開いている。錆のために石が付着している。M085は鉛滓である。磁石にわずかに反応するので、鉄分が含まれていると思われる。



P224 200003-B015



P226 200003-B013



P225 200003-B011



P227 200003-B012



P228 200003-B014



P229 200003-D069



P230 200003-B016



P231 200003-D073



## SW2区

P224：南 整地土検出面

P225：東側断剖

P226・P227・P229：中央東西断剖 近世整地土

P228：整地土

P230：南端東西断剖

P231：東側断剖北 整地土



第135図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器1



P232 200003-D072



P233 200003-D070



P234 200003-D071



P235 200003-D067



P236 200003-D068



SW2区

P232：東側断面

P233・P234：中央東西断面 近世整地土

P235：南端 近世整地土

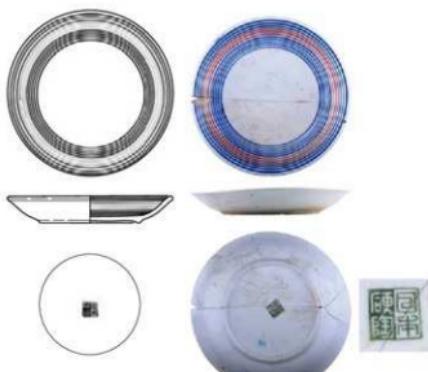
P236：整地土



第136図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器2



P237 200003-B023



P238 200003-B022



P239 200003-B021

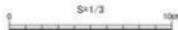


P241 200003-B019



P240 200003-B020

SW2区  
P237・P238  
SW3区  
P239：北東隅 断割  
P240・P241；西 表土



第137図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器3



P242 200003-B028



0



號



九加谷  
笑

P243 200003-B035



SW3-4区  
P242；境 挖乱、SW4区 北 挖乱、NS1区 表土  
P243・P244；現代土坑

P244 200003-B034

1 51/3 10cm

第138図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器4



P245 200003-B027



SW4区  
P245 ; SK07, 北 表土。搅乱  
P246 ; SD01

P246 200003-B024

S=1/3 : P245  
S=1/4 : P246  
S=1/4  
S=1/3 10cm

第139図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器5



P247 200003-B017



1/3



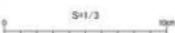
P249 200003-B038



P250 200003-B039

#### SW4区

P247～P249：北 捣乱  
P250：北 捣乱、SW3-4区 境 捣乱



第140図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器6



P251 200003-B037

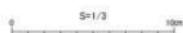


P252 200003-B040

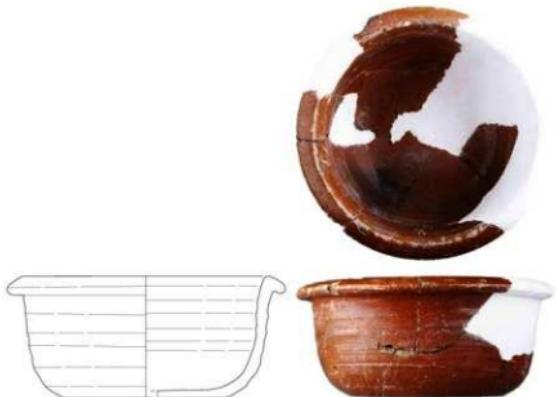


P253 200003-B018

SW4区  
P251～P253；北 模乱



第141図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器7



P254 200003-D074



P255 200003-D075



SW4区  
P254；北 挖乱。SW3-4区 境 挖乱。  
P255；北 挖乱

0 S=1/3 10cm

第142図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器8

SH4区  
P256：北 楷瓦

第143図 御宮出土遺物実測図 脚磁器・土器9



P256 200003-10941





P257 200003-B026

將集



P258 200003-B048



P259 200003-D062



P260 200003-D063



SW4区

P257：中央 表土・撲瓦

P258：撲瓦

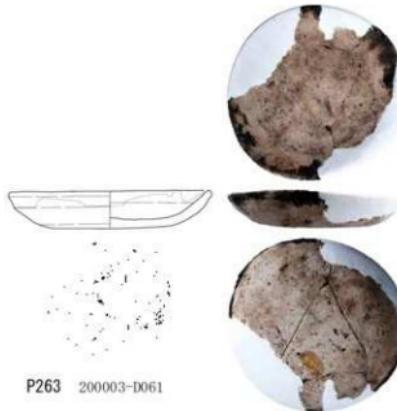
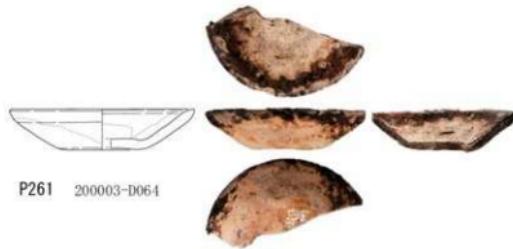
SW5区

P259：南壁（栗石面）19層

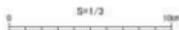
P260：東 南側断削中央

0 S=1/3 100

第144図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器10



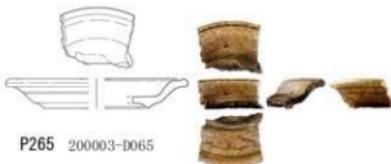
SW5区  
P261；東 南側断割  
P262・P263；中央 搾乱



第145図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器11



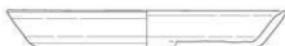
P264 200003-B031



P265 200003-D065



P266 200003-D059



P267 200003-D055



SW6区

P264：搅乱

P265：地点不明

P266：北 32層より下

P267：北 32層より下、北

S=1/3  
10cm

第146図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器12



P268 200003-D056



P269 200003-D057



P270 200003-D058



SW6区  
P268~P270; 北 32層より下

0 5m/3 10m

第147図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器13



P271 200003-B029

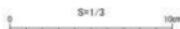


P272 200003-B033

NS1区  
P271；表土  
P272；5120N 裏达栗石中  
P273；5120N 北斜面 断割

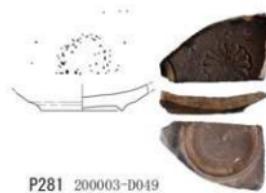
P273 200003-D034

第148図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器14





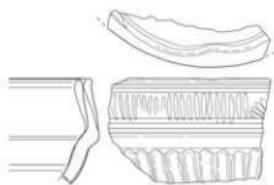
第149図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器15



P281 200003-D049



P282 200003-D041



P283 200003-D039



P284 200003-D038



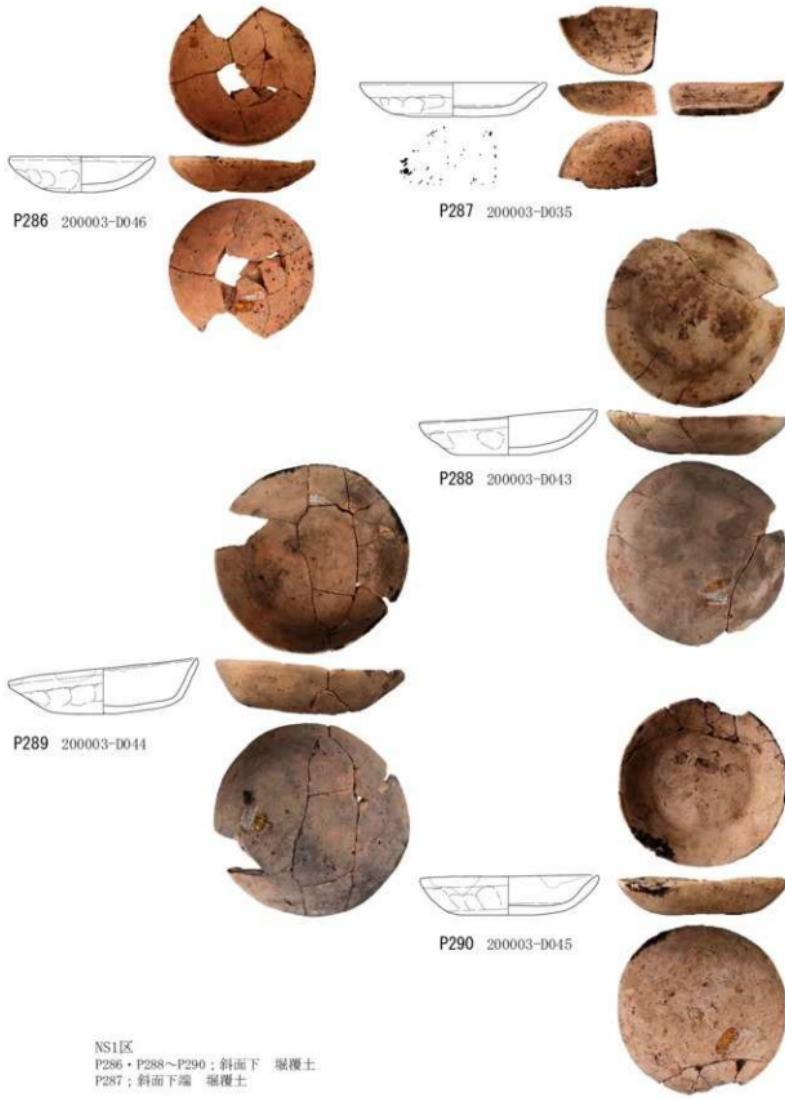
P285 200003-D042

NS1区

P281・P282・P285：斜面下 硬覆土  
P283・P284：斜面下端 断削 硬覆土

0 5cm 10cm

第150図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器16



第151図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器17

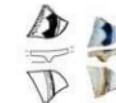
0 5=1/3 10cm



P291 200003-B032



P292 200003-B042



P293 200003-B05

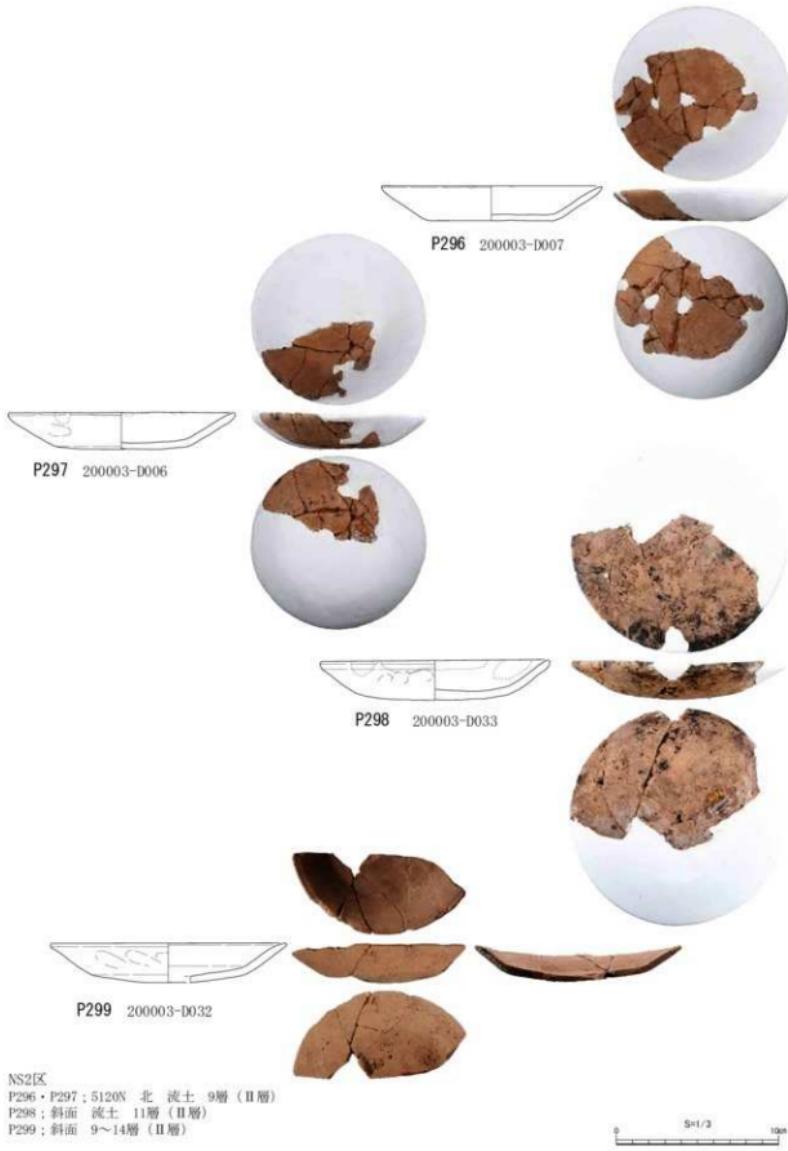


P294 200003-B004

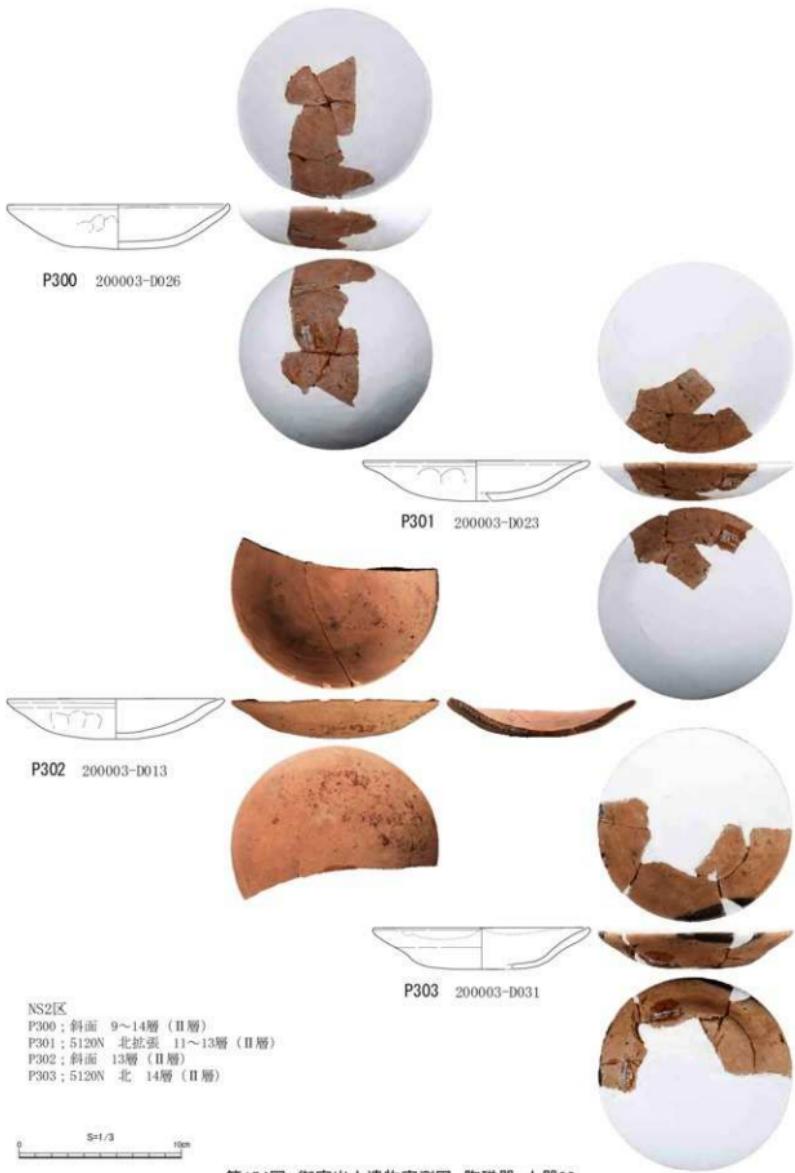
NS2区  
P291：表土  
P292：5120N 北坡层 8层（I层）  
P293：斜面 15层（II层）  
P294：5120N 北坡层 9~11层（II层）  
P295：5120N 北 12层（II层）

0 5=1/3 10cm

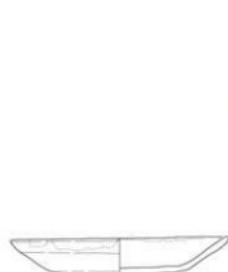
第152図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器18



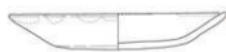
第153図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器19



第154図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器20



P304 200003-D002



P305 200003-D003



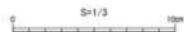
P306 200003-D009



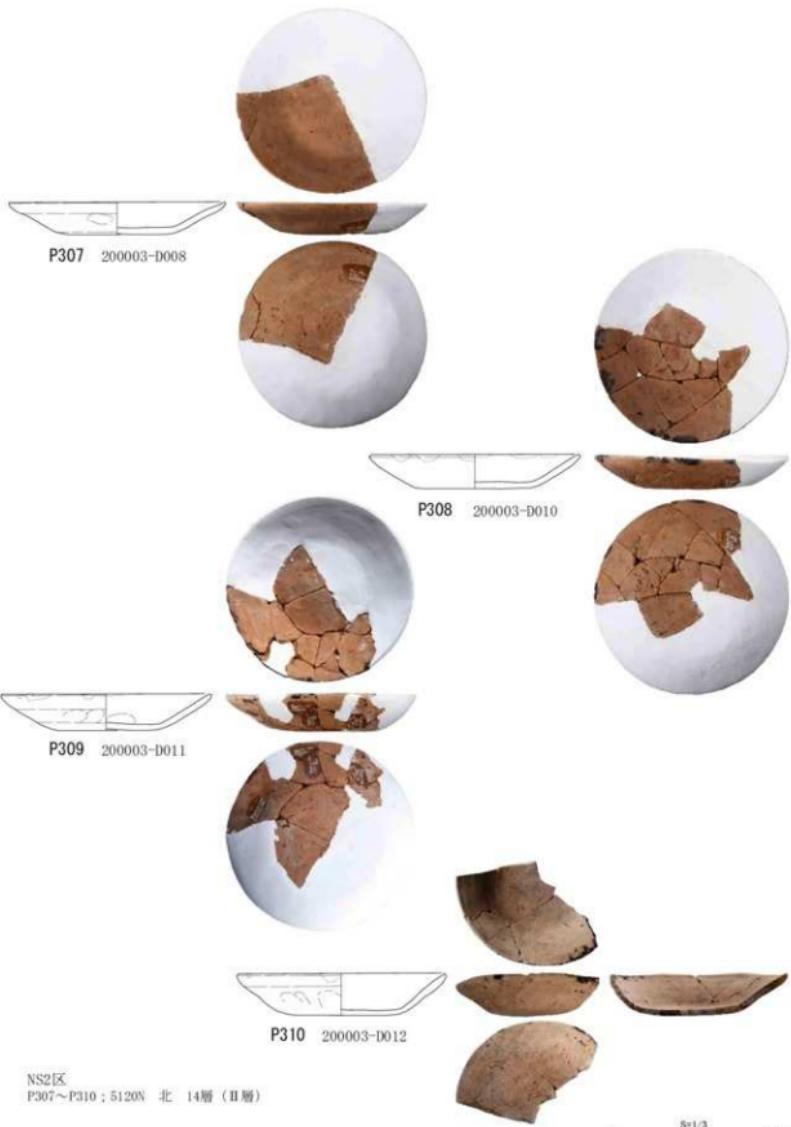
NS2区

P304・P305 : 5120N 北 流土 14層一括 (II層)

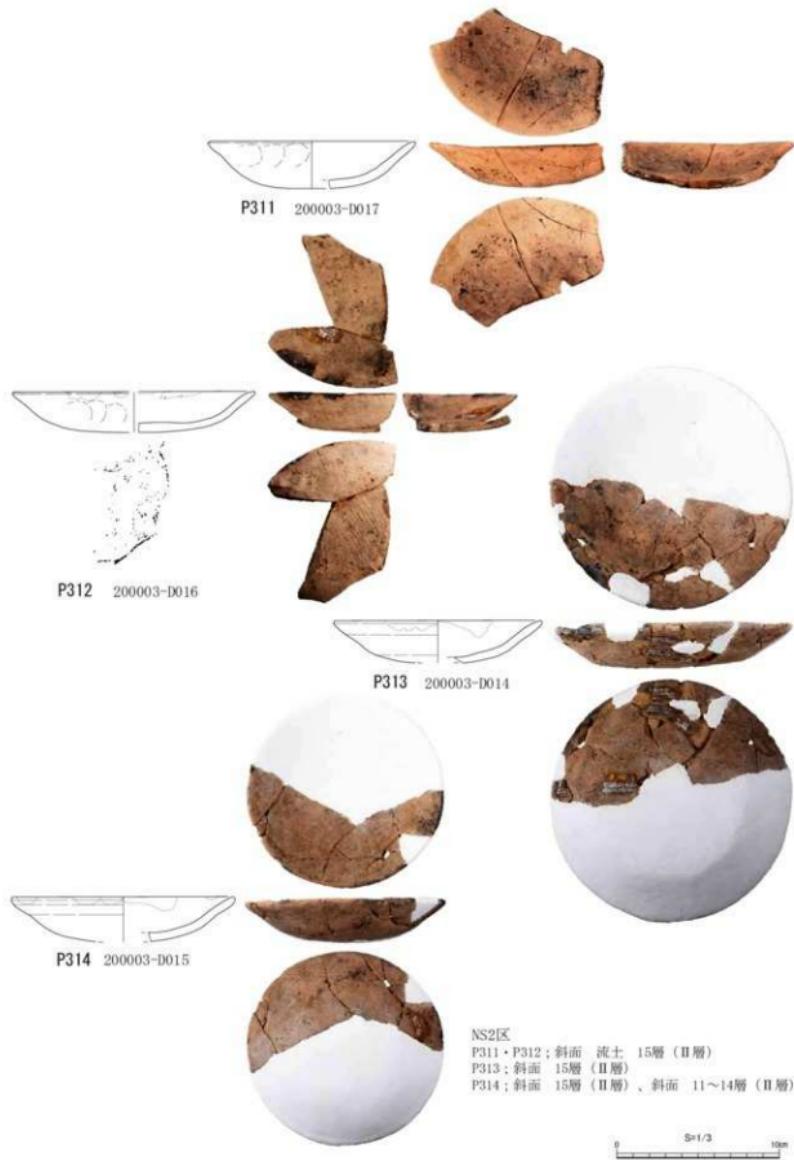
P306 : 5120N 北 14層 (II層)



第155図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器21



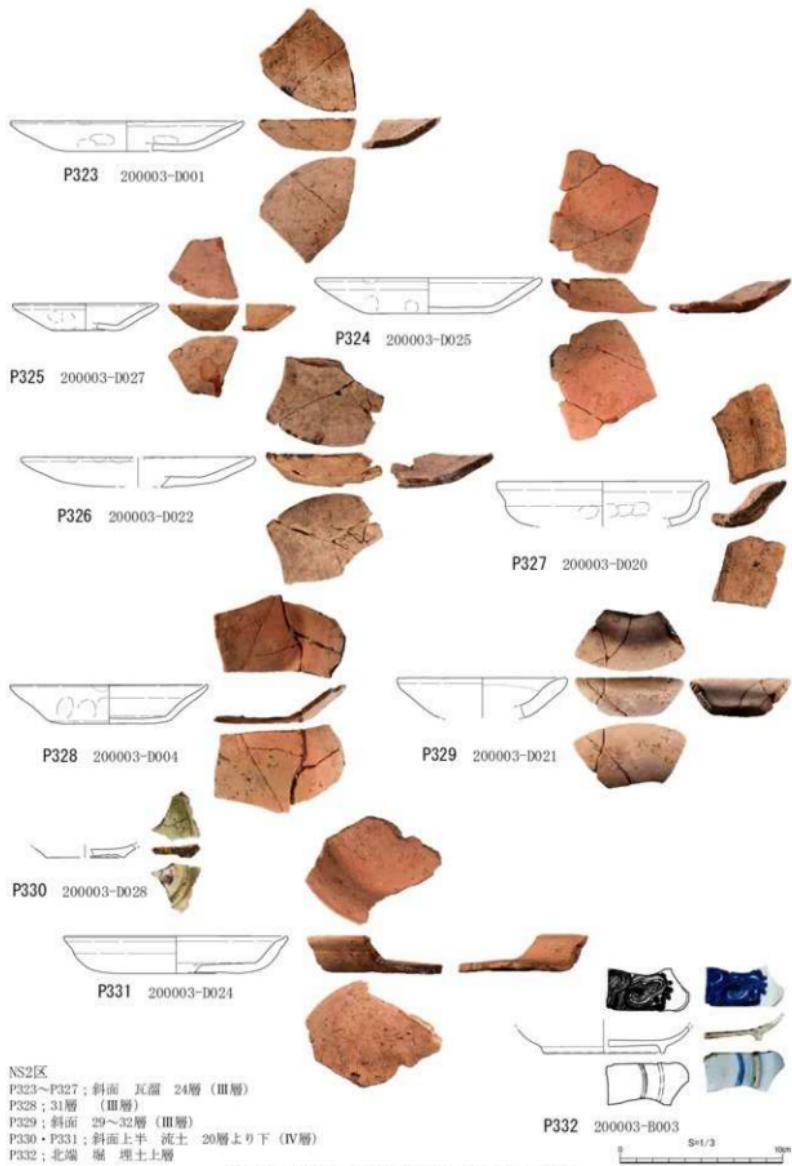
第156図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器22



第157図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器23



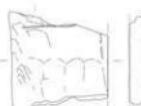
第158図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器24



第159図 御宮出土遺物実測図 陶磁器・土器25



T041 200003-D147



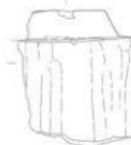
T042 200003-D080



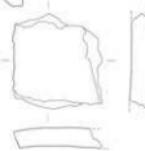
T043 200003-D146



T044 200003-D142



T045 200003-D143



T046 200003-D144

SE3区

T041：西半

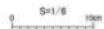
SW2区

T042：東側断割 近世整地土

T043・T044：東側断割

T045：東壁 11層

T046：東壁 5層



第160図 御宮出土遺物実測図 瓦1



T047 200003-D145



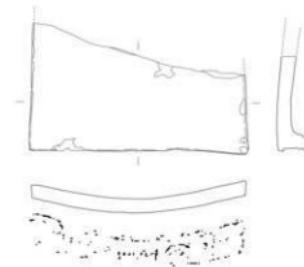
T048 200003-D148



T049 200003-D149



T050 200003-D110



T051 200003-D109



SW4区

T047；銛彈廢棄土坑

T048；北 表土・擾亂

T049；表土

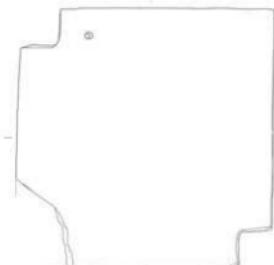
NS2区

T050；5120N 南 土坑1

T051；5120N 裏達 土坑3、斜面 瓦溫

第161図 御宮出土遺物実測図 瓦2

S=1/6  
0 10cm



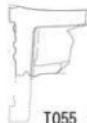
T053 200003-D086



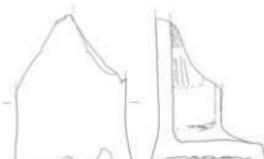
T054 200003-D139



T052 200003-D111



T055 200003-D101



NS2区

T053 ; 土坑3

T053 ; 5120N 北 12層 (Ⅱ層)

T054 ; 斜面 流土 9層 (Ⅰ層) 、斜面 瓦溜 24層 (Ⅲ層)

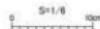
斜面 瓦溜 25層 (Ⅲ層)

T055 ; 斜面 瓦溜 25層 (Ⅲ層)

T056 ; 斜面 28層 石鬼北 (Ⅲ層)



T056 200003-D100



第162図 御宮出土遺物実測図 瓦3



NS2区

T057 ; 斜面 瓦溜No28 (Ⅲ層) 、斜面 29層 (Ⅲ層)

T058 ; 31層 (Ⅲ層)

T059 ; 斜面下 造成土

T060 ; 斜面 瓦溜

T061 ; 斜面 流土 9層 (Ⅱ層)

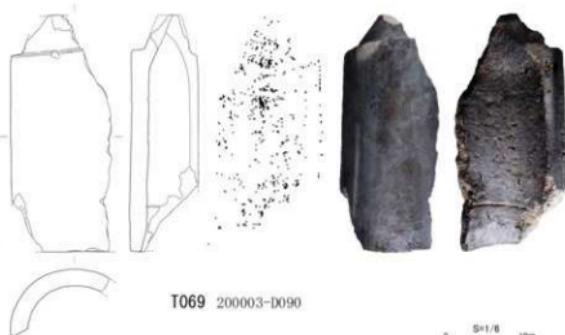
T062 ; 5120N 北 流土 14層 (Ⅱ層)

T063・T064 ; 緊面 瓦溜 24層 (Ⅲ層)

T065 ; 斜面 25層 (Ⅲ層)

第163図 御宮出土遺物実測図 瓦4

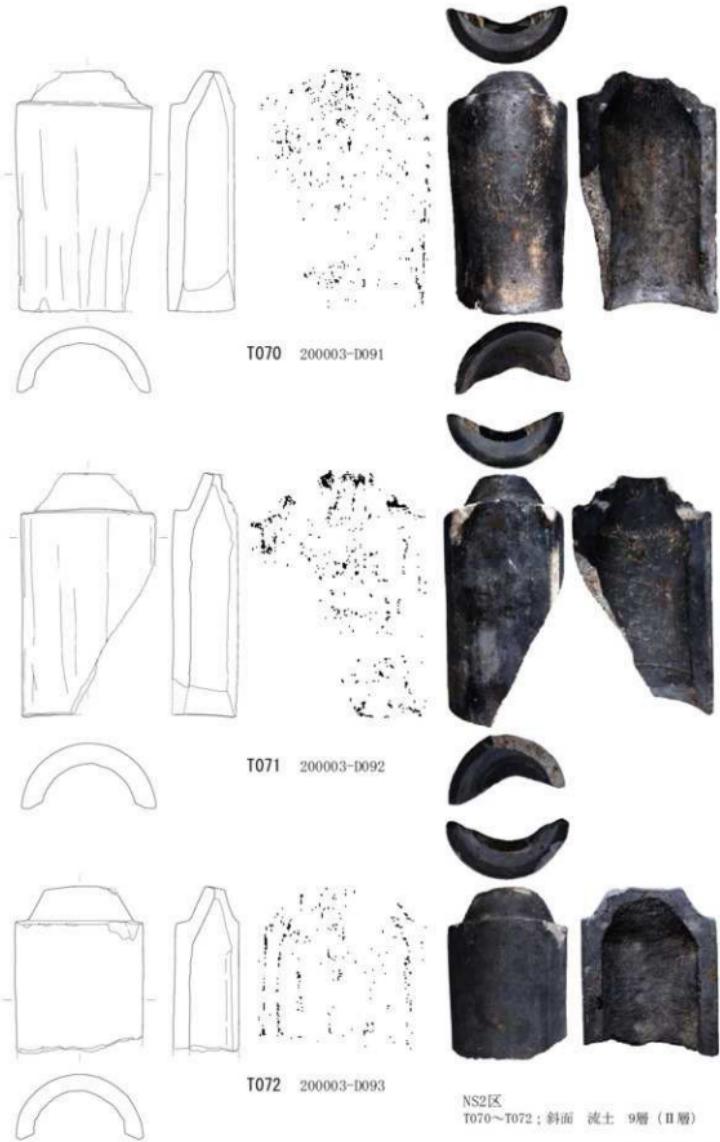
Scale 1/6  
10cm



NS2区  
T066：表土  
T067：5120N 北 9~11層（II層）  
T068：斜面 瓦端  
T069：8~9層（I~II層）

第164図 御宮出土遺物実測図 瓦5

5x1/6 10cm

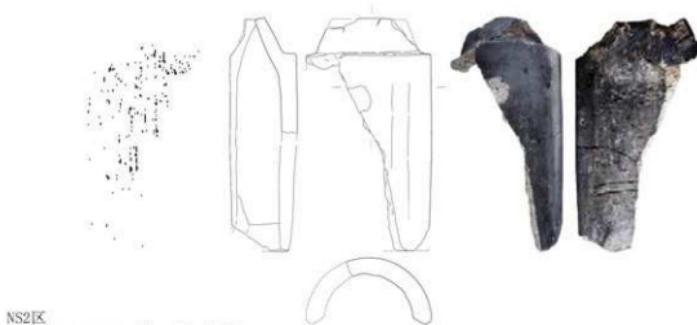




T073 200003-D088



T074 200003-D089



NS2区  
T073・T074 ; 5120N 北 11層 (II層)  
T075 ; 5120N 北 12層 (II層)

T075 200003-D085  
第166図 御宮出土遺物実測図 瓦7

5:1/6 10cm



T076 200003-D096



T077 200003-D087



T078 200003-D098



T079 200003-D099

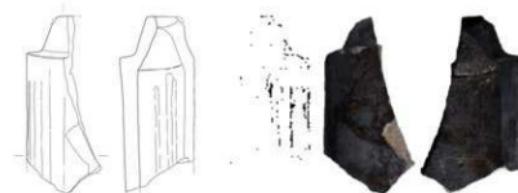
NS2区  
T076 ; 5120N 北 12層 (II層)  
T077 ; 斜面 瓦溜 No89 (III層)  
T078・T079 ; 斜面 瓦溜

1/6 10cm

第167図 御宮出土遺物実測図 瓦8



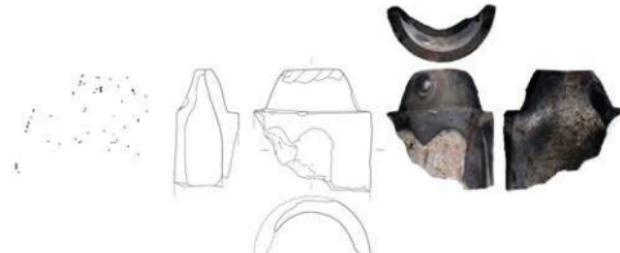
T080 200003-D105



T081 200003-D106



T082 200003-D102

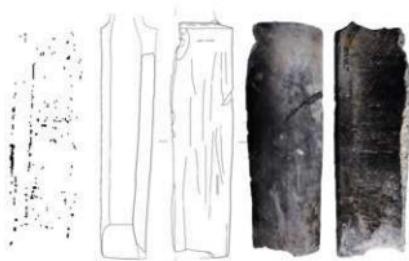


T083 200003-D107

NS2区  
T080・T081；斜面 瓦溜  
T082；斜面 瓦溜 24層（Ⅲ層）  
T083；斜面 瓦溜 25層（Ⅲ層）

第168図 御宮出土遺物実測図 瓦9

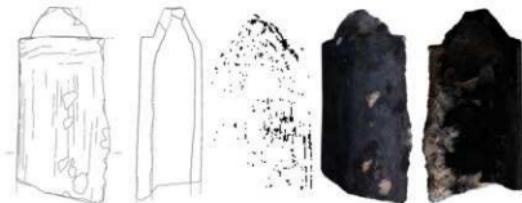
S=1/6 10cm



T084 200003-D108



T085 200003-D095



T086 200003-D104



T087 200003-D097

- NS2区  
 T084 : 斜面 25層 (Ⅲ層)  
 T085 : 斜面 28層 石鬼下面 (Ⅲ層)、斜面 瓦溜No.76 (Ⅲ層)  
 T086 : 斜面 29層 (Ⅲ層)  
 T087 : 斜面 瓦溜下

第169図 御宮出土遺物実測図 瓦10

0 S=1/6 10cm



T088 200003-D136



T089 200003-D122



T090 200003-D127



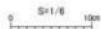
T091 200003-D128

#### NS2区

T088 : 5120N 南 捣乱1

T089 : 5120N 北 11~13層 (Ⅱ層)

T090・T091 : 5120N 北 12層 (Ⅱ層)



第170図 御宮出土遺物実測図 瓦11



T092 200003-D123



NS2区

T092 : 斜面 15層（Ⅱ層）

T093 : 斜面 瓦溜No.26（Ⅲ層）

T094 : 斜面 瓦溜No.89（Ⅲ層）

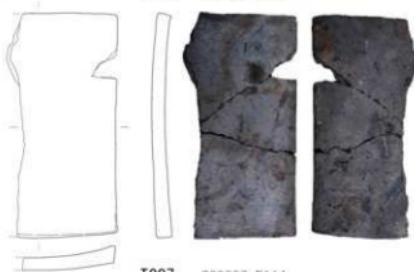
T095 : 斜面 瓦溜一括

第171図 御宮出土遺物実測図 瓦12

S=1/6  
10cm



T096 200003-D113



T097 200003-D114



T098 200003-D115

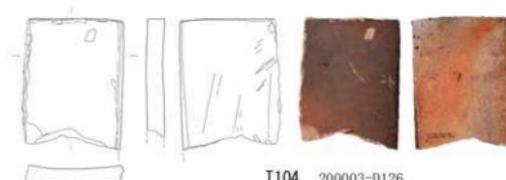
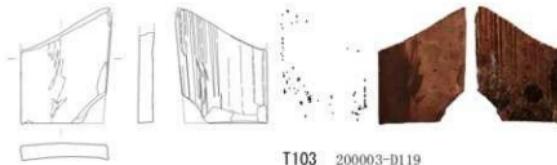
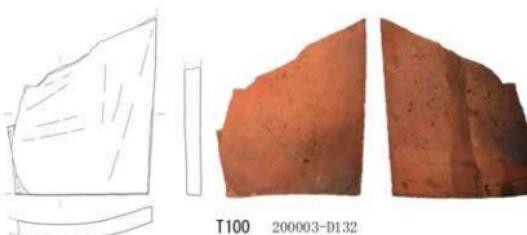


T099 200003-D116

NS2区  
T096~T099 : 斜面 瓦罐

第172図 御宮出土遺物実測図 瓦13

S=1/6 10cm



NS2区

T100 ; 斜面 瓦礎  
T101 ; 斜面 瓦礎 24層 (III層)

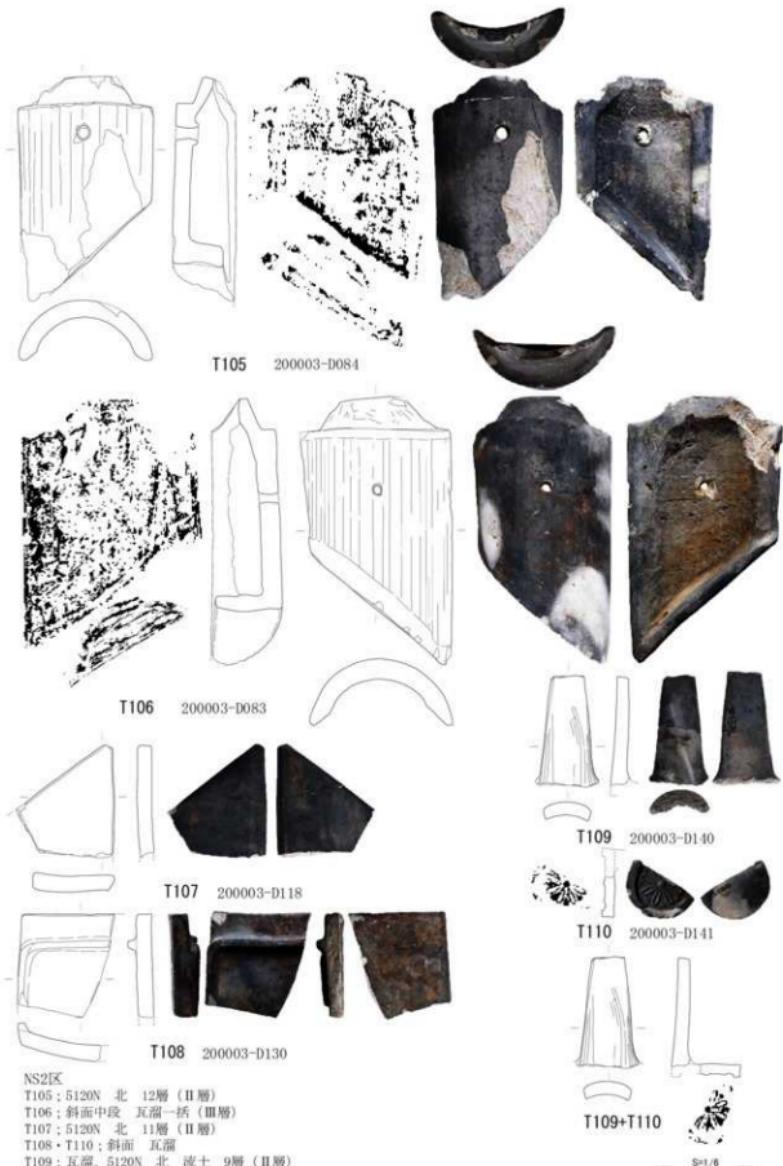
T102 ; 斜面 26層 (III層)

T103 ; 斜面 11層 (II層) or 21層 (III層)

T104 ; 斜面 15~21上層 (II~III層)

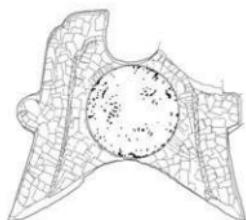
第173図 御宮出土遺物実測図 瓦14

Scale 1/6 10cm

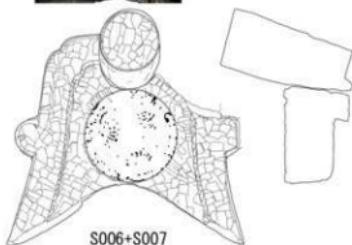


第174図 御宮出土遺物実測図 瓦15

Scale bar: 1/6 10cm



S006 200003-S001



S007 200003-S063

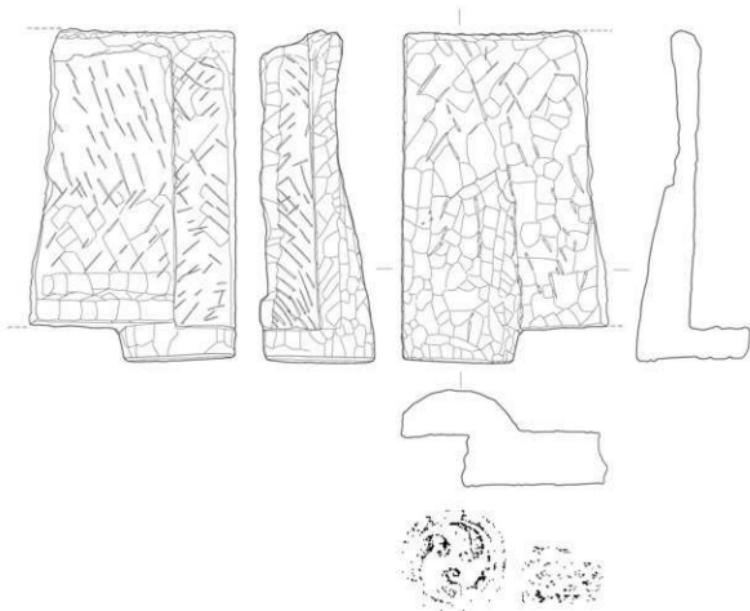
NS2区

S006 : 斜面 瓦溜No.33 (III層)

S007 : 斜面 瓦溜No.10 (III層)

第175図 御宮出土遺物実測図 石製品1

0 S=1/10 20cm



S008 200003-S041

NS2区  
S008；斜面 瓦罐No.98（Ⅲ層）

第176図 御宮出土遺物実測図 石製品2

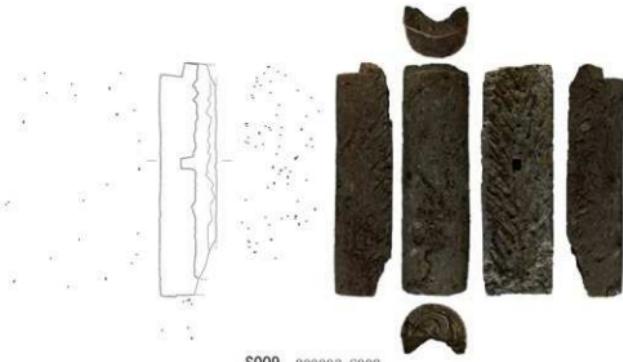
0 5=1/10 20cm

第177図 御宮出土遺物実測図 石製品3

NS21S  
S008；斜面  
H.15.5cm (III層)

S008 200003-S041

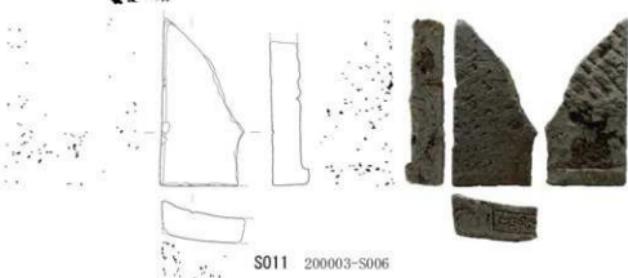




S009 200003-S002



S010 200003-S079



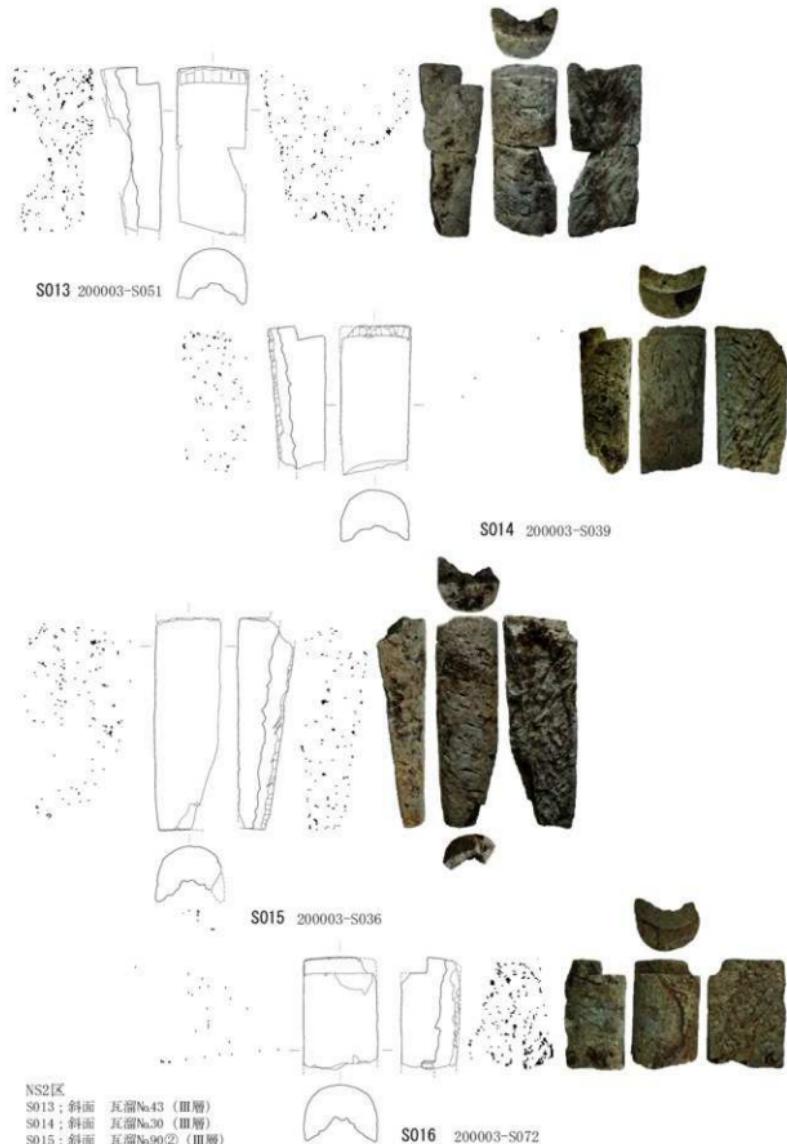
S011 200003-S006



NS2区  
 S009：斜面 瓦溜Na36（Ⅲ層）  
 S010：斜面 瓦溜Na42（Ⅲ層）  
 S011：斜面 瓦溜Na91（Ⅲ層）  
 S012：斜面 瓦溜Na95（Ⅲ層）

第178図 御宮出土遺物実測図 石製品4

0 5cm 10cm



第179図 御宮出土遺物実測図 石製品5



S017 200003-S023



S018 200003-S005



S019 200003-S017

NS2区

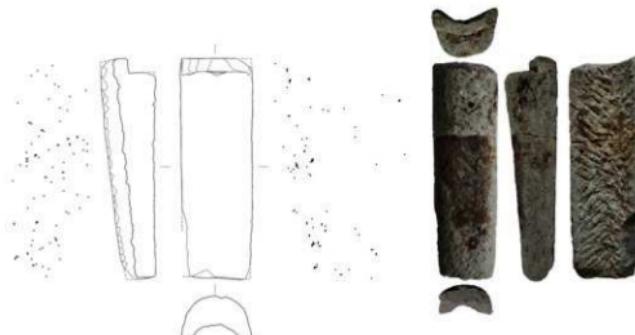
S017；斜面 瓦瀬No5（Ⅲ層）、斜面 28層（Ⅲ層）

S018；斜面 瓦瀬No31（Ⅲ層）

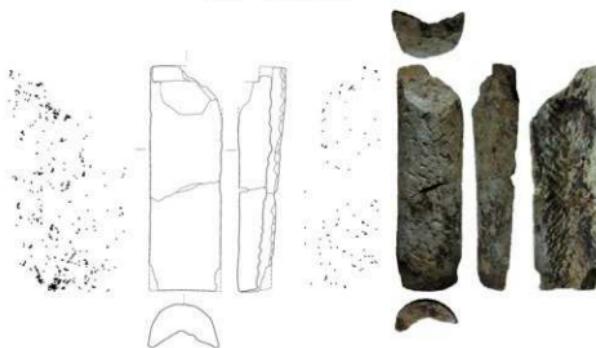
S019；斜面 瓦瀬No101（Ⅲ層）

第180図 御宮出土遺物実測図 石製品6

5×1/10 20mm



S020 200003-S011



S021 200003-S004



S022 200003-S025

NS2区

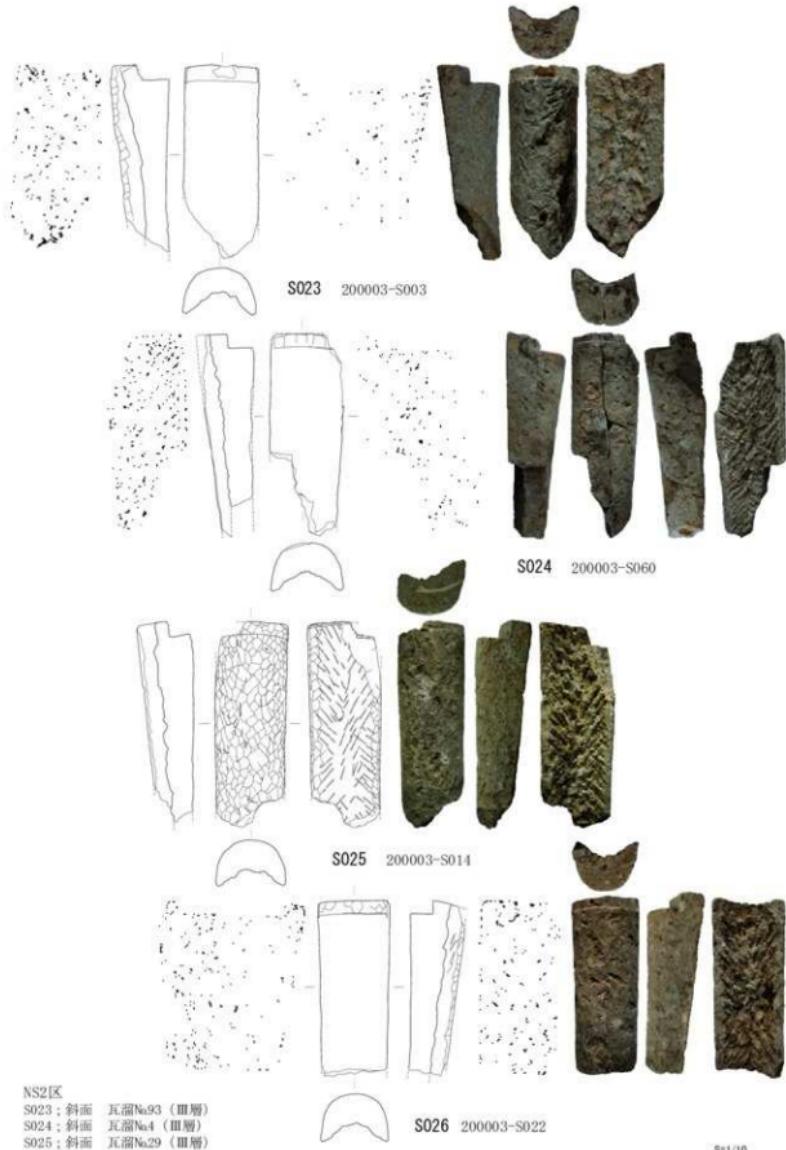
S020 : 斜面 瓦罐No.14、No.17 (Ⅲ層)

S021 : 斜面 瓦罐No.92 (Ⅲ層)

S022 : 斜面 瓦罐No.86 (Ⅲ層)

第181図 御宮出土遺物実測図 石製品7

S=1/10 20mm

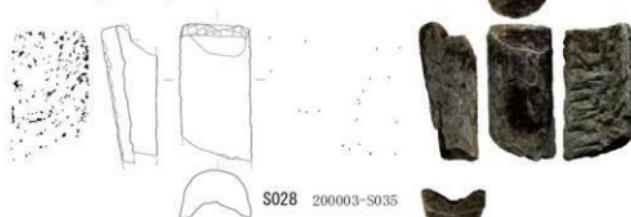


第182図 御宮出土遺物実測図 石製品8

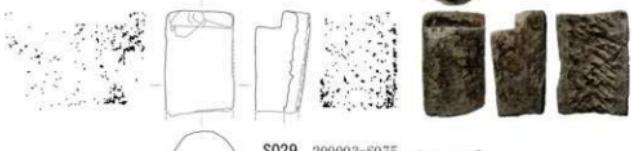
0 5x1/10 20mm



S027 200003-S069



S028 200003-S035



S029 200003-S075



S030 200003-S028



S031 200003-S071

NS2区

S027 : 斜面 瓦溜 24層 (Ⅲ層)

S028 : 斜面 瓦溜No.9 (Ⅲ層)

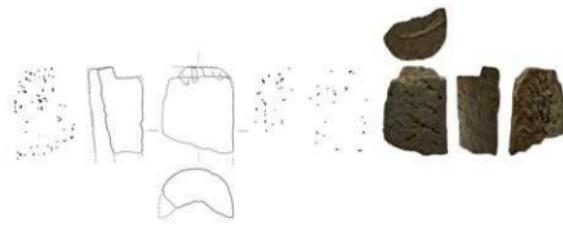
S029 : 斜面 中段 瓦溜 (Ⅲ層)

S030 : 斜面 瓦溜No.8 (Ⅲ層)

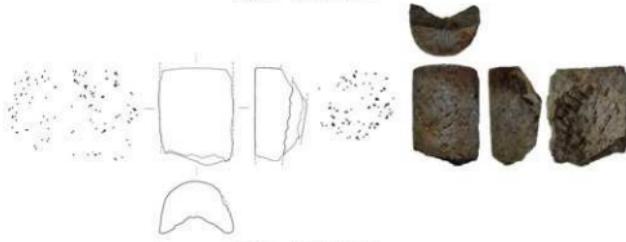
S031 : 斜面 中段 瓦溜 (Ⅲ層) 、 斜面 瓦溜No.37 (Ⅲ層)

第183図 御宮出土遺物実測図 石製品9

S=1/10 20cm



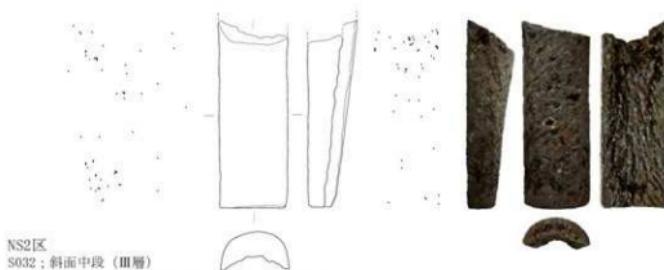
S032 200003-S077



S033 200003-S073



S034 200003-S040

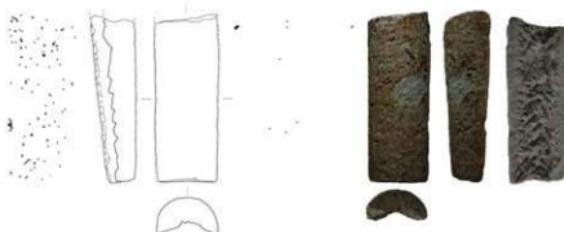


S035 200003-S067

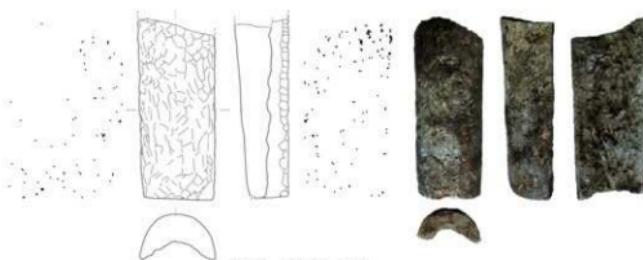
NS2区  
S032：斜面中段（Ⅲ層）  
S033：斜面 瓦瀬No.113（Ⅲ層）  
S034：斜面 瓦瀬No.99（Ⅲ層）  
S035：斜面 瓦瀬No.90③（Ⅲ層）

第184図 御宮出土遺物実測図 石製品10

5:1/10 20cm



S036 200003-S068



S037 200003-S038



S038 200003-S049



S039 200003-S056

NS2区

S036；斜面 瓦罈No.72（Ⅲ層）

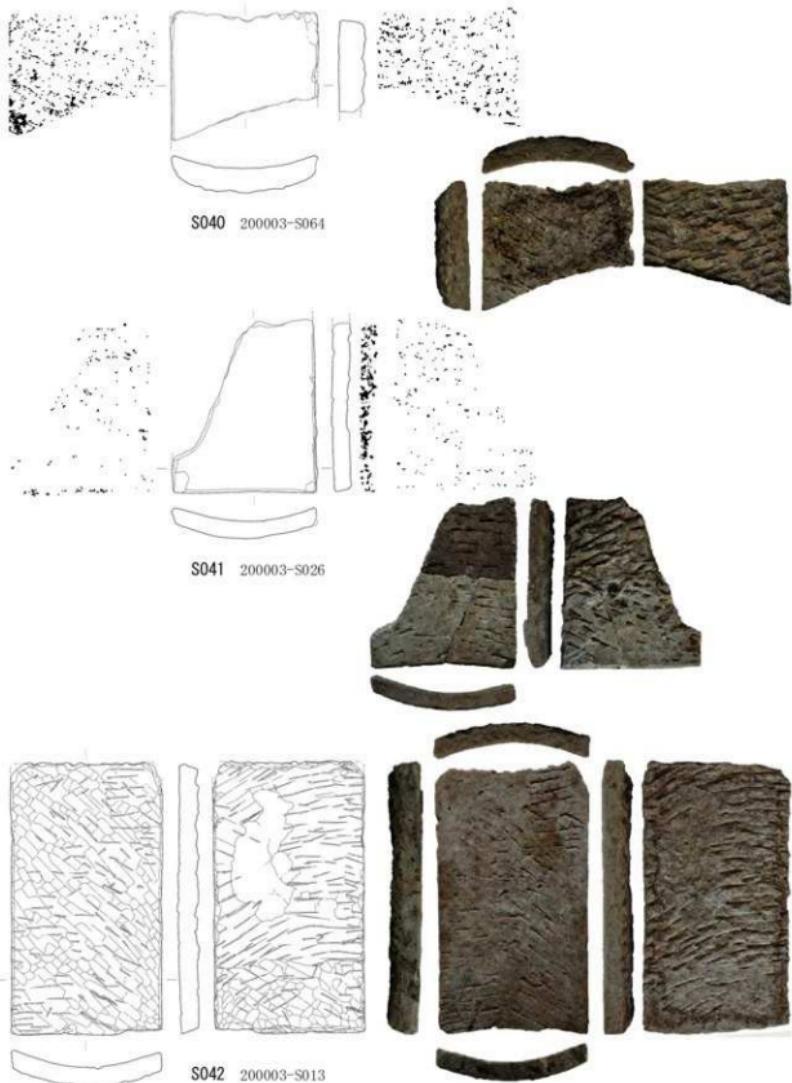
S037；斜面 瓦罈No.32（Ⅲ層）

S038；斜面 瓦罈No.103（Ⅲ層）

S039；斜面 瓦罈No.6（Ⅲ層）

第185図 御宮出土遺物実測図 石製品11

0 1/10 20cm



NS2区

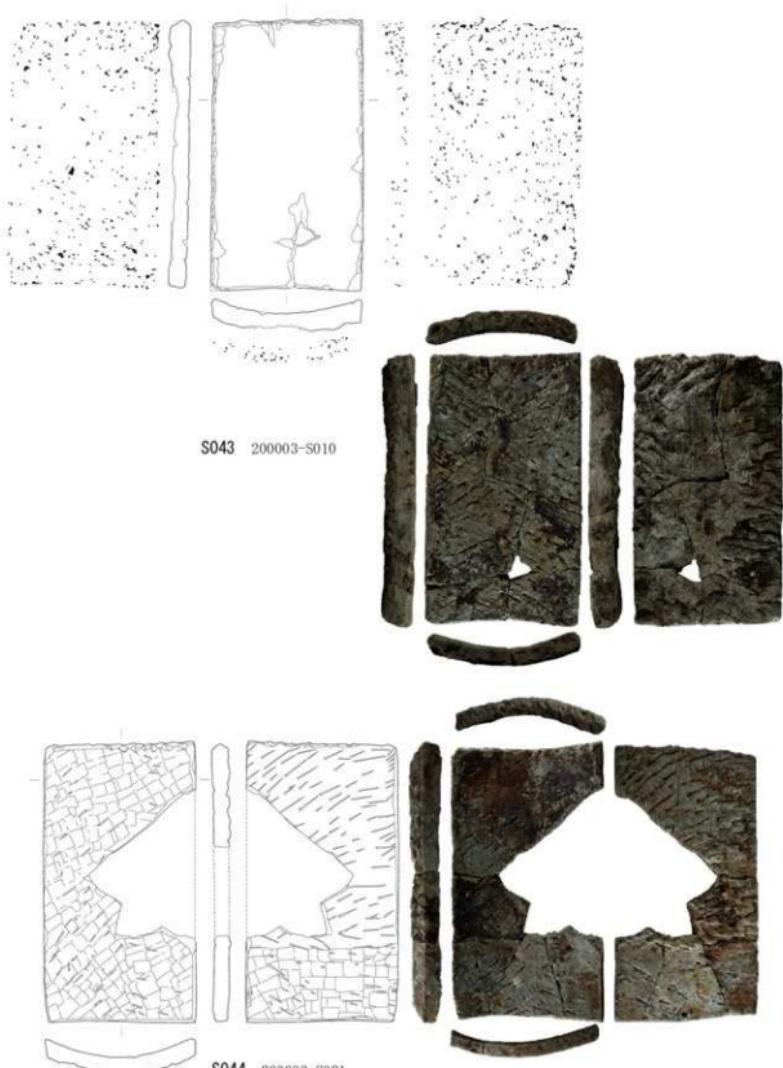
S040 ; 5120N 北 流土 9層 (II層)

S041 ; 斜面 11層 (II層)

S042 ; 5120N 北 18層下部 (II層)

第186図 御宮出土遺物実測図 石製品12

5:1/10  
30cm



NS2区

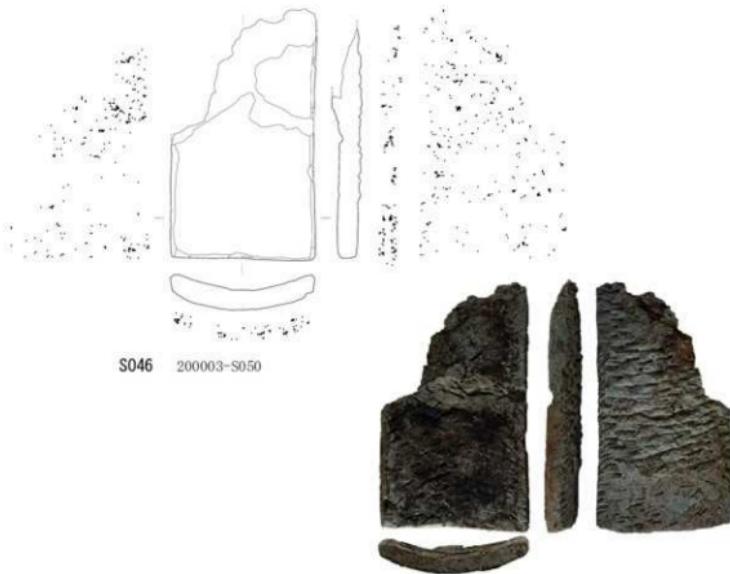
S043：斜面 瓦溜No.37（Ⅲ層）、斜面 瓦溜No.90①、No.90②（Ⅲ層）  
S044：斜面 瓦溜No.96（Ⅲ層）、斜面中段 瓦溜（Ⅲ層）

第187図 御宮出土遺物実測図 石製品13

S=1/10 20mm



S045 200003-S007



S046 200003-S050

NS2区  
S045：斜面中段 瓦溜下層（Ⅲ層）、斜面 瓦溜No.22（Ⅲ層）  
S046：斜面 瓦溜No.67、No.68（Ⅲ層）

第188図 御宮出土遺物実測図 石製品14

5x1/10 20mm



NS2区  
 S047；斜面 瓦罐No83（Ⅲ層）、西壁 No.110（Ⅲ層）  
 S048；斜面 瓦罐No78（Ⅲ層）  
 S049；瓦罐、斜面中段 瓦罐下層（Ⅲ層）、瓦罐No12（Ⅲ層）  
 S050；斜面中段 瓦罐（Ⅲ層）、斜面中段 瓦罐 24層（Ⅲ層）、斜面 瓦罐No23（Ⅲ層）

第189図 御宮出土遺物実測図 石製品15

0 10cm 20cm



S051 200003-S029



S052 200003-S024

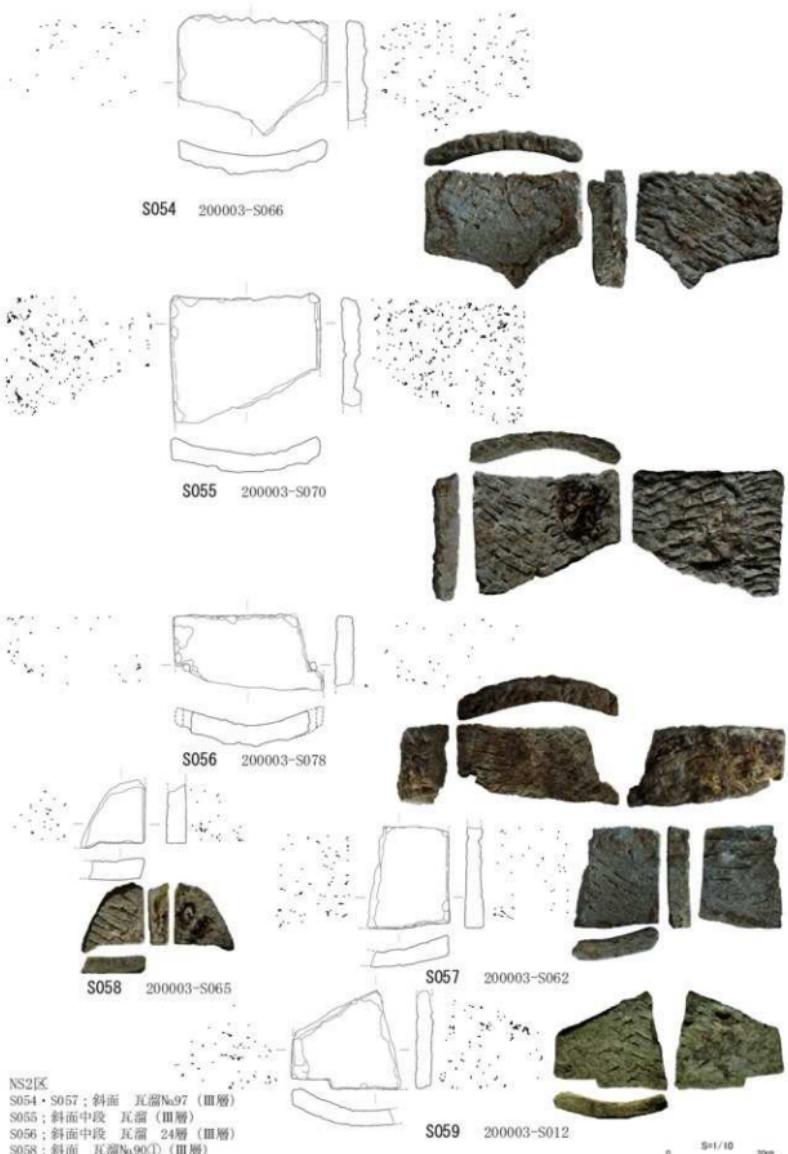


S053 200003-S027

NS2区  
 S051：斜面 瓦溜No.102（Ⅲ層）  
 S052：斜面 瓦溜No.91②（Ⅲ層）、斜面中段 瓦溜（Ⅲ層）、斜面 24層（Ⅲ層）  
 S053：斜面 瓦溜No.94（Ⅲ層）、東壁No.95の奥（Ⅲ層）

第190図 御宮出土遺物実測図 石製品16

541/10 2008



第191図 御宮出土遺物実測図 石製品17

8 S=1/10 20mm



S060 200003-S031



S061 200003-S052



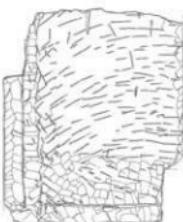
NS2区  
S060 ; 斜面 流土 9層 (II層) 、斜面上部 流土、  
斜面 石段突出前流土 (II層)  
S061 ; 斜面 流土 9層 (II層)  
S062 ; 9層 (II層)



S062 200003-S033

第192図 御宮出土遺物実測図 石製品18

0 S=1/10 20cm



S063 200003-S008



S064 200003-S009

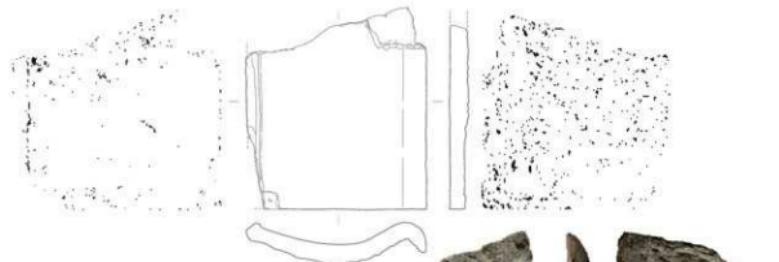


NS2区

S063：斜面 流土 11層（II層）  
斜面北端 8層（I層）～9層上部（II層）  
S064：11層（II層）

第193図 御宮出土遺物実測図 石製品19

5:1/10 20cm



S065 200003-S015



S066 200003-S016

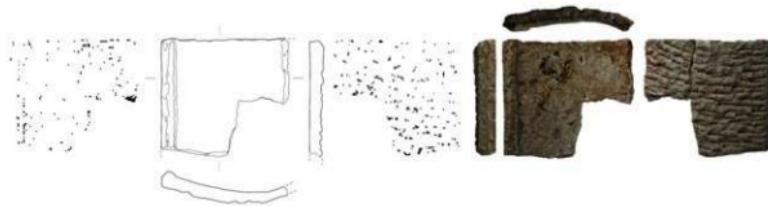


S067 200003-S076

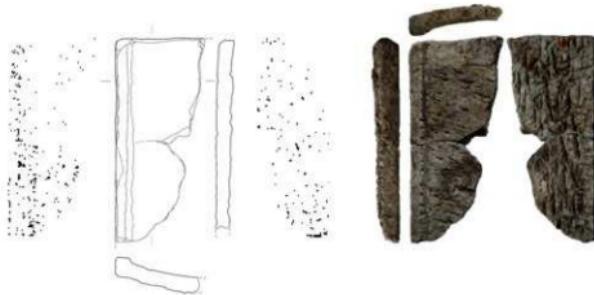
NS2区  
S065; II層(Ⅱ層)  
S066・S067; 斜面上部 流土

第194図 御宮出土遺物実測図 石製品20

5x1/10 20cm



S068 200003-S018



S069 200003-S030



S070 200003-S059



S071 200003-S043

NS2区  
S068～S070：斜面上部 流土  
S071：石段1

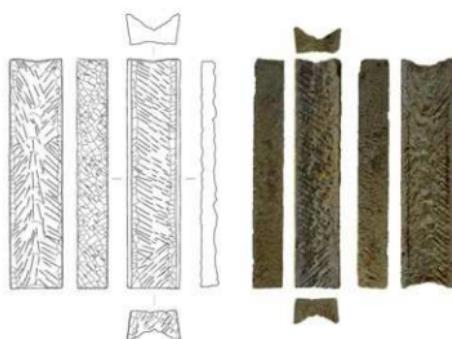
S068～S070 : S=1/20  
S071 : S=1/20

S=1/20 40cm  
S=1/10 20cm

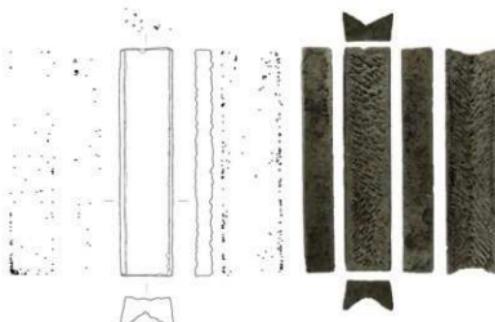
第195図 御宮出土遺物実測図 石製品21



S072 200003-S042



S073 200003-S045

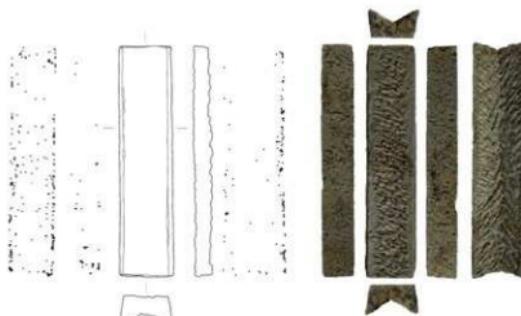


S074 200003-S046

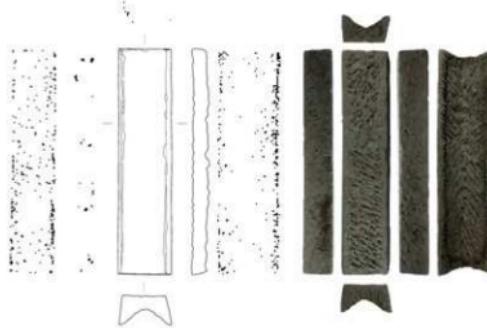
NS2区  
S072：石段2  
S073：石段3  
S074：石段4



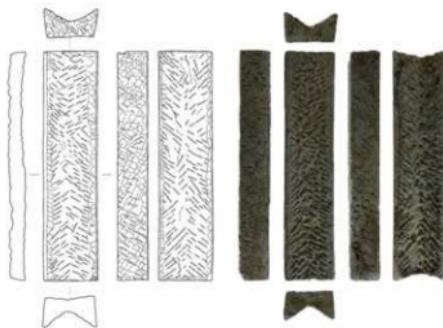
第196図 御宮出土遺物実測図 石製品22



S075 200003-S047



S076 200003-S048

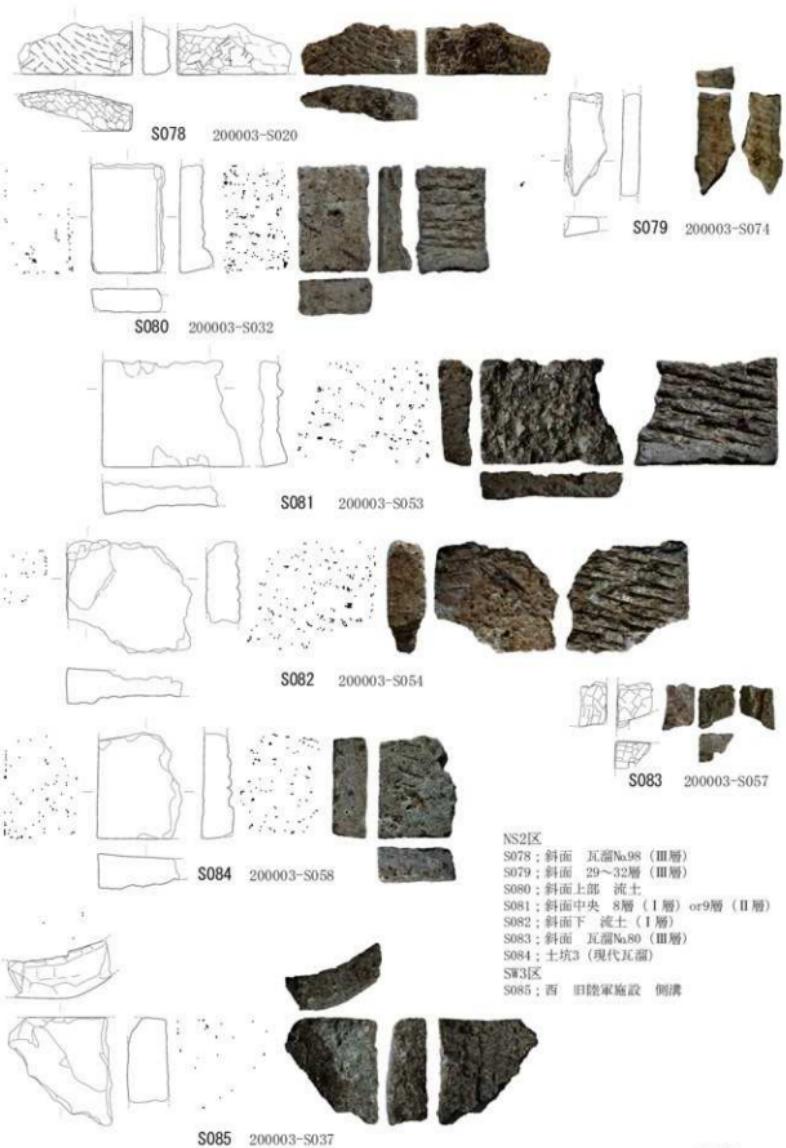


S077 200003-S044

NS2区  
S075 ; 石段5  
S076 ; 石段6  
S077 ; 石段7

Scale bar: 1/20 40cm

第197図 御宮出土遺物実測図 石製品23

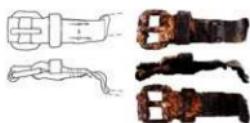
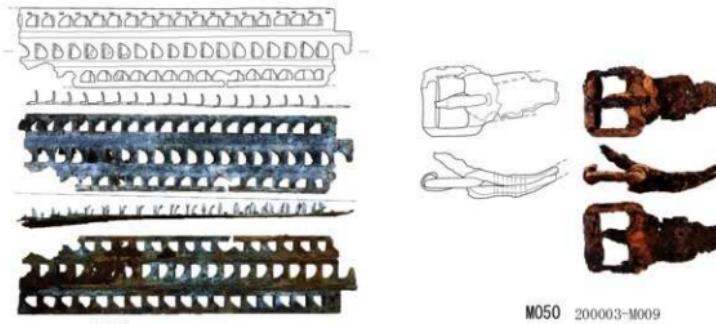
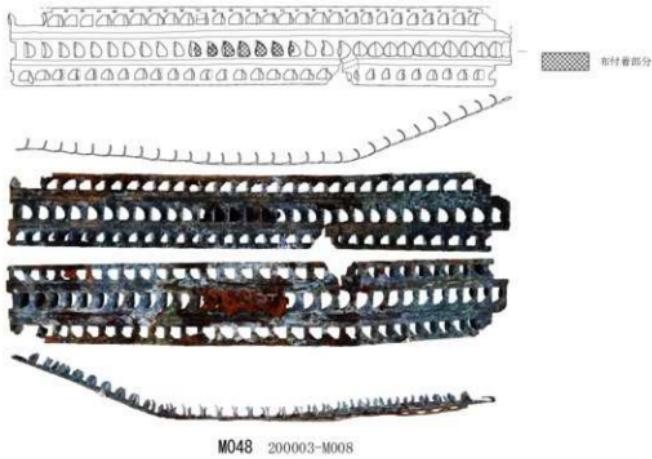


第198図 御宮出土遺物実測図 石製品24

5 1/10 20cm

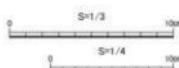


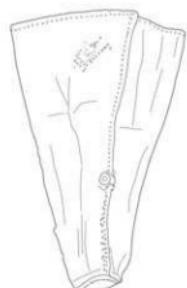
第199図 御宮出土遺物実測図 金属製品1



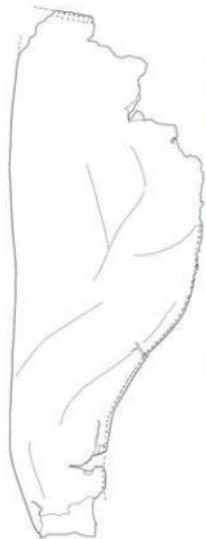
S=1/3 : M050～M052  
S-1/4 : M048, M049

第200図 御宮出土遺物実測図 金属製品2

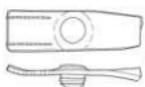




M053 200003-M015



M054 200003-M016



M055 200003-M020



M056 200003-M019



S=1/3:M055, M056  
S=1/4:M053, M054

SW4区  
M053～M056：銛弾発棄土坑

第201図 御宮出土遺物実測図 金属製品3

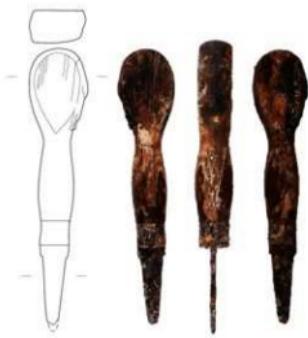
10cm

S=1/3

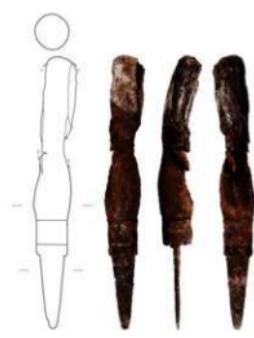
S=1/4 10cm



第202図 御宮出土遺物実測図 金属製品4



M062 200003-M023



M063 200003-M024



M064 200003-M032



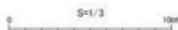
M065 200003-M033

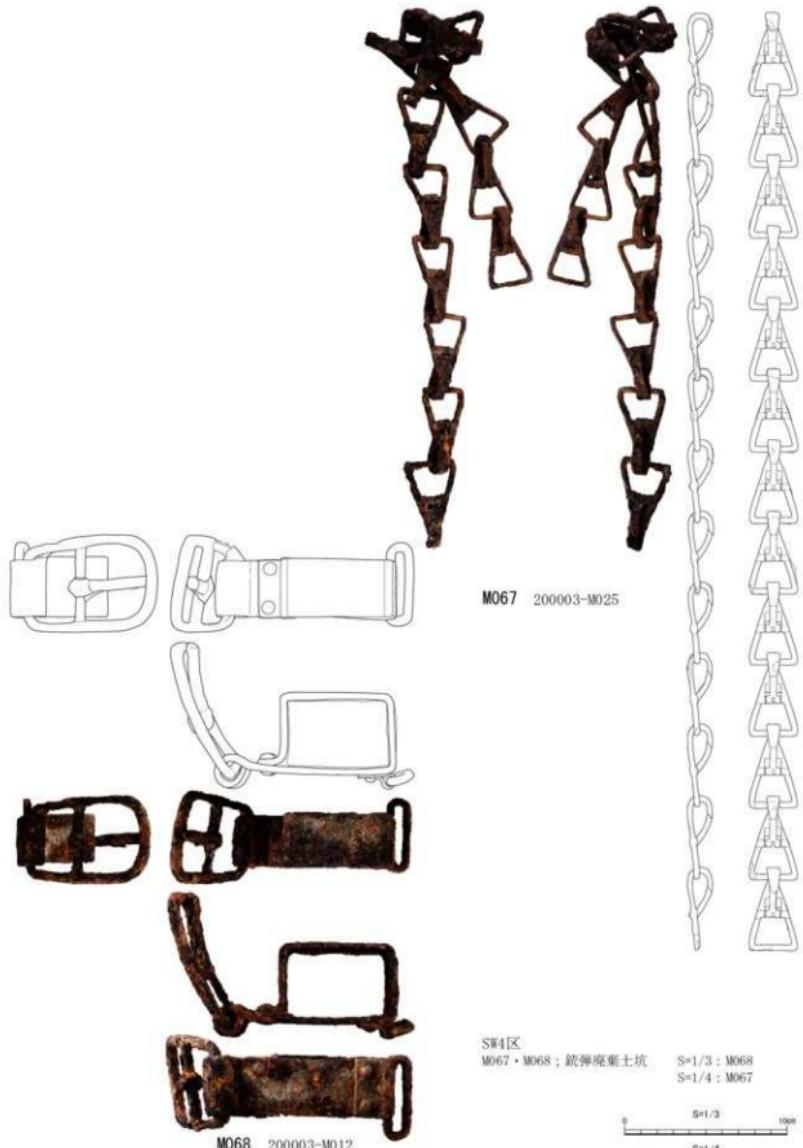


M066 200003-M034

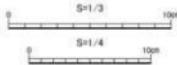
第203図 御宮出土遺物実測図 金属製品5

SW4区  
M062～M066；銃弾廻収土坑





第204図 御宮出土遺物実測図 金属製品6





M069 200003-M013



M071 200003-M041

M072 200003-M038



M073 200003-M042



M070 200003-M022



M074 200003-M037



M075 200003-M044



M076 200003-M036

布付着部分

SW4区

M069・M070：銃弾廻転土坑

SE3区

M071：表土

NS1区

M072：表土

NS2区

M073：5120N 北松葉 流土 9層（II層）

M074：斜面 流土 13層（II層）

M075：斜面 流土 11～14層（II層）

M076：斜面 流土 28層（III層）

S=1/2 : M071～M076

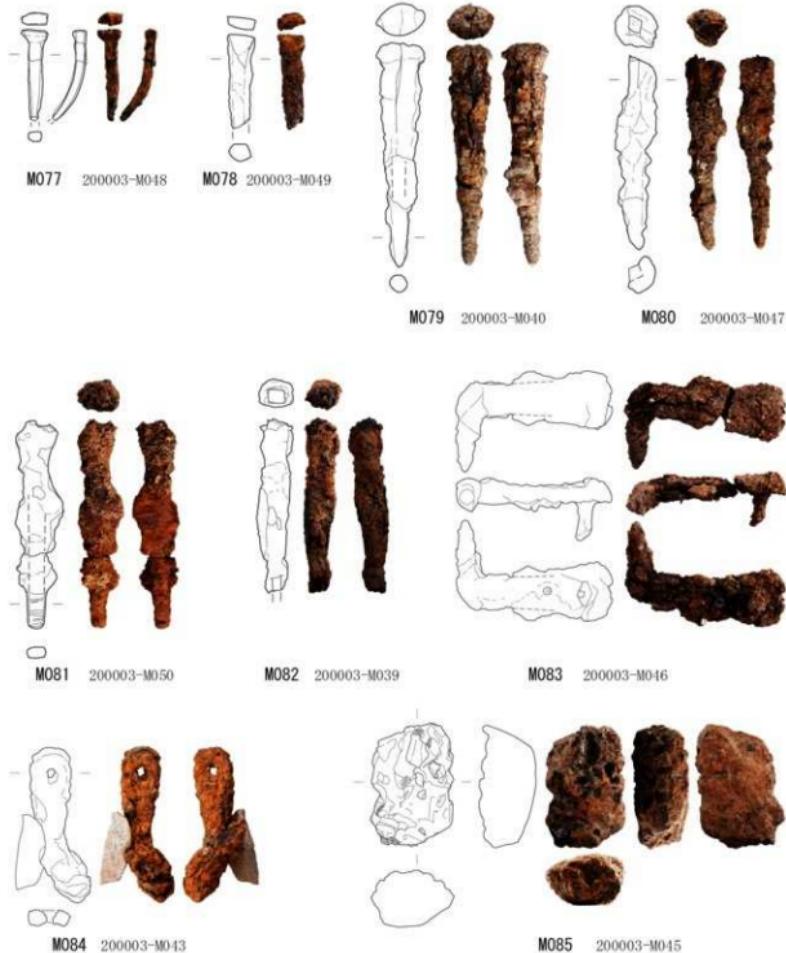
S=1/3 : M069、M070

S=1/2

S=1/3

10cm

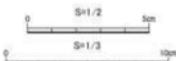
第205図 御宮出土遺物実測図 金属製品7



NS2区  
 M077・M078：斜面下半 流土 断割サブトレ 9～13層（II層）  
 M079：斜面 12層（II層）  
 M080：斜面 流土 15層（II層）  
 M081；5120N 北 流土 18層（II層）  
 M082：斜面 瓦窯No98（III層）  
 M083；5120N 北竈張 流土 10層（II層）  
 M084：斜面中段 瓦窯一括（III層）  
 M085：斜面 流土

S=1/2 : M077、M078  
 S=1/3 : M079～M085

第206図 御宮出土遺物実測図 金属製品8



第21表 出土遺物觀察表 御宮 陶器器・土器 1

編號	名稱	器種	地區	出土地点	層位 (cm)	地質 (cm)	地質 (cm)	性質 等級	輪郭・ 裝飾等	施上・色調等	形狀特徵	產地	年代	特征事項	ID (発掘番号)		
P224	輪鉢	碗	SR2	外 御宮土被山面	—	—	—	2b. 白 青花	10.15 2b. 白 青花	2b. 白	圓底形	中國製造系?	—	—	200003-B015		
P225	輪鉢	碗	SR2	外 御宮土被	—	—	4.60	[12.60] 10.20 青花	10.20 2b. 白 青花	2b. 白	圓底形	中國製造系 6°C	—	—	200003-B011		
P226	輪鉢	小碗	SR2	中央窯場附近 近豐鹽地土	—	—	—	[13.40] 11.20 青花	11.20 2b. 白 青花	2b. 白	中國製造系? 9°C	—	—	200003-B013			
135	P227	輪鉢	碗	SR2	中央窯場附近 近豐鹽地土	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
P228	輪鉢	盆	SR2	鶴巣土	—	—	4.90	[10.30] 10.20 灰胎・鉛鑄	10.20 2b. 白 灰胎	12.20 2b. 白 灰胎	淺腹 12.20 灰胎	中國產青白 17°C	—	—	200003-B012		
P229	輪鉢	深盆	SR2	中央窯場附近 近豐鹽地土	—	5.00	[3.60] 10.20 青花	10.20 2b. 白 青花	12.20 2b. 白 青花	12.20 2b. 白 青花	圓底 12.20 青花	中國產青白 17°C~17.5°C	—	—	200003-B014		
P230	輪鉢	碗	SR2	外御宮附近	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-B016	
P231	輪鉢	碟	SR2	外御宮附近 豐鹽地土	—	[10.80] 10.20 青花	[0.35] 10.20 青花	10.20 2b. 白 青花	12.20 2b. 白 青花	12.20 2b. 白 青花	平底 12.20 青花	中國產青白 17°C~17.5°C	—	—	200003-B013		
P232	土鍋	土鍋	SR2	外御宮附近	12.69	8.80	2.40	[11.20] 10.20 青花	10.20 2b. 白 青花	E1 砂多	12.20 2b. 白 青花	砂胎 12.20 青花	外御宮附近 17°C~17.5°C	—	—	200003-B012	
P233	土鍋	土鍋	SR2	中央窯場附近 近豐鹽地土	14.00	11.80	1.90	[12.20] 10.20 青花	10.20 2b. 白 青花	E1 少	12.20 2b. 白 青花	砂胎 12.20 青花	外御宮附近 17°C~17.5°C	—	—	200003-B010	
136	P234	土鍋	土鍋	SR2	中央窯場附近 近豐鹽地土	11.40	7.60	2.00	[14.20] 10.20 青花	10.20 2b. 白 青花	E2 少	12.20 2b. 白 青花	砂胎 12.20 青花	外御宮附近 17°C~17.5°C	—	—	200003-B011
P235	土鍋	土鍋	SR2	外御宮附近 豐鹽地土	12.90	7.40	2.65	[12.20] 10.20 青花	10.20 2b. 白 青花	E1 砂多	12.20 2b. 白 青花	砂胎 12.20 青花	外御宮附近 17°C~17.5°C	—	—	200003-B017	
P236	土鍋	土鍋	SR2	鶴巣土	[12.30] [7.80]	2.40	[0.12] [22.26]	[2.20] [22.26] 青花	[11.20] [22.26] 青花	E1 砂多	[12.20] [22.26] 青花	砂胎 12.20 青花	外御宮附近 17°C~17.5°C	—	—	200003-B018	
P237	碗	碗	SR2	外御宮附近	6.80	4.80	2.25	元	青花	白胎 青花	白胎 青花	白	白胎 青花	白	20°C	200003-B023	
P238	碗	碗	SR2	外御宮附近	10.00	6.20	1.80	[14.20] 10.20 青花	[11.20] 10.20 青花	E1 少	12.20 2b. 白 青花	砂胎 12.20 青花	外御宮附近 17°C~17.5°C	—	—	200003-B022	
137	P239	碗	SR3	北高鍋 鋼削	[19.8.]	—	[1.80]	[13.20] 10.20 青花	[14.20] 10.20 青花	2b. 白	2b. 白 青花	青花	中國製造系 9°C	—	—	200003-B021	
P240	碗	碗	SR3	西 土上	2.60	4.20	14.00	10.20 青花	10.20 2b. 白 青花	10.20 2b. 白 青花	圓底形	外御宮附近 20°C	—	—	200003-B020		
P241	碗	碗	SR3	西 美土	2.00	4.20	12.60	[11.20] 10.20 青花	[12.20] 10.20 青花	2b. 白	圓底形	外御宮附近 20°C	—	—	200003-B019		
P242	碗	碗	SR4	北 豊乳 N31 粘土	10.40	3.90	5.20	[14.20] 10.20 青花	[12.20] 10.20 青花	2b. 白	圓底形	外御宮附近 19°C~19.5°C	—	—	200003-B028		
138	P243	碗	SR4-1	灰化土	7.20	3.10	5.10	[12.20] 10.20 青花	[12.20] 10.20 青花	2b. 白	圓底形	外御宮附近 20°C	—	—	200003-B025		
P244	碗	碗	SR4-1	現代土灰	8.20	3.40	5.20	[13.20] 10.20 青花	[13.20] 10.20 青花	2b. 白	圓底形	外御宮附近 周口・美濃?	—	—	200003-B034		
139	P245	碗	SR4	南E. 北 土上	5.30	4.35	7.60	[10.20] 10.20 青花	[10.20] 10.20 青花	2b. 白	圓底形	外御宮附近 20°C	—	—	200003-B027		

第22表 出土遺物觀察表 御宮 陶器器・土器 2

編號	名稱	器種	施色	出土地點	118 (cm)	直徑 (cm)	厚度 (cm)	底形 (cm)	體積 (cm) <sup>3</sup>	體積・ 容積等	形状特徵	產地	年代	特征事項	IB (発見番号)
139	P246	陶器	灰	S44 (88)	3.25	13.30	3.30	口(底) 無	126.00	口(底) 無	直口(底) 有	25°C.	高口(底) 有	20003-B014	
P247	4625	陶器	灰	S44 北	11.00	3.50	5.85	11.30 底(口)	127.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	高口(底) 有	20003-B017	
P248	4626	陶器	灰	S44 北	10.60	3.50	5.70	11.20 口(底)	126.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	高口(底) 有	20003-B018	
P249	4627	陶器	灰	S44 北	10.80	3.70	5.65	11.00 口(底)	125.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	高口(底) 有	20003-B019	
P250	4628	陶器	灰	S44 北	10.40	4.00	6.20	11.70 底(口)	126.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	高口(底) 有	20003-B020	
P251	4629	陶器	灰	S44 北	10.30	4.20	5.90	11.10 口(底)	126.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	高口(底) 有	20003-B021	
140	P252	4630	陶器	S44 北	10.50	4.20	4.80	11.20 口(底)	125.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	高口(底) 有	20003-B020	
P253	4631	小網	灰	S44 北	8.50	2.70	3.95	11.00 口(底)	126.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	高口(底) 有	20003-B018	
P254	4632	土偶土器	灰	S44 北	15.00	10.00	7.80	12.80 口(底)	126.00	口(底) 無	E2 [E2-E3] 有	直地	[E2] 下半窓行者	20003-B017A	
142	P255	4633	土偶	S44 北	11.80	9.00	10.25	12.80 口(底)	126.00	口(底) 無	E1 [E2-E3] 有	直地	[E1] 下半窓行者	20003-B015	
143	P256	陶器	黑	S44 北	8.40	—	—	10.30 口(底)	126.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	高口(底) 有	20003-B041	
P257	4634	陶器	灰	S44 中央 土・陶瓦	—	—	—	14.30 口(底)	129.00	口(底) 無	直口(底) 有	20°C.	直上輪(?) 有	20003-B026	
P258	4635	陶器	灰	S44 灰瓦	13.60	6.40	4.15	11.90 口(底)	125.00	口(底) 無	直口(底) 有	19°C.	直上輪(?) 有	20003-B048	
144	P259	陶器	黑	S45 灰瓦(灰石) 1層	13.40	5.25	3.30	12.70 口(底)	126.00	口(底) 無	直口(底) 有	16°C.	直輪(?) 有	20003-B062	
P260	4636	陶器	灰	S45 灰瓦(灰石) 中央	11.00	4.30	3.80	11.70 口(底)	126.00	口(底) 無	直口(底) 有	16°C.	直輪(?) 有	20003-B063	
P261	4637	土偶	土偶頭部	S45 灰	11.20	5.40	2.50	11.00 口(底)	126.00	口(底) 無	B [B-C] 有	直地	[B] 全頭に輪形頭	20003-B064	
145	P262	土偶	土偶面部	S45 中央 土偶	11.30	6.00	3.30	12.50 口(底)	126.00	口(底) 無	B [B-C] 有	直地	[B] 全頭に輪形頭	20003-B060	
P263	4638	土偶	土偶面部	S45 中央 土偶	12.20	8.80	2.35	11.10 口(底)	126.00	口(底) 無	E1 [E2-E3] 有	直口(底) 有	17°C. 中面	20003-B061	
P264	4639	小網	灰	S46 灰	8.60	3.10	3.70	12.50 口(底)	126.00	口(底) 無	E1 [E2-E3] 有	直口(底) 有	17°C. 中面	20003-B033	
P265	4640	陶器	灰	S46 灰	11.67	7.64	1.80	12.70 口(底)	126.00	口(底) 無	E1 [E2-E3] 有	直口(底) 有	16°C. 中面	20003-B065	
146	P266	4641	陶器	灰	—	—	—	15.40 口(底)	127.00	口(底) 無	E1 [E2-E3] 有	直口(底) 有	17°C. 中面	20003-B069	
P267	4642	土偶	土偶面部	S46 灰	17.20	14.40	2.40	11.10 口(底)	126.00	口(底) 無	E2 [E2-E3] 有	直口(底) 有	17°C. 中面	20003-B055	
P268	4643	土偶	土偶面部	S46 灰	16.20	10.40	2.70	20.20	126.00	口(底) 無	E2 [E2-E3] 有	直口(底) 有	17°C. 中面	20003-B056	
147	P269	4644	土偶	土偶面部	16.90	13.60	2.40	9.20	126.00	口(底) 無	E2 [E2-E3] 有	直口(底) 有	17°C. 中面	20003-B057	

第23表 出土遺物觀察表 御宮 陶磁器・土器 3

編號	番号	種類	器種	施釉	出土地点	寸法 (cm)	重量 (g)	施釉 部位	焼成・ 装飾等	施上・色調等	形状特徴	产地	年代	特記事項	IB (実測番号)
147	P270	土器	土器皿	S66	北 26cmより下	11.00	7.50	11.00/76	手×下×足	E1 赤、褐色。	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 10		200003-B658	
F271	4628	土器	土器	N51	石板	13.40	5.60	4.10	11.00/76 12.70/26	手×下×足 (16)	28g 白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 10	アラビア数字(12)、 内側に白磁層の痕跡、外側 に毛端の痕跡	200003-B659
148	P272	4629	林	N51	石板 (51.206) 密合瓦等の中	11.70	7.80	7.10	元器	ロゴヨリ 付	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[20C]	内側に白磁層の痕跡、外側 に毛端の痕跡	200003-B653
F273	4630	土器	土器皿	N51	石板 (51.206) -北斜面 附	10.00	7.30	1.05	11.00/76	手×下×足	E1 赤、褐色。	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 中葉	口輪に白磁層	200003-B654
F274	4631	土器	土器皿	N51	斜面下端	10.00	7.40	2.10	11.00/76	手×下×足	E1 赤、褐色。	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B656
F275	4632	林	土器	N51	斜面下端 斜削 施覆土	14.50	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉	中国製白磁系	200003-B650
F276	4633	林	土器	N51	斜面下 斜削	—	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉	中国	200003-B656
149	P277	4634	林	N51	斜面下端 斜削 施覆土	10.10	4.60	7.50	11.00/76	手×下×足	E1 赤、褐色。	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉	口輪に白磁層	200003-B640
F278	4635	林	土器	N51	斜面下 施覆土	—	—	4.60	11.00	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[16C. 8~17C. 10] 後晉	口輪	200003-B647
F279	4636	林	土器	N51	斜面下端 施覆土	9.60	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B637
F280	4637	林	土器	N51	斜面下 施覆土	11.70	3.80	5.20	11.00/76	手×下×足	白釉	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B648
F281	4638	林	土器	N51	斜面下 施覆土	—	—	4.90	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[16C. 8~17C. 10] 後晉	口輪に白磁層	200003-B649
F282	4639	林	土器	N51	斜面下 施覆土	10.80	4.40	3.80	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[16C. 8~17C. 10] 後晉	口輪に白磁層	200003-B641
150	P280	4640	林	N51	斜面下端 斜削 施覆土	—	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C]	口輪に白磁層	200003-B639
F281	4641	林	土器	N51	斜面下端 斜削 施覆土	—	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[16C. 8~17C. 10] 後晉	口輪に白磁層	200003-B638
F282	4642	林	土器	N51	斜面下 施覆土	—	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B642
F283	4643	土器	土器皿	N51	斜面下 施覆土	8.40	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B646
F284	4644	林	土器	N51	斜面下端 施覆土	11.40	7.40	2.10	11.00/76	手×下×足	E1 赤、褐色。	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B655
F285	4645	林	土器	N51	斜面下 施覆土	11.00	6.90	2.80	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B643
F286	4646	土器	土器皿	N51	斜面下 施覆土	11.60	7.55	3.80	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B644
F287	4647	土器	土器皿	N51	斜面下端 施覆土	10.90	7.80	2.45	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B645
151	P288	4648	土器	N51	斜面下 施覆土	14.20	6.00	3.70	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B632
F289	4649	土器	土器皿	N51	斜面下 施覆土	—	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B646
152	P290	4650	土器	N52	土器	—	—	—	11.00/76	手×下×足 (16)	白	筒口・直腹・外 輪7.5cm	[17C] 前葉		200003-B645

第24表 出土遺物觀察表 御宮 陶磁器・土器 4

第25表 出土遺物觀察表 御宮 陶磁器・土器5

第26表 出土遺物觀察表

第27表 出土遺物觀察表 御宮 瓦2

遺物 番号	器種	出土場所	形態	寸法 (cm)						断面	内面調査	特記事項	ID (実測番号)
				a	b	c	d	e	f				
7066 壺形 NS2	灰土	雨原 (52.28m) 北: 9 ~ 11層 (目地)	壺 直筒	16.80	(13.80)	—	—	—	—	—	—	—	200003-10012
7067 壺形 NS2	灰土	雨原 (52.28m) 北: 9 ~ 11層 (目地)	壺 斜筒	(29.30)	(8.65)	3.20	(6.70)	(7.70)	1.85	5.00	—	—	200003-10011
141	瓦	NS2 斜面 瓦面	他	29.70	16.60	5.90	13.50	8.10	2.10	4.30	—	—	200003-1002
7068 壺形 NS2 斜面 瓦面	他	—	29.30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-1003
7069 壺形 NS2 8 ~ 9層 (1 ~ 目地)	他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-1004
7070 壺形 NS2 斜面 灰土 8層 (目地)	他	—	28.80	16.80	4.10	13.50	8.20	2.80	4.10	—	—	—	200003-1005
145 7071 壺形 NS2 斜面 8層 (目地)	他	—	30.15	(16.40)	5.50	13.40	8.15	2.20	4.20	—	—	—	200003-1002
7072 壺形 NS2 斜面 灰土 8層 (目地)	他	—	(28.00)	(15.80)	6.70	12.95	(8.10)	2.90	4.10	—	—	—	200003-1003
7073 壺形 NS2 石面 (52.28m) 北: 11層 (目地)	他	—	26.80	16.90	4.10	13.00	8.30	2.80	4.20	—	—	—	200003-1009
146 7074 壺形 NS2 石面 (52.28m) 北: 11層 (目地)	他	—	(20.10)	15.70	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-1009
7075 壺形 NS2 石面 (52.28m) 北: 12層 (目地)	他	—	28.80	15.40	4.40	13.00	8.20	2.80	4.50	—	—	—	200003-1005
7076 壺形 NS2 石面 (52.28m) 北: 12層 (目地)	他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-1006
147 7077 壺形 NS2 斜面 瓦面 №49 (目地)	他	—	(18.70)	(16.40)	—	—	(8.10)	(2.80)	—	—	—	—	200003-1007
7078 壺形 NS2 斜面 瓦面	他	—	(26.30)	17.40	6.90	14.90	7.70	2.20	5.90	—	—	—	200003-1008
7079 壺形 NS2 斜面 瓦面	他	—	20.00	17.40	4.50	13.20	6.30	0.90	2.10	—	—	—	200003-1009
7080 壺形 NS2 斜面 瓦面	他	—	(31.80)	(16.70)	15.65	14.00	(8.15)	2.10	4.50	—	—	—	200003-1010
7081 壺形 NS2 斜面 瓦面	他	—	(21.90)	(19.20)	5.10	(13.80)	—	—	—	—	—	—	200003-1010
148 7082 壺形 瓦面 12層 (目地)	他	—	20.00	14.70	3.70	11.80	7.20	1.80	3.90	—	—	—	200003-1011
7083 壺形 瓦面 13層 (目地)	他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-1012
7084 壺形 NS2 斜面 12層 (目地)	他	—	28.80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-1013
7085 壺形 NS2 斜面 13層 (目地)	他	—	(14.10)	13.30	(8.60)	(10.60)	8.00	1.80	4.50	—	—	—	200003-1015
149 7086 壺形 NS2 斜面 13層 (目地)	他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-1014
7087 壺形 NS2 斜面 瓦面下	他	—	14.80	8.00	12.10	7.30	1.30	4.90	—	—	—	—	200003-1002

第28表 出土遺物觀察表 御宮 瓦3

遺物 番号	器種	施K	出土場所	器物 寸法 mm						VTH (mm)	測定箇所	断面	内面調査	特記事項	ID (実測値)
				a	b	c	d	e	f						
T0888 平	NS2 瓦組 (53208) 施 A	施 A	施 A	[17, 60]	[23, 250]	—	—	[2, 000]	—	—	—	—	—	—	200003-0126
T0889 平	NS2 瓦組 (53208) 北 1～3層 (Ⅰ期)	施	施 A	27, 20	[15, 10]	[16, 90]	2, 00	1, 70	—	—	—	—	—	—	200003-0127
T0900 平	NS2 瓦組 (53208) 北 1～2層 (Ⅰ期)	施	施 A	26, 10	[15, 30]	[16, 60]	[1, 20]	1, 70	—	—	—	—	—	—	200003-0127
T0901 平	NS2 瓦組 (53208) 北 1～2層 (Ⅰ期)	施	施 A	[27, 30]	—	[11, 60]	—	[2, 20]	—	—	—	—	—	—	200003-0128
T0902 平	NS2 瓦組 (53208) 北	施	施 A	16, 35	—	24, 60	2, 60	2, 05	—	—	—	—	—	—	200003-0123
T0903 平	NS2 瓦組 (53208) 北	施	施 A	29, 00	[12, 80]	[28, 200]	—	2, 10	—	—	—	A2 F1 P1	—	—	200003-0117
T0904 平	NS2 瓦組 (53208) 北	施	施 A	32, 50	—	[2, 60]	[2, 20]	—	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0121
T0905 平	NS2 瓦組 一筋	施	施 A	27, 20	26, 20	24, 60	2, 20	1, 90	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0129
T0906 平	NS2 瓦組 瓦頭	施	施 A	28, 90	—	—	[20, 50]	1, 50	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0112
T0907 平	NS2 瓦組 瓦頭 3筋 (Ⅰ期)	施	施 A	27, 80	[12, 70]	[12, 80]	[1, 20]	1, 50	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0111
T0908 平	NS2 瓦組 瓦頭	施	施 A	[25, 50]	[13, 60]	—	—	1, 70	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0110
T0909 平	NS2 瓦組 瓦頭	施	施 A	—	—	—	—	2, 45	2, 35	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0116
T1000 平	NS2 瓦組 瓦頭	施	施 A	[22, 00]	—	[18, 45]	—	2, 00	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0122
T1001 平	NS2 瓦組 瓦頭 3筋 (Ⅰ期)	施	施 A	[16, 30]	[17, 70]	[12, 30]	—	2, 00	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0126
T1002 平	NS2 瓦組 一筋 (Ⅰ期)	施	施 A	29, 05	—	25, 00	3, 20	1, 60	—	—	—	A2 F1 P1	—	—	200003-0123
T1003 斜手	NS2 瓦組 1～2層 (Ⅰ期) or 21層 (Ⅲ期)	施	施 A	[14, 30]	[11, 20]	[13, 80]	—	—	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0119
T1004 斜手	NS2 瓦組 15～21層 (Ⅰ～Ⅲ期)	施	施 A	—	—	—	—	2, 00	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0126
T1005 斜手	NS2 瓦組 (53208) 北 1～2層 (Ⅰ期)	施	施 A	[27, 70]	16, 50	5, 30	[12, 60]	7, 00	2, 00	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0081
T1006 斜手	NS2 瓦組 1～2層 (Ⅰ～Ⅲ期)	施	施 A	[53, 60]	18, 80	4, 00	14, 50	8, 90	2, 30	—	—	A2 F1 P1	—	—	200003-0063
T1007 斜手	NS2 瓦組 (53208) 北 1～2層 (Ⅰ期)	施	施 A	—	—	—	—	4, 90	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0119
T1008 斜手	NS2 瓦組 瓦頭	施	施 A	[12, 80]	—	[2, 20]	—	[2, 00]	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0120
T1009 斜手	NS2 瓦頭 (53208) 本體土 (Ⅰ期)	施	施 A	—	—	—	—	—	—	—	—	A2 F1 P1	—	—	200003-0110
T1100 斜手	NS2 瓦組 瓦頭	施	施 A	8, 60	6, 60	—	—	1, 50	—	—	—	C2 F1 P1	—	—	200003-0111

第29表 出上道物綱索表 御它 石製品 1

品目	規格	単位	地区	出荷量						積合	積合	積合
				■	■	■	■	■	■			
3012 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	333,193	11,26	3,16	12,20	12,69	2,10	7,69	16,803	1,17%
3014 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(30,263)	1,90	1,90	11,10	—	—	—	16,272	1,14%
179 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(13,301)	11,10	—	—	—	—	—	16,232	1,10%
3015 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(12,265)	11,20	—	—	—	—	—	16,203	1,09%
3016 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	17,26	14,10	3,19	13,30	14,30	5,30	5,30	16,012	1,12%
3017 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	13,40	14,00	5,20	18,20	10,20	4,10	5,00	16,002	2,09%
190 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(17,303)	11,70	—	12,60	11,10	9,20	5,50	16,261	2,10%
3000 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	43,00	14,70	2,90	12,70	(11,20)	5,90	5,90	16,712	2,05%
181 3021 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	43,70	14,00	3,00	16,20	10,10	5,10	5,20	16,761	2,15%
3022 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(26,063)	15,10	3,20	12,20	11,50	6,10	6,10	16,433	2,05%
3023 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(26,303)	15,00	—	12,60	12,40	5,20	6,00	16,503	2,15%
3024 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(15,201)	11,00	—	(12,70)	(11,85)	6,00	6,95	16,477	2,10%
3025 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(4,301)	11,00	—	—	—	—	—	16,702	2,15%
3026 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(35,203)	15,00	2,80	12,20	12,80	7,10	7,80	16,222	2,10%
3027 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(2,10)	11,30	—	—	—	—	—	16,395	2,15%
3028 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(26,203)	15,00	2,60	14,10	11,20	6,20	6,20	16,411	2,15%
3029 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(26,263)	11,70	—	(22,10)	11,10	6,70	6,90	16,102	2,15%
183 3030 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(13,310)	14,10	3,20	12,20	11,30	6,00	6,90	16,442	2,15%
3031 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(35,301)	15,00	2,80	12,20	12,80	7,10	7,80	16,222	2,10%
3032 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(2,10)	11,30	—	—	—	—	—	16,395	2,15%
184 3033 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(19,263)	15,20	—	—	—	—	—	16,222	2,15%
3034 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(17,263)	11,60	—	—	—	—	—	16,203	2,05%
3035 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K. 丸 K.	(26,263)	11,10	—	—	—	—	—	16,411	2,15%

第30表 山上遺物觀察表

御官 石製品

丸瓦

番号	系号	種類	標記	出土場所	a	b	c	d	e	f	g	h	i	鑑定	備考事項	ID (法規番号)
50308	7-A	石器	石器	山腰 60m (山腹)	(31.0)	(13.18)								(3.99)	山腰火打	200003 5008
165	5-A7	石器	石器	山腰 60m (山腹)	20.20	15.70								(6.21)	山腰火打	200003 5009
50308	A-A	石器	石器	山腰 60m (山腹)	21.30	14.20								(2.46)	山腰火打	200003 5010
50309	B-17	石器	石器	山腰 60m (山腹)	16.20	14.30								1.30	山腰火打	200003 5011

丸瓦

番号	系号	種類	標記	出土場所	a	b	c	d	e	f	g	h	i	鑑定	備考事項	ID (法規番号)
50309	4-K	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(26.0)	20.8								(8.75)		200003 5012
156	5-A41	石器	石器	山腰 60m (山腹)	(55.0)	25.70	27.70	2.50						(6.87)		200003 5013
50312	F-17	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	31.80	(11.00)	30.50	3.20	1~4.20					(12.0)		200003 5014
50313	Y-K	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	25.35	19.70	20.20	3.00	1~4.00					(12.2)	山腰火打	200003 5015
157	5-A6	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	26.80	11.00								(8.01)	山腰火打	200003 5016
50314	4-K	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	33.40	11.10	20.40	2.70	2.20~6.10					(11.0)	山腰火打	200003 5017
158	5-A5	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(21.20)	35.70								(9.0)	山腰火打	200003 5018
50316	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	21.20	30.80	30.30	3.10	4.00					(6.02)		200003 5019
50317	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	15.90~21.20	30.6	30.60	3.00	3.40					(4.20)		200003 5020
159	5-A19	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(1.20)		200003 5021
50320	4-K	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(28.00)	30.60								(3.02)		200003 5022
50321	4-K	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(27.00)	31.10								(3.02)		200003 5023
160	5-A56	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(35.80)	30.40								(6.20)		200003 5024
50322	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(5.82)		200003 5025
50323	F-17	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(21.00)	30.60								(4.02)		200003 5026
50324	4-K	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(26.00)	30.50								(3.02)		200003 5027
151	5-A7	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(15.90)	30.60								(2.00)	山腰火打	200003 5028
50325	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5029
50326	4-K	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(21.00)	30.60								(3.02)		200003 5030
50327	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5031
161	5-A6	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)	(15.90)	30.60								(3.02)	山腰火打	200003 5032
50328	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5033
50329	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5034
50330	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5035
50331	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5036
50332	4-K	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5037
50333	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5038
50334	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5039
50335	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5040
50336	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5041
50337	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5042
50338	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5043
50339	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5044
50340	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5045
50341	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5046
50342	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5047
50343	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5048
50344	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5049
50345	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5050
50346	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5051
50347	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5052
50348	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5053
50349	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5054
50350	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5055
50351	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5056
50352	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5057
50353	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5058
50354	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5059
50355	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5060
50356	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5061
50357	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5062
50358	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5063
50359	7-J	石器	石器	山腰 60m (山腹) 60m (山腹) 60m (山腹)										(3.02)		200003 5064

第31表 山上遺物觀察表 漢官 石製品3

## 桿瓦

編號	系名	器種	體積	出土地點				尺寸(公分)				厚度(公分)				(D) (出處編號)	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	備註				
5025	5025	石斧	長柄直刃(有段)	55.00	(31.00)	52.00	5.0	—	—	—	—	1.60	5.0	(5.80)	—	200003-S030	
5026	5026	石斧	長柄直刃(有段)	(36.90)	(30.00)	—	—	—	—	—	—	(1.20)	—	3.0	(8.50)	—	200003-S026
5027	5027	石斧	長柄直刃(有段)	(46.00)	(31.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	(1.00)	—	—	200003-S027
5028	5028	石斧	長柄直刃(有段)	(37.80)	(31.00)	44.10	4.20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S028
5029	5029	石斧	長柄直刃(有段)	35.80	35.80	31.00	—	—	—	—	—	2.40	4.20	3.4	(9.22)	(9.28)	200003-S029
5030	5030	石斧	長柄直刃(有段)	(31.10)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S030
5031	5031	石斧	長柄直刃(有段)	52.70	52.70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S031
5032	5032	石斧	長柄直刃(有段)	(50.30)	(52.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S032
5033	5033	石斧	長柄直刃(有段)	(49.00)	(52.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S033
5034	5034	石斧	長柄直刃(有段)	(44.00)	(50.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S034
5035	5035	石斧	長柄直刃(有段)	(46.00)	(49.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S035

## 桿瓦・他

編號	系名	器種	體積	出土地點				尺寸(公分)				厚度(公分)				(D) (出處編號)	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	備註				
5036	5036	石斧	長柄直刃(有段)	102.20	122.20	12.60	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S036	
5037	5037	石斧	長柄直刃(有段)	96.10	121.00	12.60	5.0	6.10	1.80	(17.00)	—	—	—	—	—	200003-S037	
5038	5038	石斧	長柄直刃(有段)	95.90	111.60	12.20	6.25	5.60	—	—	—	—	—	—	—	200003-S038	
5039	5039	石斧	長柄直刃(有段)	94.80	21.90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S039	
5040	5040	石斧	長柄直刃(有段)	91.40	123.20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S040	
5041	5041	石斧	長柄直刃(有段)	92.20	21.90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S041	
5042	5042	石斧	長柄直刃(有段)	93.30	12.20	12.60	6.10	4.50	—	—	—	—	—	—	—	200003-S042	
5043	5043	石斧	長柄直刃(有段)	(10.00)	(13.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S043
5044	5044	石斧	長柄直刃(有段)	(22.00)	(18.00)	1.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S044	
5045	5045	石斧	長柄直刃(有段)	(21.70)	(15.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S045	
5046	5046	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S046	
5047	5047	石斧	長柄直刃(有段)	(10.00)	(10.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S047	
5048	5048	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S048	
5049	5049	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S049	
5050	5050	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S050	
5051	5051	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S051	
5052	5052	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S052	
5053	5053	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S053	
5054	5054	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S054	
5055	5055	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S055	
5056	5056	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S056	
5057	5057	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S057	
5058	5058	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S058	
5059	5059	石斧	長柄直刃(有段)	(12.00)	(12.00)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200003-S059	

第32表 山上遺物標記表

図版	番号	種別	器種	地名	出土地点	全長 (cm)		幅 (cm)		高さ (cm)		特徴事項	
						(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)		
M026	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.86	1.27	—	—	25.7	11.1	口部削	
M032	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.99	1.27	—	—	26.3	11.1	口部削	
M028	碗	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.97	1.28	—	—	25.9	11.1	口部削	
M029	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.65	1.70	—	20.8	11.9	口部削	
M030	碗	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.60	1.70	—	20.8	11.9	口部削	
M041	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.56	1.21	—	—	21.1	11.1	口部削	
M010	碗	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.60	1.20	—	—	20.0	11.1	口部削	
M012	碗	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.53	1.20	—	—	20.0	11.1	口部削	
M013	碗	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.50	1.20	—	—	20.0	11.1	口部削	
M011	碗	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.50	1.20	—	—	20.0	11.1	口部削	
M045	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.55	1.10	1.65	—	17.1	11.1	口部削	
M026	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.55	1.10	1.60	—	17.1	11.1	口部削	
M052	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.54	1.10	1.60	—	17.1	11.1	口部削	
M053	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.50	1.10	1.55	—	17.1	11.1	口部削	
M054	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.48	1.00	1.55	—	17.1	11.1	口部削	
M019	瓶	泥質	S84	遠野原窯土坑	S84	1.48	1.00	1.55	—	17.1	11.1	口部削	
200	M050	瓶?	S84	平べんとガラスカラ	S84	1.40	0.90	1.50	—	17.1	11.1	口部削	
201	M051	瓶?	S84	平べんとガラスカラ	S84	1.40	0.90	1.50	—	17.1	11.1	口部削	
M052	瓶?	S84	平べんとガラスカラ	S84	1.40	0.90	1.50	—	17.1	11.1	口部削		
M053	瓶?	S84	平べんとガラスカラ	S84	1.40	0.90	1.50	—	17.1	11.1	口部削		
M054	瓶?	S84	平べんとガラスカラ	S84	1.40	0.90	1.50	—	17.1	11.1	口部削		
202	M055	瓶?	S84	平べんとガラスカラ	S84	1.30	0.80	1.40	—	17.1	11.1	口部削	
M056	瓶?	S84	平べんとガラスカラ	S84	1.30	0.80	1.40	—	17.1	11.1	口部削		
M057	瓶?	馬凡?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.30	0.80	1.40	—	17.1	11.1	口部削	
202	M058	瓶?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.30	0.80	1.40	—	17.1	11.1	口部削	
M059	瓶	馬凡?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.30	0.80	1.40	—	17.1	11.1	口部削	
M060	瓶	馬凡?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削	
M061	瓶	馬凡?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削	
M062	瓶	馬凡?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削	
M063	瓶	馬凡?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削	
203	M064	瓶	ツバタ	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削
M065	瓶	ツバタ	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削	
M066	瓶	ツバタ?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削	
M067	瓶	ツバタ?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削	
204	M068	瓶	?	S84	遠野原窯土坑	S84	1.20	0.70	1.30	—	17.1	11.1	口部削

第33表 山上遺物標記表 郡宮 金城要塞 2

図版 番号	種別	器種	地名	出土地点	全長 (cm)		厚 (cm)	重さ (kg)	特徴事項
					(cm)	(cm)			
M069	鉢	四	S4	深淵台地上	16.70	11.90	6.00	387.7	事實 内存底ハ「」縁以上二 切削部スベ～タズ
M070	盤?	合子	S4	深淵台地上	9.40	—	3.00	90.0	200003-3613
M071	鉢	一	S3	土丸	2.45	2.45	0.11	1.9	200003-3622
M072	鉢	九	S1	北原面(波上)9面(Ⅰ面)	2.31	1.20	6.11	1.4	裏六角
M073	鉢	輪打目付ル・タスクル	S2	石垣(5.120m)北原面(波上)9面(Ⅰ面)	3.70	2.00	0.80	9.1	裏加輪打目付
M074	鉢	九	S2	北原面(波上)13面(Ⅱ面)	2.40	0.85	0.80	1.0	200003-3642
M075	鉢	九	S2	輪打目付(波上)14面(Ⅱ面)	2.65	0.95	0.75	1.1	200003-3637
M076	鉢	九	S2	輪打目付(波上)18面(Ⅲ面)	2.15	1.00	0.90	1.9	200003-3644
M077	鉢	九	S2	斜面下平(波上)9面(Ⅲ面)	2.05	1.05	0.30	1.9	200003-3645
M078	鉢	九?	S2	斜面下平(波上)9面(Ⅲ面)	2.85	1.15	0.35	4.4	200003-3649
M079	鉢	九?	S2	斜面(Ⅱ面)	—	—	—	—	200003-3646
M080	鉢	九?	S2	斜面(波上)15面(Ⅲ面)	7.95	1.70	1.50	25.0	200003-3647
M081	鉢	九?	S2	石垣(5.120m)北原面(Ⅲ面)	8.50	1.95	1.50	29.0	13.3
M082	鉢	九?	S2	斜面(波上)9面(Ⅲ面)	7.15	1.35	0.45	14.8	200003-3650
M083	鉢	九?	S2	斜面(波上)9面(Ⅲ面)	6.20	0.60	0.60	11.1	200003-3659
M084	鉢	九?	S2	斜面(波上)9面(Ⅲ面)	9.60	3.60	—	77.0	200003-3616
M085	鉢	九?	S2	斜面(波上)9面(Ⅲ面)	9.60	2.60	—	—	200003-3644
M086	鉢?	九?	S2	斜面(波上)	7.60	5.10	3.20	175.0	200003-3645

## 第4節 小結

### 1. 金沢東照宮の遺構について

今回の発掘調査では、調査区の制約等もあり、東照宮に関連する建物遺構は確認できなかつたが、周辺部分の石垣の位置や形状等が明らかとなつた。また、絵図でも通路の表現がされている郭北東部の斜面上で、石瓦の棟石を転用した簡易な階段を確認している。郭北東部の斜面部で鬼瓦を含む凝灰岩製の石瓦が出土したことにより、東照宮の建物の一部に石瓦が葺かれていた可能性が高くなつた。

本節では大別層ごとに遺構の様相を振り返つていただきたい。

**I層** 近代から現代層で、近代以降の建物基礎や、地下埋設物などが調査区ほぼ全域で確認された。明治以降の旧陸軍建物の絵図をみると、明治40年頃には病院が建てられ、その後、将校集会所となる。基本的な建物の配置や規模は変化しておらず、金沢大学となった昭和50年頃まで続く（第207図）。航空写真を比べても、屋根の形状等は変化しておらず、同じ建物を使用し続けたとみられる。

**II層** 近世層であるが、NS2区以外ではI層やIII層との境が不明確なままである。SW5からSW6区にかけて、標高約41m、黄褐色系の砂質土の整地面が該当する可能性がある。この地点は、近世段階では東照宮創建以降一貫して門が建てられている。近代以降では、旧陸軍関係の建物が建つており、その範囲は整地面の広がりと重複している。ただ、整地面の南端の掘り込みが旧陸軍の病院に付属していた廻の位置とも重なつてゐるが、この廻は将校集会所の平面図には残つておらず、ある時期撤去されてしまつて、それに伴う地下構造物の抜き取り痕と想定している。また、整地面下からは近世初頭の遺物が出土しており、黄褐色土の整地面を東照宮と関連付けることに大きな矛盾はない。

郭の呼称である「御宮」だが、近世初期の絵図では、「村井出雲」や「北ノ丸」と記されており、それが東照宮造営以降「御宮」「権現堂」の記述もあるとなる。絵図では、延宝年間に描かれた「加賀国金沢之図」（金沢市立玉川図書館蔵）が東照宮を描いた初期のものとしてあげられる。それ以後、明治11年（1878）に移転するまで主要な建物は大きく変化しないが、唯一変化があるのが宝蔵（経蔵）である。前述の延宝年間の絵図ではなく、天和2～貞享4年（1682～1687）頃とされる「金沢古城図」（石川県立図書館蔵）に登場する。「御城中壇分基絵図」（文政13年（1830）横山隆昭氏蔵）に描かれて以降の絵図にはみられない。『金沢東照宮（尾崎神社）の研究』〔金沢城研究調査室2006〕では、文化年間から天保元年に限つて描かれているとしており、從来考えられていたよりも、宝蔵が存続していた期間は長くなる。しかし、「金沢古城図」については、17世紀末の景観を描いたものとされるが、その年代観と一致する郭と、やや新しい要素を含む可能性をもつ郭があると指摘されており、今後年代観が変わる可能性もあるが、現時点の評価として17世紀末の景観とし、今後文献資料等での裏付けを待ちたい。なお、第2節でもふれたように、今回の調査では宝蔵に関係する遺構は確認できなかつた。

**III層** 主にNS2区で確認された、①空堀の埋め立てと東照宮建立、②石瓦の廃棄、③棟石を転用した階段の廃棄までが該当する。この段階の造成により、空堀の埋め立てが行われ、東照宮が建てられる。この埋立ての際に隣接する藤右衛門丸との間に平坦面が造成されるが、仕切りとしての石垣5120Nも築かれたと考えられる。東照宮は寛永19年（1642）に造営が開始、翌20年（1643）に竣工する。その後藤右衛門丸との間にある平坦面が斜面上（御宮側）からの流土で埋め始め、その初期段階で平坦面に集積状態であったものを含む石瓦が、燻瓦や17世紀中葉の遺物とともに廃棄されている。石瓦は鬼瓦に三つ葉葵が刻まれており、東照宮関連の建物の屋根瓦と考えてよいだろう。出土した石瓦の構成から本瓦葺の屋根と考えられるが、どの建物で使用されていたかは不明である。この上層の流土層からは17世紀後半の遺物が出土しており、東照宮創建からそう時間を使はず、廃棄されたとみられる。棟石を転用した石段はこの流土を基盤として設置しており、御宮と藤右衛門丸との簡易的な通路であったと考えられる。江戸後期の絵図では、土羽部分に通路とみられる描写や、御宮北辺に巡る柵

の一部に出入り口が描かれており、検出した石段の位置ともほぼ一致する（第207図）。この石段を埋める斜面土塁中からは、石製の棧瓦も出土しているが、具体的な年代は不明である。

これら一連の廃棄や埋没については、東照宮の修理等と関連している可能性が高く、記録では延宝5年（1677）、宝暦3～5年（1753～55）、文化12年（1815）に修理されたとあるが（第2章第4表参照）。石瓦の廃棄は出土遺物の年代から延宝5年（1677）の修理と関連する可能性もある。

**IV層** NS1区とNS2区で確認した空堀の基盤層が該当する。後述する藤右衛門丸における、金沢城初期の段階の整地土の存在を勘案すると、IV層もそれらと連動している可能性もある。

## 2. 西辺の内向き石垣5113Eについて

本調査では、SW4区より絵図等にも描かれない郭の内向きの石垣を確認した。この石垣は、城内ではほとんど見られない、自然石を使用（河川転石）した石垣であった。金沢城石垣編年1期の自然石積みでは、河川転石も混じるが、戸室石切丁場で採取して城内へ持ち込んだとみられる戸室石の自然石や割石を主体としている。5113Eは戸室石が4割程度含まれるが、石切丁場から持ち込んだとは考えにくく、河川より手頃な石材を選び、搬入した中に一定量の戸室石と同質の石材が含まれていたと推測している。石積みについては、一部石材の規格が揃い、布積みとなる部分もあるが、大部分は河川転石の小口部分を面として、やや大型の石材は大面を見せるように横置きして点々と置いている。そして、ごくまれに、大型の石材を立石状に配置する。

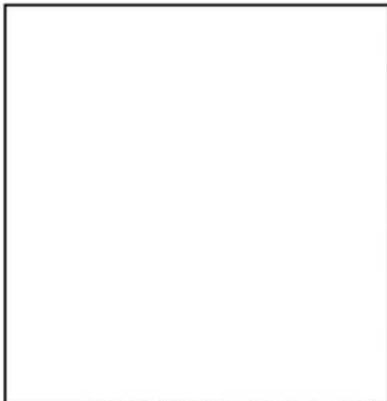
この石垣の時期を特定するような出土遺物はなく、先述した通りこういった石垣は城内では比較可能な事例もない。また、本調査では隅角部も確認しておらず、検討が難しいが、石積みや石材からは古い様相を示しているようにみえることから、金沢城石垣よりも、やや先行する事例である白山市鳥越城跡や舟岡山城跡の石垣を参考にみてみたい。

両者の石垣の特徴については、それぞれの報告書において整理されており、金沢城1期の石垣とも比較検討されているのでそちらを参照していただきたい（白山市2017、白山市2018）。鳥越城跡の石垣は1から3類に、舟岡山城跡では2類に分類されており、石積みの特徴は以下の通りである。

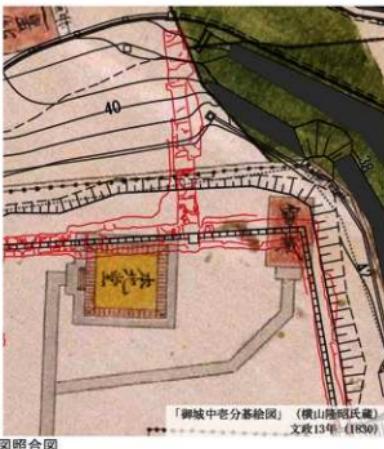
これをみると、金沢城1期石垣と近似するとされる舟岡山城二類石垣以外は、基本的に石材を小口積し、横置きした石材が混在するようである。また、大型石材の大面を立てて配置する点も共通している。鳥越城石垣にみられる、1類の石面の凹凸については、5113Eは面の平らなものを選択しているようにみえる。一方で2類の石面を水平に置く点については、横長材は水平を意識して置かれており、鳥越城2類石垣に、より共通点を見いだすことができる。

十分に現地で石垣を観察し検討を行ったわけではないが、以上の点は御宮の石垣5113Eが金沢城石垣編年1期（文禄期）石垣よりも、先行する要素をもっていることを示している。ただし、郭の内向きの石垣であるという、場による違いといった可能性も含めて、今後の類例を待ちたい。

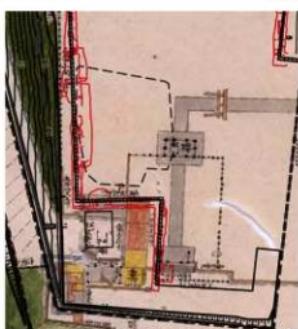
	鳥越城			舟岡山城		金沢城（御宮） 5113E
	1類	2類	3類	1類	2類	
積み	小口積、横置き（60～100cm大） 凹凸の目立つ壁面	小口積、横置き混在（多） 石面を水平に置く 60～80cm大面数石 ごと配置	小口積、横置き混在 大型材縦置き 「鉛石」風み込み	小口積 一部に横積み 平石の大面立てる	小口積	小口積、横置き 60cm～大型材一定間隔で 縦置き
隅角部	—	算木状	—	重ね積	算木積	—
積石	あり			あり	あり	あり
勾配	50～60度	60度前後	60度	30度後半	一組より急	ほぼ垂直（積石付近）
裏込め	なし	あり	裏込め強め、介石程度か	土砂の張り少、築石層	あり	石尻付近 分割的
穴穴				あり	あり	あり
年代等	中世葉落盡構の石積み に近い	舟岡山一類と親和性 天正11年（1583）		鳥越城2類と親和性 天正11年（1583）矛盾ない	金沢城1期と近似 文禄元年（1592）に近い	



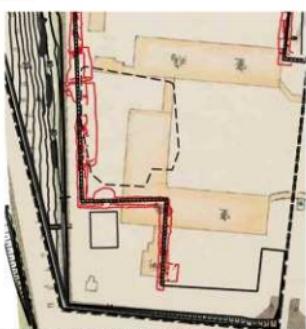
「金沢御城内外御建物絵図」（（公財）前田一徳会蔵）  
天保4～9年（1833～1838）  
黒：現況図 赤：調査区  
NS2区絵図照合図



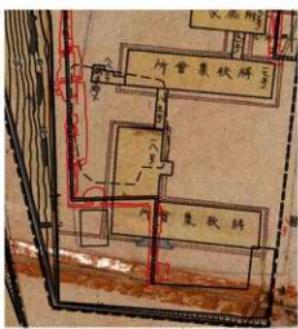
「御城中老分基絵図」（横山勝昭氏蔵）  
文政13年（1830）



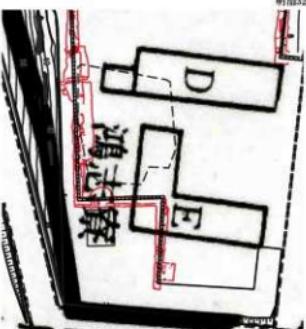
「御城中老分基絵図」（横山勝昭氏蔵）文政13年（1830）



「歩兵第七准隊構外木櫓解説之図」（防衛省防衛研究史研究センター蔵）  
明治32年（1899）



「歩兵第七准隊絵図」（石川県立歴史博物館蔵）昭和20年（1945）



「金沢大学生便覧」より転載

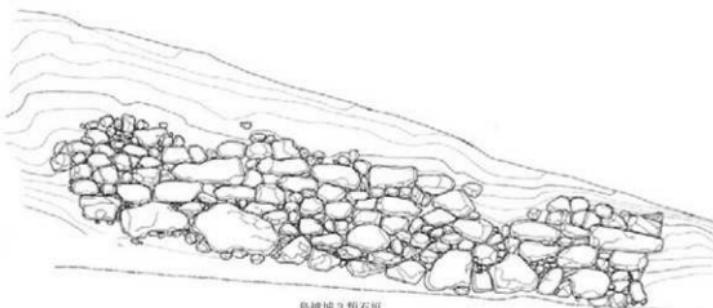
NS2区絵図照合図  
第207図 御宮 調査区内の建物変遷



鳥越城1類石垣



鳥越城2類石垣



鳥越城3類石垣

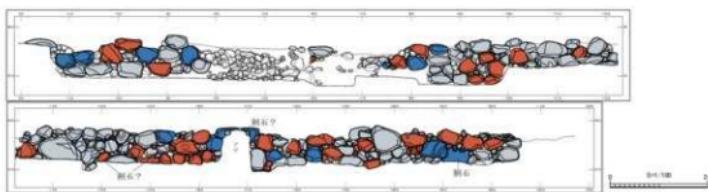
『鳥越城跡発掘調査報告書』2016白山市教育委員会より転載



舟岡山城1類石垣



舟岡山城2類石垣



第208図 鳥越城・舟岡山城・御宮石垣(5113W)



SE2区 遺構確認状況（南から）



SE2区 遺構確認状況（南から）



SE2区 調査区南壁西端（北から）



SE2区 調査区西壁（東から）



SE3区 遺構確認状況（東から）



SE3区 遺構確認状況（南から）



SE3区 遺構確認状況（南から）



SE3区 遺構確認状況（南から）

写真図版21 御宮遺構写真1



SE4区 遺構確認状況（南から）



SE5区 遺構確認状況（南から）



SE5区 ピット半裁状況（西から）



SE5区 SE01（西から）



SE5区 SE01（北西から）



SE5区 SE01東壁石積（南西から）



SE5区 SE01南壁石積（北西から）



SE5区 深掘部西壁（東から）

写真図版22 御宮遺構写真2



SW1区 南端 整地土検出状況（東から）



SW1区 遺構確認状況（北から）



SW2区 遺構確認状況（北から）



SW2区 南半 近現代石列（南から）



SW2区 SK02（南西から）



SW3区 東側 SK05（北から）



SW3区 東側 コンクリ基礎間 近現代落ち込み断面  
(南から)

写真図版23 御宮遺構写真3



SW4区 南北石垣 5113E（北東から）



SW4区 御宮西石垣 5113E (南東から)



SW4区 御宮西石垣 5113E  
根石レベルが異なる部分 (東から)



SW4区 アゼ4北壁 (石垣埋土 5113E) (北から)



SW4区 アゼ4北壁 (石垣内部 5113E) (北から)



SW4区 御宮西石垣 5100W 栗石検出状況 (東から)



SW4区 御宮西石垣 5100W 背面盛土 (南から)



SW4区 純弾廃棄土坑検出状況 (東から)



SW4区 純弾廃棄土坑完掘状況 (東から)

写真図版24 御宮遺構写真4



SW5区 遺構検出状況（北東から）



SW5区 調査区南壁（北東から）



SW5区 調査区南壁（北から）



SW5区 調査区南壁（北から）



SW5区 調査区南壁（北から）



SW5区 調査区南壁（北から）



SW5区 調査区南壁（北から）



SW5区 作業風景（東から）

写真図版25 御宮遺構写真5



SW6区 調査区西壁（南東から）



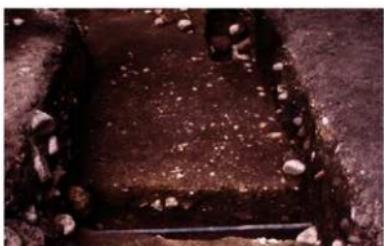
SW6区 調査区西壁（東から）



SW6区 調査区西壁（東から）



SW6区 調査区西壁（東から）



SW6区 砂利面検出状況（北から）



SW6区 石列検出状況（北から）



SW6区 調査区南端トレンチ西壁（東から）

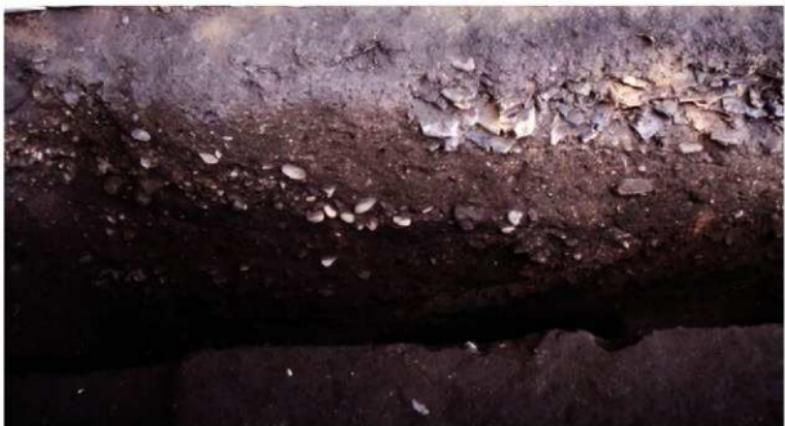


SW6区 作業風景（北から）

写真図版26 御宮遺構写真6



NS1区 トレンチ掘下げ状況（北から）



NS1区 トレンチ北半西壁（東から）

写真図版27 御宮遺構写真7



NS1区 御宮北石垣 5120N (西から)



NS1区 御宮北石垣 5120N (東から)



NS1区 御宮北石垣 5120N前面埋土 (西から)



NS1区 トレンチ北半掘下げ状況 (南から)

写真図版28 御宮遺構写真8



NS2区 トレンチ掘下げ状況（北から）



NS2区 石段確認状況（北から）



NS2区 斜面テラス出土状況（北から）



NS2区 石段検出状況（西から）

写真図版29 御宮遺構写真9



NS2区 御宮北石垣 5120N (北から)



NS2区 御宮北石垣 5120Nと石段 (南東から)

写真図版30 御宮遺構写真10



NS2区 西壁5120N前面埋土（東から）



NS2区 5120N前面埋土（西から）



NS2区 東壁（西から）



NS2区 西壁（東から）



NS2区 斜面作業風景（南から）



NS2区 斜面テラス部堆積状況（北から）



NS2区 旧壙埋戻し土堆積状況（東から）



NS2区 旧壙埋戻し土堆積状況（北から）

写真図版31 御宮遺構写真11



NS2区 斜面石瓦出土状況（北から）



NS2区 斜面石瓦出土状況（南から）

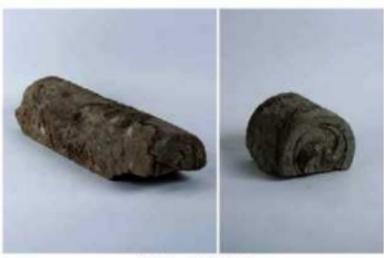


NS2区 斜面石瓦出土状況（西から）

写真図版32 御宮遺構写真12



NS2区 石鬼瓦



NS2区 石軒丸瓦



NS2区 石挂瓦

NS2区 石軒平瓦（上・中）石棧瓦（下）

写真図版33 御宮石瓦写真

## 第5章 藤右衛門丸

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査区の位置と調査の概要 (第209、210図)

藤右衛門丸は、金沢城内の北西端に位置する郭で、現地表面で標高約39mを測る。南側の一段高い御宮との比高差は約2mだが、城外となる北側の尾崎神社とは約5mの比高差となる。

郭の北縁部にトレンチを設定し、調査を行った。調査区は郭形状に沿っており弧状を呈し、その東端部から西へとむかって、調査区の折れを境として、N1～N7区とした。郭の縁辺かつ金沢城の北端部にあたる場所であることから、遺構密度は希薄ながらも近世の整地土が良好な状態で遺存していた。また、17世紀初頭に年代を特定可能な遺構を確認した。

調査区東端では慶長期の陶磁器、土師器皿を多量に含む土坑や、郭北辺中央では、側面に木枠の痕跡のある溝を検出した。出土遺物から17世紀初頭と考えられる。また郭北辺西側では地表より約2.5m下で、郭を造成する以前の火葬施設に関連すると思われる遺構や焼骨片が出土している。

#### 2. 基本層序

藤右衛門丸調査区では、調査区壁面、特にN4区において深掘りを行った地点を基準に、周辺との対応関係や堆積状況等をふまえて、大別IV層に区分した。

I層は表土や碎石層を含む近代から現代の層で、更に金沢大学期と旧陸軍期を区分できる地点もあり、その場合は金沢大学期をIa層、旧陸軍期をIb層とした。近世段階の土層との差異が不明瞭な場合があるが、広範囲で、一気に埋め戻した場合はI層に該当する可能性が高い。

II層は近世段階の造成土及び遺構である。暗褐色、又は暗黄褐色土を主体とする。I層と比べて層ごとの単位がやや小規模になる傾向がある。

III層は同じく近世段階の造成土であるが、金沢城創建期にかかる造成土である。地山や旧表土由來の暗褐色土と黄褐色土が互層状に堆積する。II層と比べて大型の礫の混入が少ない。

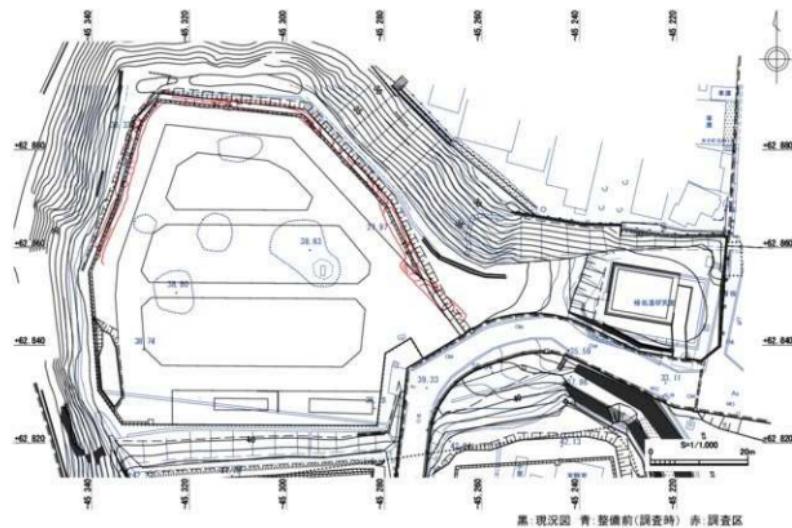
IV層は近世以前の造成土及び遺構で、N4区で確認した火葬に関連すると思われる遺構が該当するが、具体的な年代は不明である。

### 第2節 遺構

#### 1. 土坑

SK01 (第216図) N1区南端で検出した土坑である。全体形状は調査区外に延びているため把握できないが、直径約2mを越える楕円形もしくは隅丸長方形のプランと推測され、深さは約76cmを測る。近代以降の整地により上部を削平されており、掘り込み面は不明だが、近世の可能性のある整地土(I1層)を切って、地山を垂直に掘り込んでいる。覆土は下位に茶褐色土、上位に黄褐色土がほぼ水平に堆積する。土坑の半分以上を茶褐色土で一気に埋めたのち、黄褐色土を薄く敷き均して整地を行っている。また、壁面を板によって押さえていた痕跡が北側壁では明瞭に確認できる。7層までは板がある状態で埋められており、その上の5、6層はそれを覆うように被覆されている。底面は垂直に掘り込まれたのち、遺構の中心よりもやや北側に向かって緩やかに深くなる。17世紀前葉から中葉にかけての遺物が出土した。また、須恵器甕体部の細片も確認した。

I1層は、近代の整地層であるI層と明瞭に土質が異なり、地山由來のSK01周辺でのみ認められる土層で、SP西から約1.0m西方まで続いているが、それより西方ではI層の直下は地山となる。調査区南壁もI層の直下は地山となっている。I1層が近世整地層の場合、その直下の地山面も近世段階の整



黒: 現況図 青: 整備前(調査時) 赤: 調査区  
絵図: 「御城中寺分基絵図」(横山隆紹氏蔵) 文政13年(1830)

第209図 藤右衛門丸 調査区位置図・絵図照合図

地面となるが確認は得ていない。

**SK02** (第211図) N1区中央部付近で検出した土坑。遺構は調査区外に延びており、ほぼ半円形で直径約4mを測る。壁面はオーバーハングし、袋状を呈する。覆土下層より板ガラス片や、アラビア数字で「2」と書かれた旧陸軍で使用された磁器碗が出土した。

**SK03** (第211図) N1区からN2区にかけての調査区東壁沿いで検出した。北端と南端で遺構の上端が収束することから大型の土坑であろう。最大長は8.7mを測る。壁面を川原石積と粘土で補強する。覆土には大量の円礫とともに、コンクリートブロックを含む。同じくN1区とN2区にまたがって検出したSK05を切る。

**SK04** (第216図) N1区で検出した。東西方向に長軸をもち、長軸約2.5m、短軸約1.3mの不整な長楕円形を呈する。壁面は緩やかに落ち込み、検出面からの深さは約23cmを測る。近世と考えられるが年代は特定できない。

**SK05** (第211図) SK03に先行する土坑であるが全体形状等は不明で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれる。出土遺物に釉薬瓦片が含まれることから江戸後期以降と考えられる。

**SK06** (第212図) N3区中央部で検出した。長軸を南北にもち、その両端は調査区外に延びる。溝の可能性もあるが、東壁が弧状に回ることから土坑とした。Ib層を切り込んでいる。

**搅乱** (第212図) N2区で検出した。近代以降の土坑。南北方向に長軸をもち、長軸約8.3m、短軸約2.2mを測る。内部は炭化物が多く、昭和期(旧陸軍建物廃棄時)のごみ焼却に伴う廃棄土坑と考えられる。

## 2. 溝

**SD01** (第213図) N3区北西端部で検出した、南北方向に軸をもつ溝状遺構。近世とみられる整地層・II層に覆われている。検出面より深さ約80cm、幅約1.3mを測り、断面形状は壁が垂直に近い箱型を呈する。覆土は最下層に円礫を多量に含む層が薄く堆積するが、土師器皿などの遺物や炭化物や礫を含む土ではほぼ一気に埋め戻された状況である。出土遺物は越中瀬戸のすり鉢片や土師器皿が出土しており、17世紀初頭には埋め戻されたと考えられる。

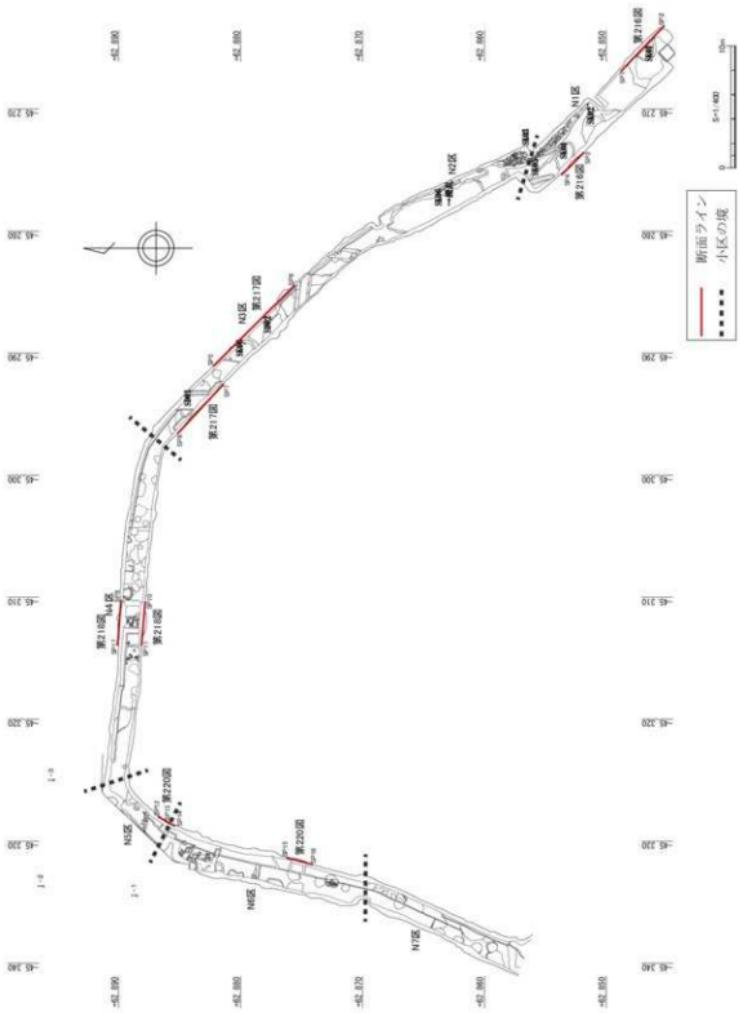
西側の壁面には、板状の痕跡がみられるが、東側の壁面には確認できない。東側は標高37.8m付近から地山を掘り込んでいるが、西壁側は整地土層を掘り込んでいることから、壁面の崩落防止のために側板を使用したと考えられる。断面図では、東側の立ち上がりがやや西側壁に比べ緩くなっているが、これは溝が壁面に対して直行していないためで、平面的には両側壁ともほぼ垂直に立ち上がる。西側壁が掘り込んでいる整地層は、30層以下では暗褐色～黒褐色系の土層だが、それより上部は黄褐色系砂礫土層と30層を境に明瞭に土質が異なる。30層のレベルがSD01を挟んだ地山のレベルとほぼ同じことも30層は搅乱を受けている可能性もあるが、城郭として整地される以前の地表層・IV層の可能性も含めておきたい。

**SD02** (第212図) N3区中央部で検出した東西方向に軸をもつ溝状遺構としたが、である。遺構の東端と西端は調査区外に延びており、幅約3m、深さは約64cmを測る。旧陸軍建物に伴うIb層に覆われており、建物建築時には埋め戻された状態となっていたと考えられるが、時期を特定又は推定できる遺物や情報は確認できなかった。

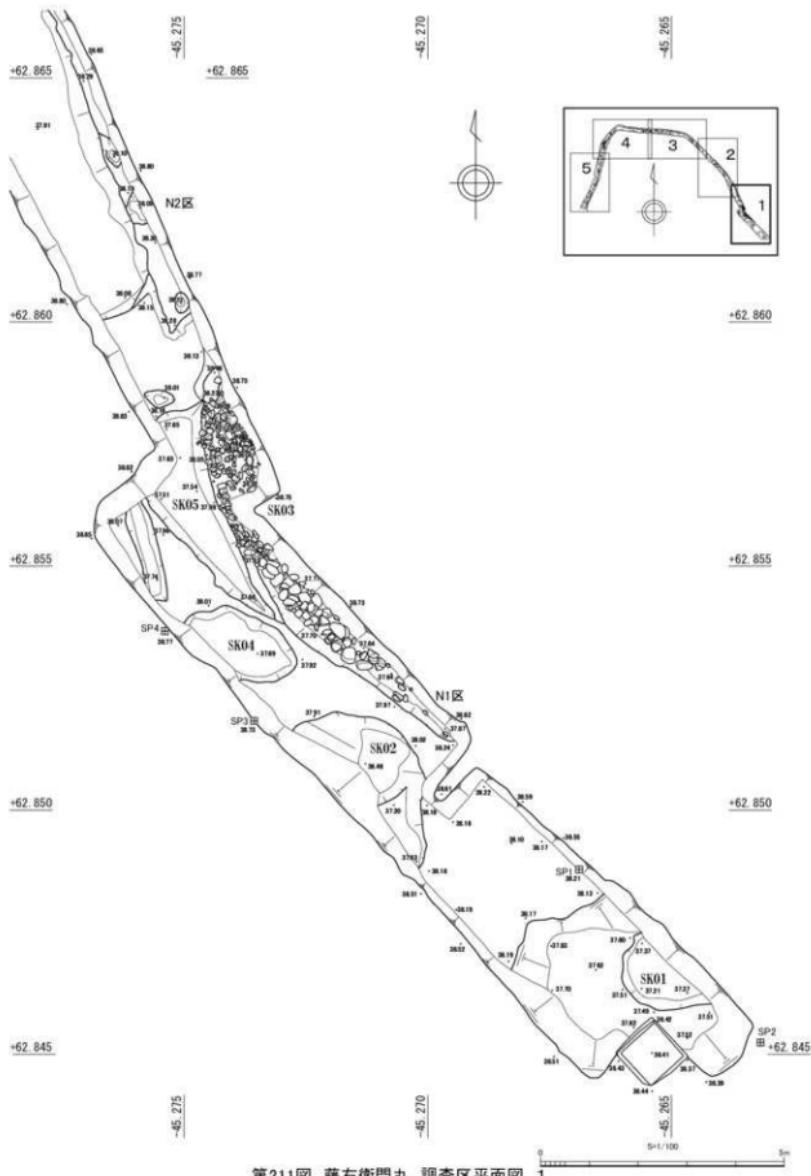
## 3. サブトレンチ1 (第218、219図)

N4区は、郭縁辺部であるため、搅乱が比較的少なく、II層にあたる近世段階の整地土が良好な状態で遺存していた。整地土や地山の状況等を確認するため、遺構が希薄な箇所において1m四方のトレンチを入れたところ、金沢城以前の遺構を確認した。

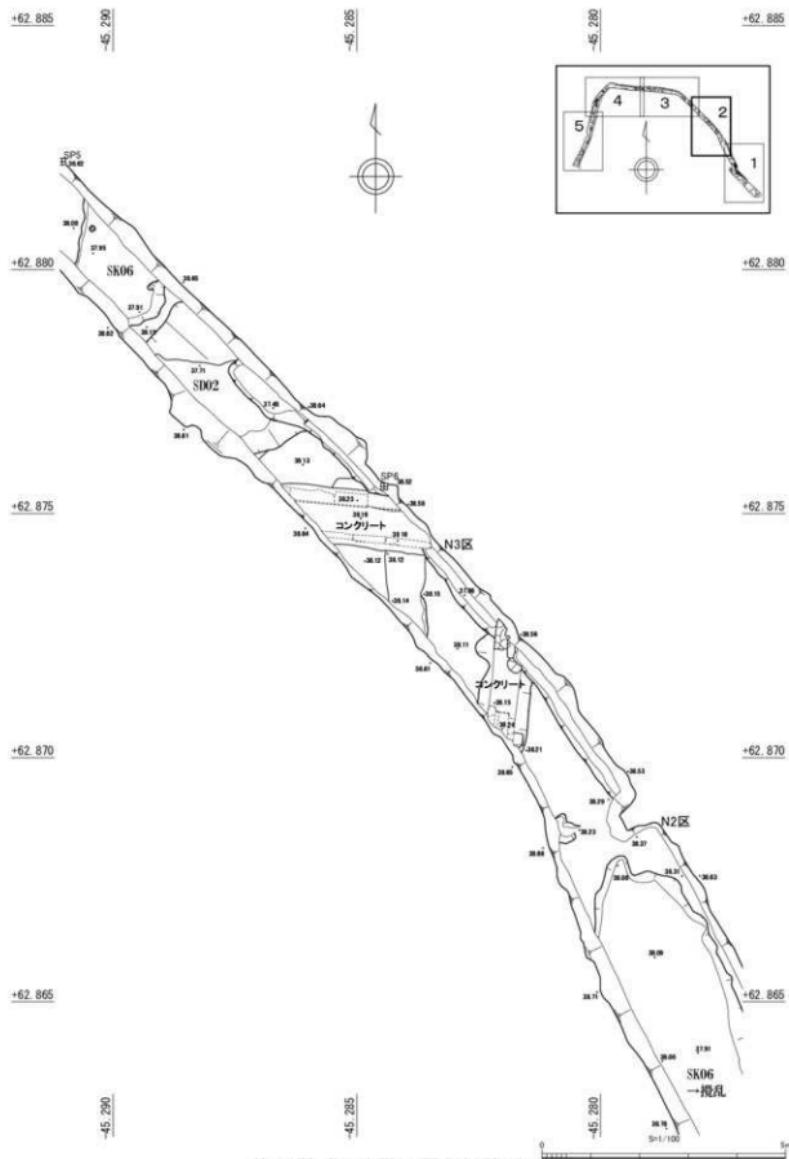
近世段階とみられる整地土は約1.5mの厚さがあり、大別で2層(II・III層)を確認した。II層は



第210圖 藤右衛門丸 調査区全体図

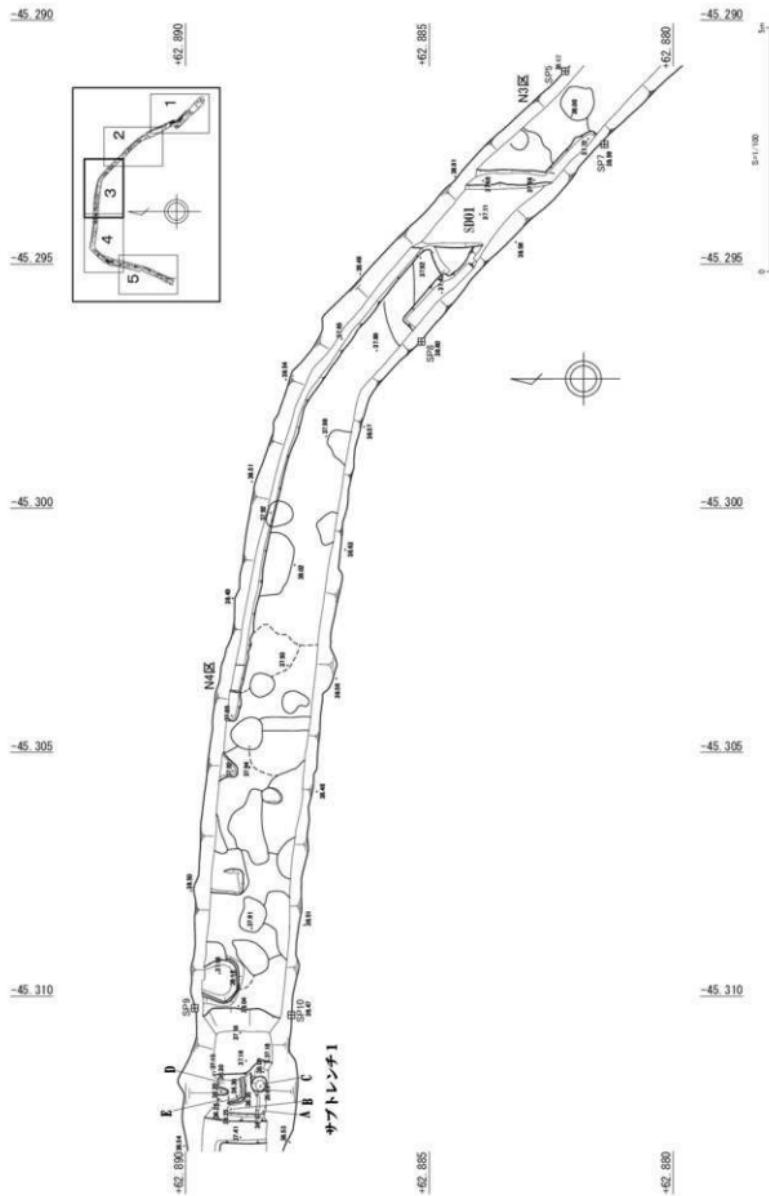


第211図 藤右衛門丸 調査区平面図

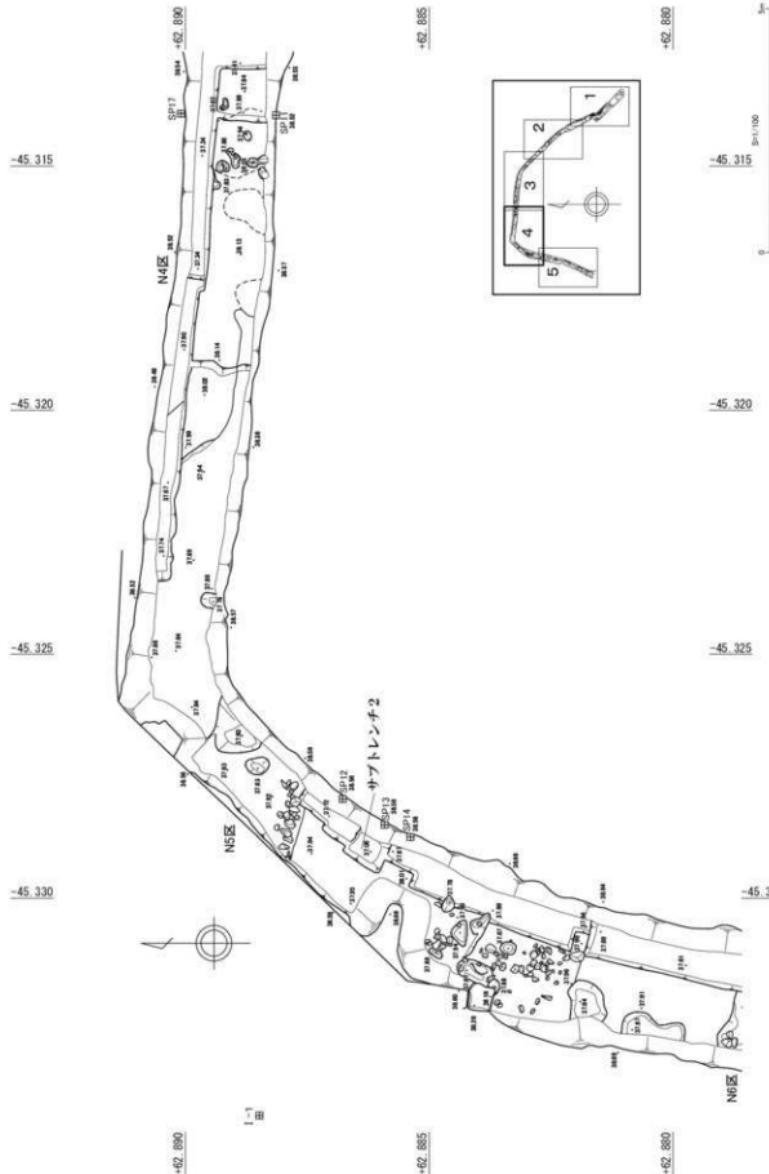


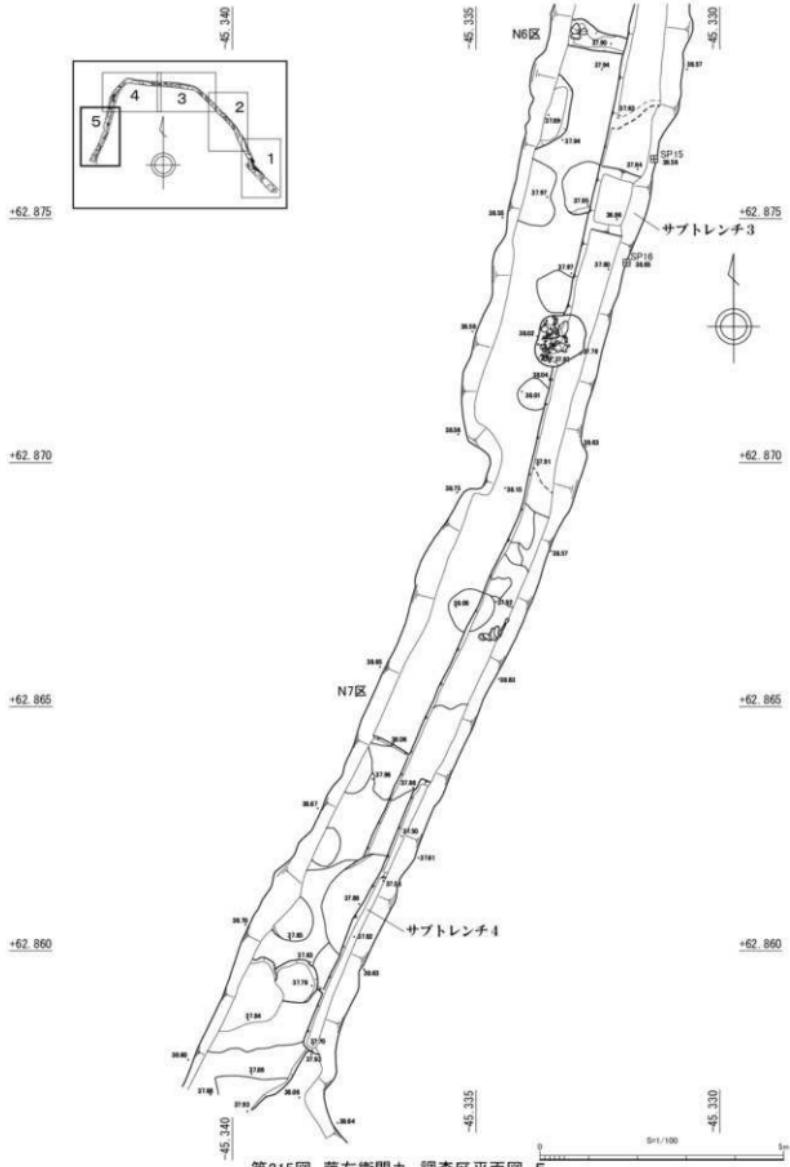
第212図 藤右衛門丸 調査区平面図 2

第213図 森右衛門丸 調査区平面図 3

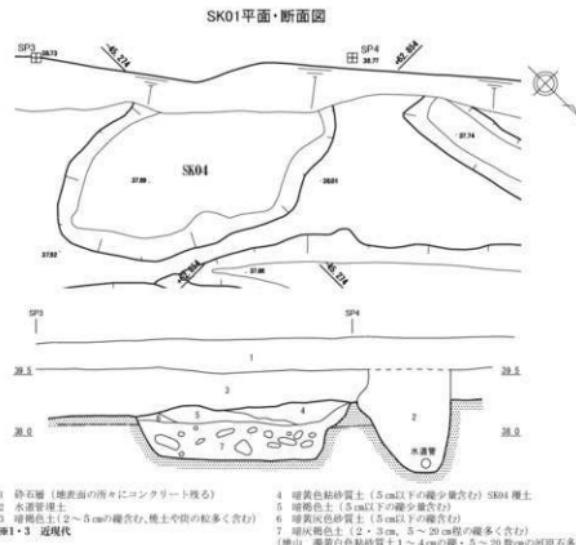
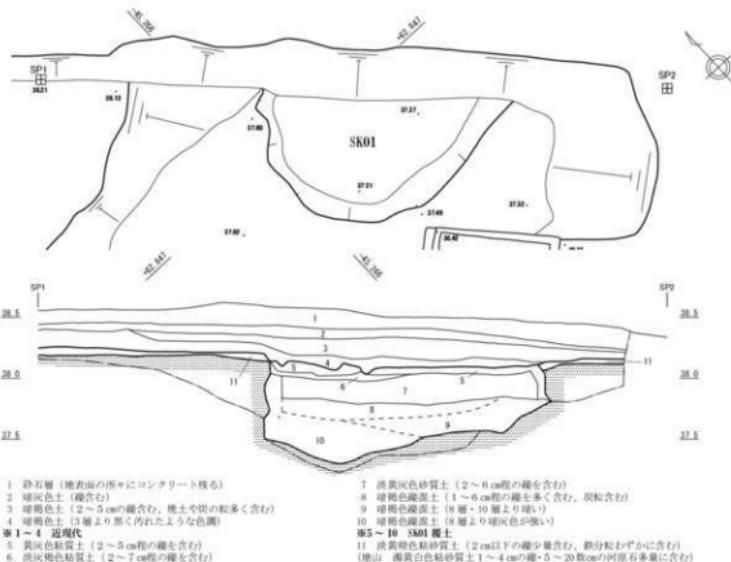


第214図 藤右衛門丸 調査区平面図 4

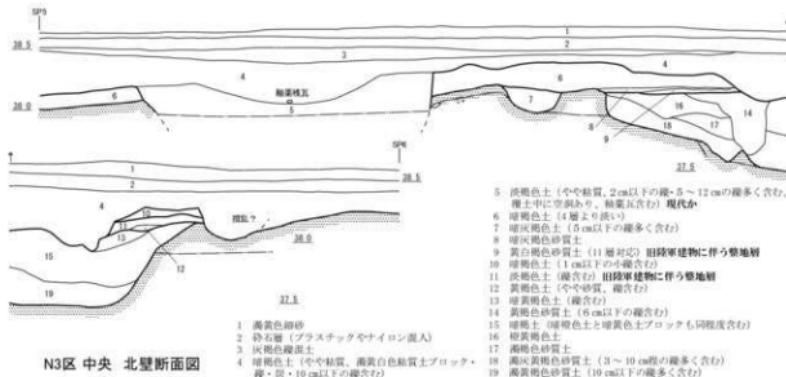


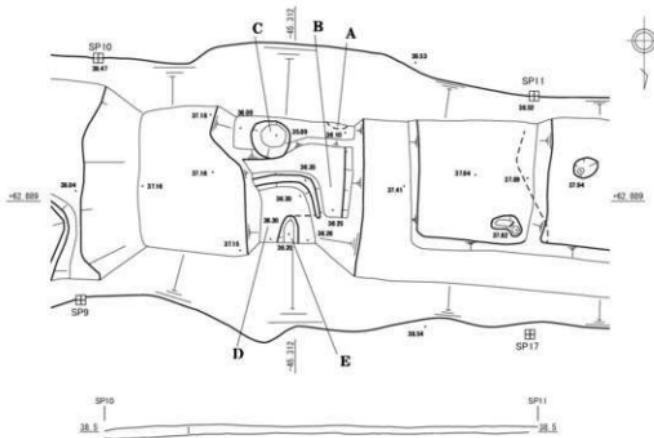


第215図 藤右衛門丸 調査区平面図 5

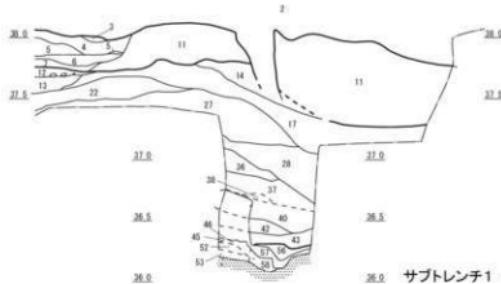


第216図 N1・3区 平面図・断面図





サブレンチ1 南壁断面図



サブレンチ1 北壁断面図

第218図 N4区 サブレンチ1平面図・断面図



#### N4区 サブフレンジ1北壁・南壁出土層注記

- 1 砂石層 **炭化地衣表面**
- 2 黄褐色礫質土（砂丘・ガラス風、コンクリートブロック）近現代廃土
- 3 明黄色粘土質土（灰質）
- 4 黄褐色粘土質土（小砂混）
- 5 明黄色粘土質土（灰質）
- 6 黄褐色粘土質土（鐵混）
- 7 黄褐色粘土質土（鐵や少ない）
- 8 黄褐色土（明黄色土アロッタ・風化鐵）近世か
- 9 黄褐色土（黄褐色土アロッタ・風化鐵）
- 10 黄褐色砂層（段丘風化地衣層入多量、11層より多く、しまり弱。明褐色粘土質アロッタ層）近世整地層
- 11 明褐色粘土質層（人の手の段丘層を堆在、しまり弱い、明褐色粘土質ブロック・黒褐色土粒・産在）
- 12 明褐色粘土質層（人の手の層合む）
- 13 黄褐色粘土質土（黄褐色粘土質ブロック含む、開・骨片なし）
- 14 明黄色粘土質土（黄褐色粘土質ブロック含む、開・骨片なし）
- 15 黄褐色粘土質土（部分的に風化鐵・鐵・小砂・骨片含む）
- 16 黄褐色粘土質土（風化鐵・鐵多く含む）
- 17 黄褐色粘土土（灰・小砂含む）
- 18 黄褐色粘土土（明黄色粘土質と黄褐色粘土質混合、径5cm以下の礫・灰小砂含む）
- 19 黄褐色粘土土（明黄色粘土質と小砂多く含む、開・骨片含む）
- 20 黄褐色粘土土（明黄色粘土質と小砂多く含む、開・骨片含む）
- 21 黄褐色粘土土（明黄色粘土質と黄褐色粘土質混合、径5cm以下の礫・灰小砂含む）
- 22 黄褐色粘土質土（1.まり弱、風化鐵3cm以下少少量含む。炭ブロック・骨片含む、部5分の径10~20cmの繩合む）
- 23 黄褐色粘土質土（2cm以下の風化鐵・鐵砂多く含む）
- 24 黄褐色粘土質土（3cm以下の風化鐵・鐵砂多く含む）
- 25 黄褐色粘土質土（明黄色粘土質と小砂多く含む、開・骨片少量含む）
- 26 黄褐色粘土土（明黄色粘土質と黄褐色粘土質混合、径5cm以下の礫・灰小砂含む）
- 27 黄褐色粘土質土（開片含む）
- 28 黄褐色粘土質土（開片含む、明褐色土小砂含む）
- 29 黄褐色粘土土（明黄色粘土質と黄褐色粘土質混合、径5cm以下の礫・灰小砂含む）
- 30 黄褐色粘土質土（明褐色粘土質ブロック少量含む、開片や多い、骨片含む）
- 31 墓兩色土（黄褐色粘土質・灰・炭小粒・骨片含む）
- 32 墓黄褐色粘土質土（明褐色粘土質ブロック少量含む、開片や多い、骨片含む）
- 33 墓褐色土（黄褐色粘土質・灰・炭小粒・骨片含む）
- 34 墓褐色粘土質土（明褐色粘土質ブロック少量含む、開片や多い、骨片含む）
- 35 墓褐色土（黄褐色粘土質・灰少量含む、炭小粒多・骨片・灰土粒少）
- 36 黄褐色土（黒土ブロック）
- 37 墓褐色土（黄褐色粘土質アロッタ層・炭小粒多・骨片、骨片・径3~5cmの風化鐵・鐵・鐵）しまり弱）北壁では黄褐色ブロックはさみ不明瞭だが上下に細分可能
- 38 黄褐色土（黒土）
- 39 墓褐色土（黄褐色粘土質土アロッタ層少量含む、開片やや多い、骨片含む）
- 40 墓褐色土（黄褐色粘土質アロッタ層多量、炭中小粒多・骨片・径3~5cmの風化鐵・鐵・鐵）しまり弱）北壁では黄褐色ブロックはさみ不明瞭だが上下に細分可能
- 41 墓黃褐色粘土質土（明褐色粘土質ブロック少量含む、開片やや多い、骨片含む）
- 42 墓褐色土（黄褐色粘土質土少量含む、炭小粒多く含む、骨片・施土粒少・骨片含む）
- 43 墓褐色土（黄褐色粘土質・灰・炭小粒・骨片含む）
- 44 墓褐色土（黄褐色粘土質土少量含む、炭小粒多く含む、骨片・施土粒少・骨片含む）
- 45 灰褐色土（灰層、開片多く含む、ほとんど同じに近い灰層・土斑塊土上から一層下でなる）
- 46 黄褐色粘土土（明褐色土アロッタ層、しまり強）熱地層
- 47 墓褐色土（開・少量含む）灰多（感熱あり、灰との層分層）
- 48 墓褐色土（黄褐色粘土土少多く含む、開片灰・骨片含む、施土粒少・骨片含む）
- 49 墓褐色土（黒土ブロック、炭少量含む、黄褐色粘土質ブロック含む、骨なし）黒土層
- 50 黑褐色土（黄褐色土アロッタ層少量含む、灰）過濾 A 層上
- 51 <すだだ黄褐色粘土質土（灰質）過濾 A 層上
- 52 墓褐色土（黄褐色粘土土（しりり強）4cm以上黄褐色土少ない）熱地層
- 53 墓褐色土（黄褐色粘土土少多く含む、開片灰・骨片含む、施土粒少・骨片含む）
- 54 墓褐色土（黒土アロッタ層少含む、灰・骨なし）過濾 C
- 55 <すだだ黄褐色粘土質土（紺土含む、灰・骨なし）過濾 C
- 56 墓黃褐色砂質土（しまりなし）過濾 D
- 57 墓褐色土（灰層、微小開孔含む）過濾 E
- 58 墓褐色土（過濾 F）

第219図 N4区 土層注記

しまりが弱く、段丘疊層を多く含む。III層は褐色系と黄橙色系の粘質土が互層状に堆積する。北壁及び南壁をみても、西から東側へ向かって、やや斜めに堆積している。III層中からは、焼けた骨片や炭化物が多く出土しており、特に下位の層になるほど多くなる傾向にある。これらの骨片の一部を分析鑑定したところ、人骨であることが判明している（詳細は本章第4節）。

III層の下からは、小規模な土坑やピットと整地層といった遺構群を確認しており、IV層とした。下層の土坑群を覆うようにほぼ純粋な灰層がひろがり、その直下にはしまりの強い整地層がみられる。下層遺構は整地土層と遺構の切り合い関係から3段階の変遷を確認できる。整地層についてIV-1とIV-2層とした。遺構はいずれも地山面を掘り込んでおりAからEまで確認した。

**遺構A** 調査区外に広がっており、全体形状は不明だが、半月状に検出されたことから、ピット状もしくは浅い溝状遺構の端部の可能性がある。IV-2層を掘り込んで作られている。

**遺構B** 深掘りの西辺で検出され、側辺が直線的に伸びるので、土坑又は溝状遺構の一部とみられる。標高36.2mで上面はIV-2層となる。

**遺構C** 直径約30cmのピットである。掘方は西側がほぼ垂直、もしくはやや内湾気味に立ち上がるのに対し、東側は斜めに立ち上がる。遺構の標高36.2mで上面にIV-2層が広がっている。

**遺構D** 深掘りの北半で、東西45cm、南北48cmを測り、隅丸形状を呈する土坑とみられる。調査区外に遺構は延びているため全体形状等は不明である。土坑底面は北壁に向かって伸びる幅16cmの溝状の遺構を検出している。覆土を掘り下げ、底面付近では、直径10cm程度で縁に鉄分が薄く巡ったピット状に土質が異なる部分がみられた。黄白色の地山が見えるようになつても、不明瞭なシミ状になつて残っており、明確な掘方をもたない杭等の痕跡の可能性も考えられる。

**遺構E** 遺構Dの溝状の部分を掘り下げた際に、検出された。北壁をみるとDの覆土が東側にむかって広がる傾向があるのに対し、Eは西側にむかって広がるようにみえ、立ち上がりはすり鉢状となる。平面形状等は未確認である。

遺構Eは遺構Dによって切られているので、Dに先行し、遺構Dは整地層IV-1層を切り込んで作られている。遺構CとBはいずれもIV-2層に覆われているが、遺構AはIV-2層及び遺構Bを切り込んで作られている。北壁では遺構D→E、南壁では遺構A→B・Cの順に新しくなる。遺構Dについては、整地土IV-1層を切ることから、サブレンチ1内では最も新しい段階の遺構である。

下層検出の整地土層からは炭や骨片がわずかながら出土しているが、遺構覆土中からは、炭は含まれるが、骨片はみられない。遺構に伴う遺物はほとんどなく、時期不明の土器師皿が出土する程度である。



第220図 N6区 断面図

### 第3節 遺物

#### 1. 概要

本調査区からは、陶磁器・土器・瓦・石製品・金属製品・ガラス製品などが出土している。また、N4区からは火葬されたと思われる人骨が出土している。以下に陶磁器・土器、瓦について記述していくが、器種・胎土などの分類、年代観などは、本丸附段調査区に準じている。

#### 2. 陶磁器・土器（第221～223図、第34表）

本調査区から出土している陶磁器・土器は多くないが、19世紀後葉から20世紀の旧陸軍が使用したと思われるもののほかに、中国磁器青花、肥前・瀬戸・美濃陶器、17世紀の土師器皿などが見られる。以下に地点ごとに記述していく。

##### N1区（第221図～第222図P340）

SK01からは16世紀末から17世紀の陶磁器・土器が出土しているが、肥前磁器染付は見られない。P333は白磁皿の口縁片である。全体に黄色味を帯びた釉が掛かり、質が良くないものである。高台脇にはケズリが施され、口縁は強く外反している。P334は下層から出土した肥前陶器鉄絵の大型鉢の底部片である。高台はあまり高くなく、見込みに胎土跡が2か所残っている。16世紀末から17世紀初頭の製品である。P335は肥前鉄釉陶器甕の口縁片である。鉄釉は薄く、被熱によって沸いているよう見える。P336は越中瀬戸の陶器鉄釉鉢と思われる口縁片である。内外面に薄い鉄釉が掛けられている。口縁は欠損後再調整したのか、釉はないが平滑にされている。一部煤が付着しているのであろうか。P337は鉄釉陶器で花瓶であろうか。図化したものは口縁から頸部と思われる破片であるが、他にも同一個体と思われる体部片が7点ある。外面と口縁内面は光沢のある鉄釉が掛かり、体部内面には薄い鉄釉が掛かっている。体部内面には、青海波の叩きが見られる。中国南部の窯の製品であろうか。P338は中型土師器皿である。底部は平らになると思われ、内面の底部と体部の境に稜を持つている。体部は緩い「く」の字状を呈し、口縁は内湾するように摘み上げている。全体が暗褐色を呈しているため分かりにくいが、口縁には油煙痕がある。

SK02からは旧陸軍が使用したと思われる19世紀後葉の陶磁器が出土している。図示したP339・P340は瀬戸・美濃の磁器染付端反碗である。どちらも染付には酸化コバルトを使用している。P339は赤の上絵付で2本の縦線とその間を3つに区切る1本の縦線を描いているが、アラビア数字は描かれていません。見込みには崩れた寿字文があり、高台内には朱書きの銘があるが、判読できない。P340は胎土が灰白色を呈し、釉の透明感も無い。染付で竹文を描いている。高台内の底面は非常に薄く削られている。このほかにSK02からは磁器染付に赤の上絵付でアラビア数字「1」「2」、縦3本線などを描いた皿や、陶器質に近い白色胎土の磁器染付格子文見込み蛇の目釉剥ぎ皿が出土している。

##### N3区（第222図P341～P343）

SD01からはP341・P342が出土している。P341は越中瀬戸陶器鉢口縁片である。遺存部分に鉢目は見られないが鉢である。内外面に薄い鉄釉が掛かっている。P342は中型土師器皿である。内面から口縁外までヨコナデされていて、外底面には指頭圧痕が残っている。体部は丸く立ち上がり、外面は底部と体部の境がはっきりせず、口縁と体部の境に稜を持つている。内面は底部と体部の境にナデが巡るが弱く、口縁は内湾するように摘み上げている。17世紀前葉の製品である。

P343は包含層から出土した中国景德鎮窯系と思われる磁器青花皿底部片である。見込みには二重縦線の中に文様がある。

##### N4区（第222図P344・P345）

P344・P345はIII-2層から出土しているが、この層からは火葬骨が出土している。P344は磁器青花瓶体部である。体部上半で、頸部・体部下半との接合部で割れている。頸部は蓮弁文、体部は花唐草文

と思われる。呉須が少し滲んでいるので、生掛けであろうか。15世紀以前の製品と思われる。P345は瀬戸・美濃の陶器鉄釉天目碗の体部片である。高台脇は鉄化粧が施されている。16世紀後半の製品である。

#### N5区（第223図P346）

ゴミ穴からは図示していないが戦時統制番号が付けられた磁器染付碗などの20世紀の陶磁器・土器が出土している。図示したP346は土器の五徳で、ほぼ完形である。口唇部に3か所突帯が付き、口縁近くには2個1組の穴が向かい合う位置に開けられている。口縁付近は煤が付着している。胎土は硬質で、砂粒を多く含み、表面に雲母が多く見える。

#### N6区（第223図P347）

P347は口縁のみの小片であるが、薄手で小型の磁器青花碗である。中国景德鎮窯系の製品であろうか。

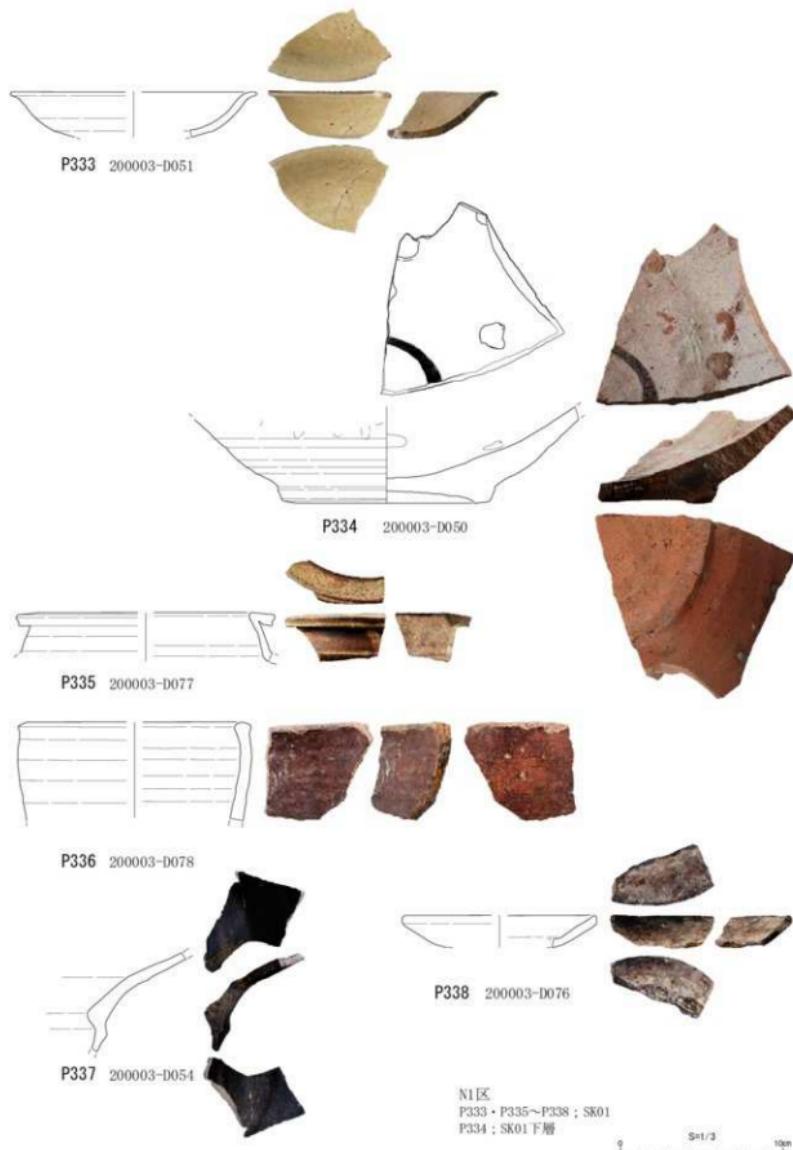
#### N7区（第223図P348・P349）

P348は中国景德鎮窯系かと思われる磁器青花碗である。高台はやや内傾している。見込みは二重圈線と花のような文様が見られる。P349は肥前磁器染付の瓶と思われる体部片で、接合部分で割れています。

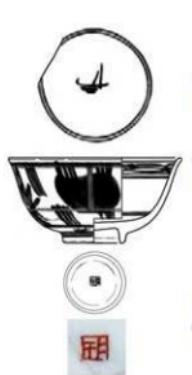
### 3. 瓦（第224図、第34表）

本調査区からは、瓦はほとんど出土していない。

T111はN1区のSK02から出土した袖葉瓦である。光沢のある濃紫色の釉が全面に掛かる袖桟瓦で、胎土は1である。尻部側に焼成前に上面から穿孔された釘穴が2個ある。完形に近く、長さ32.1cm、幅34.1cmになると思われる。T112はN5区付近で表採された燻軒丸瓦の瓦当面である。瓦当文様は巴文II-2b類で、16個の珠文を持っている。巴文は稜を持たず丸く盛り上がり、尾は次の巴の尾の中間まで延びている。胎土はB2である。



第221図 藤右衛門丸出土遺物実測図 陶磁器・土器1



P339 200003-B030



P340 200003-B045



P341 200003-D052



P343 200003-B046

P342 200003-D053



P344 200003-B010



P345 200003-D066



N1区

P339・P340 ; SK02

N3区

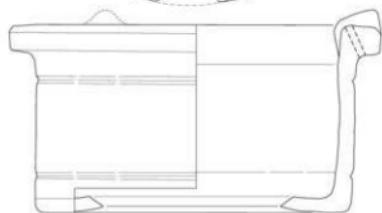
P341・P342 ; SD01

P343 ; 包含層

N4区

P344・P345 ; III-2層

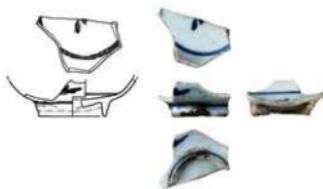
第222図 藤右衛門丸出土遺物実測図 陶磁器・土器2



P346 200003-B047



P347 200003-B044



P348 200003-B043



P349 200003-B025

P346 ; N5区 ゴミ穴

P347 ; N6区 サブトレンチ3

P348・P349 ; N7区 サブトレンチ4

0 5cm/3 10cm

第223図 藤右衛門丸出土遺物実測図 陶磁器・土器3



T111 200003-D150



N1区  
T111 : SK02  
N5区付近  
T112 : 表探

T112 200003-D079

第224図 藤右衛門丸遺物実測図 瓦1

S=1/6 10cm

第34表 山上造物觀察表

2

## 第4節 出土人骨の分析

### 藤右衛門丸（N4区）出土人骨

梶ヶ山真理（国立科学博物館）・小林克也（パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

石川県金沢市の金沢城跡の北ノ丸の藤右衛門丸地点の堀から、江戸時代以前の焼かれた人骨片が多数検出された。ここでは、それら人骨の部位同定および特徴の記載を行なう。

#### 2. 出土人骨所見

人骨の部位同定結果および特徴を第35表に示す。なお、第35表の人骨No.と図版の番号は対応する。

人骨は、寛永8（1631）年以前の初期金沢城に係る整地土中から出土している。もともと、整地土の下の層からは火葬施設（荼毘関連施設）と考えられる遺構が出土しており、それに伴う焼骨の可能性が高い。人骨は散乱して出土しており、個体数を割り出すのは非常に困難である。したがって、それぞれの出土地点ごとに人骨破片の部位と特記事項を表に示した。

人骨片は、大きくても1cm×2cm程度の大きさで、ほとんどが1cm四方、あるいはそれ以下の細かい破片である。骨体片には、横方向に筋が入る亀裂や収縮による歪みが見られる。また、ほとんどの骨片が灰白色を呈していることから、人骨は、軟部が付着した状態で、800度以上の高温で焼かれたと思われる。亀裂や収縮による歪みは、熱により急激に変化する際に起こる現象であるといわれている。遺体を晒して人骨だけにしてから火葬したものではない。例外として、C2b層の上腕骨片のみ黒色である。これは、何らかの理由で温度が低く、また、焼成時間が短時間であったのだろう。

#### 3.まとめ

当該遺跡から検出された人骨片の総重量は156.6gである。一般に、成人男性（白人）の焼骨は約3kgとされ、日本人男性の場合はそれ以下の重量（2～3kg）である。今回確認できた焼骨は、1体分の重量に対して1割程度しか保存されていない。江戸時代以前の火葬関連施設の残存焼骨であるので、複数個体の可能性も当然考えられるが、人骨の保存部位としての重複はない。1体分として矛盾はないが、検出された人骨の量が非常に少なく、埋葬遺構から直接検出された状態ではないので、今回は個体数の判断は避けたい。なお、北ノ丸第1次N4区藤右衛門丸地点のC層（人骨No.3）から検出された右側頭骨乳様突起は、熱による収縮を考慮しても発達が良く大きい。したがって、男性個体のものであろう。また、同地点のC層人骨No.7、C2層人骨No.10-aの頭蓋骨片は、冠状縫合や矢状縫合が残つており、齧合などの加齢傾向の痕跡がないことから、熟年～老年などの高齢ではない。

第35表 藤右衛門丸出土人骨一覧

No.	出土位置	層位	人骨No.	人骨部位	備考	重量
1	縦割部	C層	1	上腕骨骨体片		93.0g
			2	大腿骨片		
			3	右乳様突起	男性の可能性	
			4	肩甲骨一部		
			5	後頭骨内板	内板横道溝部分	
			6	末節骨	手足どちらか判断できず	
			7	頭蓋骨片	縫合開離 加齢変化なし 熟年以上ではない	
			8	椎体片か	骨棘は形成なし	
			9	骨片		
2	縦割部	C2層	10-a	頭蓋骨片	冠状縫合の側頭部側 縫合開離する	29.7g
			10-b	四肢骨片		
			10-c	大腿骨片		
			10-d	舟状骨か		
			11・12	四肢骨片		
3	縦割部	C2b層	13	3点保存	上腕骨片 (上腕骨か) 骨頭一部 破片	7.4g
4	縦割部	北壁サブトレ	14	大腿骨片	4点	27.4g
			15	頭骨片	1点	
			16	脛骨片	2点	
			17	四肢骨片		



1. 上腕骨骨体片（C層）、2. 大腿骨片（C層）、3. 右乳様突起（C層）、4. 肩甲骨一部（C層）、  
 5. 後頭骨内板（C層）、6. 末節骨（C層）、7. 頭蓋骨片（C層）、8. 椎体片か（C層）、9. 骨片（C  
 層）、10-a. 頭蓋骨片（C2層）、10-b. 四肢骨片（C2層）、10-c. 大腿骨片（C2層）、10-d. 舟状骨  
 か（C2層）、11・12. 四肢骨片（C2層）、13. 3点保存（C2b層）、14. 大腿骨片（北壁サブトレ）  
 、15. 頭骨片（北壁サブトレ）、16. 脊骨片（北壁サブトレ）、17. 四肢骨片（北壁サブトレ）

第225図 藤右衛門丸地点出土人骨

## 第5節 小結

### 火葬関連施設とみられる遺構について

藤右衛門丸の北端部のN4区において、一部深掘りを行い近世の整地層と、その下層から複数の土坑やピットといった遺構を確認した。近世の整地層については、時期の特定はできなかったものの、II層とIII層として大別し、II層は近世段階、III層を掘り込み、II層に覆われる溝状遺構（SD01）は、17世紀前葉までの遺物が出土しており、17世紀の早い段階で埋め戻されたものと考えている。また、III-2層の埋土中からは16世紀後半の碗が出土していることから、III層は金沢城の初期の段階の整地土の可能性が考えられる。

III層中からは、焼けた人骨と炭化物が多く出土しており、造成時に周辺から入り込んだものと想定していた。

III層の下位で検出した遺構群で最も新しい段階の遺構Dは、しまりのある整地土IV層を掘り込み面としているが、このIV層の最上面には遺構を覆うように灰層が広がっている。

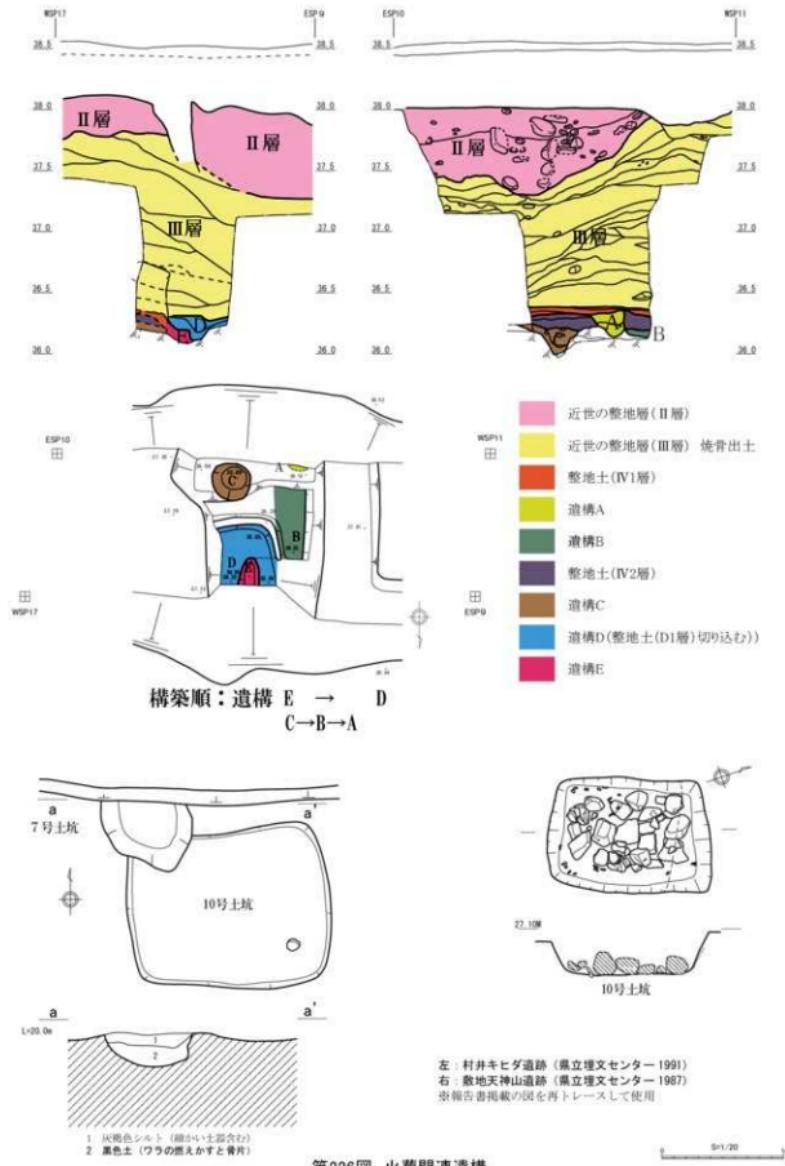
遺構Eについては、遺構Dよりも古いが、深掘りの南側で検出した遺構A～Cとの前後関係は不明である。南側の遺構群は、遺構BとCが下位にあり、この遺構を埋めた整地土を掘り込んで遺構Aがつくられる。遺構AはIV層とした整地土に覆われていることから遺構Dが最も新しい遺構となる。これららの様相は、同一地点で、整地を繰り返しながら遺構を形成していたことを示している。遺構そのものの規模や形状は不明な点が多く、覆土中に炭化物や焼土、焼骨片を含む。遺構の壁面等に焼土面は確認できないが、灰層がかぶっていることなどからも、周辺に火葬関連施設や火葬遺構（荼毘遺構）の存在を想起させるものであった。本章第4節において、III層中から出土した焼けた人骨について、部位の同定とその特徴についての分析を掲載した。その中で、「軟部が付着した状態で、800度以上の高温で焼かれたと思われる」との所見を得たが、そのことも、荼毘遺構等の存在を示すものと考えられる。

県内での火葬遺構の類例としては、白山市村井キヒダ遺跡〔県立埋文センター-1991〕と敷地天神山遺跡〔県立埋文センター-1987〕があげられる。村井キヒダ遺跡は15世紀後半から16世紀の荼毘遺構が確認されており、南北約700mの範囲（東西範囲は不明）に、火葬施設と考えられる土坑群を多数検出しているが、土坑間の切り合いは多くない。平面プランは、方形・長方形・楕円形・円形で、規模は全体形状が判明しているもので、長軸で2m前後である。いずれも顕著な焼土面を持たない。

加賀市敷地天神山遺跡では、江戸時代後期の火葬遺構が確認されている。溝状と土坑状の遺構がみられ、土坑は複数基が切り合った状態で検出され、規模は長軸で平均120cmと村井キヒダ遺跡に比べやや小規模である。遺構壁面は被熱し、覆土中からは焼けた疊や、人骨、棺に使用していたとみられる鉄釘などが出土する。

地面を掘り窪めた土坑状の遺構覆土中に炭化物や骨片が含まれる点や、藤右衛門丸で確認された土坑群は、全体形状が不明ではあるが、村井キヒダ遺跡の事例をみるとそのプランが一様ではない点、焼土面があまり明瞭ではない点も共通する。一方、土坑が切り合った状態で検出され、やや小規模な点は敷地天神山遺跡とも共通する。また、遺跡の立地も、高所から低地に下がっていく縁辺に所在するなど、いずれの遺跡とも時期は大きく異なるが、火葬に関連する遺構としての共通点は見出すことはできる。

両遺跡とも火葬された対象については、単体ではなく、周辺の集落といった集団で形成した荼毘遺構の可能性を指摘している。本調査地点の火葬遺構を形成した集団についてはそれを特定するような遺物は見られなかったが、埋め戻される前段階であれば、金沢御坊もしくは、周辺の主要な集落としてあげられる山崎窪市等の墓域として利用されていた可能性も想定できる。



第226図 火葬関連遺構



N1区 遺構完掘状況（北東から）



N1区 SK01（北西から）



N3区 遺構完掘状況（南東から）



N3区 遺構完掘状況（南東から）



N3区 SD01全景（南から）



N3区 SD01南壁（北から）



N3区 SD01南壁（北から）



N3区 SD01南壁（北から）

写真図版34 藤右衛門丸遺構写真1



N3区 SD01北壁（西から）



N3区 SK06 全景（南西から）



N3区 中央部大型土坑（南から）



N3区 中央部落ち込み（西から）



N3区 中央部北壁（南西から）



N3区 中央部北壁（南西から）



N3区 挖削作業風景（北西から）



N4区 遺構完掘状況（東から）

写真図版35 藤右衛門丸遺構写真2



N4区 サブトレンチ1（北から）



N4区 サブトレンチ1 完掘状況（東から）

写真図版36 藤右衛門丸遺構写真3



N4区 サブトレンチ1 遺構D・C（南西から）



N4区 サブトレンチ1 遺構C（西から）



N4区 サブトレンチ1 遺構D東壁（西から）



N4区 サブトレンチ1 遺構北壁（南から）



N4区 サブトレンチ1 遺構D（南から）

写真図版37 藤右衛門丸遺構写真4



N4区 サブトレーンチ1 南壁 -1（北から）



N4区 サブトレーンチ1 南壁 -2（北から）



N5区～7区 遺構完掘状況（全体）（北から）



N5区 遺構完掘状況（北東から）



N6区 遺構確認状況（北から）



N6区 サブトレーンチ3 東壁（西から）



N7区 遺構確認状況（北から）



N7区 遺構確認状況（南から）

写真図版38 藤右衛門丸遺構写真5

## 第6章 いもり坂脇石垣

### 第1節 いもり坂脇石垣の試掘調査

#### 1. 調査区の位置と調査の概要 (第227、228図)

いもり坂脇石垣は本丸附段と玉泉院丸との間にある斜面上に築かれた石垣で、石垣の背後が本丸附段、前方は通路を挟んで、坪野石を意匠的に使用した玉泉院丸東石垣である。現在石垣前方にあるいもり坂と呼ばれる園路は江戸期からあったものではなく、明治40年頃に旧陸軍によって造成されたといわれ、そのすぐ脇にあることから、いもり坂脇石垣と通称している。石垣ID番号は通路に面した西面は1500W、南面は1500S、空堀に面した北面の下段は1500N、上段は1501Nである。

本石垣は外観からの変形が著しく、平成9年度から土木部公園緑地課が実施する石垣動態観測においても、僅かずつながらも変位が累積する傾向にあるとされていた。特に平成19年3月25日に発生した能登半島地震で、金沢市内も震度4を観測したが、その影響と考えられるやや大きな変位がみられた。園路に近接していることもあり、修復等の何らかの措置についての検討をおこなうため、その基礎資料を得るという目的で、現況の観察及び試掘を実施した。

試掘は石垣の西面中央部と北西隅角部にトレーナーを設定し、西面中央部を第1地点、北西隅角部を第2地点とした。

#### 2. 基本層序

いもり坂脇石垣では、I～IV層に区分した。I層は平成以降の公園整備に伴う造成土が該当する。II層は現石垣に伴う掘方や整地土とした。III層は明治40年のいもり坂造成に伴う整地層であるが、II層とIII層に前後関係があるのかは不明である。IV層は旧石垣構築時、又はその時点で既にあった整地土とした。

#### 3. 石垣の現況 (第229、230図)

いもり坂脇石垣は、粗加工石と切石が混在する乱積み石垣だが、西面の1500Wでは部分的に布積みや落とし積みがみられる。各石垣面の規模や勾配等は以下の通りである。

1500W：L 17.5m、H 5.2m、A 102.4m<sup>2</sup>、勾配73°、築石部7段

1500N：L 9.6m、H 5.0m、A 46.8m<sup>2</sup>、勾配71°、築石部8段

1501N：L 7.0m、H 2.3m、A 12.4m<sup>2</sup>、勾配84°、築石部6段

1500S：L 6.9m、H 4.5m、A 14.9m<sup>2</sup>、勾配85°、築石部7段

創建は寛永期（金沢城石垣編年4期）で、寛文期（5期）に修理されたとみられる。それ以降の修理ははっきりしないが、明治40年頃に行われたいもり坂の造成の際に改修された可能性がある。

石積みの変形では、1500W（西面）の石垣全体がやや波打つように変形しており、中央部から北西隅角部にかけては前方向（西方向）に孕み出している。特に縦方向の目地が目立つ7m付近については、それを境に石垣面が前後にずれたようになっている。南西隅角部は天端から4段目までが前倒れしており、築石部との間に段差が生じている。

1500N（北面）は、石垣面の中央部付近から入隅部に向かって面がねじれたようになっているが、変形の可能性もあるが、修理時に非解体部分に面をすりつけようとしたためかもしれない。本丸附段の北面石垣と接する入隅部周辺で、石垣前面に栗石を含んだ土が堆積する。近世段階には類当石垣があったが、撤去されており、その際に石垣内部の裏込め層の一部が残置されたものと考えられる。その石垣を撤去した範囲でも、築石の前倒れがみられる。類当石垣撤去後に変形したのか、それ以前か

らのものか不明である。動態観測では1500N背後の孔内傾斜計や1501Nの定点観測において、累積した変位を記録している。

個別石材では、1500Wの縦方向のずれの直下にある石材2石で割れを確認したが、やや風化が進んだ石材であった。石材の割れがみられるのは孕み出し範囲の北側に集中する傾向にある。

#### 4. トレンチの調査状況

##### (1) 第1地点 (第231図)

石垣西面のほぼ中央付近で南北1.5m、東西2.2mのトレンチを設定した。石垣の基底部を覆うように盛土されており、いもり坂の路面よりも地表面は高い。地表面から約40cm掘り下げたところで、前倒れ状態の石垣石を2石検出した。現状の石垣よりも約20cm前方に出ており、石材の上面部分が見える状態である。この2石は正面部分は埋没しておりみえないが、上面に合端加工された切石材で、旧石垣は切石積石垣であったと考えられる。現状の石積みは、この前倒れした石材を残した状態でセットバックして上に積み直しており、変形していた旧石垣を修理したと推測できる。調査で確認した切石材の上にのる石材は現石垣の最下段で、金場取り残し石を使用し、現況で地表面より上となる部分をはつており、粗いノミ筋が残る。

土層観察は調査区の両側の東西壁面と調査区中央の縦横断面で観察を行った。

1～5層は平成以降の公園整備に伴う造成土である。6～8層は現石垣に伴う整地土と考えられる。6・7層は栗石が少なく、第2地点南壁断面の4～6層に対応するものと考えられる。8層は小さい栗石が集中しており、これは現石垣最下段の石材下にも見られ、トレンチ南側でも石垣の前面に広がっている。また、石材加工に伴う戸室チップも含まれており、現石垣掘方埋土の可能性がある。9～13層はいもり坂造成による削平後の整地層と解釈した。10・11層には碎石も含まれることから現代の整地層の可能性もあるが、新しい遺物は出土していないが、13層からは光沢のある釉薬瓦が出土しており近代以降とみられる。14・15層は旧石垣構築時の栗石層と推測した。14層は栗石の方向が整わず乱れた様子で、土も15層のようなしまりがない。15層は栗石が偏平面を上にしており、14層に比べ規則的に入っているようにみえ、土もしまりがある。この二つの層は上記の差異以外は同色・同質の土であるため、もともと同一層であったが、いもり坂造成時、又は石垣改修時に14層とした部分の栗石が原位置で搅乱され、現状の2層に分かれたのではないかと考えた。

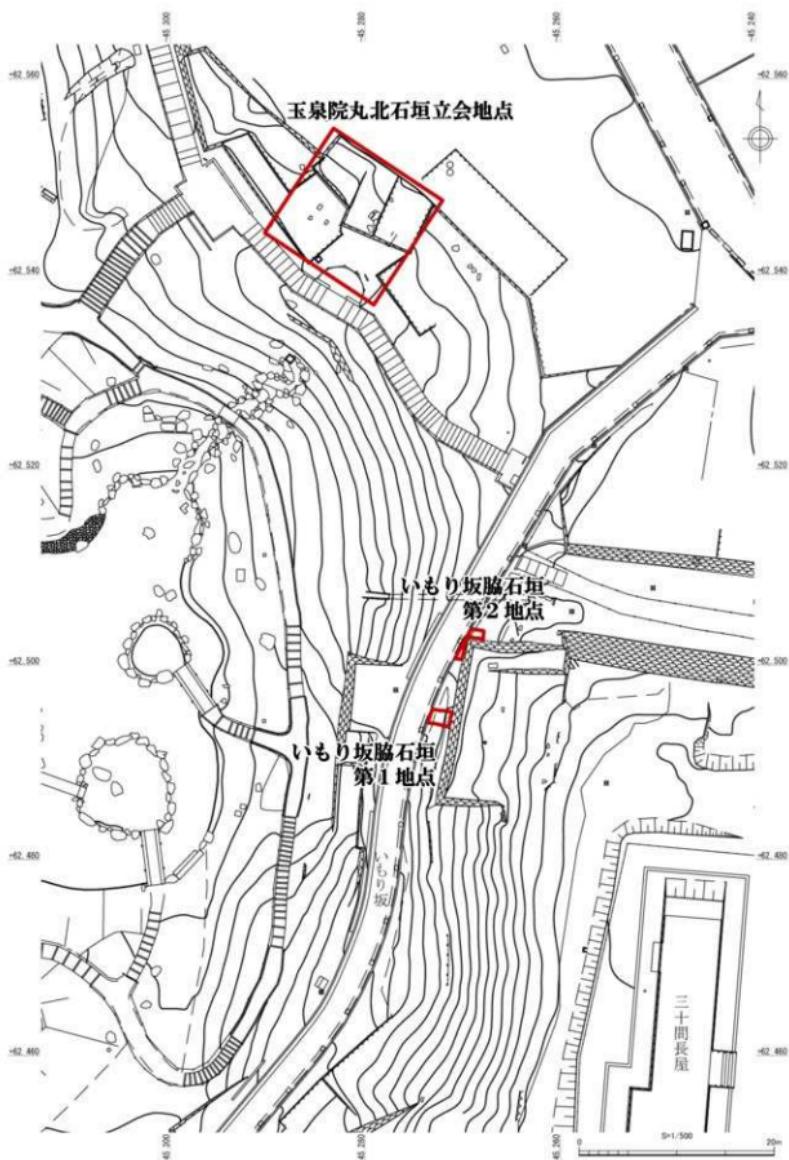
16層以下は、いずれも旧石垣の栗石層より下位に堆積しており、14・15層ほど大きめのグリ石を含んでいないが、旧石垣の構築時またはそれ以前の段階の整地土と考えている。20層は22・24・23層の黒色土層をバックしている。23層は、その周りに黄褐色粒を含んだ24層が堆積しており、その平面形状から植栽痕の可能性も考えられ、25層はその掘り込み面のようにも見える。

##### (2) 第2地点 (第232図)

石垣の北西隅角部を取り囲むようにトレンチを設定した。西面において約45cm掘り下げたところで、現石垣よりもやはり前に約20cm出た石材を検出した。この石材は、上の石材と面を合わせるように上部が高さ10cm程、はつられている。はつられた下端部で標高42.9mである。第1地点は積み直しされた現石垣の石材の下端が標高42.8mであったことから、概ねこの高さより上が修理されたものと推測できる。

隅角部を介した北側では、約1m掘り下げたが、近現代層であった。現状でも、石垣北側は本丸附段と二ノ丸の間に入る空堀となることから、地盤が低くなってしまっており、本来の石垣前面の基盤層自体が低い可能性がある。

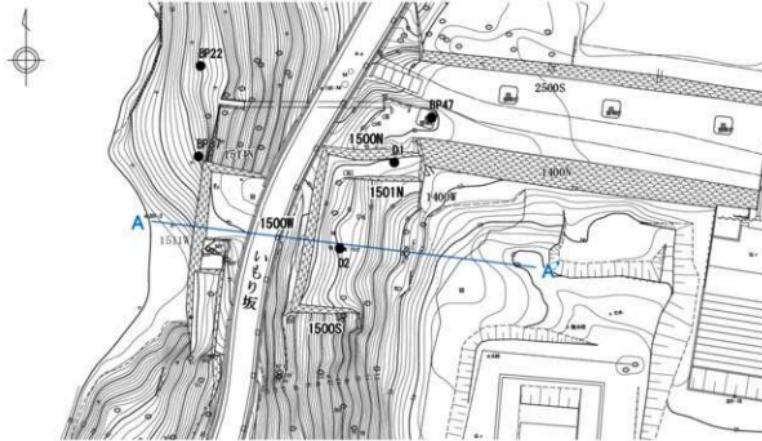
断面図の第7層は、面が前に出ている石材周辺に堆積している。面が前に出ている石材は北へ連続せず、やはり7層がひろがっていることから、旧石垣の石材を抜き取った後に、整地土として入ってきたものと考えられることから、現石垣構築に伴う整地土であろう。



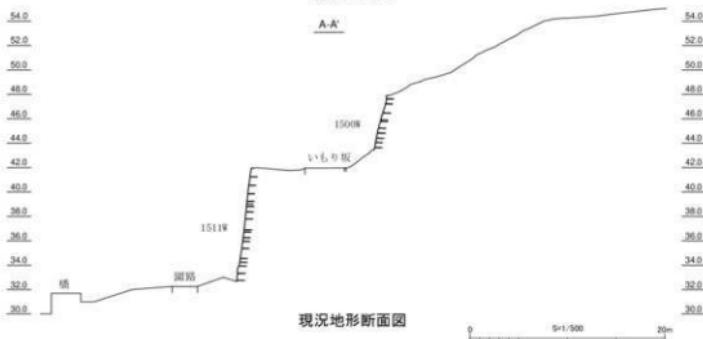
第227図 調査区位置図



第228図 調査区現況・絵図照合図  
「御城中巻分番絵図」(横山隆昭氏蔵) 文政13年(1830)



現況平面図

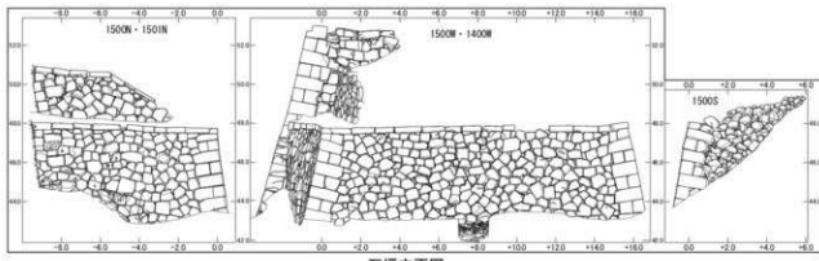


現況地形断面図



現況写真(北西から)

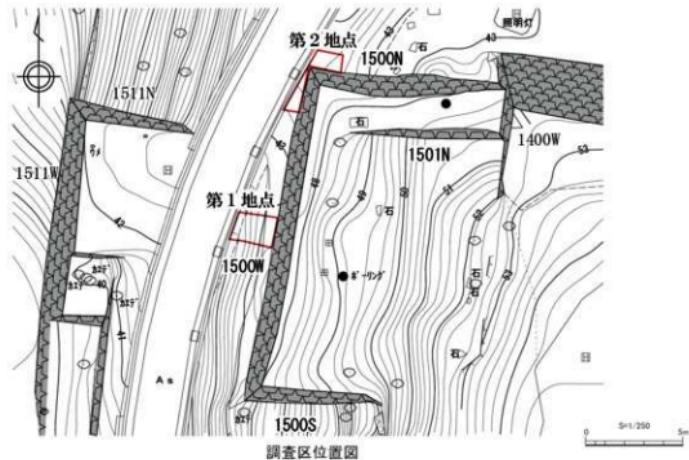
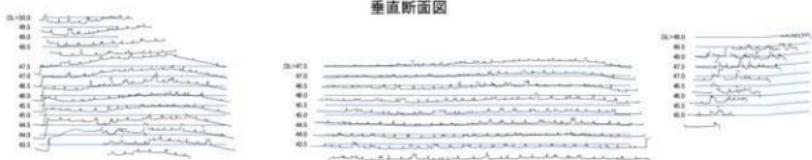
第229図 いもり坂脇石垣現況



石垣立面図

垂直断面図

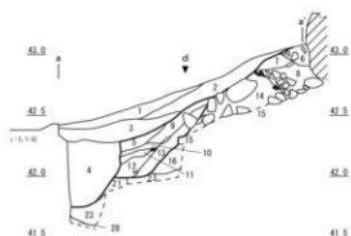
水平断面図



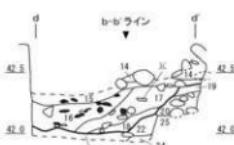
第230図 石垣立面図、断面図、調査区位置図



第1地点 平面図



第1地点 北壁断面図



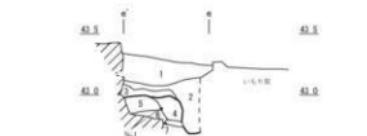
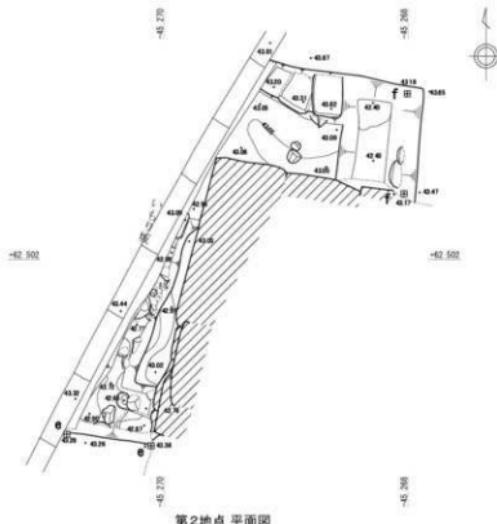
第1地点 横断面図



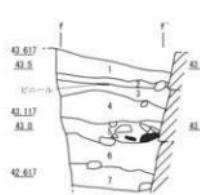
第1地点 サブトレ南壁断面図



第231図 第1地点 平面図、断面図



- T.5YRS/8 明褐色土 クリカリ
- 2.5Y5/2 喀灰黄色土 砂石
- 10YR2/2 黒褐色土 (粘性なし、しまりやや弱い。径5mm隙縫を少數含む) 砂土 (粘性なし、しまりやや弱い)
- 10YR2/2 明褐色土 (粘性なし、しまり強い) 黃褐色細粒、砂を多く含む。 黄褐色粗粒、粒・径2cm隙縫を少數含む。白色を微量含む。まじりが多い。 粗大よりの礫混入 (古代か?)
- 10YR2/4 明褐色土 (粘性なし、しまり強い、やや砂質強) 径2~3mm隙縫を少數含む)
- 6 10YR4/4 黄色土 (粘性なし、しまり強い) 砂質強、径5mm隙縫を少數含む)
- 7 10YR4/4 黄色土 (粘性なし、しまり強い) 径1cm明黄褐色 (10YR6/6)・径1cm明褐色 (10YR5/6)・径1cm黄褐色 (10YR5/6) 粒子を含む。径1cm明褐色 (10YR6/6)・径2~3cm黄褐色 (10YR6/6) 粒子を含む。半面では、径10~15cmの礫石、径2~3cmに至るを含む)
- 8I-3 表土 4~7 現石垣構築に伴う疊合地土



7. BYRS/8 明褐色土 (粘性あり、しまり強い) クリカリ
- 10YR3/4 喀灰色土 (粘性あり、しまり強い、径1~5mm隙縫を多く含む。ビニール出土)
- 3 黑褐色土 (粘性なし、しまり強い 径1~5mm隙縫を含む) ビニール出土)
- 4 10YR3/2 喀灰色土 (粘性なし、しまり強い 径1~5mm隙縫を多く含む) 黃褐色土がごとごと見られる。コンクリート出土)
- 5 10YR3/2 黑褐色土 (粘性なし、しまりやや弱い、径5mm隙縫を含む、径10cm隙縫) 径1~3mm隙縫を少數含む。やや砂質が強い、コンクリート出土)
- 6 10YR3/4 喀灰色土 (粘性なし、しまりやや強い、径5mm隙縫を少數含む、上層より砂質強) 上層より隙縫が少なくなり。礫混入が増す、ガラス出土)
- 7 10YR3/4 喀灰色土 (粘性やや強、しまり強い、径2~3mm隙縫主体、ガラス出土) 径1~7 近代代層

第2地点 東壁断面図

5-1/40  
1m

第2地点 南壁断面図

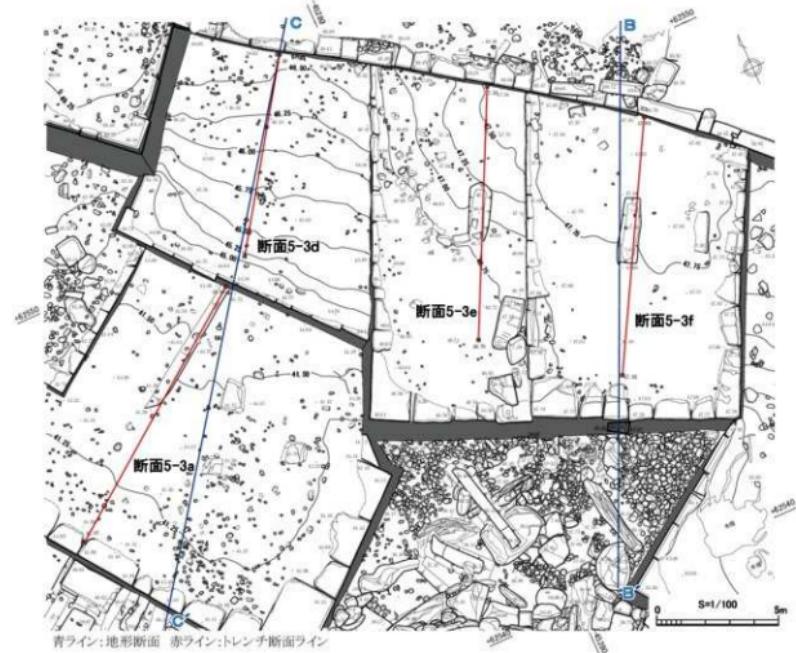
第232図 第2地点 平面図、断面図

## 第2節 玉泉院丸北石垣の立会調査

### 1. 調査区の位置と調査の概要（第227、228、233図）

玉泉院丸庭園整備工事に先立ち行われた玉泉院丸庭園の発掘調査は、庭園全体の構成や主要な施設についての構造などを明らかとするため、5つの地点において調査が行われた。これらの成果と江戸後期の絵図を参考にして、遺構保護のため本来の遺構面から嵩上げして庭園が整備された。整備の一環として玉泉院丸北にある雑段状の石垣群の上面に堆積した、崩落土の除去を行っており、本報告はその際の立会記録である。庭園発掘調査の第5地点と隣接しており、第5-3地点とした。庭園の発掘調査時で作業を実施したが、石垣の保存状況の把握の面もあり、今後の石垣保全に資する記録として、同様の目的でトレーンチ調査を行ったいもり坂脇石垣と併せて報告することとした。

石垣前面の崩落土は、近代以降に二ノ丸側からの土砂等の廃棄に伴うものと考えられるが、作業に



第233図 玉泉院丸北石垣トレーンチ位置図、地形断面図

際しては先行してトレーンチを入れ、明らかに近代以降と判断できる土のみを除去することとした。

土層確認のトレーンチは石垣2640S（色紙短冊積石垣）で2箇所、2670S、2610Sにおいて各1箇所、各石垣の奥に位置する石垣正面と直交するように設定した。トレーンチ両壁にa～hまでの番号をつけて断面観察を行い、土砂の堆積状況がより明瞭に把握できた壁面について報告することとした。

## 2. 土砂の堆積状況（第234、235図）

石垣上面に堆積する土は、石垣の背後にあたる二ノ丸側から、流れ込むように堆積する。いずれも近代以降の堆積層とみられるが、含まれる遺物の様相からI層とII層に大別した。

I層はガラスやコンクリートや空き缶などを多く含む明らかに近代以降の堆積土が該当する。II層は、出土品がごく少量になるが、軍隊で使用されたアラビア数字を上絵付する茶碗が出土する。

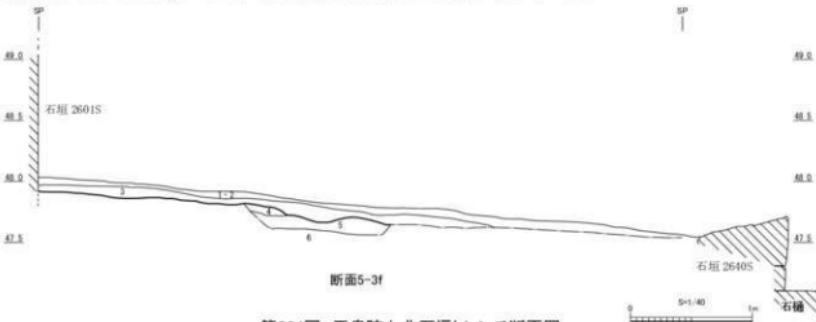
断面5-3f 2640S（色紙短冊積石垣）の上面のトレーンチ東面で、V字型の石樋の長軸を通すように設定した。表土の被りが薄いことから、石樋の設置等に関する掘方等が確認できる可能性もあり、慎重に掘り下げを行った。約20cm掘り下げたが、近世の整地層は確認できなかつた。しかし、上から10cm程までは、ガラスやコンクリート等が入るI層で、石垣天端とほぼ同じ高さから下は、II層となる。石樋や石垣に關係する構造は確認できなかつた。

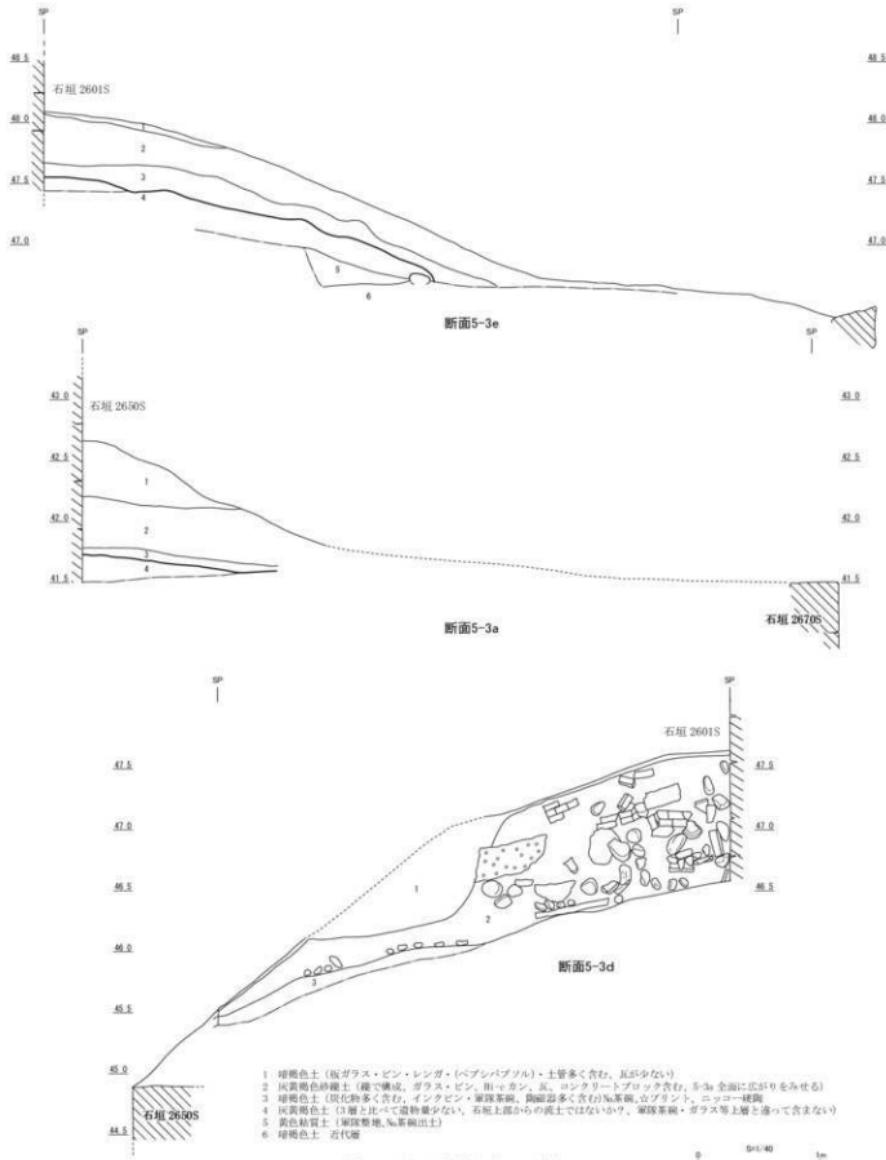
断面5-3e 2640S（色紙短冊積石垣）が一段低くなる西側上面のトレーンチ東面である。上方の二ノ丸側からの流れ込みとみられるガラスやコンクリートを含むI層が50cm程の厚さで斜めに堆積し、2640Sの天端付近に向かって薄くなる。断面5-3f同様に、I層の下位でII層を確認した。

断面5-3a 2670S上面のトレーンチ東面である。2650Sの前面で1m程の厚さで三角堆積するが、その堆積の裾は2mほどの広がりで收まり、2670Sの天端に向かって薄くなり、天端石と表土のレベル差は無くなり、ほぼ水平に近くなる。このトレーンチでもI層とII層ともに確認した。

断面5-3d 2670Sの上面のトレーンチ西面である。トレーンチの主軸は2601Sの石垣面と直交するように設定した。この地点は、二ノ丸側からの土砂の堆積が最も厚く認められる箇所で、最も土砂が高い2601Sの直前と2650Sの天端の比高差は約2.8mある。2601Sは地表面から上の高さが約1.5mであることから、本来見えるはずの高さの2/3は近代以降の土砂の堆積によって埋没していると考えられる。

ただし、現状で2601Sは石垣面として弧形に前方へ孕み出している状態であった。ちょうどトレーンチを入れた線状が最も出ている部分であった。土木部が行っている動態観測はこの石垣では平成23年から開始されたばかりで、現状で変位の累積があるのか、それとも過去に変形した状態なのか判断ができないかった。そのことから、石垣前面の土砂が変位の進行を抑えている可能性もあるため、今回の整備では土砂を全て撤去せず、基底部付近を残置した状態に留めている。





第235図 玉泉院丸北5-3地点



第1地点全景（西から）



第1地点石垣検出状況



第1地点北壁



第1地点南壁



第1地点南北断面東壁

写真図版39 いもり坂石垣遺構写真1



第2地点南側全景（西から）



第2地点南側石垣検出状況（西から）



第2地点南側南壁



第2地点北側全景（北から）



第2地点北側東壁

写真図版40 いもり坂石垣遺構写真2



表土除去前 全景（南東から）



表土除去前2050S・2601S前面（南西から）



表土除去前 2601S前面（北西から）



断面5-3f



断面5-3e



断面5-3a



断面5-3d



整備後の2050S・2601S（南西から）

写真図版41 玉泉院丸北5-3地点

## 引用・参考文献

- 石川県1924『石川県史蹟名勝調査報告 第二集』  
石川県1993『金沢大学跡地等の利用に関する提言』  
石川県1995『金沢城跡整備実施計画報告書』  
石川県2011『史跡金沢城跡保存管理計画書』  
石川県2014『重要文化財金沢城 石川門修理工事報告書』  
石川県2015『特別名勝 兼六園保存管理計画書』  
石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所2012『特別名勝兼六園 宋燈山石垣等修理工事報告書』  
石川県金沢城調査研究所2008a『金沢城調査研究所年報1』  
石川県金沢城調査研究所2008b『絵図でみる金沢城』  
石川県金沢城調査研究所2008c『金沢城石垣構築技術史料I』  
石川県金沢城調査研究所2008d『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書I』  
石川県金沢城調査研究所2008e『戸室石切丁場確認調査報告書I』  
石川県金沢城調査研究所2009a『金沢城調査研究所年報2』  
石川県金沢城調査研究所2009b『よみがえる金沢城2』  
石川県金沢城調査研究所2010a『金沢城調査研究所年報3』  
石川県金沢城調査研究所2010b『金沢城の三御門－河北門・橋爪門・石川門－』  
石川県金沢城調査研究所2011a『金沢城調査研究所年報4』  
石川県金沢城調査研究所2011b『金沢城石垣構築技術史料II』  
石川県金沢城調査研究所2011c『金沢城跡－河北門－』  
石川県金沢城調査研究所2011d『金沢城跡一二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門統縁I－』  
石川県金沢城調査研究所2012a『金沢城調査研究所年報5』  
石川県金沢城調査研究所2012b『金沢城跡一二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門統縁II－』  
石川県金沢城調査研究所2012c『城郭石垣の技術と組織』  
石川県金沢城調査研究所2013a『金沢城調査研究所年報6』  
石川県金沢城調査研究所2013b『金沢城普請作事史料1』  
石川県金沢城調査研究所2013c『戸室石切丁場確認調査報告書II』  
石川県金沢城調査研究所2014a『金沢城調査研究所年報7』  
石川県金沢城調査研究所2014b『金沢城普請作事史料2』  
石川県金沢城調査研究所2014c『金沢城跡－石川門付属太鼓塀－』  
石川県金沢城調査研究所2014d『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書II』  
石川県金沢城調査研究所2015a『金沢城調査研究所年報8』  
石川県金沢城調査研究所2015b『金沢城普請作事史料3 奥村栄実御用番井御城方日記』  
石川県金沢城調査研究所2015c『金沢城跡一橋爪門－』  
石川県金沢城調査研究所2015d『金沢城跡一玉泉院丸庭園I－』  
石川県金沢城調査研究所2015e『金沢城跡鼠多門・鼠多門構造構確認調査概要1』(現地説明会資料)  
石川県金沢城調査研究所2016a『金沢城調査研究所年報9』  
石川県金沢城調査研究所2016b『金沢城普請作事史料4』  
石川県金沢城調査研究所2016c『金沢城跡石垣保存実態調査報告書I』  
石川県金沢城調査研究所2016d『金沢城跡一鶴ノ丸第1次・新丸第1次・尾坂門・二ノ丸南路・敷寄屋敷敷一』  
石川県金沢城調査研究所2016e『金沢城跡鼠多門・鼠多門構造構確認調査概要2』(現地説明会資料)  
石川県金沢城調査研究所2017a『金沢城調査研究所年報10』  
石川県金沢城調査研究所2017b『金沢城普請作事史料5 三壇開口』  
石川県金沢城調査研究所2017c『絵図にみる金沢城二ノ丸御殿』  
石川県金沢城調査研究所2018a『金沢城調査研究所年報11』  
石川県金沢城調査研究所2018b『金沢城総合年表 前編』  
石川県金沢城調査研究所2018c『金沢城庭園調査報告書』  
石川県金沢城調査研究所2018d『金沢城跡一玉泉院丸庭園II－』  
石川県金沢城調査研究所2018e『平成30年度 切石積石垣確認調査の概要』(現地説明会資料)  
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2003a『年報1』  
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2003b『研究紀要 金沢城研究 創刊号』  
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2004a『年報2』  
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2004b『御造営方日記』上巻  
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005a『年報3』  
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005b『御造営方日記』下巻  
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005c『金沢城フォーラム 記録集 石垣の匠と技』  
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006a『年報4』

- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006b『金沢城跡II』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006c『よみがえる金沢城I』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006d『金沢東照宮（尾崎神社）の研究』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2007a『年報5』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2007b『金沢城代と横山家文書の研究』
- 石川県教育委員会1970『金沢城二ノ丸跡発掘調査概報』
- 石川県教育委員会1979『石川県の古庭園』
- 石川県教育委員会2001『金沢城 フォーラム いま甦る金沢城』
- 石川県教育委員会事務局文化財課「いしかわ文化財ナビ」<http://www.bunkazainavi.pref.ishikawa.lg.jp/>
- 石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会1991a『金沢御堂・金沢城調査報告書I』金沢城史料編
- 石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会1991b『金沢御堂・金沢城調査報告書I』金沢御堂史料編
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 1998『金沢城跡を掘る 1998』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 1999a『金沢城跡を掘る 1999』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 1999b『金沢城跡を掘る 1999』vol. 2
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2000『金沢城跡を掘る 2000』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2001a『年報2（平成11年度）』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2001b『金沢市 三社町道路』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002a『金沢市 金沢城跡I』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002b『金沢市 木ノ新保遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002c『金沢市 稲寺道跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002d『金沢市 高岡町一ツ水溜跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002e『金沢市 前田氏（長種系）屋敷跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2007『金沢市 三社町遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2010『金沢市 金沢城跡I』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2012『金沢市 金沢城跡2－堂形（第3・4次調査）－』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2013『小松市 八幡遺跡II』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2014a『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2014b『金沢市 小立野ユミノマチ遺跡』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2014c『金沢市 金沢城跡3－堂形（第5次調査）－』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2014d『金沢市 元菊町遺跡』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2015a『金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）II』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2015b『金沢市 小立野ユミノマチ遺跡II』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2016『金沢市 金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）』
- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2017『金沢市 金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）』
- 石川県教育委員会管理課2019『兼六園「明治紀念之壇」修理工事報告書』
- 石川県土木部宮崎課2001『金沢城公園整備、五十間長屋、橋爪門統括等復元工事報告書』
- 石川県土木部公園緑地課2013『金沢城公園 河北門復元整備工事報告書』
- 石川県土木部公園緑地課2016『金沢城公園 橋爪門復元整備工事報告書』
- 石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所2011『金沢城跡石垣修理工事報告書－玉泉院丸南西石垣－』
- 石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所2012『金沢城跡玉泉院丸南石垣』
- 石川県史調査委員会・石川県立図書館史料編さん室2011『石川県史資料 近世篇11（諸士系譜 四）石川県 石川県史調査委員会・石川県立図書館史料編さん室2012『石川県史資料 近世篇12（諸士系譜 五）石川県 石川県立埋蔵文化財センター1987『敷地天神山遺跡群』
- 石川県立埋蔵文化財センター1990『元菊町遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター1991『宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡・村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター1992『特別名勝 兼六園（江戸町跡推定地）発掘調査報告 附 多家上屋敷跡試掘調査報告－』
- 石川県立埋蔵文化財センター1996『金沢城跡車橋門発掘調査報告書』
- 石川県立埋蔵文化財センター1997『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書I』
- 石川県立埋蔵文化財センター1998『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書II』
- 井上義夫1969『金沢城跡の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会
- 井上久男1990『尾張陶磁（1）－近世初期の瀬戸物生産－』『愛知県陶磁資料館研究紀要』9
- 上野佳也1976『金沢城四十間長屋跡発掘調査概報』『日本海文化』No. 3 金沢大学法文学部日本海文化研究室
- 江戸遺跡研究会2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 岡 泰正2001『出土・護岸石垣出土のヨーロッパ製陶器について』『国指定遺跡 出島阿蘭陀商館跡－護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書－』長崎市教育委員会
- 岡 泰正2010『出島南側護岸石垣前面出土の西洋陶器について』『国指定遺跡 出島阿蘭陀商館跡 南側護岸石垣発掘調査・修復復元工事報告書』長崎市教育委員会

- 小川 望2008『焼塙壇と近世の考古学』同成社
- 小野正敏1982「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 金沢市・金沢市教育委員会1991『瓢箪町遺跡』
- 金沢市教育委員会1995『金沢市本町一丁目遺跡』
- 金沢市教育委員会1997a『安江町遺跡』
- 金沢市教育委員会1997b『金沢市本町一丁目遺跡II 削治片原地点』
- 金沢市埋蔵文化財センター1998『長田町遺跡 長町遺跡 穴水町遺跡』
- 金沢市埋蔵文化財センター1999『下本多町遺跡』
- 金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター) 2001a『金沢市高岡町遺跡I』
- 金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター) 2001b『金沢市昭和町遺跡I』
- 金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター) 2001c『金沢市醒ヶ井遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2002『石川県金沢市 湯三町遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003a『石川県金沢市 高岡町道路II』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003b『石川県金沢市 昭和町道路II』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡III』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003d『野田山墓地』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004a『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目) I (測量図編)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004b『石川県金沢市 久昌寺遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004c『石川県金沢市 昭和町道路III』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005a『平成16年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005b『石川県金沢市 木ノ新保遺跡II』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005c『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目) II (古代・中世編、測量図編)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005d『石川県金沢市 片町二丁目遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006a『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目) III (近世編)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006b『石川県金沢市 本町一丁目遺跡IV』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006c『石川県金沢市 市内遺跡発掘調査報告書III』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007a『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目) IV (近世編)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007b『石川県金沢市 兼六元町遺跡 湯三一丁目遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007c『石川県金沢市 下堀・青草町遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2008a『野田山・加賀藩主前田家墓所調査報告書』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2008b『石川県金沢市 金沢城惣構跡 I ~西外惣構跡・東内惣構跡発掘調査報告書~』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2009a『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目) V (金沢美術館地点)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2009b『既已用木調査報告書』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2010a『平成21年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2010b『石川県金沢市 東山一丁目遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2011a『平成22年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2011b『石川県金沢市 金沢城惣構跡 II ~西内惣構跡(主計町地点) 発掘調査報告書~』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2011c『石川県金沢市 金沢城惣構跡I ~西外惣構跡(武蔵町地点) 発掘調査報告書~』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2011d『石川県金沢市 土清水塙構跡調査報告書』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012a『平成23年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012b『本多家上屋敷廻遺構調査報告書』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012c『石川県金沢市 金沢城下町遺跡(本多町三丁目地点)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012d『石川県金沢市 金沢城惣構跡IV 金沢城下町遺跡(西外惣構跡升形地点) 発掘調査報告書 構編』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012e『野田山・加賀八家墓所調査報告書』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2013a『平成24年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2013b『石川県金沢市 金沢城惣構跡V 金沢城下町遺跡(西外惣構跡升形地点) 発掘調査報告書 遺物編』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2013c『石川県金沢市 小立野四丁目遺跡~天徳院前田家墓所~』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2014a『平成25年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2014b『石川県金沢市 片町二丁目遺跡(5番地点)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2014c『石川県金沢市 金沢城惣構跡VI 東内惣構跡(枯木横南地点) 発掘調査報告書』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2015a『平成26年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2015b『石川県金沢市 長家上屋敷跡調査報告書』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2016a『平成27年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2016b『石川県金沢市 玉川町遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2017『平成28年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』

- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2018『平成29年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市史編さん室1965『金沢の百年 明治編』金沢市
- 金沢市史編さん室1967『金沢の百年 大正・昭和編』金沢市
- 金沢市役所1973『稿本 金澤市史』市街編第四 名著出版
- 金沢大学創立50周年記念事業後援会2001『金沢大学50年史』通史編
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2000『金沢大学文化財学研究』2
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2002『金沢大学文化財学研究』3・4
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2003『金沢大学文化財学研究』5
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2017『金沢大学構内道路一角間遺跡、宝町・鶴間遺跡一』
- 金沢御堂・金沢城調査委員会1994『金沢城跡 金沢城跡構造実態調査概要報告書』石川県教育委員会
- 絆野義夫1993『新版・石川県地質図（10万分の1）および石川県地質誌』石川県
- 絆野義夫2001『石川県の地質に因襲する調査研究の百年史年表』『石川県地質誌・補遺』北陸地質研究所
- 金子 智賀1994『近世瓦の基本分類・江戸道跡出土品を中心に一』『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第20集 哲学・史学編』早稲田大学大学院文学研究科
- 木越隆三2003a『元と寛文期の金沢城築城について』『研究紀要 金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室
- 木越隆三2004『金沢城全城給岡の分類と編年』『金沢城研究調査報告』1号 『研究紀要 金沢城研究』第2号 金沢城研究調査室
- 木越隆三2009『金沢城作事所に関する断簡資料（1）－名倉氏採換下張文書（金沢大学文学部日本史研究室蔵）－』『研究紀要 金沢城研究』第4号 金沢城研究調査室
- 木越隆三2007『近世後期、石垣構築技術「秘伝」の形成過程』『研究紀要 金沢城研究』第5号 金沢城研究調査室
- 木越隆三2013『金沢城の瓦用土と瓦用土』『辰巳用土調査報告書』金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
- 木越隆三2013『金沢の惣構建城年次を再検証する』『日本歴史』第780号 日本国歴史学会
- 北垣聰一郎1987『石垣普請』法政大学出版社
- 北野博司2001『加賀金沢城の石垣修築について』『東北芸術工科大学紀要』No.8 東北芸術工科大学
- 北野博司2003『金沢城石垣の変遷1』『研究紀要 金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室
- 北野博司2004『金沢城石垣の変遷2 一切石積石垣』『研究紀要 金沢城研究』第2号 金沢城研究調査室
- 久保智康1989a『越前における近世瓦生産の開始について』『福井県立博物館紀要』3 福井県立博物館
- 久保智康1989b『近世中～後期越前ににおける赤瓦の生産』『福井考古学会会誌』7
- 久保智康1992『近世後期朝賀における赤瓦の生産』『福井考古学会会誌』10
- 久保智康2001『北陸の瓦の歩み』日本セラミックス協会北陸支部
- 久保智康2005『日本海城をめぐる赤瓦』『日本海歴史体系』第四巻 近世篇1 清文堂
- 九州近世陶磁学会2006『九州陶磁の編年』九州近世陶磁研究会10周年記念
- 佐々木達夫1981『金沢城跡の発掘—一九七九年—』『日本海文化』No.7 金沢大学文学部日本海文化研究室
- 佐々木達夫1981『金沢城跡の発掘—一九七九年—』『金沢大学日本海域研究所報告』第13号
- 貞末庵司・石崎俊哉・前田清彦1986『金沢城の発掘—1981—藤右エ門丸北側法面掘削発掘報告』『金沢大学日本海域研究所報告』第18号
- 貞末庵司・前田清彦・児玉剛1989『金沢城の発掘—1986年—黒門横北側軸外部発掘調査報告』『日本海文化』No.5 金沢大学文学部日本海文化研究室
- 津辺利明2019『金沢城下町道路（本多氏屋敷跡地区）』『石川県埋蔵文化財情報』第40号 （公財）石川県埋蔵文化財センター
- 須川薰雄1995『日本の軍用装と器具』国書刊行会
- 瀬戸 薫2000『北信愛覚書』について一天正十五年の金沢城一』『加能史料研究』第12号 石川県地域史研究振興会
- 瀬戸市史編纂委員会編1993a『瀬戸市史』陶磁史篇四 愛知県瀬戸市
- 瀬戸市史編纂委員会編1993b『瀬戸市史』陶磁史篇五 愛知県瀬戸市
- 瀬戸市史編纂委員会編1994『瀬戸市史』陶磁史篇六 愛知県瀬戸市
- 瀬川重徳1999『金沢城跡（本丸附設柵区）』『石川県埋蔵文化財情報』創刊号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 谷口明伸・増山 仁2004『前田土佐守家の下屋敷と醸ヶ井遺跡』『研究紀要』第1号（財）金沢文化振興財団
- 田端實作1979『金沢城石垣刻印調査報告書』城郭石垣刻印研究所
- 土田友信2000『金沢城跡』『石川県埋蔵文化財情報』第4号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 坪井利弘1999『建築家のための瓦の知識』鹿島出版会
- 坪井利弘1999『図鑑 瓦屋根』理工学社
- 東京大学埋蔵文化財調査室2006『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点
- 富田和気夫・漆原玲美2002『金沢城跡』『石川県埋蔵文化財情報』第7号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 長崎市教育委員会2010『国指定遺跡 出島阿蘭陀古船跡 南側漢岸石垣発掘調査・修復復元工事報告書』
- 日本海文化研究室1976『金沢城郭史料』日本海文化叢書第三巻 金沢大学法文学部日本海文化研究室
- 白山市教育委員会2016『国指定史跡 烏越城跡附二曲城跡 烏越城跡発掘調査報告書』
- 白山市教育委員会2018『白山市史跡 舟岡山城跡確認調査報告書』
- 服部 郁1993『幕末から明治の瀬戸製』『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1987『商業施設の研究（1）』『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館

- 藤 则雄1999「金沢城「百間堀」の断層とその周辺の地形」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会々誌第42号 石川考古学研究会
- 藤 则雄1975「河岸段丘」『金沢周辺の第四系と遺跡』
- 文化庁1969『重要文化財金沢城 石川門・三十間長屋保存修理工事報告書』
- 文化庁2005『史跡等整備のてびき』同成社
- 文化庁2013『発掘調査のてびき－各種遺跡調査編－』同成社
- 文化庁文化財部記念物課2015『石垣整備のてびき』同成社
- 日置 謙1956「改訂増補 加能郷土辞典」北國新聞社
- 北陸近世遺跡研究会・奥田 尚1995「北陸の後塙壠－金沢城下出土の鉢形後塙壠を中心にして」『石川考古学研究会々誌』38 石川考古学研究会
- 増山 仁1997「金沢城下における近世墓－久昌寺墓地を中心として－」『第9回関西近世考古学研究会大会 西日本近世墓の諸様相』
- 増山 仁1999「金沢城跡」『金沢市史』資料編19考古 金沢市史編さん委員会
- 三浦ゆかり1999「金沢城跡いもり塙発掘調査」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 見瀬和雄2000「金沢城の創建と前田利家」『石川県史だより』第39号 石川県立図書館史料編さん室
- 渕尾玲美・土田友信2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第5号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 渕尾玲美・土田友信(左)2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 森田平次(日置謙校訂)1976『金澤古蹟志(上)』歴史図書社
- 米澤義直・米澤義光2008『江戸後期から昭和前期頃までの瓦資料について』
- 米澤義光2009『加賀国・本吉いぶし瓦(本吉瓦)について』(有)米澤義直商店
- 吉岡康暢1985「金沢城の発掘」『金沢城と前田氏領内の諸城』日本城郭史研究叢書 第五巻 名著出版

## 報告書抄録

ふりがな	かなざわじょうあと 一 ほんまるつけだん・きたのまる 一						
書名	金沢城跡 一 本丸附段・北ノ丸 一						
副書名	金沢城史料叢書35						
シリーズ名	金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	12						
編著者名	西田郁乃、滝川重徳、辻森由美子、知田真衣子、梶ヶ山真理、小林克也						
編集機関	石川県金沢城調査研究所						
所在地	〒920-0918 石川県金沢市尾山町10-5 TEL 076-223-9696						
発行年月日	2019年3月29日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	○°'〃	○°'〃		(m <sup>2</sup> )
かなざわじょうあと 金沢城跡	いしかわけん 石川県 かなざわしまるうち 金沢市丸の内	17201	130200	36° 33' 58"	136° 39' 35"	19980506～ 19980812	500 (本丸附段)
						20001212～ 20001225	20 (本丸附段)
						20000613～ 20000825	850 (北ノ丸)
						20081021～ 20081210	6 (いもり坂塀石垣)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
金沢城跡	城館	近世	階段、石垣、土坑、空堀、火葬関連遺構	陶磁器、土製品、瓦、石瓦、金属製品、石製品			
要約	<p>金沢城公園整備事業に伴い、本丸附段、北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）等を対象に埋蔵文化財調査を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本丸附段では、近代に改変された北部の階段について基礎構造や周囲の石垣等を確認し、近世当時の形状・規模に係る知見を得た。また、階段が構築された17世紀前半以前の遺構を一部検出した。</li> <li>北ノ丸の御宮では、寛永20年（1643）に創建された東照宮関係の建物に葺かれていたと考えられる石瓦がまとまって廃棄された状態で出土した。藤右衛門丸では、整地土や土坑から灰や火葬骨が出土し、火葬に関連する遺構を確認した。</li> </ul>						

金沢城史料叢書 35  
金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 12

金沢城跡  
一本丸附段・北ノ丸一

平成 31 年（2019）3 月 29 日 発行

編集・発行 石川県金沢城調査研究所

〒920-0918 石川県金沢市尾山町10-5  
電話 076 (223) 9696 FAX 076 (223) 9697  
<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html>  
メールアドレス kncastle@pref.ishikawa.lg.jp

印刷 前田印刷株式会社